

裏窓



★あぶちつく★
★みすてりい★
★特集号★



11月号

裏窓

あぶちつく・みすてりい特集号

11



定価120円
IBM 1807

ムード

大人だけの雑誌

裏窓臨時増刊 (第3集) 発売中!

特集・危険な悪戯者

愛欲のアウトサイド

ツカマツリ順末記
性の秘薬はどこにある
夫婦のムード20代~50代

炎情詩抄... 岩佐東一朗
白綿電話... 三宅一朗
キヨウ妻は天災である... 今官一
しりえくぼ... 田辺福一
月見れ... 連美庵
近所迷惑... 陶山密
森比呂志
サイクリング奇譚... 峰岸義一

定価百三十円
送料八円

回答・竹内茂代 性の健康相談室



女であることの悩み — その五つのケースについて —

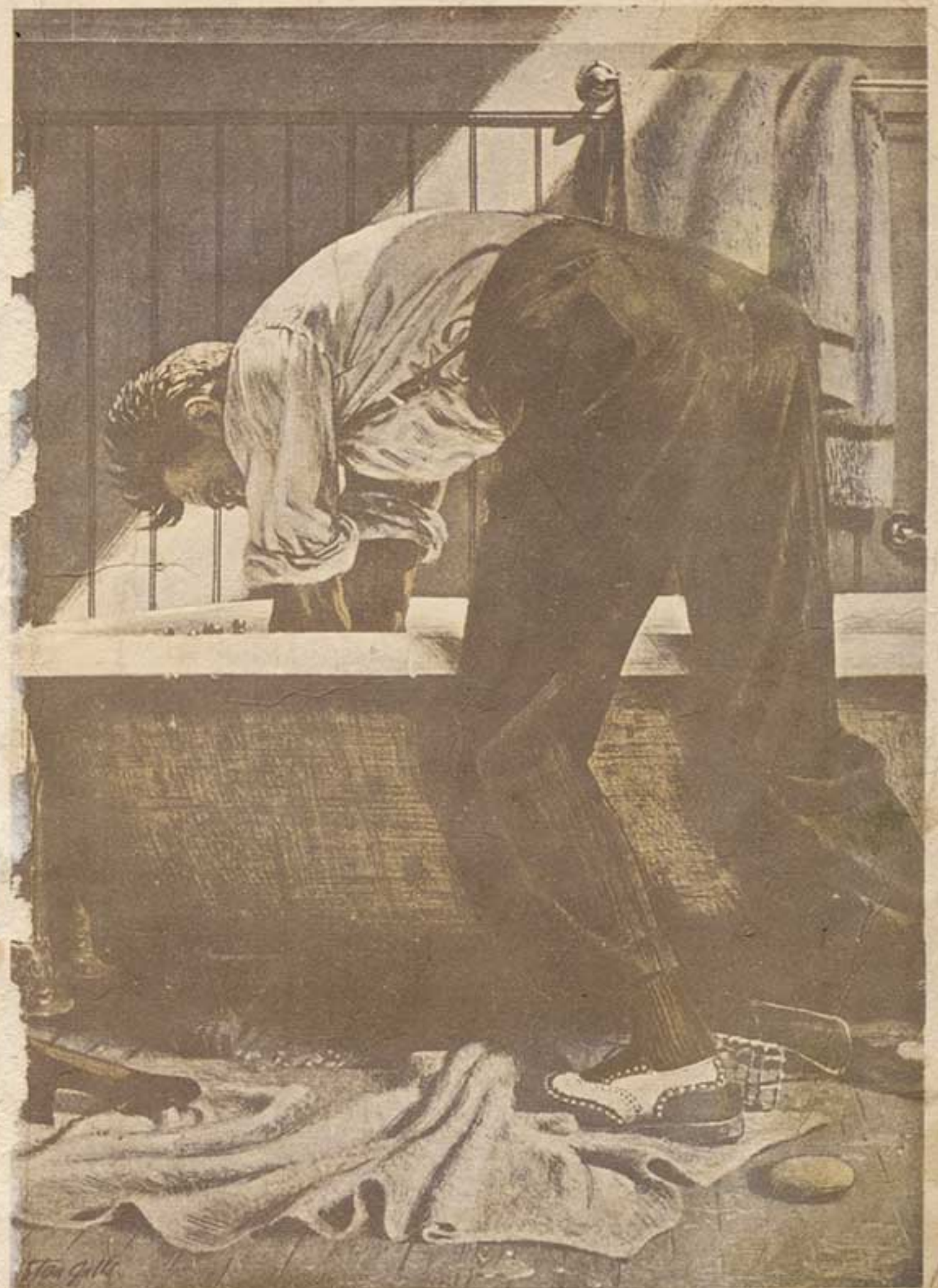
杉靖三郎
山本 杉

痴漢の心理について... 藤原 豪
性的傾向テスト... 編集部 編
「ヘンタイ女性」今昔物語... 高橋 鉄
千人斬り女豪列伝... 谷 蔵

闇にうごめくY虫を駆えべんで痴漢を刺しまくる
座談会
痴漢様歓迎の女の受入れ態勢・強盗の口止策に痴漢行為・女の甘さがモモ
切り横行・ウイットと勇気で痴漢撃退等々最近の痴漢現象防止にメスを入
れた、東京・読売・毎日・産経各紙の警視庁づめ第一線記者が語る座談会

リポート集・熱つすぎる妻へホッテスト・ワイフ 編集部・編
実らぬ葡萄... 武野藤介
痴話閑談... 岡田 甫

東京都中野区江古田1の2302 株式会社 久保書店
振替・東京・10756



浴槽 (恐るべき瞬間)

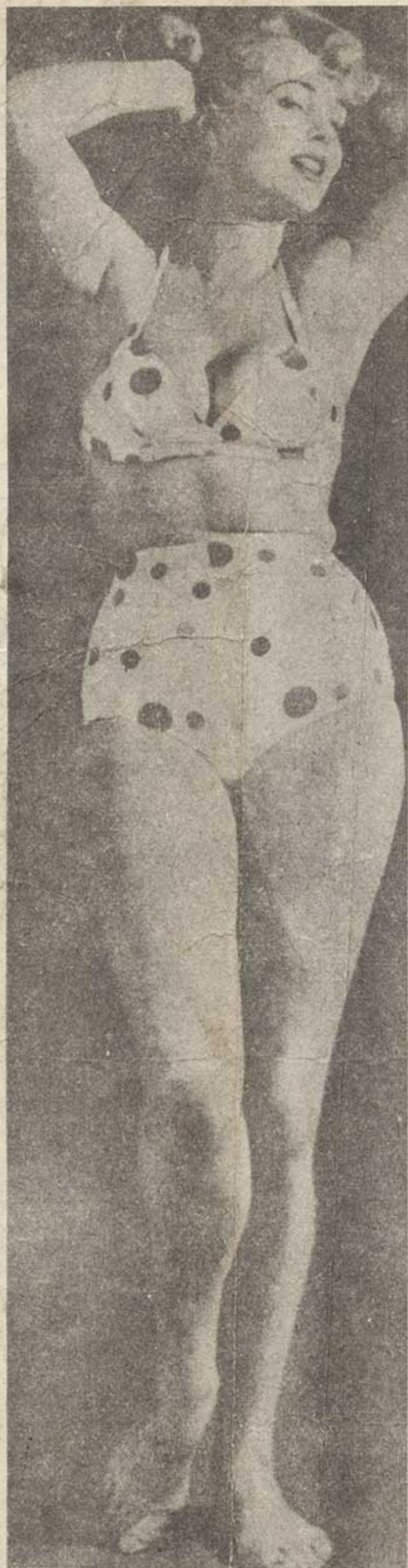
外誌より

背徳の緋文字コレラの正体 (本文五八頁)

壁一重向うで行われている地獄絵のような行為に彼はギョツとした……

(本文四六頁)

探訪記者ノート 悪魔の祈祷師 神行京一



表紙……須磨利之・表紙裏……(恐るべき瞬間) 外誌より
◎本誌特撰・海外グラマー写真集……編集部・篇

隠密書(第八話) 鬼姫変化……島本春雄 28

……或る逞ましき御婦人への手紙……中野満寿男 130

連載(第一回) 刺青弁天……中林節三 88

裏話 偶奇談議……川口映治 155

口絵 廃屋の妖精……秋吉 11

小説 罨にあえぐ女……波戸 容 19

背徳の コレラの正体……田井良栄 58

時談 手裏剣……狭山 温 68

海外妖 死体買います……柳生 亘 78

青年の 放浪の記……伏見和夫 122

不思議 恋 人 形……鳴海玄吉 189

おばさ 妖 蟲……京極美岐 219

ま娘 スターリンを狙った男……陶山 密 224

魔の 黒いマニキュアの女……木原康夫 236

毒婦 女炎脂地獄……岩堀 光 252

あぶちっく みすてりい 人差指の妬み……朝山蜻一 132

悪魔の祈禱師……神行京一 46

闇 入 者……三宅一郎 105

地獄から殺しに来る男……真野 麗 110

金曜日の戦慄……鳥羽瑛子 144

窓 (まど)……岬 洋之助 163

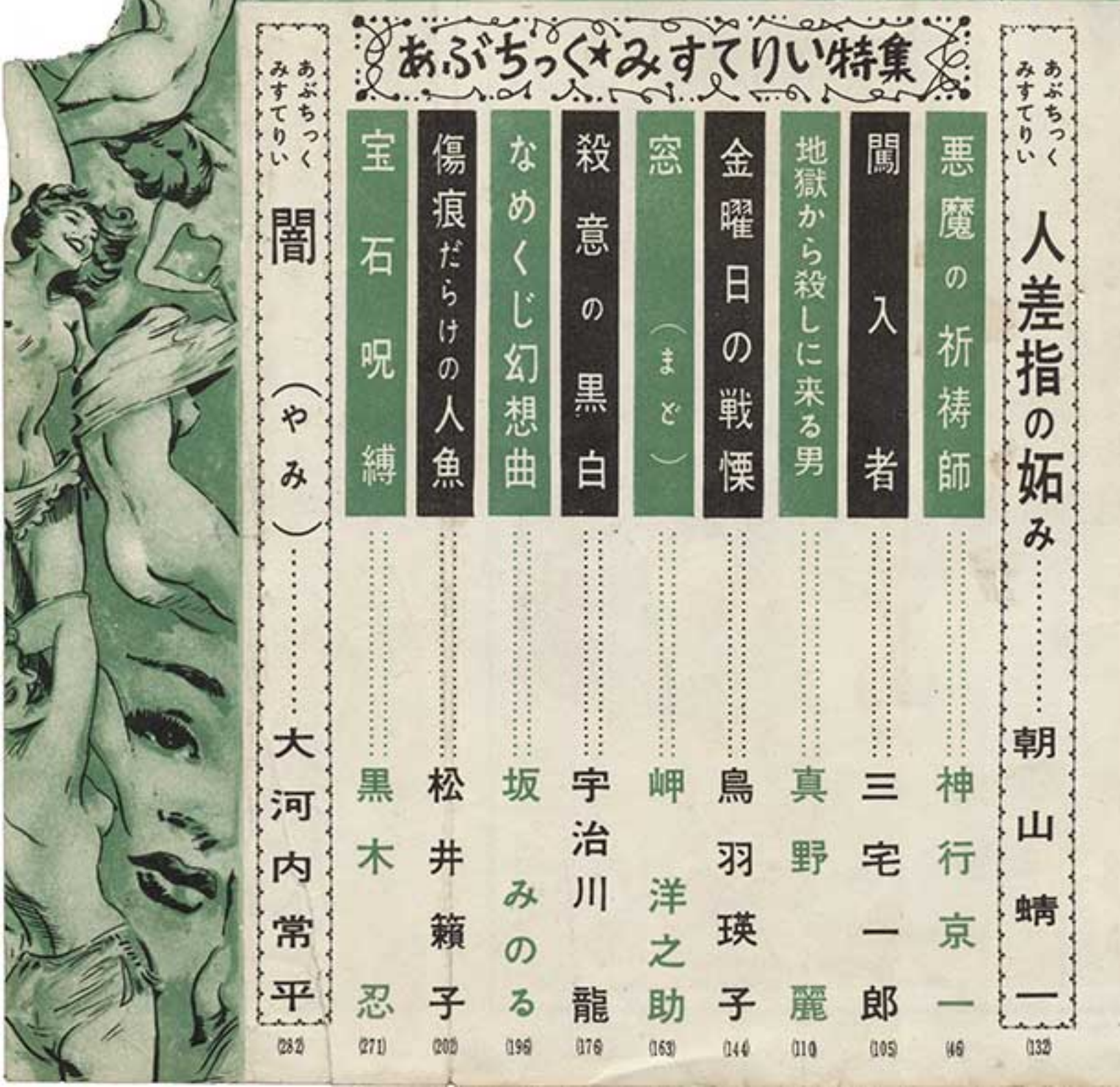
殺意の黒白……宇治川 龍 176

なめくじ幻想曲……坂 みのる 196

傷痕だらけの人魚……松井 籟子 200

宝石呪縛……黒木 忍 271

あぶちっく みすてりい 闇 (やみ)……大河内常平 282



鬼姫変化

隱密覺書(第八話)

島本春雄
中島喜美・画



廃屋の妖精

重と文 秋吉 戀

①その廃屋の庭に一步踏み入れた時から、私は現実と夢幻の境を彷徨し始めた。宵闇のたゞよう中に浮び上る三角の屋根、外れた窓枠、白壁の汚点、泥酔の夜に定まって見る夢に立木の位置さえ寸分の違いも無い風景だった。それのみか私は、夢の記憶を辿りながら三十号大の油絵さえ描いている。不思議な一致に呆然と佇む私の周囲を、風も無いのに、かすかな笛の様な響を立て、夕靄が渦を巻いて流れ出した。連れて来たホテルの飼犬ジュリーが、無言で鎖を持つ手を強く曳く、思考力を失いかけた私は、その誘いの儘に半開きになっている玄関をくぐった。

昨日の朝早く、私は唯一人の友人であり、パトロンでもあるS君の訪問を受けた。長いN湖畔の避暑から帰って来た彼は、陽やけた顔を輝やかせながら、「この絵とそっくりな家だよ君、あまり驚いたのでカメラに納めて来た。」——そうだ、君も是非行ってみ給え、そのつもりで旅費を用意して来たんだ」私はその夜東京を発ち、教えられたホテルの門を潜ると、陽だまりに寝そべっていたシェパードが、むっくりと起き上って顔をすりよせて来た。「今朝方、S様からお電話がありましたのでお待ちしていました。シーズンが過ぎていまして充分なおもてなしも出来ませんが——ジュリー、あまり喜んでお客様の召物を汚すんじゃないよ」





②真暗な廊下を歩く足許が不思議に明るい。ジュリーは心得顔で進んで行く。右に折れる階段を昇りか、ると、頭上から黄色い光が流れて来た。「長い事お待ちして居ました。どうぞこちらへ——摩耶様、隆夫様ですよ」

振り仰ぐと、古風なランプを手にした老人が立っている。「今隆夫さんとおっしゃった様ですが——」

尋ねる私を手で制し、深くうなずくと先に立って歩き始めた。薄暗いランプの光の中で摩耶と呼ばれた少女を見た時、再び私は我が目を疑わねばならなかった。乱れた前髪の間から覗くなやまし気な眸や背中迄垂下った長い髪のは、矢張り私の描く少女の絵から抜け出したと思われるばかりだ。「何をそんなに視つめていらっしゃるのです」何時の間にか、先刻の老人は去っていて、摩耶と向き合って腰を下したテーブルの下にはジュリーが安心した様に蹲っている。注がれる儘に重ねた酔も手伝ってか、やがて抵抗し難い睡魔が襲って来た。頬にふれる少女の息吹きには杏子の香が漂っていた。

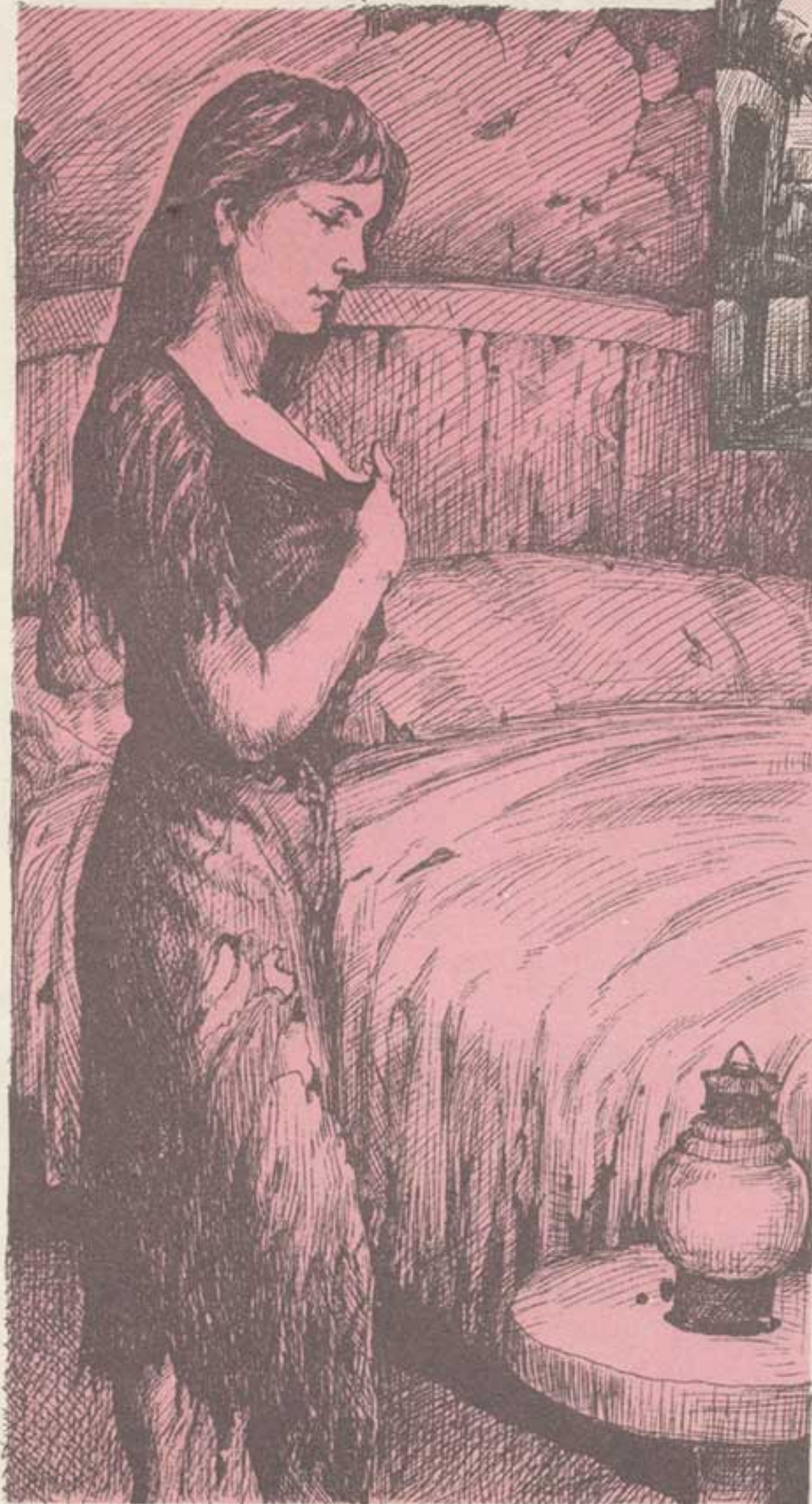


③激しい喉の乾きに目を覚すと、爽やかな朝の陽のあふれるホテルの一室であった。サイドテーブルに置かれた心遣いの水差しに手を延ばしかけて、ふと気がつく、その下に白い封筒が挿まれている。

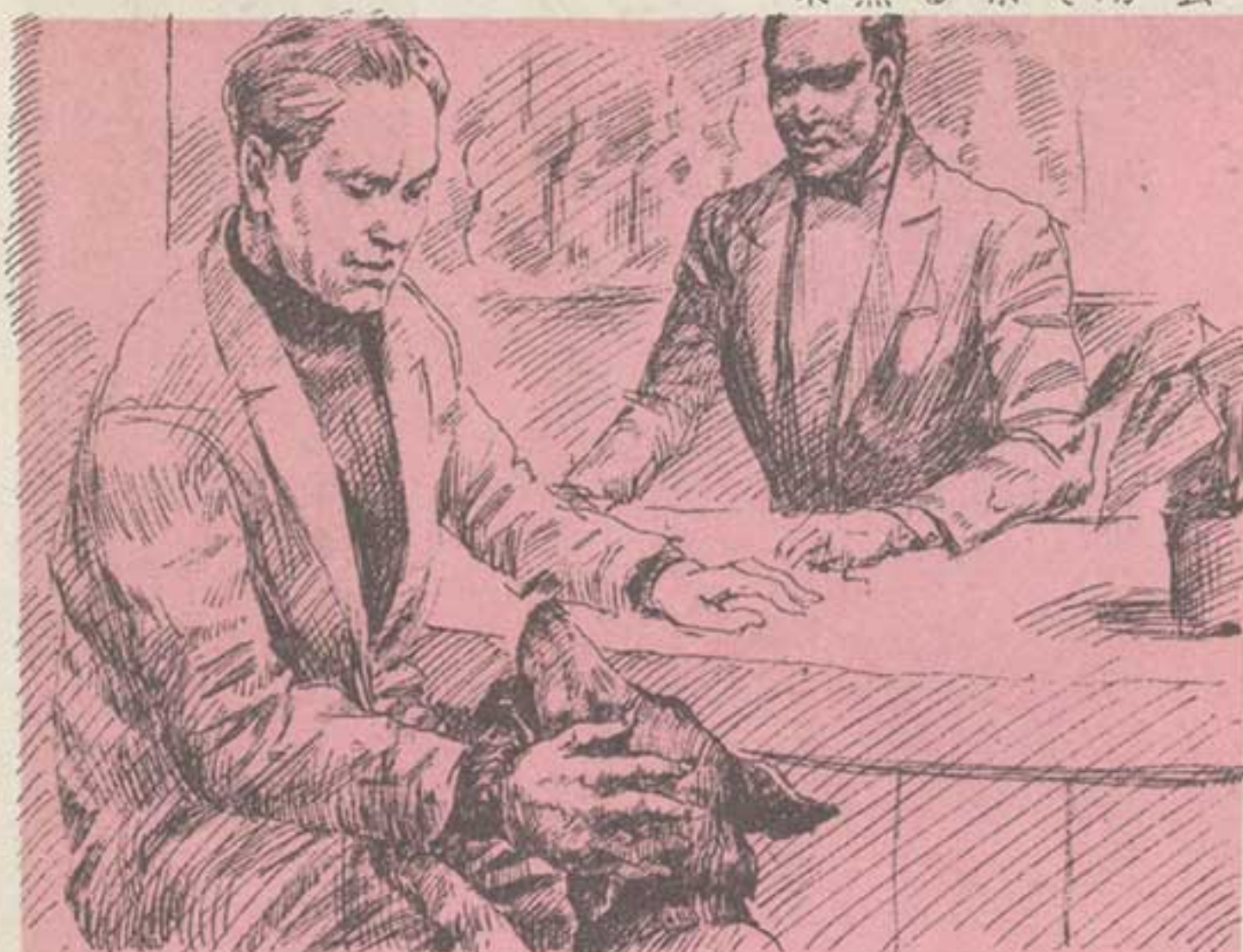
隆夫様、さく爺でございます。摩耶様は長い事、本当に随分と長い事、貴方をお待ち申して居りました。何処にも参らず、あの家に居られたのでございます。今夜も是非お出で下さいませ、でも明るい内はお出でにならぬ様に、これは何としてもお約束下さいませ——

隆夫とは私の事なのか、最初に会った時にも、あの老人は私を隆夫と呼んだ。

そして摩耶と云う少女も、情欲の渦の中でしきりにタカオ、タカオ、と囁いていたではないか。「おや、日高様、昨夜は何処でお飲みになったのですか、大変御機嫌の様でした」が「ホテルのバーに顔を出すとバーテンが笑顔で話しかけた「本場のスコッチを半分程空けた事は覚えていたのですがどうやって帰り着いたのか、まるっきり記憶が無いんですよ」



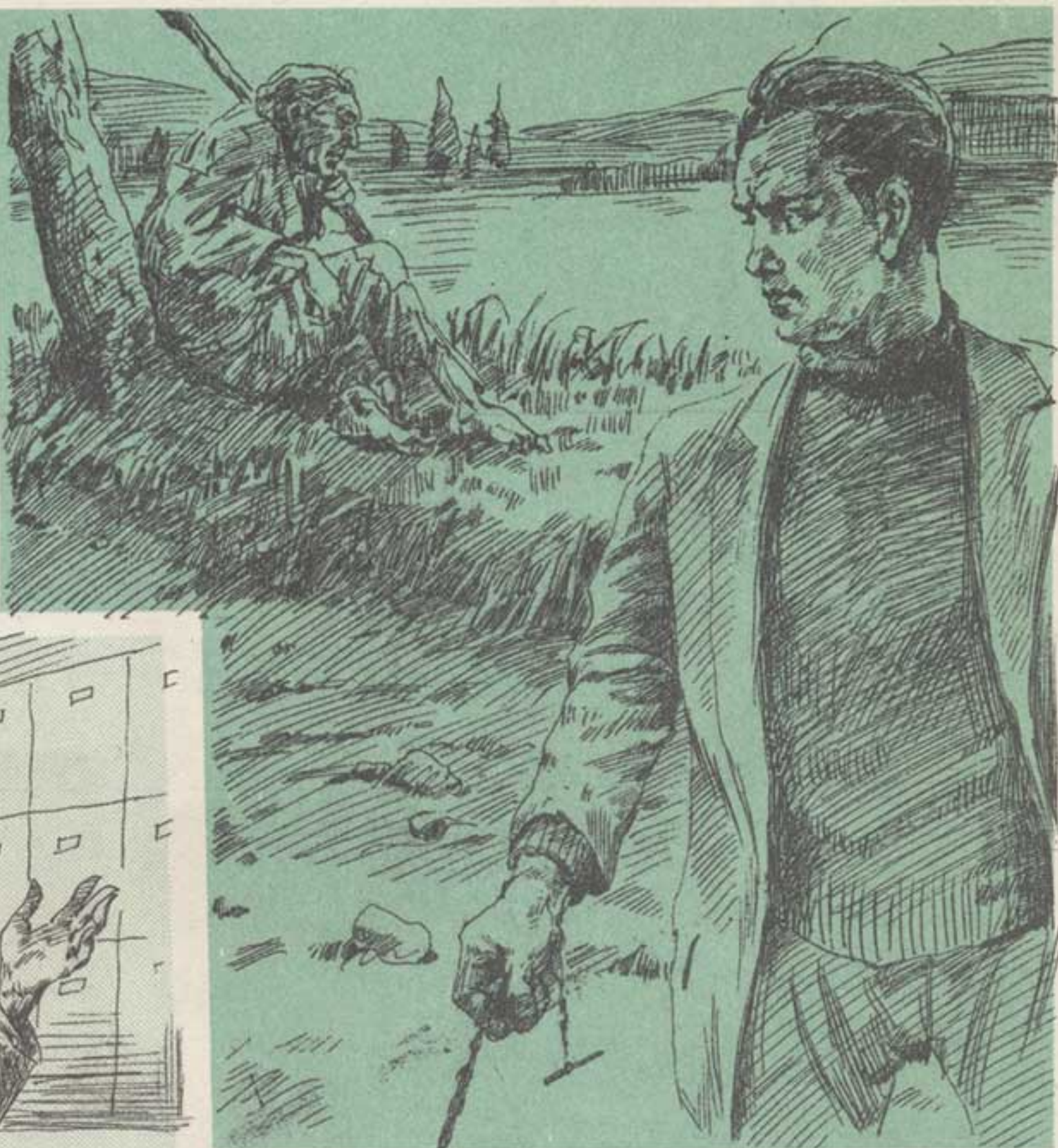
④「ジュリーが知らせて呉れましてね、玄関の石段に寝込んでいらっしやいましたよ、きつとあそこ迄はジュリーに曳かれて来たものの、相当お酔いになっ
ていらっしやったのであの石段は上れなかったの
でしょう——ジュリーも大分歳をとりましてね、も
と
は湖の真向いに見える大きな家の飼犬でしたが、終
戦この方住む人が無くこのホテルで養っています。
近頃はめっきりと弱っていましたが、貴方がお出で
になりましたから見違る程元気になりました。日高
様は余程犬が好きと見えますね」膝に顎を乗せて
いるジュリーの頭を撫でながら、矢張りそうか、こ
の犬にも私は隆夫なのかも知れない。
いやきつとそうだ。しかし無人だと云
う家で、昨夜会った二人は何者なのか
？ ジュリーは何かを知っている。そ
して今朝の手紙の謎、通るか、ったボ
ーイに手紙を届けた者の様子を尋ねる
と、手紙を部屋に取り継いだ覚えは無
いと云う。私は思い切って手紙の約束
を破る決心をした。



⑤先に立つジュリーが昨夜の部屋に消え
ると、其処から猛然と吠える声をした。
飛び込んで見ると片隅のベッドの中に、
もぞもぞと何か蠢めいている。プンと鼻
をつく異臭。目がうす暗さに馴れると、
垢染みたボロボロの衣服をまとった老婆
である。「君は唯だ!!」跳びか、るジュリーを押えて思わず大声
で誰何すると「ヒッヒッヒ、乞食の婆さんだよ、この家はお前
さんのもんだったのかね。折角い、ねぐらが見つかったと思っ
たに」老婆を追い出し家の中を隈無く探して見たが、何処にも
摩耶の姿は無く、厚く埃が積み荒されこ、数年人間生活が行わ
れて無い事を物語っていた。



⑥「摩耶さんはいなかったかね。ヒッヒッヒッ」放心の儘、湖畔の道を辿っていると、ふいに横合から、先刻の老婆に呼びかけられた。「君は摩耶を知っているのか」「お前さんがそう呼んでいたんではないかね。ヒッヒッヒッヒッそう云えば聴いた様な名だよ。でも私に尋ねても駄目さ、他人様のこたア何にも知らないよ」



⑦「お帰りなさいまし、実は一寸不思議な事がありましたので、貴方のお帰りを待っていたのです。お気を悪くなさらないで下さいよ」ホテルの支配人とパーテンがそう前置きして話し出したのは「今朝方本場のスコッチとおっしゃっていたので、御存知の様に辺鄙なこの土地で、季節外れに酒を出す店も無い筈と、念の為倉庫を検めたところ、残り少いストックの内、スコッチ一瓶とチーズや罐詰等が少々不足しているのです。いえ決して日高さんがと云う訳では無いのです。その証拠に、鍵はか、つていますし、昨日は倉庫を開けた様子は見えないのです。損害と云う程のものではありませんが、まるで鼠小僧に入られたみたいで、何とも気味が悪くて仕様がありませんから、もし差さわりがなければ貴方がお飲みに出掛けられた場所を教えて頂きたいと思ひまして」話して見たところ、果して信じて呉れるかどうか。いや、それよりも私自身あれは現実にあつた事か、それとも何時もの夢の連続だったか疑わしくなつて来た。「その事はしばらく考えさせて下さいませんか、代金は何れにしても私が飲んで了つたものだしお払いますから」とんでもないと断るホテルの人々を後に、混迷にあえぐ頭をか、えて、自室のベッドにもぐり込んだ。



⑧夢を見ていた。走馬燈の様に馳け巡る昨夜の出来事、その中を、摩耶と老婆の顔が夜と昼をバツクに交互に現われ、終には重なり合って消えて行く、ジュリーが月に向って吠える。その声がだんくくと現実に代って来て、気がつく、夜も大分更けた様子、腕時計は丁度二時を示している。四囲は凍りついた様な静寂に覆われ、あの家へと誘うジュリーの遠吠えのみが、波の様に伝って来る。不可解な謎を含む摩耶の魅力にひかれて、秋冷の身に沁みる湖畔を歩いてみると、又しても奇怪な笛の様な音を発する霧に出会った。何処からともなく杏子の香が漂って来る。

「摩耶！ 摩耶！」

涙にうるむ瞳でみつめる少女を発見した時私は最早どうにもならない宿命の様なものを感じた。



⑨終戦後、記憶喪失症として、陸軍病院のベッドから第二の人生に踏み出した私の、過去の生活の唯一つの遺品である胸に下げた守袋の中の指輪を、摩耶の薬指にはめながら、「明日は二人で東京に帰って、一緒に暮そう、もう一日も離れる事は出来ないんだ」指輪は彼女のものにピッタリと入り、私の胸は摩耶の涙でじとくに濡れた。「嬉しい!!」でも、でも私は昼間の世界は忘れてしまったの、太陽が恐い!」「太陽が恐いなんて、そんな馬鹿な事があるものか!」「何時来たのか、がっかりと肩を落した老人が立っていて、しきりに手を振り、「いけません。摩耶様もうお帰りになる時刻です。隆夫様どうぞおひきとり下さい」「何故だ。何故夜が明けてはいけないのだ」私は摩耶の肩を二度と離さぬ積りで、しっかりと抱いた。漆黒の湖水が夜明けの空を映して、ウルトラに生きかえると、寒さが一しお身に沁みて来る。すると抱きか、えた摩耶の体温が徐々に降り始めた。





⑩「摩耶、ホラ太陽が出るよ。勇気を出して、僕にしっかりとつかまるのだ！」
はるか地平の彼方から雲間を破って、まぶしい一条の光が、摩耶の顔にさっと注がれた。瞬間、鮮血か、それとも旭の色だったか、少女の顔は真紅に彩られ、その色は刻々と薄れ行き、やがては透明となり、摩耶の肉体と共に消え失せてしまった。「摩耶!! 摩耶!!」
狂った様に叫ぶ私の声は、もうすっかり明るくなった湖面に空しく山彦するばかりだ。



⑪「お、お氣がつかれましたか。崖から落ちて、氣を失っていらっしやった様でしたが、何処かお怪我はありませんか」
「貴方は岸山さん、私はどうして」
「矢張り佐田さんでしたか、そうではないかと思っはいましたが、お名前が違っていましたので、——— それであの家——— 貴方が出征されてから、しばらくは摩耶さんと爺やさんお二人であの家を守ってお出でしたが、お宅の裏山の頂上に防空監視所が出来まして、あの家が所長の宿舎に当てられました。私共からは、毎日の生活を覗う事は出来ませんが、所長付の兵隊さんの話では、美しい摩耶さんに大分執心の様子で、従わない摩耶さんを大変お責めになったそうです。あれは終戦も間近い日でした。所長が何者かに射殺され、お二人共行方をくらまし、当時は軍人殺害と云う事で大騒ぎしました。終戦のどさくさで捜査は立消えになっていますが、今だに消息が知れないのです。話の途中から、私の失われた記憶の手帖は一枚一枚と蘇って来た。」



⑫「お、摩耶、作爺、ジュリー」

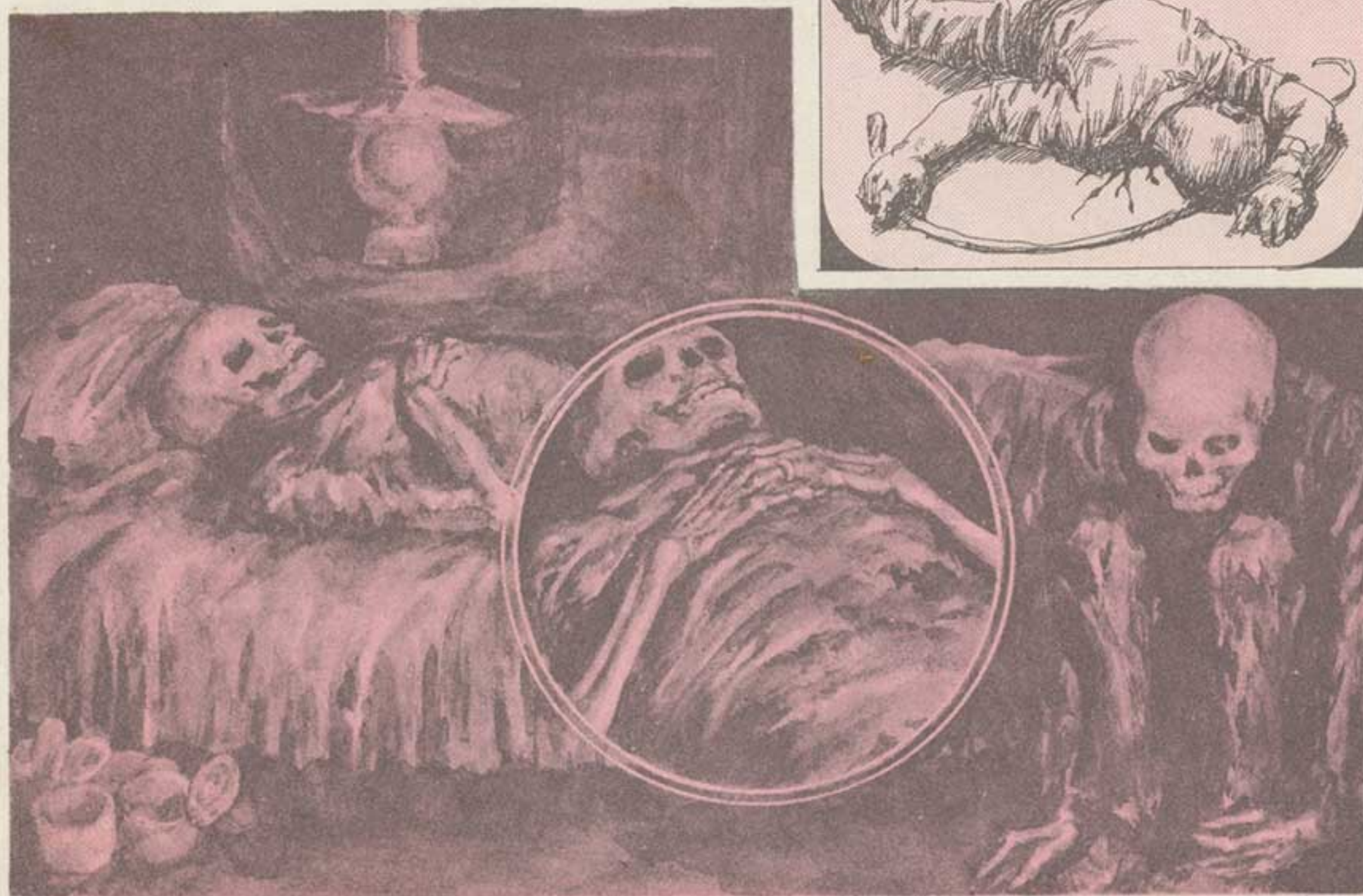
「岸山さん、一諸に来て呉れませんか、摩耶の居所が判る気がします。彼処より他には無い筈です」

摩耶と二人だけ知っている場所、この湖畔にキャンプに来て偶然に発見し、其処で二人

は始めて結ばれたのだ。その想い出の地に家を建て、新生活に入つたのだが、その夢も、赤紙一枚の為、僅か三ヶ月で打切られて了つた。転戦に次ぐ転戦、ニューギニヤで傷つき——とりもどした記憶が私を戦慄させる。

我が家である廃屋のすぐ裏手に、熊笹に覆われた人目には容易につかぬ洞窟の入口がある、心なしかジュリーも尾を垂れて悲し気な様子で先導する。懐中電灯を頼りに背を曲げて続くと、その奥に発見したものは、湿気でボロ／＼になった、見覚えのある着物をまとつ

て横たわれる白骨と、その足許にくずれる様にこと切れている同じく白骨化した作爺の姿であった。一瞬声を呑む目に昨夜、永遠の愛の誓と私の手ではめた指輪がくみ合された白骨の指の間からランプの光を受けてキラリと光った。





秋の肌



ハード・ボイルドにおける嗜虐傾向

畏 に あ え ぐ 女

——ビル・ピーターズ作

「金髪女は若死する」より——

波 戸 容

——ジェニイの両腕は頭の上で組まれて、うすい絹の靴下でベッドの鉄のワクに縛りつけられていた。彼女の首のまわりにも絹の靴下の片方があったが、あまりかたく結ばれているので、首の肉の中にめりこんでいた。彼女の着ている黒のタフエタのドレスの左肩には、ヴァイオレットの小枝がピンでとめてあった。ドレスのすそは、太腿の中ほどまでまく

り上げられていて、脚は両方ともむぎ出しだった。ジェニイのはいていた黒いくるぶしどめのサンダルは、ベッドのそばにころがっていて、ハンドバッグと肩かけが椅子の上ののっていた。——

正真正銘のプロンドで、大きくて濃い水色の目を持ち、ほっそりしてはいるが魅力的な肉体の持ち主だった



た彼女だが、今は冷たい死体となつて、うす汚ない貸部屋の裸電球の下に横たわっている。

無抵抗なままで蹴とばされ、ねじ上げられていたであろうことが、その無理な姿勢と、細い白い脚が苦しまぎれにのばされている様子からハッキリ判るのだ。

誰がやったのだ！ 何故？ 腹の底からわき上ってくる烈しい怒りと



憎しみに齒ざしりしながら、凝然と死体の傍に佇ちつくす男、私立探偵ビル・カナリ。

ナイト・クラブの歌手だったジェニイと知りあったのは四カ月前、彼女がビルの住むフィラデルフィアに立ち寄った時。そして今日、再会の楽しい期待に胸躍らせながらシカゴの彼女のアパートを訪れた彼を待っていたのは、思いもかけぬ恋人の無残な死だった。

これが、ビル・ピーターズ (Bill Peters) の作品『金髪女は若死する』 (Blondes Die Young) の発端である。徹底した通俗ハード・ボイルドで一世を風靡したスピレイン旋風も実際にアメリカを席卷したのは、わずか三年間。その後はいっそうに作品らしい作品を発表していないが、彼によって代表されるストリップ・アンド・シュート (脱がせて射つ) 小説を要望する多数の読者の声に応えて、続々と第二のスピレイン的新人が登場して来た。玉石混淆で、中

にはヒドイのもあるが、このビル・ピーターズは構成といい文体といい間然するところのない見事さで、或いはスピレインを凌駕するのではないかと思われるのも道理、現在アメリカ・ミステリー界の人気作家ウィリアム・P・マッギヴァーンの匿名作だったのである。

ストーリー紹介に帰ろう。

ジェニイよ、俺は必らずお前をこんな目に会わせたド畜生をさがし出してやるよ。決して心配しないで天国へ行ってくれよ、ジェニイ。……猛烈な憎悪と復讐の念を心に秘めたビル・カナリは単身、見えざる敵を求めてシカゴのダーク・サイドに潜入して行く。

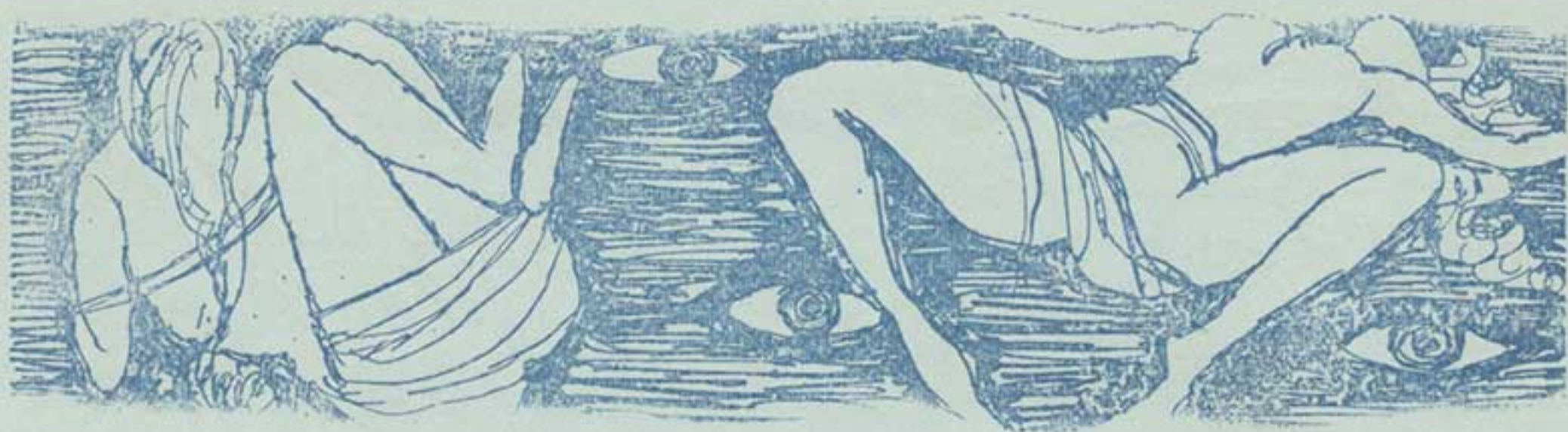
——うわさによるとこのあたりは、荒っぽい街で下品な街で、下級労働者の街でありシロシロの住む街、無銭飲食常習者や麻薬中毒者の街、そして、現金登録器のような心をもつ

女たちや、世界中で一番無情な警官のいる街であった。——

「バートニイズ」で彼は、さっき殺人現場で話しかけられたエキスプレス紙の婦人記者テリイ・ミッチェルと会って、ジェニイの身辺についての話を聞くが、それによると彼女はシカゴの親分モート・エラートンの親友で、自分の弟に麻薬を与えていたという——そんな事があるだろうか？ 信じられない！

ビルはテリイをアパートまで送って行く。湖に面した居間。白いナイロンの部屋着に着替えたテリイはすっかり感じが変っていた。グラスをあわせる二人。

——「私は少し飲みすぎてるわ」彼女はこう言っただけでモジモジしながら、空いている方の手で部屋着のひもをいじっていた。「もうおそいわ」(中略)「急に道徳観がよみがえったのかい？」(中略)私は彼女に向



って冷たい笑いをうかべながら心の中で楽しんでいた。「物事は始める方が途中で止めるより楽だよ」私が言った。「私たち別に何も始めてやしないわ」彼女は、いささか上ずった声で言った。「僕は始めてないが君が始めてるよ」――

彼はテリイを抱き上げる。「おろして頂だい、キング・コング！」必死に両脚をバタつかせるが、かまわず寝室まで運んでベッドの上にほうり出す。

――「君は喋りすぎるよ」私が言った。「僕には悪気はないんだぜ。それを皮肉たっぷりで、さんさん人を小馬鹿にするとはどういうことなんだ？」

彼女は呪いの言葉を口にしながら手をふり上げて私の顔をたたこうとしたが、私はその手首をにぎって支えた。私の体重は彼女の片腕にのしかかり、彼女のもう一方の腕をベッ

ドにおしつけて、頭の下にまわしている手でつかまえた。

「悪漢！」彼女はこう言って意味なく身体をバタつかせてもがいた。

「たいこ腹の極悪人！」

やわらかい電灯のほのかな光りが彼女の顔のデリケートな線を照らした。胸は急ビッチの呼吸で上下し、引きつったノドの筋肉を動かせていた。彼女は私から目はずして下唇をかみしめていたが、バサバサの頭髪はベッドのおおいの上で黒かった。彼女はまだ、泣き出しはしなかった。泣くまいと必死になっていた。しかし、やがて泣き出すだろう。私は、彼女が泣き出す理由を知っている。――

うっかりすると暴行シーンみたいに受取られそうな件だし、恋人の死に泣いた直後に、あまりにも刹那主義的超ドライにも見えるが、実はこのビルの行動には隠された意味がある。しかし、探偵小説の紹介文で

あまり詳細に亘るという事はつつしまなければならぬから、これ以上は直接、早川書房版のポケット・ミステリイについて見られたい。

――「君は表面をつくろっているんだ」私が言った。「皆にそう言われているんだろ？」

「ほうっっておいて頂だい」

彼女は今までにすいぶん私の心を傷つけている。今こそ私が彼女をとっちめる番だ。なるほど私のしたことは、ひどかったかも知れないが、それがどうしたと言うのだ？「君は怖くてふるえているね？」私が言った。

「君は僕が怖いんだ。君は男が怖いのだ。それで君は得意の毒舌を用いて男の生皮をひんむこうとしているのだ。そんな方法では僕たちは参らないよ。あまり近づこうとしなくなるだけだよ」

彼女はまたもや暴れ出した。私の言葉が、彼女には、大変な責め道具



に思え必死になって逃れようとしたのであろう。彼女はついに泣き出した。ほっそりした身体全体をふるわせる、身も世もあらぬ泣き方であった。

スピレインの作品の特徴として、女性が責められるシーンが、必らず何所かに設定されてあったが、彼の後継と目される此の作品も、そのひそみにならつてか、それは要所々々に、ぬかりなく採り入れてある。しかし、そこにスピレイン以上の趣向がさまざまに凝らされていて、そういう面でも単なる亜流・凡手ではない事を知らされるのだ。

アメリカに於ける女尊男卑的風習は、最近はいふ揺れ動いて来ているとは言っても、まだまだ強いものがある。女性の持つ「弱き者の特権」を普断、思い知らされて切齒扼腕している善良なる男性達が、映画や小説のこうした場面で秘そかに快哉を叫んでいる……という事も確かに考

えられるのではなからうか？

ともあれ、この件りのような、言葉によつて女性の痛いところをついて行くという責め場は、ちよつと珍らしいシチュエーションであらう。

——「出て行って頂だい！」彼女は低く太い声で言った。「何も言わないで！」

「男たちは君の煙草に火をつけてはくれんだろ？ 花だってくれやせんよ。それは君がそうさせないからだよ、テリー。君は僕のことを昼間のあんどんと呼び、僕がある娘を愛して見事に裏切られたからとて態あ見ろと考へた。君はやはりブラステック製の聖女ではなく、女は女としてあつかつてほしいんだよ。君は口だけで大きなことを言ってるんだよテリー。そのくせ、女として取扱われることを馬鹿みたいに怖がっている。君は女になりきれるかどうかと疑っているんだ。ちがうかい、テリー？」

「もうよして頂だい！」彼女が叫んだ。

私は、彼女のナイロンの部屋着のひもをほどいて、平たい彼女の胃のあたりに、じかに手をすべりこませた。彼女は激しく身体をねじまげてあえいだ。彼女のわき腹の筋肉が、私の指の下でこきざみにふるえるのを感じた。(中略)

「いいかげんに肚を決めるんだ」私は言いたかったことをすっかり言つたし、傷めたいだけ彼女を傷めてやった。もうこれ以上に彼女を傷めたいとは思わなかった。——

翌朝からビルの体当りの脚の捜査がはじまる。ジェニイが歌っていたナイト・クラブ「スター」の経営者ボスのエラートンの邸宅で、お定まりの凄味をきかせた子分どもを相手にタフ・ガイ振りを発揮し、また、「スター」の女マージゴを魅きつけて情報を探る。

今度の事件の最初から、彼の周囲



に出没していた憂うつな表情の謎の男スミス氏は、尾けている彼の眼前で射殺される等、事件の背後にはこの街の麻薬密売団がからんでいることが次第に明瞭になってくる。

ジェニイのアパートに置いたままにしてあった荷物をとりに行ったビルは、そこで何者かに襲われ、昏倒する。気がつくとき、そこへ誰かが近寄ってくるのが見えた。

——両足が私の頭のすぐ近くの光線の中に来ておそろおそろとまった。くるぶしでとめる黒いサンダルをはいた細い茶色の二本の脚が、月の光りの中で銀色に光っていた。その脚がつい私の目の前にあったので、くるぶしにつけた金色のブレイスレットに刻まれているイニシアルも、脚にはえている美しい金毛もはっきり見えた。

片方の足が動くのと同時に私はわずかに身を起して、その両脚のくるぶしを片腕でかかえこんだ。女はお

とろきのあまり息をつめたが、私の背中に両ひざをつきたてて、今度は怒った猫のようにひいひいという声を立てた。私はなおもくるぶしをかかえた腕をはなさず、あいている方の手で女の手首をつかまえた。しばらくのあいだ、私は不利な立場におかれていた。そして、やがて私がかんでいた手首がはなれたかと思うと、女の爪で両目を引っかかれていた。

私は女の身体を自分の身体の上に引きたおそうとしたが、彼女はスタート・ポジションについたときのようになかつこうで、両ひざで私の胃の上をふみつけるので、私は身体をひねって彼女を下におしつけた。このあいだ、彼女は声一つ立てず、ただひいひいはあはあという音とあらい呼吸にあえぐ音、そして、くいしばった歯のあいだからもれる、獣のような低いうめきだけが聞えるだけだった。私はやつのことで彼女の両手をつかまえ、下むきにころがすと

彼女の両腕を、背中の上でしめ上げた。彼女は必死になって私からのがれようとしてもがいたが、私は彼女の両腕を強くおさえ、体重を彼女の脚の上にかけておさえつけた。

「あばれるな！」私が言った。「あばれるなど言ったらよせ！」

今となつては女の力ではどうにもならないのだが、それでも女は低い怒声でさかんに呪いながら必死になつて身をもがいた。私が彼女の手首をねじ上げたので、ようやく呪うのをやめて、かるくすすり泣きをはじめた。格闘はおわって彼女の身体はグツタリとやわらかになった。——

やはり相手が女性だけに、何やら陰性のすさまじさといったような気配もあるが、見方によっては妙な色気めいたものもあるというものの。ほほをカーペットに押しつけ、両腕をのばして横たわっている此の女性は何者かということも、まず云わぬが花であろう。



——私は彼女のそばにひざまずいてクルリと彼女をおおむけにした。

「お前は何の用があつてここへ来たんだ？」

「お願いだから救けて頂だい」（中略）彼女はガタガタふるえ、苦しみにゆがむ顔は青ざめていた。「あなたの言うことなら何でもきくわ。どんなことだってするわ」

私にはピンと来た。（中略）

「後生だから救けて頂だい」と彼女はすわりこんだままの姿で身もだえしながら私の両手をつかんだ。「あなたの身のまわりのお世話だってします」

常日頃、女性は一目置かなければならない存在として馴らされているダグウッド氏らにとって、想像の世界でなりと、こんなセリフをブロンディーにはかせて見たいところではないか。

ビルは麻薬中毒者である彼女を因にして密売団の組織を攪乱する計画

をたてる。つまり、彼女が密売人から買った薬が不純で病気になったと云い立てさせれば、問題は結局、組織の上層部まで持ちこまれ、街中の業者に大混乱が生じる。そこを衝けば、やがては大物の正体がつきとめられるだろうという狙いである。

しかし、四のあとを尾けて飛びこんだビルの一室で、彼はエラートンの子分に、拳銃で殴り倒されてしまふ。意識を回復した時には、彼は椅子にしばらくつけられて、身動きならぬでいたらくだった。そして四に使った女もそこに居たが、

——彼女はクリスマススの七面鳥のように、がんにがらめにしぼり上げられて、ベッドの上にうつ伏せに放り出されていた。彼女はひどい恐怖に青ざめながら私の方を見ていた。彼女の身体の位置では、私に目を向けるのが精一杯の動作であった。彼女は両手首を背中ではばられており、そのロープのはしで足首もしばられ

ていたので、まるで引きしほった弓のようにそりかえっていた。面白半分でなければ、こうまで彼女をしぼり上げる必要はなかった。エディの顔にうかんでいる笑いから判断すると、彼はユーモアのセンスを持った男のようだった。——

この辺に来ると、いよいよスリー・S・ストーリーの独壇場で、ファンが固唾をのむ見世場というわけである。

——彼女の目に哀願の色を見ると、私は胃袋のあたりがぞつとした。彼女は自分をこんな目に会わせた私という男に向つて必死の救いを求めているのだ。だが、私に出来ることは心の中で考えていることとは百万マイルもかけはなれた、自信の色を顔にうかべて彼女を見つめる以外に何一つなかった。（中略）

エディがニタリとして、彼女のそばに腰をおろしたことから、彼がど



んな性格の人間かが判った。彼のニ
タリと笑ったのは、ほんの序曲で、
彼の残虐性は全くの病的なまでにみ
にくいものであった。彼は実にうれ
しそうに女のむき出しの脚をかくく
たたいてから、ポケットのライター
をとり出して火をつけた。彼はメラ
メラと燃えているその火をじっと見
て変な笑い方をすると言った。「さ
あ、エディに話をしな、ベビー。俺
はお前との長い友だちづきあいを棒
にふりたくないんだ」

「私は本当のことを言ってるのよ」
女が言った。その声には新たな恐怖
のひびきがこもっていた。彼女は一
度言い出したことをどこまでもおし
通す以外に、のがれる道はないと決
心していることがよく判った。嘘だ
ったと言うには、余りにもおそすぎ
た。――

ヒロインやヒーローの身に降りか
かる危難は、あくまでも執拗に、残
酷に――というのが、古今東西を通

じてメロドラマに不可欠の要素であ
るが、して見ると、最も残虐なのは
作中の悪人どもではなくて、読者で
はなからうか……閑話休題。

――エディはため息をついて立ち上
ると、浴室の中へ歩いて行った。彼
は長いばんそう膏を手にしてかえっ
て来た。片手にはまだ火のついたラ
イターを持っていた。ムーアは煙草
に火をつけると、二度ばかりふかく
吸いこんだ。

「早いことやれ」彼はベッドの方を
見ようとししないで、肩こしに言っ
た。「グズグズするんじゃないぞ」
「やるよ。やるよ」エディはライタ
ーをしまうと、六インチばかりの長
さのばんそう膏をすばやく女の口に
はりつけた。そして彼女のそばに腰
かけると、くるぶしでとめる彼女の
サンダルを脱がせて床の上に投げ出
した。(中略)彼は、ポケットから
ライターをとり出して火をつけた。
(中略)私はばんそう膏をはりつけ

た女の口からもれる悲鳴を聞いた。
同時に彼女がベッドの上で身体をの
たうつ音も聞えた。(中略)ベッド
の上からは、さらにひどい音が聞え
て来た。ばんそう膏を肉ごと引っぱ
がす音が聞えた。
「さあ、ベビー」エディが猫なで声
で言った。

女の声は、高くて細くて必死だっ
た。「もう、そんなことしないで！
やめて！」――

半殺しの目に会わされて地下室へ
はうり込まれたビルは超人的な努力
で縛られたロープを煉瓦の角でこす
り切り、ムーアとエディに徹底的な
お返しをして(何しろ一人は締め殺
し、一人は眼と首を拳銃で射抜いて
息の根を止めてしまうのだから、サ
ンザンじらされた反動で痛快きわま
りない)脱出する。四の女は拷問さ
れてもだえ死んでいた。

彼の活躍によって連邦検察局も動
き出し、麻葉ギャング一網打尽の体



制は整うが、ジェニイの此の事件との結びつきや、何故殺されたのかという理由、真犯人などは、ギリギリの最後になるまで判らない。そうした点でも探偵小説としての骨組もまたことにシッカリしていて、本格的な翫賞にも、耐え得る佳作となっている。また、いわゆるオルソドックスな探偵小説に興味のない方でも、グイグイと引きずりこまれて行く面白さを備えているのが、この種のモダン・デイクティブである。

この程度の短かい紹介では、醍醐味は解って頂けないだろうが、多少とも食指の動いた方は、ぜひ早川ボケット・ミステリー中の一本を購入されて一読される事をおすすめする。野中重雄氏の訳文も、実に練達流暢の名訳である。

ところで、此の一文を草するにあたって、はじめて気のついた事がある。というのは、ハード・ボイルド

も数あるけれども、女の責め場を探り入れた作品は実に少ないという事である。此の点でも、やはりスピレインは他のハード・ボイルド派とは異質なものを含んで居り、そして、それが、あの空前のブームを招来した原因の一部ではなかったろうか？ 本当は、もっと数種の作品からピック・アップして色どりを添えたいと思ったのだが、手許にある微々たる蔵書の中から、スピレイン以外には此の作品くらいしか見出せなかった。まことに不勉強で汗顔の至りである。大方の御示教をまちたい。

次号予告 — 時代小説 —

死人駕籠 黒木 忍

女の白い肩が小刻みにあななく。逃れるすべはないのだ。不気味な眼は妖気を帯びて無抵抗な女の肌をはいまわる。闇夜を行く死人駕籠の行方は？

次号掲載！ 乞御期待！！

ちなみに、"エラリー・クイーンズ・ミステリ・マガジン" 日本版編集長・都築道夫氏によれば、スピレイン派の作風を持つ作家の中で、優秀な人々としては、ここに御紹介したビル・ピーターズ "Spillane in Mink" (ミンクを着けたスピレイン。女性が主人公なのだろうか？ それとも上流社会が舞台なのか？) というキャッチ・フレーズ付きだというエドガー・ボックス。スピレインの戦友だというアール・ベイズインスキイ。その他リチャード・マーステンなどがあるとのことである。

裏

窓



あぶちっく・みすてりい特集

十一月号

第二卷・第十三号

鬼^{おに}

姫^{ひめ}

変^{へん}

化^げ

隠密覚書

第八話

島本春雄

中島喜美・絵

一、鬼女囚人

貧相な屋敷侍が二人ヒソヒソ話している。

「地下牢の囚人、おぬし見たか？」

「いや、当屋敷の先代の住人、発狂して九千石を棒に振った長尾備前守が、御老中の耳に事情が洩れるまでの半年ばかり、無理矢理押し込められていた話は聞いたが、長尾家がお取潰しになり、我々が移り住んで以来は用のない地下牢だ。単の巢になって久しい所、先頃何者か囚人が一人閉じこめられた事は知っているが、まだ見たことはない。何しろ、地下牢お錠口には近寄るべからず、——と言うきついお達しだ」

「ところが、近づくな、見るな——と言われると余計見なくなるのが人情でな」

「ふむ、するとおぬし……」



「フフ、いかにも。お錠番の隙を狙って、ちよいと覗いて見たよ」

「ちよいと覗いた？　えらく手軽に言うが、錠はどうしたのだ？」

「なあに、錠番侍野瀬紋十郎、酒をくらって高軒だ。腰の錠を抜いたって気づくところの騒ぎじゃない。これ幸いと……」

「フーム。それにしても思い切った事をしたものだなあ。それで、地下牢の囚人、一体どのような奴であつたな？」

「それが……」

と話しはじめたのは、村越重太夫。聞き手は権藤左馬之介、ともに直参とはいえ、糊米ていどの扶持を頂戴して二本差している御家人で、お家断絶となつた長尾備前守の桜屋敷に新しく移り住んだ、お化粧料五千石の將軍家御連枝溶姫様附きを命じられ、邸内のお長屋に巢を構えているのであつた。

「……それが、全く驚いたな。つまり……」

野次馬根性を出して、薄暗い、じめじめした地下の座敷牢を覗いた村越重太夫、物音に弱々しく振り向けた囚人の顔をひと目見てギクツとした。

——鬼女。

幽暗の中に、グワツと口の裂けた乱髪の鬼女が、金泥の眼を剝いて眩やくような、すすり泣くような、含み笑うような——そのいずれとも判らぬ不明瞭な声を発すると、走り寄って牢格子にヒシと取りすがつたのである。

「げっ！」

驚いて逃げ腰になつたが、よく見ると、それは鬼女の面を被せられどす黒い墨染の僧衣を着せられた囚人であり、息づく胸のふくらみから女と判った。

「ふーむ、女か。奇妙な事もあるものだ。一体そやつは何者であるの？」

「判らぬ。とにかく狂人が半年も住んでいた座敷牢だ、べとべと肌に纏いつく湿気、得体の知れぬ不気味な臭気、そこへもって来て、薄暗くて陰気で、ゾクリと背筋に迫る冷氣——いやや鬼気陰々とはあの地下牢の事だな。おれは這々のていで逃げ出したよ」

「フフフ、桑原く。君子危うきに近寄らず——そのようなエテ物の係りは、新規お召抱えの冷飯浪人共がちょうど似合ひだ」

権藤左馬之介が首を縮めると、村越重太夫もうなずいて、ぶつぶつ、コボしはじめた。

「全く……。しかし、おれには姫のお心がさっぱり解せぬ。何のために浪人共を次々とお召抱えになるのだ。近頃は中間小者も、悉く新規の者に変つたし、奥の腰元たちも、古い者はお咎めを受けたり、お氣に染まなくなつたりして、あら方人別が違つてしまった」

「それに、新規の者共め、いやに威張りくさつて、我々を鼻であしらひおる。姫も姫だ、直参のわれら兩名を軽んじて、ちか頃は顔もお見せにならず、お声も掛けてくださらぬ」

地下牢の囚人の話が、愚痴に轉移して、際限もなく続いていく。こうなつては、どちらからも寝酒を持ち出して、いぎたなく眠り込

夜な夜な富商を襲う美貌の女盜賊は桜屋敷に消えた！ 忍び込んだお蘭はどうなる？

むまで続くのがおきまりであった。

しかし今宵、この二人は、度胆を抜かれるような光景を目撃し、揚句の果に、死生瞬転——地獄への道を突ッ走って、寝酒どころの騒ぎでない運命に置かれた。

二、逆剃り裸女

「だれじゃッ！」

冷たい、刺すような声が、奥の書院から聞こえたのは、それから小半刻ばかり後のことである。

襖が開き、燭台の灯が揺れると、疊廊下で進退に窮した腰元夏絵が、蒼白無言で立ち竦んでいた。

「控えい」

夜伽の側女中二人が、走り寄って、左右から夏絵をねじり伏せる。

襖の向う奥書院では、上座に溶姫——脇息に片肘つき、紅い褥に美しく気高く坐っていて、その前に新規お抱えの側侍や腰元の幾人かが半円になっていた。

「夏、今宵は書院に近づいてはならぬ——ときつく申してあるはず、何用あつて立ち聞きなど致したのじゃ」

姫の眼が、不気味にギタリと光り、その声には容赦の無い冷酷な響きがあった。

夏絵は無言である。

「近頃のそちの振舞は、まるで誰その廻しもの……密命を受けた間者のようじゃ。申して見い。何のために姫の身辺を探るのじゃ」

「探るなどと、そのような……」

「ならば、何の為に、この奥書院に近づきました？」

「……………」

「それは言えぬといやるのか」

「……………」

「ううム、主を裏切る不埒な女……言わずば言わせて見せようぞ。孫兵衛！」

透き通るような美しい額に、見る見る青筋が走って、姫は傍の側侍関根孫兵衛を呼んだ。

「はっ」

「吐かせて見い」

「心得ました」

新規お抱えの側用人関根孫兵衛、身分柄もなくニタリと淫らっぽく笑って、ツと立ち上った。

「そうして——」

「船越、おぬしは女が一番嫌がるものは何だと思う？」

近侍の一人に訊ねている。

「は？」

と船越弥八郎、一瞬まごついたが、何を思ったのか、こやつもニタリと笑い返して、

「左様でござりますな。まず、淫奔無頼の女でなければ、男の前で肌身を曝す事をいいたましよう」

一語一語、妙に区切って、嫌味たっぷりに言つてのけた。

「成程」

うなずいて孫兵衛は、

「夏絵殿、船越はああ申しておる。裸かに剝かれるのが嫌なら、包ま

す姫に申し上げろ」

ツイと一步踏み出して言った。

「……………」

「フム。覚悟は出来ていると見えるな。ならば……それッ、剃いてしまえッ！」

——占めたっ、とはさすがに言わないが、こんな仕事を嫌がる野郎はない。襖際に控えていた近侍が四人、バラバラと走り寄って、揉み苦茶に剃ぎはじめた。

夏絵は桜屋敷随一の美女中である。

素裸に剃かれて押さえつけられた雪の肌——乳房のふくらみも、腰のまるみも、よじれた胴から下腹への曲線も、一点のシミもなく滑らかで、清潔で、艶めかしくて、見る者の胸に何かしら兇暴な嗜虐の疼きを起させる。

「由良、女が命より大事にするのは何じゃ」

関根孫兵衛、今度は今一人の近侍に尋ねた。

「は、申すまでもなく操でござりましょう」

「うむ。ならば、操正しからぬ女ならばどうじゃ」

「黒髪。女の命はその豊かな縁の黒髪と申します」

由良十郎太、狎がくしゃみをしたような顔を崩して、即座に答えた。

「よろしい。夏絵殿、今度はその黒髪を丸坊主に剃ってくれるがどうじゃ。それで白状せぬか？」

「……………」

やはり答えは無かった。

「剃れッ！」

乱暴な声で叫んだのは、溶姫であった。

「はっ」

由良十郎太が剃刀を持って起ち上る。

「待ちャッ。そのままでは、わらわの胸が癒えぬ。欄間から吊り下げて、逆さ剃りにしてくれるのじゃ」

と、溶姫も襷を蹴るようにして起ち上っている。

無言無抵抗の夏絵を、逆さ身に吊りさげると、ツカツカ近づいて、姫の手が大きく一と揺れした。同時に、右手の姫扇が、激しく夏絵の乳房の上で鳴った。

サッ——と一刷毛、紅い筋が純白の乳肌走る。

「それっ。水も油もいるものか、そのまま荒剃りにしてしまえ」

孫兵衛の声に、十郎太の剃刀がザクリと黒髪の一端に入り、手荒くゾリゾリ剃り始めた。

「——あッ！」

その瞬間である。夏絵が、——め、雌狐——と叫んで舌を噛んだのは……

「しまった！」

うろたえる十郎太を冷たく見て、

「わらわを裏切った女……どうせ生かしてはおけぬ女……眼ざわりじや。裏の死人井戸に投げ捨てよ」

溶姫は顔色一つ変えず、にくにくし気に言っただけだ。

（——やれやれ、これが生身の女で、泣いたり喚いたり叫んだりする女なら、ずんと抱き甲斐も担ぎ甲斐もあると言うものだが、舌を噛んで死んだ女、そいつをあの死人井戸へ運ぶなんぞ、余りそつとしねえな……）

由良十郎太、ぶつくさこぼしながら、裸の夏絵を肩に担いだ。

半剃りの頭も不気味に解けて乱れた黒髪が、サラリと首筋に纏いつく。

（——うへっ）

へっぴり腰で庭へ出た。と——

「誰だ！」

いきなり死人を抛り出してキツとなった。奥書院の騒ぎを聞きつけて、権藤左馬之介、村越重太夫——名前だけ厳めしくて、その実一向頼もしくないこの二人が、何事ならんと様子を見に出て来ていたのである。

「ううム、見たなっ！」

叫んだのは関根孫兵衛である。走り寄っていきなりスバリと重太夫を斬った。

続いて茫然となっている左馬之介を、十郎太が——聞いたなっ、——言うと同時に袈裟がけに斬りさげていた。

血と死人と闇と、——一陣、なまぐさい夜風が吹き抜けて行った。

三、葵 盗 賊

ペタリ、——表の大戸に、三つ葉葵の紋所を墨黒々と描いた紙つきれが貼りつけてある。

「フーム」

唸って足を止めたのは、黒無紋の着流しに懷手の、黒い影のような男である。

ふと小首をかしげた。

そして、軽く眼を閉じ、口をキツと結んだのは、大戸の向う、家の中の気配に耳を澄ませたのであろう。

豎川に臨んだ相生町二丁目、万両分限といわれる雑穀問屋伊勢屋久兵衛の広大な構えの表である。

ちようど子の下刻。

あたりは深閑と静まり返って、猫の子一匹姿を見せず、月の光りはあるにしても、角の自身番をのぞいては、すべてが暗く、冷たく、息吹きのない仮死の世界であった。

「——？」

ほ——つ、と吐息して影侍は眼を開いた。伊勢屋の屋敷は広大で、コソリ——単の動く音すら聞こえては来ない。

「しかし、三ツ葉葵の貼紙は見過せぬ」

今度は呟やいた。

「ふむ」

呟やいて、独りうなずくと、フラリ歩き出している。それが癖なのか、別に変った歩法でもないのだが、猫のように足音を立てぬ奴である。

表構えを左へとって、ぐるっと廻ると豎川に出る。伊勢屋の裏口は、この豎川に接して木戸があり、石を疊んで船着場の拵えになっていた。

ここに船が一艘。

そして、船と木戸口に、紫頭巾、矢絰縮緬黒緇子帯の女が、三人——四人、身じろぎもせず立っていた。

木戸を入り、裏庭に抜けると、伊勢屋の土蔵がある。

これは雑穀蔵で、金蔵は母屋と棟続き、長廊下の突き当りに扉があ

って、庭からは雨戸をはずさぬと入れなかった。

その雨戸が一枚、齒抜けのようにボカリとはずれている。

——これは、明らかに賊の侵入を意味するものであった。賊。

金蔵の前に、うごめく黒装束の姿があり、伊勢屋の家族は、白雲頭の小僧に至るまで、一人残らず客間に追い込まれて縛り上げられている。

伊勢屋久兵衛。内儀お松。番頭由松。手代綾吉、久造。女中お兼、お梅。

猿轡で口も利けず、がんじがらめに縛られて、芋虫のように転がされているが、それだけは自由になる眼だけは、恐怖と絶望と嫌悪と憤怒の色をたたえて、ともすれば部屋の一角——倒れた襖の上に引き寄せられる。

そこに、どす黒い血と無惨な死体があった。

金子陣十郎。

伊勢屋の食客で用人棒のこの浪人者は、賊に抵抗したのはいいが、日頃の腕自慢も一向に役に立たず一刀のもとに斬り伏せられて、三十年の生涯を閉じたのである。

黒装束が四人、拔身を突きつけて、見張りに立っていた。その一人の刀身が血に濡れていて、このやつが陣十郎を斬ったのだと判る。

「引揚げ」

金蔵の方から声が来た。

澄んだ細い声で、これは間違いなく女の声であった。

見ると——

黒装束の頑丈な賊が七人、それぞれ肩に千両箱を担いで、金蔵から



裏庭の方に歩いていて、それを見守るように立っているのが、紫の頭巾で面体を包んでいても、桜の立樹模様には綸子の帯、ブンと蘭麝の芳香に匂まれているのは、容易ならぬ身分の女と判る。

「姫、この者は、如何様に処置致しましょう？」

最後に金蔵から空手で出て来た黒装束の一人が、蔵の案内に立てた伊勢屋の一人娘、相生町といわれるお夢をこづきながら訊ねた。

「斬るがよい」

答えは冷たく、この一言であつた。

「は？」

さすがに途惑つたものと見、慌てて短かく反問すると、

「町民下賤の娘が、寝衣に白綸子を着するとは、僭上も沙汰の限りじや。斬り捨てい」

人の命など虫けらほどにも思わぬ語気で軽く答える。

動顫して、——お許し……と、縫りつこうとする肩に、地獄の刃が冷たく走った。

「ひいーっ」

叫んだ時には、白綸子の右肩に、パツと血牡丹の花が咲いて、相生町小町の美貌の顔が醜く苦痛に歪み、死生瞬転、ぐらり大地を抱くように倒れている。

四、徳川 溶 姫

七つの千両箱は、次々と船に積み込まれた。

千両箱は、幅五寸、長さ一尺三寸、深さ三寸、堅木で造って嚴重に金具を打ってあり、一両小判は一枚が四匁、千枚で四貫、七箱七千両

では二十八貫ある勘定になる。

船に乗り移った人数は、黒装束が十三、紫頭巾縞縮緬、下げ帯の奥女中風の女が四人、そして蘭麝香の女人……合せて十七人である。

黒装束の一人が、棹をとった。——と、見て、裏手の物蔭に身をひそめていた黒無紋着流しの侍が、ヌツと立ち上った。

「待った」

声を掛けて、音もなく、ツ、ツ、ツと近寄っている。

「伊勢屋久兵衛は評判の良くない男だが、それにしても、七千両こそり持去る現場を目撃したからは、このまま黙って見送れぬて」

とタリ、杭の縄に足を置いた。

「黙れッ」

黒装束の一人——相生小町のお夢を、無音冷酷の地獄刀で、後袈裟に斬り伏せたあの男——が、ぐいと身を乗り出して吠えた。

「素浪人の分際で口が過ぎるぞ」

「ほう。こりゃ驚いた。随分威張りくさった押込みだな」

「ええい、無礼な。押込みとは何たる雑言——これにおわします姫君を何と心得る。將軍家御連枝溶姫様なるぞ」

どうだ——と言わんばかりに、心持そっくり返って見せる。

「ふふふ」

含み笑つたのは着流し侍で、

「馬鹿も休み休み言え。徳川溶姫様ともあろうお方が、夜盗の真似なとするものか。騙るに事欠いて、三葉葵を持ち出すとは何事だ」

と、皮肉な小馬鹿にしたような口調である。

「こやつ！」

「斬り捨てろ」

「許さぬ」

神経を騒ぎ廻すような、独特な調子の皮肉口調に挑発されて、口々にガヤガヤ騒ぎ立てる船の者を、

「お黙り」

鶴のひと声に制した蘭麝香の女人は、頭巾を解いて顔を見せると、

「これを見るがよい」

鼻先に、ヌツと何やら突きつけた。

見ると、それは黒光りのする短銃で、元ごめの和蘭陀渡り——銃把の上に、三ツ葉葵がくつきりと象眼してある。

「うむ、これは……金葵の短銃——！」

金葵の短銃。

それは、幕府御道具帳にも載っている名器で、先頃將軍家から溶姫に下賜されたものであった。

「ほう……ひと目でこれを金葵の短銃と見抜きましたな。そちや何者じゃ？」

「甲賀組、鳴子善四郎」

「えっ。鳴子善四郎と……？ ならばよい。今宵の無礼は見逃してつかわしましょう。大名共の尻ばかり追い廻さず、たまには市中に眼を転じ、増長僭上の町人共を、少しは懲らしめるがよい」

「——はア？」

「江戸府内十六人衆——貧民を泣かせて金を積み、袖の下を使うて南北両町奉行配下の与力、同心、岡っ引共を手なづけ、暴虐無人の振舞じゃ。伊勢屋の如きは、融通した金の返済を迫り、さる小大名の姫君を弄びし不埒な男……姫が天にかわって懲らしめてくれました。ホホホ——さ、孫兵衛、船を出しや」

「はっ。鳴子うじ、足をのけられい」

棹を突っ張って、船はツイ——と豎川の流れに乗った。

着流し侍——鳴子善四郎は、いささか毒気を抜かれた形で、暫くは茫然と立っていた。

徳川溶姫……

（うむ。確かに見覚えがある。しかし……しかしだ。俺が名乗る前に頭巾を解いて顔を見せたのは何故だ？ また、名乗る前に、金葵の短銃を示したのは何故だ。姫の顔も、短銃も、知る者はごくごく限られている。名乗る前に、おれを鳴子善四郎と見破っていたか——いや、そんな筈はない。それに……溶姫にしては、馬鹿に下情に明るいが……しかし、あの顔、あの蘭麝香、溶姫に違いない）

善四郎は、首を捻り、口を歪め、苦い顔で腕を組んだ。

「——よし」

暫くして、ペツと唾を吐くと、素早く影のように、月光の深夜の町を走り出した。

五、蝦蟇石問答

江戸府内十六人衆。

成り上りの一代分限もあれば、権現様入国以来の名家もあり、地主、質両替、紙問屋、雑穀問屋、呉服問屋、油問屋、——と家業も色々だが、いずれも長者番付の上席を占める万両分限が十六人——これを、江戸府内十六人衆と呼んでいる。

その十六人衆が、相生町二丁目の伊勢屋久兵衛を皮切りに、次々と襲われはじめた。

表の大戸にベタリ、葵の貼紙を残して行く、例のあの葵盗賊である。

伊勢屋久兵衛方。

——金子陣十郎、お夢——

唐崎屋宗左衛門方。

——筆五郎、お民——

大黒屋房吉方。

——房吉、雑賀国十郎、お弓——

越前屋四郎兵衛方。

——朱房の辰造、お葉——

唐崎屋は神田の紙問屋で、此処では手向った腕自慢の手代筆五郎と、蔵の案内にたたされた養女のお民が斬られて三千両持って行かれた。

大黒屋は麻布の油問屋で、主人の房吉は武家あがり、昔の朋輩で食客の雑賀国十郎ともども派手に立向ったが、苦もなく斬り伏せられて同じように金蔵の案内をさせられた姪のお弓も殺されている。強奪された金は、千両箱二つで二千両。

越前屋は日本橋の質両替商、高利の金を貸して太った一代身上だが葵盗賊の噂におびえて、日頃目をかけている土地の御用聞朱房の辰造を用心棒がわりに泊めた晩襲われて、辰造と娘のお葉を斬られた上、千両箱ひとつ奪われている。

万両分限は噂ばかりで、金蔵の中味は案外大した事はなかったが、それでも、伊勢屋の七千両を加えると、四軒で一万三千両強奪され、男五人 女四人が斬殺されている勘定である。

漸く御府内の騒ぎがうるさくなりはじめた。

「おい、聞いたかい」

「何を？」

「葵盗賊だ」

「うむ、聞いたとも。今度は日本橋の越前屋がやられたってな」

「これで数えて四軒目。狙われるのは、評判のよくねえ金肥りばかりだが、しかし、やる事がちつとばかしむごいじゃねえか。何も娘盛りのピカピカしたのを、きまつて一人ずつ殺して行くてはねえだろう、畜生め！」

「町方の奴等ア腰抜けの阿呆ばかり揃ってやがるんだ」

「それそれ、阿呆はどうだか知らねえが、腰抜けの方は太鼓判よ。ちよいと小耳に挟んだ所では、例の葵の貼紙——あれア、人騒がせのはつたりばかりじゃなく、押込みの張本は正真正銘の三ツ葵、公方様のお姫さんだと言う話だぜ」

「へーん。それじゃ、夜な夜な千代田のお城から抜け出して……」

「違う、城を出て桜林に屋敷を賜った、例のそら、桜屋敷の溶姫様、お化粧料五千石というあのお姫様が夜盗の親分だ。奉行所のへろへろ十手じゃ手が出ねえ訳だよ」

こんな噂も飛びはじめた。噂は噂を呼んで、野火のように拡がって行く、捨てて置いては、どんな一大事を惹起するか計り知れない形勢である。

一応安泰に見える徳川の屋台骨も、泰平の軟風になじむとタガがゆるみはじめて、諸国の外様諸大名、叛発の毒気を満々と秘め、外柔内剛、いつなんどき動き出すやら見当もつかぬ——これが実態と言つてよかつた。

鳴子善四郎が、隠密急符を受けて、吹上御苑蝦蟇石の陰に伺候した

のは、この時であつた。

「善四郎、そちはどう思う？」

將軍家直々の下問である。

「は……」

「姫の仕業と思うか？」

「手前、一度現場をこの眼で見届けております」

「なんと！ すれば世上の噂、やはりまことでありしか」

「しかし……」

「ん？」

「小々解せぬ節もござります。葵盜賊、まこと溶姫様なるや否や、輕率に速断はなりかねます」

「うむ。ならば探つて見よ。手加減は無用なるぞ」

「はっ。心得ました」

と、さて引受けはしたものの、鳴子善四郎この時ほど当惑した事はなかつた。

見覚えのある溶姫の顔。

三ツ葉の金葵の短銃。

それに、七千両積み込んだ船を屋行して、あの時蘭麝香の女人の一行が、桜屋敷に戻るのを間違ひなく見届けているのだ。

六、忍者封じ

「どうだ、何か判つたか？」

枕元にペタリと坐り込んだお蘭——その銘仙の前あきへ、悪戯な手をのばして、馬鹿だよこの人は！——と、ひと膝逃げ退かせてから澄

ました顔で訊ねたのは、鳴子善四郎である。

青畳の上に、ごろんと寝そべっていたのだ。

「色々と妙な事がね……」

お蘭は、イイツと睨みつけて、乱れた裾前を直すと、それでも性懲りもなくまた、善四郎の枕へちかちかと膝を進めて答えている。

「どんな事だ……？」

「四人小町」

「——ん？」

「お夢、お弓、お葉、お民」

「それは、葵盜賊に殺された娘たちだ」

「フフ、その四人娘が、みんな……もとは桜屋敷の溶姫様お腰元だったら……」

「本当か、それは？」

「あたしを誰だと思つてゐるんだい。甲賀の於蘭だよ。吹けば飛ぶような下つ引風情が調べたネタとは、ちいとばかり重みが違ふね」

「判つた／＼、お蘭姐御の啖呵は後でゆっくり拝聴つかまつるとしてしかし、驚いたな……あの四人娘がねえ」

「いずれも最近、お暇になつて親許に歸された……善さん、これア何か訳がありそうだよ」

「如何にも、こいつは臭いな。俺ア何だかイヤな予感がするよ」

「嫌な予感？」

「そうだ。まさかとは思ふが……ウム、ここは一番どうあつても、桜屋敷に忍びをかけて確かめて見る必要がある。……しかし、相手は徳川溶姫、事は慎重を要するな……ふむ」

善四郎、ひとりでうなずいたり、首を振ったり、ぶつくさ呟やいた

り、揚句の果てに腕を組んで眼を閉じてしまった。

呆れたのはお蘭である。

「よう、どうしたのさ。ひとりで顔を顰めたりニヤリとしたり……よう、善さんたらア」

肩を小突いたりゆさぶったりしても、知らぬ顔の半兵衛。

「フン。天邪鬼！ 変屈！ 勝手者！ もうお前がいくら頼んだって一緒に寝てやらないから——ヘンだ」

お蘭は顔をくしゃくしゃにすると、立ち上って、裾を蹴散らして、戸障子をガラリ、ペシャンと閉めて、ブンブンのいで消えた。

——と見て、むくり起き上った善四郎、

「事は重大だ、気の毒だが、お蘭、——お前にも俺の考えは打明けかねるよ……」

呟やいて、何やらごそ／＼支度を始めた。

さて——

その夜、あいにく月があつて、忍者には不都合な夜であつたが、小当りに当って見ると、溶姫の桜屋敷は、意外にも完璧な隠密封じが施してあり、さして広くもない屋敷だけに、かえって隙がなく鳴子善四郎ほどの者でも、容易に手が出せなかった。

（——愈々妙だ。將軍家姫君の屋敷とは言え、もと／＼は五千石の旗本屋敷、町人でも気の利いた単賊なら容易に踏み込めるはずが、飛弾流の忍者封じを仕掛けてあるとは……臭い臭い。ブンブン悪臭が匂うわ……）

胸のうちに悪態をついて、月を睨みながら引揚げる。この上は、漆黒の暗夜を待つほかなかったのである。

善四郎が消えると、替って桜屋敷の塀外に姿を現したのはお蘭であ

る。

「ヘン——だ。しつぽを捲いて逃げ出したじゃないか。何かあるか知らないが、見事このお蘭さんが忍び込んで、隅から隅まで、ズイーツと嗅ぎ廻って見せるよ。何か掴んで帰ったら、三べん廻ってワンと言わなきゃ、教えてやらないから……ヘン」

と、まだ怒っている。善四郎に恋して、しかし勝気の意地ツ張りで胸のうちにこそ、抱かれて吸われて、メチャ／＼に可愛がられたい、ともやもや思いながら、さて口に出しては、ポンポン口喧嘩になつてしまふ此の頃のお蘭は、もう無性に善四郎が恋しく憎らしく、いささか尋常でなかった。

ふわり——

鉤縄を塀にかける。高いといつても、忍び返しのない武者塀で、これに登るのは訳はなかった。

する／＼、鉤縄を手元に戻して、ヒョイと飛ぶ。十尺の高さから飛び降りても、猫のように物音をたてぬ修練が出来ている。

が——

お蘭はやはり、忍者としては善四郎の足もとにも及ばなかった。というのは——

塀内の忍者封じ、触るれば肌を裂き、当てれば骨まで貫く逆木の帯は見えてとつたが、帯の幅五尺、その向うへ飛び抜ければ侵入成就と考えたのが、実は重大な錯誤だったのである。

お蘭の眼力では、逆木の向うの罫を見抜けなかったのだ。

飛弾流忍者封じ土網——空濠を掘って網を張り草葉を敷いて土を被せる……

塀上から飛んだお蘭は、この土網に引っかかって、

七、死人井戸

裏庭に井戸がある。

屋根つきの釣瓶戸で、久しく使用せぬと見え肝心の釣瓶はどこへ行ったか姿を見せず、滑車も縄も埃まみれ、井戸端の石畳みも苔蒸している。

その上、桜屋敷の裏庭は、大樹の植込みが多く、この井戸のあたりは手入れも不充分で、我物顔に雑草が茂り、陰気で、じめじめして薄暗くて、何かしら妖異を秘めたたたずまいであった。

この、余り有難くない荒れ井戸に、いま仇っぽい色彩が躍っている。

お蘭だ。

忍び装束を剝ぎ取られ、そこは女のたしなみ下着に眼の覚めるような緋縮緬を着ていたのが、胸元も裾前も乱れられて、釣瓶の滑車縄で吊り上げられている。

福知山隠密行で、その柔肌に受けた刺青責めの髑髏乳房は（隠密覚書第二話・丹州鬼の巢城参照）純白のさらしをキリキリ巻きつけて、まだ人目には触れさせぬが、後手に宙吊りされては、白い脛やふくらはぎが、チラチラ隠見するのを、どうするすべもなかった。

そんなお蘭を、無心の月が蒼白く照らしている……

滑車に通した縄は、井戸屋根の柱に結んであり、井戸の中へ落ちる



「あっ！」

叫んだ時には、空濠の中へ網吊りになっていた。同時に——カラカラン……と鳴子が鳴っている。

（——善四郎さま……）

邸内のあちこちから走り寄って来る足音を聞きながら、お蘭は観念して、祈るように、善四郎の名を小さく呼んだ。

サッと籠灯の光が、そんなお蘭の顔を照らした。

心配はないが、手首に食い込む縄目の苦痛は、お蘭の体重を支えて、次第に強く激しくなつて来ていた。

血——が、ジク／＼にじみ出て、手首の縄を染め、濡らし、一滴二滴、吸い込まれるように井戸底へ落ちていった。

「ちきしよう！　ひと思いにバツサリやったらどうなんだい！　突くなど斬るなど勝手にすりゃいいんだ」

喚くと、その反動で、宙吊りの体が、キリキリ——と一廻転した。「う、う、う」

思わず喰い縛った歯の間から、苦痛の呻きが洩れる。が、叫んでも呻いても、あたりに人影はなく近寄る者もなかった。

冷汗が、つるりと頬を伝った。

カッと眼を開けば、闇に視力の利くお蘭の瞳が、井戸底に水を見ず、何やら不気味に鈍く光るもの、紅や青の交錯したもの、そして白い骨のような物を見た。

今まで、捕われの屈辱と、不安と、自嘲と苦痛に氣をとられて、気づかなかつた。

（——何だろう？……）

これが甲賀女の根強い習癖なのか、一瞬お蘭は、苦痛も虜囚の身も忘れて、井戸底の異物に視線を凝らした。

闇に眼が利くといつても、無論昼のように見える訳はなく、しかも深い井戸の事である。

暫くは、彼女の関心を唆った物の正体が何であるか、見当がつかずにいた。

釣瓶吊りにされてから、もう何刻たっているだろう。

常人——それも女ならなおの事、苦痛に耐えかねて、とつくに氣を

失なっているだろう。

しかし——

お蘭は常人ではなかった。甲賀女として秘伝の術に鍛え抜かれ、この怖ろしい虐境にあつても、氣を唆る物を見つければ、一刻苦痛まで忘れるのだ。

（——？）

異形の正体を確かめる前に、お蘭は胸のむかつくような臭氣を感じた。

死臭。

腐臭。

——と知って、急に井戸底の異物も、その正体が明らかとなった。死体だ。それも一つや二つではない。すでに白骨化したもの、腐りやすい粘膜部がドロリと崩れて、腐肉と骨と妖しく交錯したもの、まだ新しいもの——重なりあつて、五六体はあろうか。

それが、みな女である。

紅い物は下着の色、青い物は矢絰の屋敷着かも知れぬ。

さすがのお蘭も、ゾクリ——背筋を走る悪感を制し得なかつた。

一日、二日、三日……いつまで、その身体がもつてあろう。神ならぬ身のお蘭であつてみれば、いずれは宙吊りのまま餓死する運命であり、死ねば腐れて縄を抜け、井戸底に落ちて白骨と化すに違いない。今にして判った。

これは、斬るよりも、突くよりも、一層冷酷で惨虐な隠密刑である。

一寸試し五分試し、鋸引きの肉の苦痛と恐怖に勝る、遅々陰々、ねちねちとした鬨り殺しの地獄責めだ。

（ちきしよう！　負けるものか——）

舌を嚙んで果てるは易い。それだけの気力は、まだ充分にあった。
が――

命の灯の消えるその刹那まで、脱出の望みを失なつてはならぬ。――
これもまた、甲賀女に与えられた絶対の戒律であつた。

吞まず食わずで一ヶ月は生きる。

吊り身の疲労と苦痛を勘定に入れても、お蘭ならば、半月は生き抜けるはずである。

八、墨染姫

一日、二日、三日。……四日。

空しく日が過ぎて行き、釣瓶吊りのお蘭は五度目の月光を迎えた。
しかし、空模様はくずつき始めていて、夜雲が刻々に拡がつて来ている。

「ほう、さすがは女隠密、まだくたばらずにいたか――？」

不意に声があつて、井戸端に姿を見せたのは、溶姫様側用人関根孫兵衛である。

「――しかし、もうあと幾日もつまいて。冥土の土産に、いい事を報らせてやろうか。……フフ、溶姫様俄かの御発病、しかも重態じや。いまわの際に一目、お顔を拝したいとの切なる願い。將軍家も不憫に思召され、今夜お忍びで当屋敷にお成りに相成る……さてどんな事になるやら、さぞ知りたい事であらうの――」

何やら意味あり気に言つて、ツカツカ近づくと、

「そうだ、死なせる前に、一度見ておきたい物がある」

ぐいッ、――腕をのばして、緋縮緬の胸を掻き上げ、乳房を隠した白

布を剥ぎ取つた。

奔放に發育した乳房。

雪のように白い乳肌。

その上に、くつきり彫り込まれた、妖しい紅髑髏の毒入墨……

「フーム。これが噂に聞いた、狂い彫りの毒刺青か……フフ、とんだ眼の保養だて。こ、こう捻り上げたらどうなる……」

形の良い豊かな乳房は、どうやら下司の嗜虐心理を唆ると見える。

関根孫兵衛は、氣息奄奄、ともすれば昏睡状態に引き込まれようとする凄艶なお蘭を、一突きこづいて、その右乳房を捻り上げた。

乳首が充血して、乳肌が引つ吊れて、乳髑髏が奇妙に歪む。

「――ふ」

あっちへコネたり、こっちへ捻つたり、散々おもちゃにしているうちに、夜空の怪しい雲行が、月を隠し星をさらつて、無明の夜を呼び寄せていた。

「うむ、こう暗くなつては興覚めじゃて」

ベッ。

汚ない奴である。唾を吐くと、ふらり井戸端を離れてしまった。

（――將軍家お成り……そこに、どんな意味があるというのである。今の男は、何やら意味あり気に不気味に言つたけれど……將軍家が、重態の姫を見舞うだけなら、何の不思議もないはずである……溶姫、井戸底の死女……発病、將軍お成り……）

手首の苦痛も、今は麻痺して感じない。もうろうとする意識の底でお蘭は、繰り返して繰り返して一つ事を考えていた。

もう筋道立てて物を考える気力が失せている。

やがて、ガクリ意識を――失なつた。もう間もなく死ぬのである

う。

(——善四郎さま……)

声にならぬ呟やきを呟やいたようである。

その善四郎は、今、溶姫屋敷の塀外に立っていた。

月も星もない。

邸内飛弾流忍者封じも、充分心得ている。

しかし、無数の鋭い逆木の備えと、その向うの土網の罌を一気に越える事は、鳴子善四郎の術をもつてしても不可能であった。

が——

善四郎には、余人の追隨を許さぬ、鳴子流甲賀縄——あの不気味な黒縄術がある。

塀上から、土網備えの向う、泉堤の巨木まで、ざっと六十尺……

(——えいッ)

声にならぬ術気を発すると、善四郎の右手を離れた鳴子の黒縄が、音もなく電光のように走って、榎の大樹に絡みついた。

手許の縄尻を、塀上に打ち込んだ甲賀鋳に結び止める。

奥伝に——流星縄懸橋……とある、その縄の橋を、善四郎は重量のない影法師のようにスルスルと伝って行った。

これは、漆黒の闇夜でなければ出来ぬ仕事であった。

暫くして、善四郎の姿は、邸内の天井裏に現れた。

その一端、地下牢になっっている御錠口で、天井裏は封鎖され、その向うは、広い空間と地下への階段になる。

善四郎は、負い袋から甲賀の鋳を取り出した。

御錠口には番侍が詰めている。その右手首には、真田紐の鳴子綱を結びつけて、不意を襲われても、警鐘だけは鳴る仕組であり、それと

見て、御錠口の上、天井封じの板壁を甲賀鋳で破ろうというのである。

板と鋸齒の鋳——音を発しては、番侍に気取られて鳴子綱を引かれる怖れがあった。

が、予期した通り、雲行が速く、風が出はじめている。

唸る風——を利用して、油を送りながら鋳を使う。

間もなく善四郎は、御錠口の内側、ここで切れている廊下天井の板封じを破って、ヌツと暗い空間に首を出した。

縄梯子を垂れる。

地下に降り立つと、牢格子は板敷の道を右へ折れた突き当りにあった。

ここで善四郎は忍者蠟燭に火を点じた。

「う！」

鈍い黄色の光りが、牢格子の向うに、髪ふり乱した鬼女の姿をうつし出したのである。

「何者か？」

声を掛けると、よろ／＼這い寄って格子に縋ったが、呻くような、不明瞭な音を発するのみで意味が通じない。

「聞こえるか？」

と問うて、うなずくのを見ると、

「では、その面を取るがよい」

囁やくように言ってみた。まず顔を知らうと思ったのである。

探った所では、この溶姫屋敷、ほかにこれという異常はない。問題は、この地下牢——謎を解く鍵は、従ってこの囚人と考えたのだ。

葵盗賊。

次々に暇を賜わり、あるいは逆鱗にふれて手討ちになり、消えて行った奥女中たち。

姫の性情の激変。

新規召抱えの濫用。

こうした事の解明が、地下牢に閉じ込められるばかりでなく、さらに鬼女の面まで被せるといった、二重三重のこの囚人の謎に繋がっているのに違いない。

「その面を——」

善四郎は重ねて声をかけた。しかし、墨染の鬼女は弱々しく首をふって、そっと両手を突き出したのである。

「——これは？」

何という痛々しさ。

白魚の十本の指が、指端を真っ赤に腫張させ、崩れている。思うだにおぞましい爪裂きの拷問の跡が、今もなおあり／＼と残って、これでは指としての用をなさぬはずであった。

「よし——！」

善四郎の手が、ツとのびて、懷から忍者さくを抜いた。さくは錠をあける術具であり、牢格子の錠前は、苦もなく外れた。

「御免！」

素早く、面の緋の打紐を解く——もぎ取るように鬼女の面を剥いだ。

「あ、姫！」

面の下、首縛りに口へ廻した猿轡の紐はあっても、その顔は紛れもなく溶姫の顔であった。

「——姫！」

猿轡の紐を切り、安皮と坂方と袈裟の交錯に耐えかねて、グタリ気

を失なった溶姫……の柔かい身体を支えた善四郎は、もうあらかた謎の解けた顔であった。

（——そうだ。今夜將軍家は、姫の病氣見舞に当屋敷へお成りになるこれが偽姫の策謀とすれば、上様のお命が危ない！）

九、蛇 穴

闇黒——嵐の前触れを思わせるドス黒い夜空に、赤い星が飛んだ。

一つ——二つ……六つ。

赤星は打揚げの忍者合図——、溶姫屋敷の大屋根から、鳴子善四郎危急の隠密急符を打揚げたのである。

遠く甲賀屋敷で、この急符を読んだ者があり、將軍家の御忍び駕籠は、危く溶姫屋敷お成り寸前に食いとめられた。

「射てッ。殺せつ。逃がしてはなりません」

灯影乱れる泉庭に立って、半狂乱のように喚き立てたのは、偽溶姫あの瓜二つの美貌と声と姿体をもった盗賊姫である。

火縄銃が火を吹いた。

合戦用の本矢が、雨のように飛びはじめる。

善四郎の姿は、矢と玉を避けて、飛鳥のように榎の葉陰に飛んだ。

「灯り——灯りッ！」

叫んでも、この大樹をくまなく照射する龕灯の用意はない。

「む、無念！」

偽姫の瞳に涙があふれ、夜更そのままに相貌が変わっている。

「——この上は……」

と、御錠口へ走りだす。

「姫ッ！ お逃げください。逃げて、再起を……再起を……」

関根孫兵衛、船越弥八郎、由良十郎太が、口々に叫びながらあとを追った。

「——あ、おらぬ！」

地下牢の前に立って偽姫は茫然と四辺を見た。

「——そんなはずは……」

牢内に飛び込んだが、そこには鬼女の面一つ、嘲笑するように転がっているのみで、捕われ人の姿は、影も形もなかったのだ。

「ホホホホ」

突然笑いだした。そして、くるり振り返ると、

「関根、皆の者、さらばじゃ」

投げつけるように言つて、牢内の片隅に垂れている房紐をグイと引いた。と——

「あ——姫！」

パクリ、足もとの板が下へ開いて、偽姫の白綾子績帯姿が、吸い込まれるように視界から消えてしまった。

「あ——う……う」

叫ぶ声と呻く声が、鈍く反響して這いあがって来る。

地下牢の一角に、更に深い穴をうがち、そこには無数の蛇が、うねうねクネクネ、異臭を放って蠢めいており、今、偽姫の柔かい生身を迎えて、狂ったように動き出した。

顔を這い、首を巻き、胸、腹、足、腰——至るところ柔肌に纏いつくのだ。

蛇と美女——やがて死……が来るはずである。

葵盗賊の溶姫。

鬼女面の溶姫。

いったい、この謎は何であつたろうか？ 鳴子善四郎の《埋れ草》は、次のように解いている。

先頃凶事あり、お家断絶領地没収、斯くて亡びたる飛弾高山三万八千石金森長門守に、隠し姫一人ありて、名を珠姫と言へり。当代將軍家を恨みて復讐の一念に燃ゆ。旧家臣関根孫兵衛始め多数の者姫を指喚、反逆に盟約す。珠姫、奇しくも徳川溶姫様に瓜二つなりこれ天の助けと、一夜桜屋敷に忍びて溶姫を地下に移し、自から身替りとなる。化身現れるを怖れて旧女中、側侍共、次々に暇を与え或いは斬り、次第に盟約の金森党と入れ替え、幕政を嘲弄せんため葵盗賊となりて江戸を荒す。この間、不審を感じて、老中府より特派されたる腰元ども悉く、惨忍、無惨、責めを受けて相果てたり。然れども、折を見て將軍家を誘い寄せ弑せん密略のため、旧女中、付け侍共、その総てを変える事叶わず、一部は恐迫と巧言もって仲間となせり。その仲間も変心ありて、一人二人斬られたるか——また溶姫には鬼女の面、墨染のころもを着せ、苦しめ抜いて最後に蛇穴へ投ずる予定なりしと聞く。予もまた高山に隠密して、彼等の恨みを買ひおれり、屋敷に誘いて飛弾流の罟、忍者封じの土網に捕えて、罟り殺しとなす方略なりしと聞けり。予、裏を掻きて大事を食い止む。この世、人間ある限り恨むあり泣くあり笑うあり、予、ただ命のままに働くのみ。

お蘭は、半死半生の姿を、善四郎の手で救われている。——

(第八話 終り)

異色風俗作品集

夜の錯倒

夜のるつぽに発酵するあやしい媚酒の香
気が、あなたを悩乱の淵にさそう！ 倒
錯の夜の盃にころゆくまで酔いたまえ！

鳥羽瑛子

秋吉 巒・装幀



アッと仰天した時は、そのまま引きずられて、すぐ右手のドアの開く音と一緒に、ドサリと投げ出されている。肩を打って、思わず小さく叫んだ。とたんに再びかぶさって、細い手が二、三度もがくうちに、易々と猿ぐつわがかけられる。両手は後手に縛り上げられ

ている。真暗な小部屋——。だが、霞未亡人は知っている。看護婦たちのトイレットの隣で、不用の家具や掃除道具が置いてある物置部屋なのだ。恐怖にひきつった瞳が、闇の中にこの狼藉者を見定めようとわなないた。

つい鼻の先に、その黒い、かすかな影があ

る。強盗？ いや、それらしくはなかった。

しかし、一体なんのために？……深夜の物置部屋でこの影の男と対して、霞未亡人は血さえ凍るような恐怖にうちのめされているのだ。闇の中で、男が動く気配がする。

「だれ？ いや、いやッ！」

猿ぐつわの奥で、それがぶざまな呻きになったのを、彼女は聞いた。自由な足が逃れようとあせって、誰かの体にふれる。その足首を、しっかりと握った男がいる。

「ああッ！ なにをするの？」

しかし、おびえて、もう力は抜けている。その足首がグイと引かれて、何か堅い金属にふれた。

足を、縛られる！

羞恥と戦慄が同時に来た。そして、再びもう片方の足をさぐる手！霞は体をちぢめる。

背中の下で縛られた両手が痛い。

霞は暗闇の中で、唇を嚙んで赫くなっている。

（国秀官能作家・鳥羽瑛子女史の異色傑作集「倒錯の夜」があまとりあ社から発売されました。価二〇〇円・千四〇円）

祈禱師

(探訪記者トトクリ)



人間という奴、万物の霊長などと威張っている癖に、案外臆病で、脆弱で、頼りなくって、そしてまた、どうかすると、狡猾で、冷酷で、淫虐で……要するに、つまり、こんな訳の判らない複雑怪奇な生物はない、という事である。

亡友加藤は、いつも口癖のように、神も悪魔も天国も地獄も、それはすべて人間の中にあるのさ——と言っていた。

そして彼は、人間の中にある悪魔と地獄——

神行京一
根え 裕画

—悪徳、淫虐、狡猾、不倫、無知、暗黒のみに興味を感じ、追求し、蒐集し、やがて膨大な記録を私に遺してこの世を去った。

私はこれまで、彼の記録の中から、差し障りのある部分には、適当に筆を入れて、三つの物語、乳房を蒐める男、単男と猫女、悪魔に呪われた三人の男——を発表した。

ここに四番目の物語として、かりに、悪魔の祈禱師と題した記録を発表する。

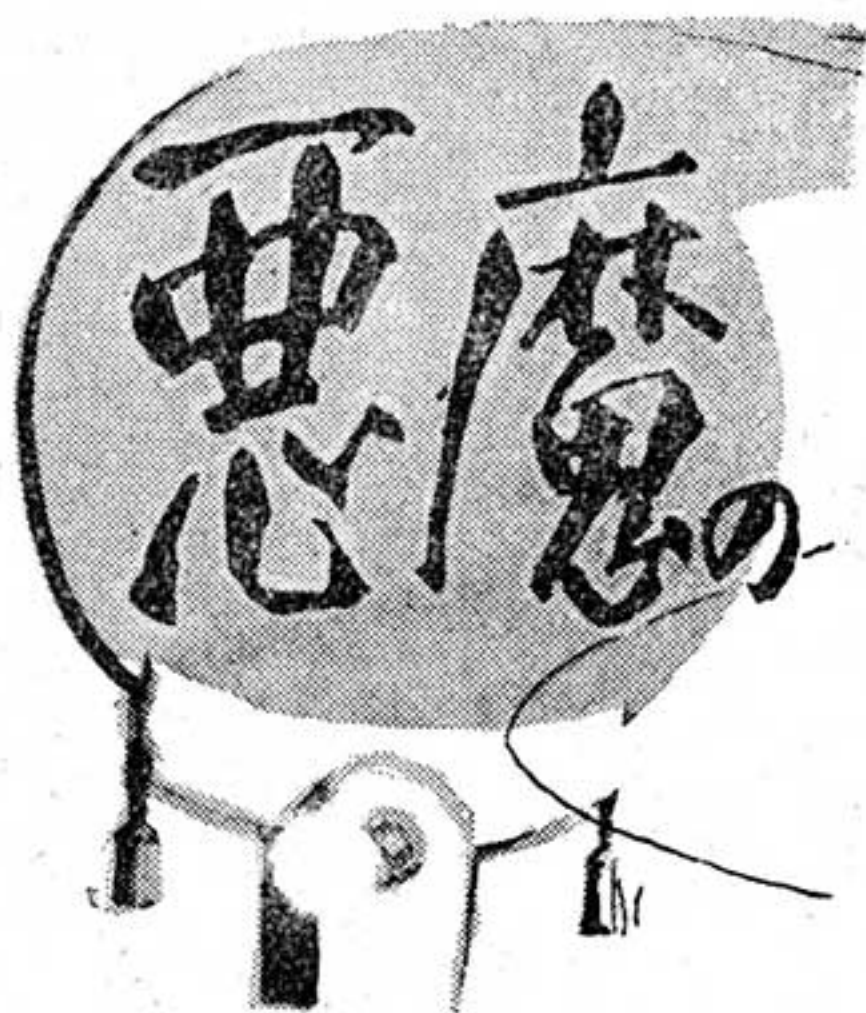
一、四枚の写真

「おい——」

ぐいッと腕を掴まれて、レインコートの男は、いささか大袈裟に見える程よろめいた。市電を降りて、ものの小半町も歩いていない。

「何だ？ 何をしやがるんだ？」

喧嘩腰で、掴まれた腕を振り払うと、鋭い



眼で相手を睨む。

七条烏丸で降りて、東本願寺へ向う道を、最初の角で左に折れると、これは賑やかな場所に出た一つの盲点——意外に人気の無い一角である。

「何もしない。ただ一寸見せて欲しい物があるのさ」

腕を掴んだ男は、至極平凡な顔に、薄笑いを浮かべて、淡々と落ちついている。

「なんだとッ」

「まあまあ、そうムキにならんでさ。たった今、お前さんが指先の早業で失敬した一件物を、一寸拝見させて貰えばそれでいいんだ」

「ウム」

「ふふふ。眼を白黒したってもう遅い。ちゃ

んと現場を目撃しているんだ」

七条烏丸。

西大路廻り京都駅行きの市電が、七条烏丸で停車した、その乗降の混雑を巧みに利用して、レインコートの男が、器用に指先を働かした。

狙われたのは、三十前後のクリーム色の夏背広の男で、左手に手提鞆、右手に洋傘を持っていた。

雨は十分余り前にあがっている。

「畜生、手前は刑事か？」

「フ、そんな野暮な者じゃない」

「すると——？」

「こう見えても、日本一の新聞記者だ」

「ヘン、手前で言ったりや世話アねえや」

「自分で言わなきゃ、だれも言ってくれ手はないのさ。そんな事はともかく、出しなよ」

「何を？」

「空ッとほけるのもいいが、相手が悪いぜ。

余りの早業に度胆を抜かれて、その場でとっ

つかまえ損なったのは、こっちの落度だ。だから今頃になって警察に突き出すような野暮な真似はしない。が、市民の義務という奴がある。その財布だけはスラれた人に返してやらなきゃ……財布の中には、名刺ぐらい入っているだろう」

「ちえっ。落ちついてやがる。仕方がねえ、財布は返すぜ、ホラ」

「フフ、確かに受取った」

「名刺を貰ったところか」

「ほう？」

「掏摸から捲き上げて、今度は手前が猫婆するかも知れねえ。念のためだ」

「なるほど。お堅い事だな。しかし、うっかりお前さんのような人間に名刺は渡せない。ソラ、これが身分証明の記者証だ」

記者証。

見ると、京都新報社会部、加藤太郎——とある。

「ヘッ」

★これは、夢でも幻でもなく、あくまでも冷酷な現実だ!!

壁一重向うの同じ屋根の下で行われている地獄絵だった! ★

とたんに、レインコートの掏摸男は、唇の端を歪めて苦笑すると、ひらり身をひるがえして烏丸通りの方角に姿を消した。

——その顔の記憶を頼りに、後で社の資料室で調べて見ると、この男、掏摸で前科八犯の猛者であった。

横沢源造 大正二年生れ。

掏摸前科 八犯。

通称 横源または花源。

一と頃花屋の店を開業しながら、専ら市電内、映画館、縁日の盛り場を中心に稼いでいた。

——社の資料室のカードには、写真の下に左記の如く、簡単な説明が記入してあった。

ところで——

財布を取りもどした加藤記者、中味を調べて見たが、あいにくと持主の住所を示す手掛りは何もなく、かわりに妙な物が現われた。

四枚の写真である。

私の手許に、今、その四枚の写真がある。

加藤は、この四枚の写真を其の一、其の二、其の三、其の四と区分して、ハترون紙に貼布して置いたのである。

其の一——三十前後の女性。素っ裸で、何のつもりか、四つん這いになって、口を

大きく開いている。

其の二——同じ女性。やはり四つん這いになっているが、これは明らかに馬になった形で、素裸の背に白衣、白袴の男を跨らせ、手綱のつもりであろう、男が、女の口に廻した細引をグイと引き絞っている。

其の三——二十五六の女性。これはグッと趣きが変わって、身に着けた物はナイロンらしいストッキングのみで、後手に縛られ、天井からぶら下げられている。

其の四——十八九の女性。素裸で座禪を組み、頭にコーヒ皿と茶碗をのせている。

「何だい、これア？」

加藤記者は顔をしかめた。よく見かけるエロ写真にしては、いささかうなぎかねる節もあるし、撮影も現像も、かなり手際よくできているが、素人写真であることは間違いない。写真其の二などは、故意か偶然か、素裸の女に跨った白袴の男の肩から上が視界の外になっている。

「はて——？」

この奇妙な写真のほかには、現金で六千二百円……名刺も所書も書類も、その他持主の

手がかりになりそうな物は何一つなかった。

これでは、せっかく掏摸の手から取りもどしたものの、持主に返却できる当てがなくなった訳である。

「面倒くさい。警察へ届けるか——」

下唇を噛んで、

「いや、待て待て、猫婆する気はないが、何となく気になる写真だて……」

何思ったか、眼と鼻の先の七条署を尻目に、見て、社へ引返した。

警察廻りの若手記者に探らせて見ると、どの署にも、掏摸の被害届は出ていない。様子を見る事にして、四五日過ぎしたが、遂にこの財布の持主からは、被害届が出なかった。

が——

事件は意外な方面に、大発展をしたのである。

殺人事件。

思いも設けず、一番厭な、一番おぞましい血の発展であった。

二、染血の寝室

「——殺し——」

警察詰記者の第一報に、スッ飛んで行くと場所は、七条御前通りを少し上った所、この

辺りの資産家で、地所持ちの加屋俊一郎邸——外庭の梅林が評判で、町内の者から、梅屋敷と呼ばれている広大な屋敷が、事件発生の現場であった。

加藤の遺品のメモには、こう書いてある。

加屋俊一郎 三十六歳。加屋家当主。

幾子 三十一歳。俊一郎の妻。

村瀬さち子 二十一歳。加屋家女中。

能勢 清介 二十七歳。幾子の従弟。

晴子 二十四歳。清介の妻。

進 二歳。能勢家長男。

つまり、これだけが加屋家の家族全部で、事件の現場は、加屋夫妻の寝室、発見者は、女中の村瀬さち子であった。

殺し——とは言っても、事件は一見簡単に見えた。

つまり——

良人の俊一郎が、妻の幾子を殺害して、その場を去らず、自分も首を吊って自殺したのである。

——が、結論はそうであっても、現場の状況は、いささか奇妙なものであった。

現場の状況。

八畳余りの広さの洋間で、個人用ベッドが南北の壁際に離れて一つずつ置いてある。扉

は東側の廊下に面した南寄りにあり、西側は庭に面して窓——薄地のカーテンが垂れていて両開きの硝子窓には、錠がキッチリとおりている。

幾子夫人の死体は、両ベッドの間——厚い綴織りの絨たんを敷き詰めた床に、首筋を血まみれにしてうつ伏せになっていた。

裸体。

一糸も纏わぬ裸体で、血溜りに顔をつけ、両腕を胸の下に折り曲げて、不自然な姿勢であり、両脚はのばして、左右に突ツ張っている。

頭の右上に、兇器の果物ナイフが転がっていて、その横の夜卓の上に、リングを盛った鉢と、リングの皮を入れた皿がのっており、夜卓の脚の片隅に、食べ残したらしいリングが二片転がっていた。

俊一郎民の縊死体は窓際にあり、窓の最上部のカーテン用の金具に、これもカーテン用の細引を絡んで罫にして、ダラリとぶら下がった事が、ひと目で分った。

手拭地のパジャマを着ている。そして、同じ手拭地のバンドがこの死体の腰にはなく奇妙な事に、全裸の幾子夫人が口にくわえて、両端は血溜りに長々とのびていた。

こういう状況である。

もっとも、加藤記者は、直接現場を目撃した訳ではないだろう。いかに敏腕で、顔の売れた新聞記者でも、発見直後、兇行現場をじっくり観察させてくれる程、日本の警察は寛大ではないはずである。

この状況は、あとで懇意な築山警部に、現場写真を見せて貰って知り得た知識であった。

ほかに、色々蒐集した情報がある。再び加藤のメモを開いて見よう。

○現場の果物ナイフに俊一郎の指紋。

○死体の顔の下に一枚の写真。

||それは、前記メモ四枚の写真中其の二の写真に該当する。

(筆者註)

○加屋俊一郎、ここ一年余り、心臓を悪くして寝たり起きたりの生活。

○同氏の主治医は、西大路七条の九鬼医師である。

||そして最後に二重丸が二つ描いてあってその下に、次の如

特集 いりす*ちくちくあ

く驚くべき言句が簡明に記されてあった。

(筆者註)

◎加屋幾子夫人は、写真其の二の裸体美人
と同一人である。

果物ナイフの指紋が証拠で、この加屋邸事件は、殺人事件としては、至極興味の薄いものとなってしまった。

犯人を探す必要もない。

警察は手をはぶけて大助かりだが、反対にそれまで余り興味を示さなかった加藤が、むつかしい顔をして、眼ばかりギラギラ光らせて憑かれたように、この解決の済んでしまった殺人事件に執着しはじめたのである。

何かしら異常なもの、この世の常でないもの、悪徳と不倫と淫虐とドス黒い臭いのする物に対しては、狂人のように、執着し、食いついて離れない加藤の性癖が、ここでムクムクと首をもたげ始めたのだ。

掏摸の手から、取りもどした財布の中の写真。それも異常な裸体の四つん這いの写真美人がその良人の手で殺害された。

そして――

死体の顔の下には、手に入れた写真其の二と同一の写真があり、掏られたクリーム色夏背広の男は、確かに加屋俊一郎とは似ても似

つかぬ男であったのだ。

一体、この奇妙な事件の裏には、何があるのだろうか？

あの写真の撮影者。

馬乗りの白袴の男。

撮影の場所。

他の二人の女。

そして掏られた男。

このすべてが明らかにならぬ以上、他の者はいざ知らず、加藤の考えでは、加屋殺人事件は解決したとは言えないのである。

三、九鬼医院

1

「――いや、お説の通りだよ。犯人は明らかに加屋俊一郎で、しかも現場で自殺してしまっているんだから、今さらあれこれ勘繰って見ても始まらないが、やっぱりあの夫婦は尋常じゃなかったんだな」

話しているのは築山警部で、ニヤリニヤリ聞いているのが加藤太郎である。

警部の私宅。

その応接間。

鬼警部と敏腕記者、仕事を離れても、二人はかなり親交があったようだ。

「つまり――サドとマゾてえ訳さ。現場に写真が落ちていたろう。素っ裸で四つん這いになって、背中に男を乗せているのが、明らかに被害者の幾子夫人で、乗っている男は、顔が分らないけれども、まず良人の俊一郎と考えて間違いないと思う」

「そうかな――？」

「そうとも。女房を裸に剝いて、馬に見立て、あのスベスベした尻でも引っぱたきながら、寝室内をグルグル廻っていたんだらう。馬鹿々々しいようで、しかし危険な遊戯さ。特にサジストとマゾヒストの組み合わせではね。次第に興奮して来る。手綱をむやみに引っ張ったり、尻を叩く力が強くなる……因果な事にそうされればされるだけ、夫人の方は苦痛と屈辱の快感に愉悅する……恐らく、こんな事は、寝室の秘密として、何度も何度も繰返されていたに違いない。自動シャッターで、その姿態を、写真に撮ってあるくらいだ。所が事件の夜は、従来の繰返しだけでは済まなくなった。何か刺激する理由があったのかも知れん。尻をひっぱたきながら、よたよた這い廻っているうちに、俊一郎の手が、フト夜卓の上の果物ナイフに触れた。十分興奮している時だ。これで一寸、軽く痛めてや

ろう……多分、背中の上で、散々おとし文句を並べながら、肩先をちょいと斬った——いや、そのつもりが、思わず手が滑って、急所の頸動脈をズブリとやってしまった。ハッと驚いたが後の祭りさ。うろたえて、それで……」

「自分も死ぬ気になったと言うのかい？」

「そうとでも考えなきア、あの現場の状況は説明できないよ」

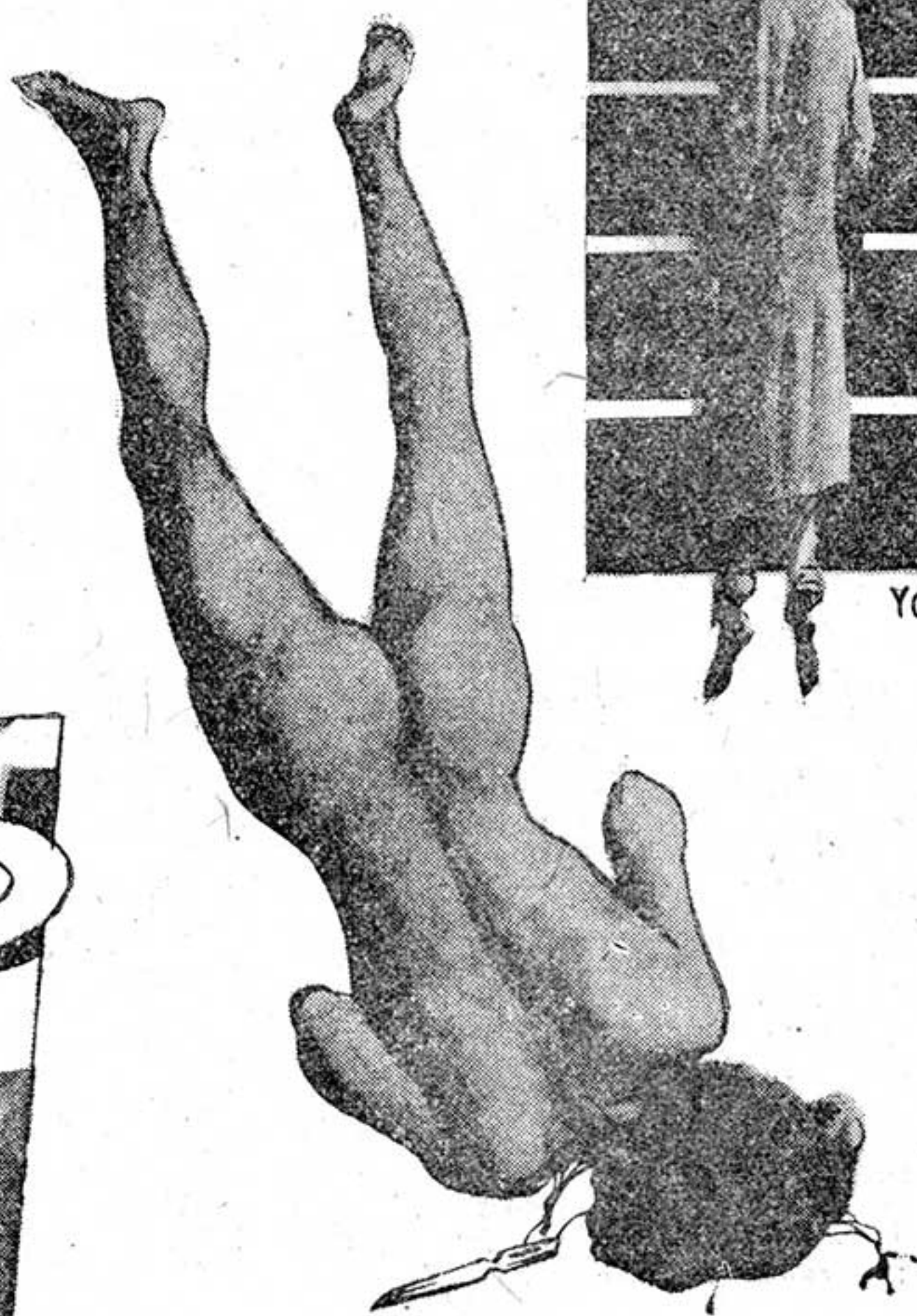
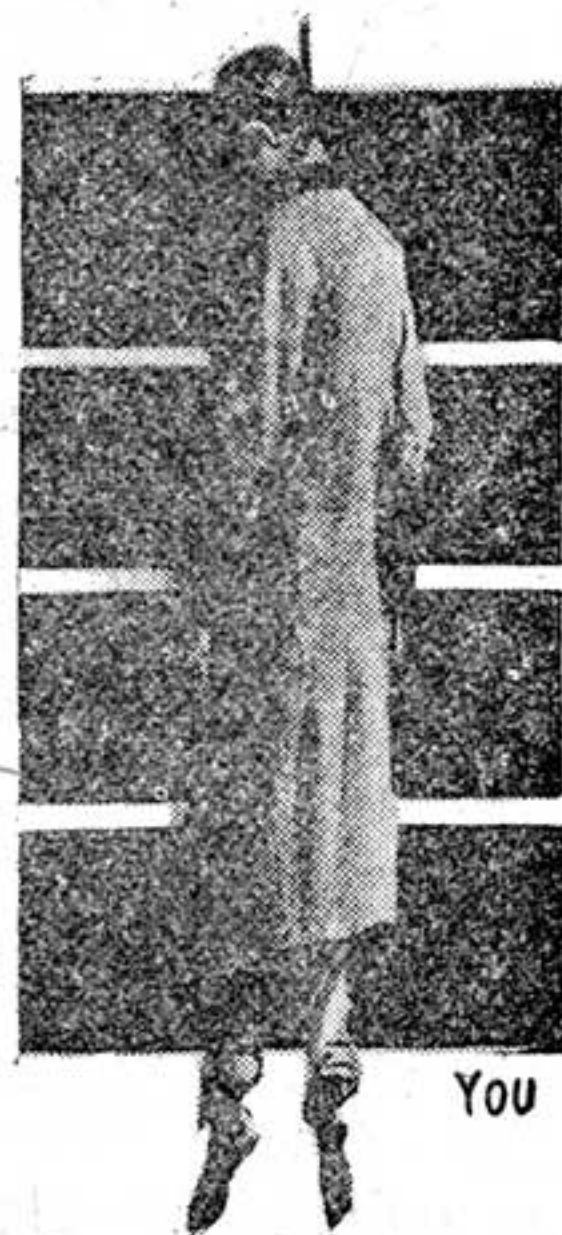
「ウム。ほくも一応は、そう考えたんだがねえ。しかし、どことなく、すっきりしない節があるんだ。誤って頸動脈を刺したんなら、どうして応急の手当をするなり、医者を呼ぶなりしなかったんだろう……」

「その疑問はもつともだが、何しろ異常性格者だ。必ずしも常識的な行動をとるとは限らないさ。それに、どう考えたって、証拠の示す通り、俊一郎が犯人に違いないんだからねえ」

「いや、その点には異存はない。しかし、スラれた男は、確かに俊一郎ではなかった。なぜあの男が、夫婦の秘密に属する写真を……」

加藤が口の中でモゾモゾつぶやくのを小耳にはさんで、

「何？ 何が俊一郎でなかったというんだ？」



それに、誰が何を

スラれたって……？」

築山警部の声が、少しキツとなつた。

た。

「いや、何でもなし。こっちの事だ……。犯

人の自殺で事件は片がついたが、記事にするには、まだ材料が足りない。事実、俊一郎が

想像

通りの異常性格

者だったとすれば、主治

医が何も知らんという事はなかる

う。一つ今度は九鬼医師に当たって見るかな」
さり気なく言って、加藤は立ち上った。そして――

「フフフ、まあ好きなだけ、突ツついて見るさ――あいにくと警察は、犯人の自殺した事件の裏を嗅ぎ廻るほど、ヒマじゃないんでねえ」

警部の皮肉だか冷かしだか見当のつかぬダミ声に送られて外に出た。

婦人科。内科。

レントゲン科。

屋根つきの看板が、玄関の右手に出ていてまだ新しい瀟洒な建物――これが、九鬼医院の外貌である。

この家は、三年前に火事を出して焼失しているが、加藤の遺品の中に、九鬼医院を正面から撮った写真があるので、私の説明の材料には困らない。

玄関の左右は、化粧煉瓦を腰高の垣にしてその上に鉄棒の格子垣を組み、ぎっしり植木で目隠し塀をこしらえてある。

玄関を入ると、左手が薬局、正面の硝子扉の向うが待合室になっていた。

「――あ！」

薬局の小窓が、同時に受付の小窓になって

るが、加藤は、その小窓に顔を近づけて、名刺を差し出そうとした途端、どうした事やら急に口をあんぐりと開けると、あわてて手を引つ込めた。

薬局。

薬剤師。

看護婦。

彼の眼に映じたのは、二十歳前後の看護婦と三十歳位の白衣の男と、夥しい薬瓶……

薬局の中に薬瓶があるのは至極当然だし、また看護婦がいても何の不思議もない。それに白衣の男は、粉薬を上皿天秤で秤量していたから、これは薬剤師に違いないとすれば、これは看護婦以上に、当然そこにあるべき人間である。

何一つ驚いたりあわてたりする理由がないが――

問題は、やはりその薬剤師にあった。記憶の正確を誇る加藤の脳裏に刻まれた顔……あの市電内のスラれ男の顔――が、この薬剤師の顔とピッタリ、相似形のように一致するのである。

四枚の写真――加屋幾子夫人――九鬼医院――薬剤師……これは偶然の暗合と考えるには、余りにも筋が通り過ぎている。

（こいつは、うかつに乗り込めないぞ）
突嗟に思案して、加藤はとりあえず一たん退却した。

九鬼医院。

――何か秘密がありそうだ。加藤の永年の探訪記者としての勘が教える。

（調査の方法は幾らでもある）

社に引揚げて、加藤は作戦を練った。

2

加藤の張った情報蒐集の網……その網の目の触角の一つ一つから続々と報告が入りはじめた。

電話A――立派な医者ですね。腕もいいし免状も本物、医学博士というのも嘘じゃありません。偽医者なんかじゃない事だけは確かです。ただ、ちょっと妙な事があるんですよ。九鬼医院には裏口というものがないんですよ。裏側には、破風づくりの門構えの家がびったり背中合せになっていて、こいつが何と、靈尊教本部――てんです。そして、医学博士九鬼博之氏が、医者であると同時に靈尊教の教主というんだから驚くじゃないですか。いずれ新興宗教には違いありませんが、天理教や金光教ならともかく、靈尊教なんて、聞

特集 いりてみ☆ちくちくあ

いた事ありませんよ。——社会部中尾記者

電話B——薬剤師は、木林庄一と言いまし
てね、学校は京都薬専ですわ。何でも、九鬼
博士が大阪で開業していた時に、近くで薬局
を経営してたらしいんですが、火災にあつて
元も子もなくしたところへ、大病をやつて、
弱り目にたたり目、散々の悲運に、九鬼博士
が救いの手をさしのべて、爾来、命の恩人て

訳で九鬼家の書生兼下男兼薬剤師
兼秘書——まあ、そう言う事で、
博士にくつついてゐるらしいんで
す。しかし、仲々食えない男だと
いう噂もあるようだし、それに写
真狂らしいですな。

——探訪室長谷記者。

電話C——看護婦を当つて見ま
した。九鬼家は、九鬼博士と薬剤
士の木林庄一の他に、看護婦が五
人います。みんな博士子飼いの看
護婦で、小学生時代から引取つて
育て上げた女の子ばかりです。だ
から看護婦兼女中兼メカケとい
う所らしいです。最後のメカケてえ
のは私の想像なんですが、おそら
くピタリだと思いますね。みんな

口がかたくてなか／＼こつちの思う通りにや
なりません、しかし、九鬼医院てのは、何
となく臭いですよ。第一医者兼新興宗教の教
祖てえのも変ですし、看護婦たちの口裏から
推察すると、彼女達、靈尊教とやらの巫女の
役まで兼業してゐるらしいですからねえ。

——社会部谷記者。

四、二人の女

外部から探知できるのは、まあこんな程度
で、尋常の手段では、これ以上の情報を望む
のは無理であつた。

しかし、絶対の確信もないのに、非常手段
の探訪は遠慮しなければならぬし、加藤は、
一足飛びに結論へ飛躍するような軽卒な男で
はなかつた。

張込み。

加藤は次の手段として、この手を用いる事
にした。論理的に計算して立てた戦法ではな
いが、とにかく、九鬼医院に秘められた謎が
あるとすれば、張込みの手で、思わぬ大魚が
掴めないものでもないのだ。

張込み第一日——異常なし。

張込み第二日——異常なし。

そして、第三日。

「おや？」

加藤はギロリと眼を剝いた。その見張った
彼の眼が、じつと一人の女性に吸いついて、
鳥籠のように離れなかつた。

二十四五の女性で、びっちり身についた水
玉模様のワンピースを着ているが、いわゆる
八等身型の美人で、乳房の盛り上りも見事な
ら、細く切れ込んだ胴、ぷりぷりと躍動する
ヒップの曲線も肉感的で、これは確かに、加
藤の記憶にある女だつた。

（——そうだし）

次の瞬間には想い出している。

あの女だ。あの女……豊かな胸も胴も腰も
剃き出しに、ストッキングだけを身につけて
後手に縛られ、天井からブラ下げられていた
女……拘摸の花源から取りもどした財布の中
に秘められていた四枚の写真、加藤の分類に
依れば其の三に属するあの写真の女——が、
今、加藤の眼前を横切つて、九鬼医院の玄関
の扉を開けたのである。

「フーム！」

唸つて、下唇を噛んで、顔をしかめて、そ
して何思ったか加藤記者は、九鬼医院の裏手
破風づくりの門を構えた、靈尊教本部の門前
の物蔭に身をひそめた。



尾行する加藤の足が、膠着したように、不意に止った。

「――はて？」

彼は見たのである。九鬼医院の玄関の扉が妙に祕密っぽく開いて、単のようにキョトキョトした男が滑り出ると、こやつが、明らかに加藤の目的の女を狙って、こそこそ尾行しはじめたのを――

しかもこの男は、例のスラれ男、九鬼医院の薬剤師木林庄一であった。

(面白い……フフフ)

どんな事になるか、思わぬ事態の変化に、
 全くそえんだ加藤は、木林薬剤師をやり過し
 て、更にその後を尾行^{つげ}はじめた。

写真の女——木林葉劑師——加藤太郎。

尾行し、される、この三人組は、ものの一

丁も歩いたろうか、右手に小公園の見えるあたりで、木林が急に歩度をはやめ、ツツと前の女に近寄ると、いきなり右腕を掴んで、

傍の小公園——児童公園の樹蔭に連れ込んだ

(フ、始まったな……)

口のうちでつぶやいて、加藤も歩度をはやめた。気づかれてはまずいので、樹蔭の前まで来ると、御丁寧に靴まで脱いで忍び寄る周到さである。

十五分。

不意に足音がした。靈尊教本部の破風門から、誰やら急ぎ足で出て出る者がある。

女。

まだ二十才前の女学生風で、ホウ——と加藤が口をとんがらせたのは、この女にも見覚えがあつたからだ。

写真其の四——あの、素裸で坐禪を組んで
頭にコーヒー皿と茶碗をのせていた女である

これで、四枚の写真全部が、九鬼医院とつ

ながっている事が分つた。

「——よし、尾行してみよう……」

加藤は、女の身許を確かめて、見る気になつた。

この女は、靈尊教の門を出ると、道を左へ折れて、つまり九鬼医院の正面の方へ曲つて七条通りへ向つた。

ピタ。

「——ね、いいだろう」

木林が、ねちっこい声で何やら言っている
「嫌ならいいんだよ。ここに持つてくるこの写真、これを、あんたの親爺さんとお袋さん、いやいやそればかりでなく、学校の校長、教師、級友達にまで、景気よくバラバラ撒くまでの事だ」

「そんな、困ります」

「フッフフ、そりゃ困るだろ。こんな、素裸で何もかも曝け出して、もう一人の裸の女を鞭でヒツ叩いている写真なんかバラ撒かれちゃね」

「あたし、こんな事した覚え、ありません」

「覚えがなくなつて、事実こうして、ちゃんと写真に撮つてある。さ、どうするんだ。黙つてオレに可愛がられるか、それとも、この写真をバラ撒かれるか」

「でも……」

「オレに可愛がられたつて、誰にも口外しなきゃ判りやしないよ。フッフ」

「……」

「な、いいんだな……」

木林は、いきなり女を抱き寄せた。

女は急に、力一杯の抵抗を始めたのである。が、さすがに声は立てない。

「くそっ！」

それをいい事に、爆発した獣性の赴くまま木林は、力づくでも——と、ギタギタ光る眼を血走らせ、女を樹蔭の草地にねじり伏せた
「ちえっ。こんな事になろうとは思わなかったよ」

ボヤいて加藤が飛び出したのは、この時である。

五、奥の院

白木の祭壇がある。

祭神は何だか判らないが、円形の大鏡を正面に安置して、御幣や注連縄を配置し、榊木の緑を添え、上段に——

▲医は心なり、心は霊なり

——と、分つたような、分らないような、妙な文句を、かなり達筆で書いた横額を懸けてある。

九鬼医院の奥、そして霊尊教本部の奥でもある、十畳敷の居間で、人口の鴨居に、奥の院——と書いた木札が貼つてあった。

白の法衣に白の袴、鼻下に美髯をたくわえた縁無し眼鏡の男が、祭壇を背にして坐っている。

医学博士、そして霊尊教教祖の九鬼博之氏である。

彼の前に、二人の女性が坐っている。

一人は、年の頃二十四五才、水玉ワンピースの肉体美人で加藤の分類による写真其の三の女であり、今一人は、三十才前後、派手な浴衣を着て、黄色の原色の帯をしめていた。

「よろしい、二人共、眠くなりましたね。そのまま、そのまま、無心、虚心に眠るのですよ。虚心の眠りは、魂の遊離を意味します。

魂の遊離は、肉にわずらわされぬ浄化を意味し、従つて、魂を失なつた肉体の病いは、いかなる宿痼も、ただ一個の物体として、その診断、その治療、ともに易々たるものとなるのです。遊離した魂は、原始に帰る、肉体もまた従つて原始に帰る、身心共に原始に帰ればそこには最早病いは存在しません……」

低い、陰気な声で、ぶつぶつ、ぶつぶつ、つぶやくように話しかける九鬼博士。

二人の女性は、軽く眼を閉じて、これは、一種恍惚とした表情を見せている。

ところで——

一種の密室となつてゐるこの奥の院の隣室に、加藤記者と薬剤士の木林庄一が身をひそめていた。

暗い。

二人は壁に顔を寄せていた。巧みに穴を掘って、壁のこちら側から、奥の院の様子が覗けるようになっていたのだ。

「何だいあれや……？ 医学博士ともあろう者がさ、言ってる事は支離滅裂で、まるで狂人のたわごとみたいだぜ」

加藤が囁くと、

「あれが、女たちを催眠状態に導く博士の常套手段なんです。密室と静寂と、そして、鏡と言葉の音楽で、博士は患者たちに催眠術を仕掛けるんです」

横から木林が答えた。

「なるほど、催眠術か——。九鬼博士はかなり達者な術者らしいな」

「ええ」

「しかし、催眠術という奴、抵抗する者とか体質とかで、いくらキバつてもかからぬ人間も多い筈だが……」

「博士は抵抗させません。相手に気取られぬよう、巧みに施術してしまふし、それに、催眠術にかかりそうでない人間は、医者としての診察の折に見抜いてしまいます。そう言う種類の女達には、靈尊教をすすめないから、万が一にも間違いないです」

「フム」

うなずいて加藤は、また壁の穴に眼をやった。彼は、児童公園で木林をとっちめ、警察への通報を差し控える条件として、木林の口から九鬼医院内の秘密を聞いたのであった。

そして今、この薬剤士の案内で、九鬼医院内深く忍び入り、壁一つへだてるのみで、奇怪な九鬼博士の行状を確かめ得る立場に立っているのだ。

いま博士は、祭壇に向って、何やら祈禱をはじめていた。

口の中でモゴモゴ……さっぱり意味のとれない祈禱で、ただ、その陰気な声が、時には高く、時には低く、波のように高低するのだけが判る。

やがて——

ピタリ、祈禱の声が止み、博士は再び二女性の正面に向き直った。

「原始、原始に帰るのじゃ、女共！ その服その着物、脱ぎ捨てよ」

命令されて、今は完全に催眠状態にあるらしい二人の女は、相変らず、軽く眼をとじたまま、一人は水玉のワンピースを、一人は派手な浴衣を脱ぎはじめた。

帯、腰紐、浴衣、下着……

ワンピース、シュミーズ、乳当て、そして全裸。

いや、一人はストッキングだけを身につけて、一人は文字通りの全裸で、九鬼博士の面前に、ぼんやりと突っ立っている。

加藤の位置からは、九鬼博士の横顔が見えた。

その横顔が凄味にニヤリと笑っている。笑って醜くく歪んだ口から、陰気な声が出た。

「間瀬一枚、お前は馬だ。無限地獄に落ちた馬だ。そうだな」

と——

「はい。私は馬です」
ストッキングだけの馬が、寝ぼけたような声で答えたのである。

「馬、馬、メス馬。四つん這いになって、ヒンと啼け」

女はもそもそと四つん這いになって、ヒヒンと啼いた。

催眠状態の女には、羞恥もなければ、嫌悪もない。それだけに、これは何という冒瀆的な眺めであったことだろう。

加藤は心中唸った。

探訪記者として永い経歴を持つ彼は、これまでに、幾度か、催眠術の実験——公開、

非公開、祕密施術——を、見て来ているが、これほど完全な、これほど冒瀆的な施術は始めての経験であった。

「村山初江は地獄の鬼じゃよ。無限地獄に堕ちたそのメス馬に、地獄の鞭をくれてやれ」博夜が革バンドを、浴衣を脱いだ全裸の女の手に握らせる。

「打て！」

裸の乳房をゆすり、掌と膝頭で、十畳の密室を這いずり廻る女。

これを追って、背、尻、脚、所嫌らわず鞭を振り続ける裸女……

ニタニタ凄味に笑って見守る九鬼博士。

加藤は気が変になりそうで、何度も眼をこすったが、これは夢でも幻でもなく、あくまでも冷酷な現実、壁一重向うの同じ屋根の下で行なわれている地獄絵であった。

加藤は、眼をそらせて、横にいる薬剤士に囁いた。

「お前、この穴から中の様子を写真に撮ってその写真をネタに、何も知らぬ女達を脅迫し全品を捲きあげたり、貞操を奪ったり、散々悪事を重ねたそうだが、その写真機は、どこにある」

「この部屋」

「ホウ。それは好都合だ。一寸オレに貸してくれ」

隣りの密室で、九鬼博士の悪魔的な催眠淫虐が続いている間に、加藤は、証拠の写真を撮って置こうと考えたのであった。

「九鬼博士は狂っているのかな？」

「そうとも言えますね。しかし、普通の意味の狂人じゃありませんよ。頭はいいし、医者としての腕も確かだし、人情厚いし」

「人情厚い？」

「ええ。但し、男に限ってです。博士は、女を憎んでいますね。それも尋常一様の憎み方じゃない。医学生の時、命をかけて恋した愛人に裏切られてからとも言いますし、もっと古く、産みの母の不貞を知ってからとも言います。要するに、女の事で絶望して自殺を計り、失敗して生き返って以来、狂的な女性憎悪症になった事は間違いありませんよ」

「フーム。それで、催眠術を利用して、こんな事を……」

「そうです。患者の中から、これだと思う女に限り、巧みに靈尊教を吹き込んで誘い入れ催眠術を施して、玩弄しているのです」

「お前はまた、そんな博士を利用して、さらに悪事の上塗りをやっていた」

「ふつ。ほくの事は、大目に見て戴く約束でしたぜ」

「オレの口から洩らさずとも、いずれは知れる事だよ」

「お前が警察に告げ口しなきゃ、判るものか」
「フ、日本の警察は間抜けじゃない。オレも加屋事件さえなけりや、別に騒ぎもしないがアレは拙かったな。お前は、加屋夫人が、意のままにならぬので、あの写真を、良人の俊一郎氏に送ったんだろう。それで、怒り狂った加屋氏は、写真通りに自分の手で実演して揚句に夫人を殺害してしまったんだ」
急に、暗室の中で、木林の眼が不気味に光った。

「くそッ」

いきなり彼は、加藤に飛びかかって、グイと首を締めて来た。

が——加藤は柔道六段の猛者であった。

格闘。逮捕。曝露。

しかし、この事件は、その性質上、九鬼医院婦人患者の将来の迷惑を考慮して、新聞紙上では九鬼博士の自殺を、簡単に報じたのみであった。木林と加藤の格闘騒ぎで、祕密の洩れた事を知った九鬼博士は、警察が動き出す前に、自殺してしまったのである。



えくぼとホクロ

彼が彼女の足を踏んだ。因縁はたったこれだけのことであった。

時計を見た。十一時五分前である。しめた十時発の郊外電車に間に合う……と思うと彼は勢いよくかけ出した。

駅ではもうベルが鳴っていた。パスを見せるのもどかしく、一番近くのドアに飛びこ

背徳の緋文字

	コ	
正	レ	
	ラ	
体	の	

田井・良・榮
都・築・峰・子・画

ある初夏のころ、N新聞の駆け出しカメラマン美風敏郎は部長から田植の風景をとってこいと命ぜられた。おきまりのカット写真である。彼はショルダーバッグにガンを十個ばかりつめると愛用のスピグラを下げ、腕

むとドスンと、自動扉が彼の背中にぶつかった。その途端、よろけた彼の足の下から、ふんわりとした、生きものの感触が伝わってきた。

女は丸顔の美しいお嬢さんだった。見たところ二十歳前後だろう、都会風の白いレースの服を着ていたが、体つきにはどこかぎこちなく、幼いところが残っていた。しかしすっかり生長した二の腕や首すじは美しく、豊かであった。

「やあ、すみません」
敏郎は思わず頭をかいた。その癖足はまだ

のけなかった。走ったせいか息が激しくはずんで、そこまで気がまわらなかったといつてよい。あるいはとっさのことで、足をのけたくないという男のエゴイズムがむき出しになったのだろう。女にたいする感覚が異常にとぎすまされて足の下からつきあげてくる。

足をふまれた女はまず下を向いた。それから恐る恐る顔をあげ敏郎をにらみつけた。しかしそれは瞬時で、笑うともしかめるともつかないえくぼを薄すらと浮かべながらうなだれ、頬に幾分、血がのぼっているように見えた。女は、別に足をひこうとはしなかった。

敏郎は踏まれた女の態度を、動揺した気持ちの中で十分観察したわけではない。だが、彼独得の本能で、できる、この女ならできるかもしれないと思った。

敏郎はやつと体勢を立て直すと、一、二歩間隔をとり、あらためて女を見直した。女は眉と眉の間隔が広くて、左の眉の中にかくれて、小さなホクロがあった。ひたいと頬と眉のところに、細いうぶ毛が生えていて、電車

のまどから差し込む弱い光線で黄金色に光っていた。

「ごめんなさい、つい重心をくずして。どうぞこれで靴をふいて下さい」

敏郎はゆっくりとした動作で、真白なハンカチをとりだすと女の胸のあたりにさしだした。

「あら、よろしいんですの、こんな靴ぐらい……」

女は突然さし出されたハンカチに驚いたふうだった。彼女はちよつと斜めに顔をあげ、敏郎の顔を見た。敏郎はこの機を見逃がさなかった。猫が鼠を追いかける素速さで、

「そう遠慮せんでもいいでしょう」

と相手にハンカチを渡すしぐさで手をはなした。ハンカチは広がり、静かにふんわりと二人の間に落ちた。

「あら」

女は、びっくりしてすぐそのハンカチをひろった。そしてハンカチを胸のあたりに支えたと甘えるような目で敏郎をにらんだ。

白い手箱に真紅の文字、人知れぬ熱病の正体が

そこには秘めてあるのだった——それこそ俺の正体だ！

二人はある感情を抱いた。抱かないわけにかなかったのである、落ちたハンカチは急速に二人を結びつける役割をした。その女、由美は、はじめて、相手の男をゆっくり観測し、一種の不思議な魅力を感じた。

中島由美はこの日ちょうど満二十歳の誕生日になるというので、住んでいる瀬高町という田舎から町のデパートまで買物に出かけた。そして二階の呉服売場から六階の家庭家具用品売場までまわってささやかな買物をした。トリコットの靴下だの、レースのついたブラジャーだの、白い毛の小さな犬の置物など買いたがら由美は一つの夢を見た。

きれいな着物を着て、いい人とめぐりあつたら電気洗濯機でも買って、小さっぱりした家に住んでみたい。それにはいい人を見つかるのが第一だ。もう二十歳だし、一人で探しているところだわ……と思う。

いい人といえばこの前小母さんの話していた隣村の五郎さんは、ほんとに人のよさそうな青年だが少し線が細い。そうかといって幼なじみの浩次では、つまらないし……男なんて知っているようで知っていない、どこかにあつというような立派な男はいないものか——こうしてデパートでふくらんだ由美の夢が

むなく、消えかかろうとしたとき、突然、天啓のようにひらめいたのは、きっと今日、自分の求めるような立派な男性がみつかるという予感であった。

しかし予感は当らなかった、買物を終っても、電車の切符を買っても、それらしい男性は現われなかった。こんなはずではなかったがと思ったとき、突然敏郎に足をふまれたのだ。ここで予感は当たった。

足に受けた苦痛は、怒りからハンカチを介して瞬間、変じて恋心に代った。妙なものである。

敏郎と由美はそれから、胸を開いて話した。そして三日後の日曜日の正午に、二人は由美の住んでいる瀬高町の近くにある柳河市の駅で、再会することを約して、別れた。

熱病

時計が十二時を打った。敏郎は下宿のせんべいぶとんにくるまって天井を眺めていた。窓から月光がうつすらしこんでいる。いまごろ彼女はもうしているだろうか、あすは彼女に会う日と思うとなかなか寝つかれない。きっと彼女もこうして寝つかれず月を眺めているだろうか、それとももう足を踏んだ男

のことなどすっかり忘れてしまっているのではなからうか。そういえば二人はついに名前をあかさなかった。名前をきく意思がなかったわけではない、ついそびれたといった感じ、それ以上に相手の名前をきかなくてもみんなわかっていような親しみだった。それがいま急に不安になってきた。白い丸い顔のほやけた輪郭が空中にふんわりと浮いた。あの女のくちびるは一見、野いちごのような色だった。彼女はもう二度とこの目の前に現われないのではなからうか――

そういう敏郎の脳裏にふとゲーテのファウストの文句が浮かんできた。

よろめける姿のものよ

、お前をもう一度しっかりと、つかんでみようか――

よろめける姿のものとはなんだろう、それは彼女に対する愛情だろうか、まだ愛情を抱くまでに至っていないとするなら、あの時、突差に彼女ならできると感じた、あの直感……彼自身の秘められた欲望であらうか。

敏郎にはここ十年間かわらない、一つの秘められた欲望があった。それは美しい女を得て、思いきり自由にしてみたいという欲望であった。たいていの男が抱く、結婚の夢であ

る。だが、彼のは普通のひとと少しかわっていた。それは結婚が目的ではなかった。結婚なぞ、彼にはとうてい、のぞみがたいものである。

敏郎は中学の時、大病をして、落第し、さらに中途退学する破目におちいった。それ以来すっかり健康にも人生にも希望を失った。やっと習得した技術で、安定した職を得た現在でも、その失望からくる劣等意識が胸に巣くっている。だから「俺はとても普通に結婚する資格なぞない」と勝手に思いこみ、さらにせめて一度でもいいから女を自由にしたいという意識が歪んで、女を縛りたいという欲望にかわっていった。

あの女は果して縛られるだろうか！　そう思う。そう思うとなんだか悩ましかった。

敏郎はねむられないまままくらもとのスタンドのスイッチを入れた。四十ワットの光線が四畳半の小部屋を照らすと、闇になれた目には光りがまぶしかった。彼はむっくりふとんの上におきあがって枕もとの手箱を引寄せた。その手箱の上には真白な紙の上に真紅なえのぐで「コレラの正体」と書いてあった。

敏郎は一字一字その文字を目で追った、それからしばらく考え、ためらっていたが思い

きり手をのばして静かに箱の蓋をとった。箱の中には縛られた女のスチール、絵、写真がいっぱいつまっている。

彼がカメラマンになってから映画や雑誌などから集めたものだ。職業柄新聞社に送ってくる報道用スチールをもらったり、映画館の中にキヤノンを、しのばせて写したり、雑誌の口絵を復写したりした。したがって人によく知られた「縮図」の乙羽信子や「めくら娘」のR・テムプルはもちろん、新しいところでは「大菩薩峠」の長谷川裕見子のもので集められている。有名なKクラブやF草紙は、いうに及ばず、画家ではI画伯、K画伯のものに及んでいる。この中で彼は人に余り知らないもの、女優ではマニヤが余り好まない八千草薫や高千穂ひづるが好きだった。その理由は敏郎はまだ実際に女を縛った経験もなければ、いわゆる女なるものに深い知識もなかったもので本能的に残酷さよりベビフェイスに憧れを抱いていた。だが……こうして沢山縛られた女の写真が集ってみると、彼自身、そこに幼稚な彼の好みを超越する一種異様な雰囲気を見つけ出さずにはいられない、彼はその雰囲気をも「コレラの正体」と名づけた。

無造作に沢山ある写真の中から五、六枚と

り出す、それを枕辺に並べて凝視していると一種の感情の嵐がおそいかかる。一種の熱病だ。コレラである。彼は体が小刻みにふるえだすのを覚えた。

その昔コレラが流行ったという、その時の街の悲惨な状態を北原白秋がなにかに書いていたが、敏郎はそれを読んで残酷な美しさに身ぶるいした。それ以来、彼は自分の心の中に残酷さを喜ぶ本能があるのではないかと考えるようになった。女を縛りたい本能、これこそ自分の欲望の正体なんだ！ そうじゃないか。俺は劣等意識からそうなったと思ってた。そうではなくて、縛って喜びたいのだコレラにかかったせいではなく、コレラが自分の正体なのだ――。

だが敏郎でも、女にはやさしい男でありたい。もし彼女にあした会えたらやさしく愛したい。と思う、もし彼女に会って話している最中この熱病におそわれたらどうしよう、そう思うとふと臉に浮んだ彼女の姿の美しい輪郭が、急にぼやけて固い大地（ステスラ・フィルムメント）の上に立ち、透視図法（パースペクティブ）以前の世界に生きているようにふんわりと浮んでくる。

そして、なによりも電車の中で「できる」

と信じた不思議な直感が生々とよみがえってよしそれなら大きなかけを一つしようか、あす彼女に会って、彼女をやさしく愛するだけに止め得たなら……そして彼女の愛を勝ち得たなら結婚してもよい、もし熱病が起ったらその時はあきらめるのだ、女を縛って、愛をかちうるはずはない……と思いつめるようになった。女を縛ることが俺の正体でなく、それが、人間誰しもあるコレラの正体なら、俺は、救われるかもしれない。だが、そういうことは……

敏郎はあれこれ思案し、不安の中でやがてねむりについた。不安をやわらげてくれたのは別れぎわの彼女の微笑であったが、それ故に不安がさらに増していくようでもある。

幻 夢

そのころ、由美も一つの不安に悩まされていた。彼女の不安も相手の名前を聞かないことに端を発していた。名前をきかなかったことで、青い鳥を野放しにしたような不安に身を責められた。由美はいまにもその青い鳥が羽ばたいて視界からきえてなくなるようなおそれから二度、三度と寝返りを打った。すると隣の寝床からやさしい声がかかって由

美を慰めてくれた。

「どうしたの由美ちゃん、きつとむし暑いからでしょうね、悩ましくて、寝ぐるしいときは、お父さんの名前を三度呼んでごらん。すぐ、すっきりしてねむれるようになるワ」

お母さんの声である。母は父をなくしてもうまる九年、父の残した旅館を経営して、由美をそだててきた。いわば勝気な女丈夫であったが、由美にとってはやさしい唯一の心のよりどころであった。しかしこの慰めの言葉は慰めになりそうにない。

「お父さまの名前を呼べだって」

と声をしのんで由美は笑った。（そうすればお母さんは幸福にねむれるでしょうが）とひやかしてやりたかったが、母をひやかすのは悪いと思ってやめた。そうこうするうちに母はスヤスヤねたようである。反対に由美は目がさめて、よけい、悩ましくすらなってきた。

あの人は本当に私のお父さんみたいにかわいがってくれるかしら、もし不良だったら……いや、そんな事はないと思う。それより片親であるということが心配だ。級友のよし子さんがデパートの試験を受けに行ったとき、両親がそろっていないという理由で落された

とか、もしそれと同様、「父のない者はもらえないんだ、しつと心が強いから」なんていわれてあの人から拒絶されたらどうしよう。

そういうことにならないように勇気を出さなくっちゃ。そういうそぶりがみえたらあの人胸にむしやぶりついてやろう。あの人お父さんみたいに胸毛がはえているかしら？ あら、いやだわ由美こんなこと考えて……由美こそ不良ね……お父さんごめんなさい。

彼女は目をつぶった。

（由美、お前は私を愛してくれるかね。僕は君が大好きだ。あの人かそういったら由美はすぐハイと答えなくちゃいけない。由美それならなんでも僕のことをきくかね？ はい、じゃ好きといいなさい。好き、目をつぶりなさい。はい、手を出して、はい、それから服を脱いで、はい……あ、もう厭……ほんとに私どうかしているワ。

もしあの人が悪人であって……こら由美、お前はここの前お菓子をめすみ食いした隣の健坊の頭をこづいたね。暴力を振った罰だ、そこに立ってなさい。浩次というおさななじみがあんなから浮気をする。そんな奴はこうしてくれろと松の木に縛られたら？ そんなことあの人知りやしないわ、でも裸になれたの縛

るだの、もしいわれたら、ハイと言えるかしら。私の求めているのは真実の愛情だわ。愛情のない人なんか自由にはさせない、あの人なら愛情を、きつと持っていてくれると思う。すると裸に……いやーだ。由美はたしかに今夜はどうかしているわ、あの人を目をみてごらん、漆黒の黒眼の中に鳶色のひとみが光って、薄あかく、火花がもえているみたいだ。この前はあの人で私をみつめてくれた。あんな目のように、丸く、大きく、新鮮な感じの目だった。あんな目の人に悪人はいない）主よわれに幸せを与えたまえわれに力と勇気を与えたまえ由美はいのりながらいつしかぐっすり寝いた。

確 証

もうし もうし 柳河じゃ 柳河じゃ

銅の鳥居をみやしやんせ

欄干橋をみやしやんせ

（殴者はラッパの音をやめて

赤い夕陽に手をかざす）

（白秋より）

その翌日、二人はまさしく正午きつちり、柳河の駅の前で会った。それからすぐにちよ

つとした軽飲食店に入って昼食をとった。敏郎は親子丼を、由美は冷麦をたのんだ、そこで敏郎はさっそく冷麦二つに訂正、仲の良いところをみせた、たべ終ると揃って見知らない街に出た、二人は余りしやべらなかつた。会話よりやっぱり会えたという喜びが二人の胸を大きくつつんでいたので、お互いに、それをのがしたくない——といったふうにみえた。

柳河の町は、町の中を幾すじもの堀割の水がながれ、その堀割の片側に柳が茂り、青葉若葉が目にしみるほど鮮かで美しかった。二人はその柳のある小道を肩を組んで行ったり来たりした。そして時には向いあって佇んだり、ハヤや川たなご、にがばやなどの舞い泳ぐ川面を眺めたり、ゆれる水中の藻草に身をなぞらえてみたりした。

街はずれの楠の木蔭で敏郎が用意したケーキを開けば由美が果物を取り出した。敏郎が愛用のスピグラを構えると由美が笑った。その白い歯が印象的で流行歌の一つも聞えてきそうな風情であつた。

しかし次第に時がたち、夕ぐれが近づいてくるに従って二人は次第に無口になった。その頃になって、二人はやっと名前だけ名のつ

た。それが二人を心持ち落ちつかせた。しかしそれはちょっとした間で、二人の心は重たくなった。敏郎は次第にある一つの欲望が頭をもたげはじめたし、由美は少くとも具体的な愛の表現、確証が欲しかつた。二人ともなんらかの方法で自分の運命を左右する行為を求めあつてゐた。そのきっかけがないまま、日は次第に、くれかかつてきた。

「ほら、これがあの白秋が柳河風物詩で歌った、三柱神社よ。この絵はがきにそう書いてあるわ、銅の鳥居はないけど大きな欄干橋があるでしょ」

由美がそういって神社の石段をのぼりつめたとき、敏郎はふと不吉な予感を覚

えた。

今日の由美はこの前のときくらべ実に浮き浮きとしていた。えりのところが大きくあいた、白地に水玉模様を配したワンピースに



黒のハンドバッグを持っていた。

その新鮮なスタイルが好ましい印象を彼に与えていたが、いま無意識に腰をつかいながら石段を登る彼女に、彼は女の成熟した臭いをかいだ。すなおにのびたうなじに、縛られた女のスチールに見たと同じ種類の美しさをみた。

そして、それを目にしながら、この女はとも俺には及びもつかない清純さをもっているのだ、俺は彼女を求めることも、どうすることもできやしないという無意識的なおそれ突然彼をおそい、彼の喜びを完全に押しひしいた。と、その悲しみが、再び明滅して哀調を帯びた風物詩の一節が思い出される。

薊の生えた

その家は

その家は

旧いむかしのノスカイヤ（遊女屋）

人も住はぬノスカイヤ

(Bahko)

裏のバンコにいる人は

あれは隣の継娘

継娘

水に映ったそのかげは

そのかげは母の形見の小手まりを
小手まりを

赤い毛糸でくくるのじゃ

涙片手にくくるのじゃ

人から人へ、婦人から婦人へ多感な生涯を送った白秋ですらこんな悲しい調への歌をうたっている。悲しい歌も歌えず、これまで一人の婦人すら愛し得なかった俺がどうしてと敏郎は思う。だがこの歌はママ子いじめの歌だ。してみると弱いものいじめは人の常ではなからうか、そう思うとくくるのじゃ、くくるのじゃという言葉がしきりに口にのぼってもしや由美にこんな心の底をのぞかれるのではあるまいか、という不安が彼の心をより一層いためつけた。

その時由美もこの歌の文句を思い浮かべていた。彼女は継娘ではないが父をなくした悲しさが、そしてまた女性特有の感傷が、彼女を襲っていた。そのものがなしさを救ってもしらおうと希望する男は、すぐ横にいる、しかしもうすぐ別れねばならない……それでいて彼女はまだ何も得ていない。

（私もあの継娘のように不幸なんだわ——やっぱりあの人は私のことなぞ馬の骨みたいに念頭がないのだろうか）

二人はいつしか無口になって、ひっそりと三柱神社の裏の人気のない木立ちに足をふみ入れた。二人はそれぞれ自分のハンカチをひろげて敷くと、並んで腰をおろした。冷やかな沈黙がしばらく続いた。そしてついに男が口を開いた。それは女にいいきかすというより、自分自身にいいきかすといったたよりない語調である。

「ああダメだ、やはりダメだ、僕はあなたを愛する資格はない」

敏郎は頭をかかえていた。「私はあなたを愛しています」という言葉がどうしても敏郎はいえない。だからこの言葉は明らかに愛の告白と同じものだ、にもかかわらず女には通じない性質のものである。

由美は驚いた。そして男の顔を見た、そしてうつつむいて自分の足もとを眺めている男の中に深い愛情の光を発見して二度びっくりした。もし敏郎が正面から愛の告白をし、さらに静かに縄へのプレイにみちびいたら由美は恐らくそれに従うだけの素質を持っていたであらう。

だが敏郎はこの期に及んでも迷っている。女を縛ることは罪悪という考えを忘れ切れない。幼稚な経験すらないこと、それが勇氣に

火をともし得ないのだ。

由美はそんな男にいらいらするものを覚えた。

「そんなことはないわ、あなたは立派な、立派なヒトですもの」

彼女はヒステリカルに叫んだ。そして叫びおえると急に不安が襲ってきた。卑怯な男は由美のそんな心理状態をぐっとつかんだ。

「こちらをみてごらん、ほら、あなたは僕をおそれている。あなたは僕を軽蔑しようとしている。あなたは僕がいま思っていることがわかる。わかるのだ、だからそれをいわせまいとしている。僕がいま僕のおもっていることを皆ぶちまけたらあなたは僕を愛してはくれない。もう僕という人を信用してはくれない。僕はそんな男なんだ」

敏郎はそこで一息ついた。そして女の顔をじっとにらみながら、

「実は僕は、あなたの自由を奪おうと思ってたのだ。あなたを犯してしまおうと思っていたのだ。あなたを縛る、そのため僕は昨日からまる一日計画を立て熟考した。僕はそんな男なんだ。とても君を愛する資格はない」
敏郎は頭をかきむしり、ふらりと立ちあがり、一歩二歩、方向もみず立去りかかった。

由美は呆然とそういう男の姿をみていた。

男のいう言葉がまるで理解できなかった。信ぜられなかった。犯す、縛る、という声が耳につきささり頭のしんがしびれた。一瞬きのうねむれなかった不安がよみがえった。一瞬現実にはひきもとされた。しかし男のわびしげな後ろ姿を見ると、とても彼の言葉が信ぜられなかった。彼女は夢遊病者のように立上った。ひざがしらがガクガクした。しかし悪魔に魅せられるように男の背中に吸いよせられる、カッターシャツの肩に汗がにじんで、両腕は力なくたれていく。どうみてもその姿は悪人とはとれない。由美はじっとしていられた。なかった。といって縛られるのは厭だった。まして肉体なぞ絶対にゆるせない、彼女はセツぱつまった。顔から血がひいて行くのがはつきりとわかった。がついに彼女は誘惑に負けた。

「待って、待って、あなたってば！」

由美は無意識に、あなたという言葉を使った。そしてかけ出し、男をひきもどした。男は二、三歩たたらをふんだ。そしてふりかえりざま、

「うるさい」

とどなった。由美はひるんだ。そのすきに

敏郎は逃げた、由美が追った。その途端、男がくると向きなおった。敏郎が逆に迫ってきた。由美はハッと立止った。そして見た。どこで拾ったのか、雨ざらしになって白く色がかわった一束の荒縄を、男がさげているのを。彼女は急にへなへたと全身の力が抜けていくのを感じた。

見よ！ 由美、恐れるな、お前はそんな女だ！ そして俺はこんな男だ――

そう男の目がいつている、そう思った瞬間男の体が跳躍した。そして恐ろしい力で胸を背にとられ縄が手首にまきついた。胸にも二巻き三巻き。さらに近くの松の木に余りがゆわえられるのを由美ははつきり意識した。縛りおえると男はゆっくり手をのばし、彼女のあごに手をかけて顔を上向け、ゆっくりと押し殺すような声でいった。

「これが俺の正体なんだ。俺はとてもお前を愛する資格はない」

そして手を放し、五、六歩離れて、ヨシの繁みごしにうつろな目で堀割の水を眺めた。さらに目をかえして足もとをみつめるとまたしよう然と歩き出し、立ち去ろうとした。

その後姿をみとめると由美はまた突然恐怖におそわれ意識がよみがえってきた。興奮と

恐怖がくりかえしおそって、痛みは感じなかったが思わず声が出た。

「待って、待って」

「うるさい」

「待って、待って」

男はやがてひき返してきた。由美はついに勝った、よびもどしたと思った、すると再び力が抜け、手首から痛みが、胸から苦しみがつきあげてきた。だがそれはほんの一時の喜びにしか過ぎなかった。

「そうだ、忘れていた。これを君にお贈りしよう。これこそ君と僕とを結びつけた唯一の記念品だった」

敏郎はそういうと足もとから真白い一枚のハンカチをひろいあげあつけにとられた無抵抗の由美の口の中へ押込んで、彼女のワンピースの腰にまきついて細いベルトをはずし、それを齒と齒の間にくわえさせ力一ぱいしめた。

ウ、ウツ、ウーッ。由美は思わずうめいた。頬がひょうたんの胴のようにへこみ、齒とベルトにはさまれた頬の肉が猛烈にうずいた。

「うむ、いい恰好だ」

男ははじめて満足したらしかった。そしてこんどは幾分落着いたのか愛用のカメラを構

えるとパチリと縛られた女の姿をうつした。こんどは何かをされる、という観念が突然彼女を恐ろしい絶望に追いやった、その時ひきつけるような男の声が聞こえてきた。その声は意外に澄んでいた。

「ほんとうは僕は君を愛していたんだよ、心から。僕はこれでも一日中君をやさしく愛してやろうと一生懸命骨折ったのだ、そして、もしうまい具合にいったら、仲人を立てて結婚しようと思っていた。ところがどうだ、現実は僕は結婚する前に君を縛りあげてしまった。多分僕はこうなるだろう、それがわかっていながら自分自身をどうすることもできなかった。女を縛って喜ぶ男、これが僕の正体だ、人を正常に愛したい、そうせねばいけないと思っていて、それができない。僕はそんな男だ。いわば君にはふさわしくない男なのだよ、僕のような男に出会ったことを君は災難と思ってあきらめるんだな。もう僕はこれ以上君を苦しめようとは思わないよ、君は清潔だ、美しい、そしてもうちょっと長く僕がここにいると、僕は君なくしては生きていけなくなるかもしれない、これ以上君が僕に近寄ってくれば、僕は君の生活もまた僕自身の生活もきつと破壊してしまうだろう。なぜな

ら僕は狂気、一種の熱病患者、コレラ患者だから……。じゃ、さようなら」

由美は男の言葉を夢のように聞いていた。そして敏郎の姿が見えなくなると急に彼への愛情が湧いてきて、結局は犯さずに立ち去った男の真心が、彼の愛情がはじめてわかるような気がした。

由美は思わず叫んだ。しかしそれは声にならなかった。無残にもそういう彼女に残された自由はなにもないのだ。だが彼女は猛然と暴れた。幸い縄はいたんでいた。縄はやがて切れた。しかし顔は汗と涙でぐちゃぐちゃになり、手首はすれて血がしたたった。またワンピースも一、二箇所はころびていた。由美はそれでもいちもくさんに、彼が当然行くはずの駅に向かってかけ出した。しかし駅に彼の姿はなかった。もちろん、あたり近所にいるわけがない。彼女はしよう然と再び自分の縛られていた場所にもどってきた。そして足もとに大きく広がった自分のハンカチの横に、口から吐き出され、ぐちゃぐちゃになって落ちている敏郎のハンカチを発見すると、思わずそれにしがみつき、大地に突っぶして慟哭した。涙が手首を伝い、にじんだ血と一緒に傷口にしみ、火のように痛んだ。

あまとりあ 講談文庫

開化 近世毒婦伝

西尾富岳



静まり返っている。

「いいかい、今夜という今夜は許さないからね。泥棒娘の性根を叩きなおしてやるために、一晩中倉の中に押しこめておくからそのつもりでいるがいい……こうしてくれる！」

「知りません！知りません！誰かのいたずらです、誰かがそこに入れたんです！」

られなかった。

情け容赦もなく降る鉄拳の下に悲鳴をあげて、

「この、強情者め！」

いきなりお雪の平手が園江の頬に飛んだ。

「お母さん！勘弁して下さい。何かのまちがいですから！……ああ……どうか……」

い眼をむけているじゃないか、それほど私が憎いのか、だからこの十円だって私を困らせてやろうという小細工だったのだろう！この泥棒猫め！」

この騒ぎが、奥の書斎にいる父

「この泥棒娘！これだけの証拠がありながらまだ白を切るのか！」

自分の身体の下でもかく柔軟な肉体、処女の清純な香りが、むせかえるほどお雪の鼻をうつ。それがいつそう妬情を煽るのだろう、お雪は、ギリギリと眼尻を釣り上げ、

親三郎衛門の耳に入らぬ道理はなかったのだが、どうしたわけかあれつきり姿を現わさない。下手に仲裁に入れば余計事態を悪化させるとでも考えているのかもしれないそれに傭人たちも、お雪のヒステリーの発作にこれまで度々手を焼いているので、誰一人とめに来る者としてなく、家内は水底のように

のにされようとする……十七才の世間知らずの美女、園江の身の上に次から次とふりかかる危難のかずかず。

ねじ伏せて、お雪は半狂乱の状態で鉄拳の雨を降らせた。

「何がまちがいだ！ママ母だと思つてこの私を頭から馬鹿にしくさつて！ええ、お前は私にいつも白

やがて、最後に巡りあった生首小僧と名乗る盗賊と共に園江は毒婦に仕込まれて行く。波乱万丈の毒婦伝四篇収録のあまとりあ社刊西尾富岳著「近世毒婦伝」を御一読下さい（定価一三〇円）

なくなつた十円札が自分の本箱の中から発見されようとは、身に全くおぼえがないことだけに、園江には悪魔のいたずらとしか考え

読下さい（定価一三〇円）

手

裏

剣

狭山 温

古正英生・画

前老中水野忠邦、並びに老中格堀親宝が滅封のうえ蟄居になったその年——というのだから、幕末、弘化二年のことである。

年の瀬もおし迫った霜月（十一月）二十九日に、江戸浅草奥山の見世物小屋で、大ぜいの見物を前に心中をしてみせた男女があった。

女の方は、その一座の花形太夫大江朝日という手裏剣投げの名人、男の方は、同じ一座の佐助という男衆で、男二十七、女十七の若さであった。

心中そのものは、とりたてて珍らしいということではなかったが、そのやり方と、事件後に判明した事実とが異常だったので、忽ち市中の評判になった。

そこでまず、事件の経過から書くと、当日は、やがて来る冬のきびしさを思わせるようなすこぶる肌寒い日で、おまけに、空一面、低く



灰色の雲が垂れこめ、なんとなく陰惨な感じの日であった。が、ちょうどこの年は、二十九日が三の酉の当日に当たっていたので、そのお酉様帰りの人々が、この奥山へもどつと流れこんだため、小屋という小屋はどこもかしこも普通以上の入りで、もちろんこの小屋主もほくほくであった。

事件の起った小屋は、その奥山も若宮稲荷に続いた閻魔堂の裏手にかかった、女軽業・大江若菜太夫一座で、ここがまた一番客が立て混んでいた。

逆立ち・綱渡り・水車轆・梯子乗りと、目もあざやかな演目がすすんで、いよいよ呼びものの、朝日の手裏剣投げとなった。手裏剣投げというのは、舞台の端から一本々々手裏剣を投げて、向う端の、杉板を背にして立った人間すれすれにそれを突き立てて行くという、なかなか危険な芸当で、これがなんといつてもこの一座の看板になっている。

さて、その日——大江朝日の登場は、嵐のような満場の拍手によって迎えられた。朝日は花形太夫にふさわしい、綺羅びやかな振袖に、真紅の縮緬の扱帯を襷にかけ、額には、白い鉢巻、しずしずとした足取りで舞台に現われると、見物に向つてニコリ笑つて頭を下げた。

「そう云えば、どうもあの時の容子は……」

と、これは後になって、誰しもが口にしたことだが、その時は、ただもう朝日の水際立った美しさに、満場は我を忘れていた。

前口上がすむと、朝日は舞台の下手に、同時に上手から、目隠しさ

れた、これも華やかな振袖姿の女が現われ、あらかじめ用意してある杉戸の前に、朝日と向い合つて立った。

この舞台だけは、わざと下座は使わない。

したがって場内は文字通り水を打ったような静けさである。

朝日は、しばらくの間、眼をつむつて、何事かを祈る風をすると、やがて、パツチリ眼を開いて、向う側を見た。

朝日の、血の気のうすれた顔に、かなりはっきりした動揺の色が浮んだのがこの瞬間だった。これも、後になって目撃者の一人が云ったことだが、その目撃者は、朝日の顔を掠めた動揺に、おやと思つたそうだ。

が、深くは考える暇はなかった——

「ええい！」

その時、静かさを破つて朝日の紅唇から、裂帛の気合が発せられたからである。同時に第一の手裏剣が、びゅつと風を切つて、五間の舞台を流れ生きた人的の頭上すれすれに、ブスツと突き刺つた。そしてその後はもう朝日得意の早打ち。右のこめかみ、左のこめかみ、頬脇と次第に下つて、見る見る人的はキラめく手裏剣の囲みに寸分の間もなく射立てられて行く。一投ごとに、青白い朝日の顔は逐次紅潮してこの世ならぬ美しさに彩られていったが、ちょうど最後の一本、これが宙を走つた瞬間だった。

「佐助！」

朝日の口からひとこと、思いがけない叫びが洩れた。

★発止と投げた手裏剣が生きた的を貫いた！

娘太夫にからむ秘密が舞台の手を狂わせたか？

手裏剣は、人的になった女の、左の心臓部に突き立っていた。

「あ」

微かな絶叫を残して、杉戸の前の振袖姿がくたくたと崩折れる。と、ほとんど同時に、投げた朝日の体も、ふいにぐらりと大きく揺れると、そのまま花が散り敷いたように舞台にのめっていた。

「幕だ！ 幕だッ」

突然、降って湧いた椿事に、座方が狼狽ふためいて幕を引いたことは云うまでもない。

そして大ぜいが、どっと二人の方に駆けよった時には、もう両者とも断末魔だった。人的は心臓を一突き。また、朝日の方は、いつそれだけの事をやってのけたのか、けい動脈を切った上、舌を噛んでいたのである。しかも驚きはそれだけではなかった。人的となった女が、実はこれが女でなく、佐助という、男衆で、さらに、検屍がすすむにつれ、またまた意外な事実が判明した。それは、朝日が立派に成人した男だったということである。

以上が、表に現われた、この事件のあらましであった。

二

ところで、話は一年前にさかのぼる。

その年の夏、大江若菜一座は武州熊谷で興行を続けていた。あいにく農繁期で、入りは思わしくなかった上、雨ばかり降ったせいから一座に食中毒が発生して、このぶんでは一座の存立さえも、危まれるという瀬戸際であった。

そこへ、佐助と呼ぶ男が転がり込んで来たのである。

佐助は江戸の生れで、本業は叩き大工であったが、三度の飯よりもサイコロいじりが好きで、自然ごろつきの仲間に入って、とど、賭場の口論が因で人を傷つけ二年ほど佃の寄場（刑務所）に収容されていたが、前の年の江戸の大火の際、きりほどき（仮釈放）で、放免されると、そのまま江戸を脱走して、上州の方でほとほりをさましていた。

が、江戸恋しさにここまで来ると、草鞋銭慾しさにのぞいた鉄火博奕で法度のイカサマ賽を使って、それがバレ、追われて逃げる途中、たまたま見かけた一座の掛小屋に飛び込んだ、という訳である。

いいあんばいに、追っ手の眼をくらすと

佐助はそのまま一座に居ついてしまった。

元が大工で、器用なものと、やくざの飯を食って来ただけに弁口が立つ。おまけに、人心を読んで取り入る術が巧かったからだ、一座の方でも、この所の御難続きで、無断で脱退した裏方も居て人手の欲しい所だったからあえて、この男の暗い過去は見えて見ぬふりをして置くようにしたものらしかった。

幸い、どうなるかと思った興行成績も、佐助が一座に、加わったためというのではないが、それ以後、急に尻上りに好調になったので、座頭の若菜太夫はほっと安心して、

「いっその勢で、上州一円を廻ってみよう」
キリよく熊谷を打ち上げると、それから、高崎、前橋、足利、伊勢崎と足をのぼした。

ところが、一座が、その伊勢崎に小屋掛する頃から、佐助の地金が現われはじめた。即ち、佐助と、手裏剣投げの人的になる、おきんという二十三になる女の仲が、はっきりと露骨になってきたのである。

だいたい、一座の構成は女が主になっていて、座頭の若菜をはじめ、その娘の朝日、さらに手踊りに入る娘達まで入れると、女ばかり十五人近い人員で、男は、裏方、木戸番をふくめて五人ほどこしか居ない。しかも、女の

方は座頭をのぞいては皆年頃の娘ばかりであるのに引替え、男衆は、佐助と、もう一人、幕引きの伊之吉以外は、ほとんど四十から五十近い威勢の悪い者ばかりだったから、自然娘たちの関心が佐助の、やや悪がかった魅力

にひかれるのは当然だが、一座の統制上、厳しく内輪同士のそういう種類の関係を禁じている若菜は、立場放っておけず、「困るじゃないか、佐助……」何度か、男を呼んでたしなめたが、

「へえ、相すみません。これからは気をつけますから……」

佐助は、たしなめられると素直にわびて、しばらくは自重している。が、五日もすると、もう、ケロリとして、おきんばかりでなく、他の娘にも色眼を使った。

「困ったものだね、佐助にも……」

若菜は思いあまって、番頭格の与兵衛という、もう老人の男衆に相談すると、

「まア、大目に見てやんなせえ。そりゃア、当座のうちならアレを出す事も出来たでしょうが、もう今となっちゃア無理でしょう」

逆にそうなだめられる始末だった。

と、いうのも、佐助は例の小才のきくところから、僅かの間に一座の呼吸を呑み込んでしまっていて、もう、この頃には一座には、必要な人間となっていたからである。

で、若菜も、没々に見て見ぬふりを続けていたが、そのうちに、今度はどうにも放って置けないような事態が起ることとなった。

三

その年が暮れて、翌年の春であった。一座は、宇都宮で打っていた。

ある晩……若菜太夫がひいき筋に呼ばれ



て御馳走になつて、宿にしている曲師町の橋本屋へ戻つてくると、宿の手前で、向うから急ぎ足でやって来る男の姿を見た。

暗い夜だったので、顔が見えず、擦れ違ふまでは誰だか分らなかつたが、行き過ぎるとたん、若菜はぎくりと足をとめた。

「お前……佐助だね？」

と、若菜は男の背に追ひ縊る風に云つた。

「え？……ああ、親方さん？」

案の定、男は佐助だつた。これまた、ぎよつとしたように振り返つたが、

「お、お帰りなさいまし……」

あわてて、ペコリと頭を下げた。その、狼狽した様子に、若菜は異常な不安を覚えて、

「お前……ど、どこへ行つていたの？」

追ひ討ちをかけた。

「へ、へえ……ちよいとこの先まで、へい」

佐助は、なぜか、言葉を濁して逃げ出した様子を見せた。若菜は、もう胸に萌した疑念を隠すことができなくなつて、

「お前、まさか、わたしの留守に宿へ来たのじゃア？」

「いいえ……そ、そうじゃアありませんで。

実は、この先の茶屋へ客に呼ばれまして、へい」

「本当かい？」

「へえ、嘘は申しませんで、じゃア」

まだ何か云いそうにする若菜へ、佐助は、あわてて背を見せると、スタスタと行つてしまつた。が、その後ろ姿を見送つて、不安は依然、若菜の胸を去らない。若菜は、急にその疑念を打消すために、宿の玄関を入つた。

その土地に便誼がない限り、若菜と、娘の朝日だけは一座とは別に宿をとることにしていたが、この宇都宮でも、若菜は娘と二人だけこの板木屋に一室借りてゐる。

部屋は二階の一番奥であつた。

若菜は、動悸のする胸を抑え、梯子段をかける上と、その部屋の前まで来たが、淡い、行燈の光を映して、黄ばんで見える、その、廊下との境の障子を引くのが、なぜか、むしろに恐ろしかった。

「朝日……」

若菜は、障子の外から呼んでみた。

が、答えはない。

（眠ってしまったのだろうか？）

若菜は何かに祈りたい氣であつた。

今夜、若菜は、そのひいき筋の座敷へ、一人だけ招かれたのではない。むしろ、若菜の方はツマで、客の招びたかつたのは娘の朝日

の方であつた。が、その朝日が、小屋が閉場はつかて宿に戻ると、急に頭痛を訴えたので、大事をとつて先に寝かせ、若菜だけ御座敷に伺つたわけであつた。

「朝日……」

若菜はもう一度呼んで、それでも返事がないとみると、思い切つて障子を引いた。

けれど、その瞬間、

「あつ、朝日……」

若菜は、紙のように青ざめていた。

乱雑に、取り散らかされた部屋の中に、朝日が、あられもない姿で氣を失つて倒れてゐたからである。

「朝日！ ど、どうしたんだい？ 朝日」

若菜は、我を忘れて部屋に飛び込むと、倒れてゐる朝日に取りすがつたが、何よりも先に若菜のつた行為は、あらわになつた朝日の雪のように白い肌を包み隠すことだつた。

次に、彼女は、失神してゐる朝日の枕許に呆然と坐つて、ほうつと深い溜息をついた。

部屋の中の、乱れようは、寸刻前にここで行われたことが、どのようなものであつたかを歴然と物語つてゐる。明らかに、何者かが自分の留守にこの部屋を襲つて、眠つてゐる朝日に乱暴をしたに違いない。

「佐助……」

若菜は、慄然として呟いてみた。

その、何者か、は、佐助ではなかったか？
もし、佐助だとしたら？

「ああ……」

若菜は、醜く、わのした顔で、絶望的な声を上げた。

「おっ母さん！」

その時、朝日がぼんやりと眼を見開いた。

「あ、朝日……お、お前は？」

恐怖の眼で、若菜がその眼を見返すと、

「あたし……あたし……おっ母さん！」

朝日は突然、ゴクリと咽喉を鳴らして、母の膝に取りすがった。唐子島田に結った髪が、根元からがつくりこわれた朝日は、派手な長編絆に包まれた、まるい肩をふるわせると、

「おっ母さん！ あたしは、か、不具なので
すか？ 女ではないのですか？ い、云って
ください。あたしは本当は男なんですって
ね？ そうなんですか？ 本当なんですか？」
「あ、朝日……だ、誰が？ 誰がそんなこと
を、お前に？」

「佐助が……佐助が云いました」

「えッ、佐助が、……ああ、やっぱり……」

若菜は、眼の前が真っ暗になった。

予感が、今はもう、すっかり当たっていたのだ。若菜は唇を噛んで顔を伏せていた。

四

佐助が、座頭に呼ばれて、小屋がはねてからその指定された小料理屋の離れへ出かけたのは、その翌日の夜であった。

佐助が座敷に通った時、若菜はもう床の間を背に、暗い面持ちで坐っていたが、

「お坐り」

彼女は佐助に席をとらせると、暫くは自分の云おうとすることを、胸の中で整理している様子だったが、やがて決心したように、
「佐助、今夜お前に来て貰った訳はもうお分りだろう？ 昨夜のこと、お前、まさか他人には云やアしないだろうね？」

「へ、へい……」

佐助は神妙に頭を下げた。

「本当に、云やアしないね？」

「へえ、親方……決して、だ、誰にも……」

「そうかい、それならいいけれど、でもお前この先も絶対に他人にはしゃべらないと、それをわたしに約束ができるだろうね」

「へえ」

「ありがとうよ、佐助……用はそれだけだよ。それさえ約束してもらいやア……」

若菜は、ほっとしたように云うと、素速く懷中から取り出した金包みを、佐助の方へ押しやると、

「取ってお置きよ。いいからさ、口止め料だよ……ね」

初めて、白い歯を見せて笑った。

「おきんのことも大目に見てあげるつもりだからね、いいかい？」

「へ、へえ」

意外なほど佐助の素直なのが、若菜にはむしろ物足りなく思えたが、しかし、若菜は、ほっと胸を休めた。

（これで、秘密はバレることはない）

若菜は、昨夜は文字通り一睡もできなかったことを思うと、急に少しばかりしくなってきた。何も、これほど騒ぐ事はなかったと。が、後になって思うと、若菜のこの時の誤算は、長く尾を引いて事件の原因をなしている。

なぜなら、佐助は、若菜の思ったほど、そんなおとなしい人間ではなかったのである。その夜、佐助は若菜からもらった金を懷中にとすると、小屋からおきんを連れ出して、街

裏の貸席で一夜を明かしたが、彼は、おきんのねちっこい肌を抱きながら、ふと、途方もない計画を思いついたのだった。

が、まず、その前に、若菜と、その娘朝日とのことから説明しておく必要がある。

朝日は若菜太夫の娘ということになってしたが、本当はまぎれもない男だったのだ。しかも、彼女、いや、朝日は若菜の本当の血を分けた子供ではない。十数年前、まだ若菜が一座を持ち始めた頃、旅先で拾った子であった。が、男の子とは思えぬ、眼鼻立ちだったのと、一座の性質上、若菜は、なんとなくこの子を女子として育ててしまった。そして、それは確かに成功だった。なぜなら、朝日は、年頃になるにつれ、生れつきの女よりも女らしく美しく成長して、しかも芸の呑み込みも早く、難行中の難行といわれる手裏剣打ちの技を身につけると、いつか、一座の花形としてその艷名が評判になったからだ。

もちろん、若菜としては、いずれ分ることだけに機を見て朝日を本来の男に返すつもりだったが、女としての朝日を失うことは、とりも直さず、一座の人気を失うことだと思いと、容易にその切換えを実行できなかった。しかも当の朝日が、むつきの中からの細心の

注意の成果か、まるで自分の異性に気づかないのを見ると、この秘密はめったには口に出せなかった。

従って、佐助が、淫情に駆られて前夜、それを襲うまでは、一座の中で朝日を男だと知っている者は、若菜のほかには昔から居る、番頭格の与兵衛以外にはなかったのである。

こう考えてみると、若菜が、よくせきでない限り常に朝日を自分の監視下に置いて、宿舍も別に、またひいき筋に招かれても巧みにとりなした苦心のほどもうかがえる。

だが……いずれは知られる事にしろ、知られるに

事を欠いて、最も注意すべき佐助にその正体を見抜かれたことは千慮の一失といってもまだ云い足りぬ悔恨事だった。

五

一座は、その年の夏、何年かぶりに江戸の土を踏んで、五月、六月と、芝神明の小屋に常打ちをかけたが、佐助をめぐる異常な葛藤が起ったのはその頃からだった。

ある日、朝日は佐助から呼出しをかけられた。片門前の某という茶屋に来てくれというのだった。



朝日は、その呼出しを受けた時、ちょうど手裏剣打ちの舞台に上る直前だったが、瞬間胸がカーッと燃えて、真っ赤になって返事もろくにできなかった。

というのも、あの宇都宮での一夜、熟睡していた所を佐助に襲われて、刻みつけられた肉の記憶が、あれ以来日が続つにつれて、いっそう強烈になって彼女？ を責めさいなんでいたからであつた。で、朝日は、母から厳しく云われていたにも拘らず、小屋がはねると、いそいそと、約束の茶屋に出かけていった。

ところが、そこで朝日を待っていたのは、佐助ひとりではなかった。おきんが一緒だつた。二人は、公然の夫婦のように酒を飲み交わしていた。そして、朝日を見ると、二人は一瞬顔を見合せて意味あり気に笑つた。

朝日は、座敷の隅に坐つたまま、真っ赤になつて口もきけなかった。そのうち、

「太夫、こっちへ来なよ」

何か、小声でおきんと話していた佐助が、立ち上ると、朝日に近づいて腕を取つた。

「ハイ」

心には抵抗はあつても、体にはそれがなかった。朝日はもう、ぼうツとなつて、云われ



るまま隣り座敷に連れ込まれていた。

そして、その先のことは……朝日には覚えがない。ただ、朝日の肉体は、宇都宮での一夜をこの夜もう一度再現したのであつた。

が、そのしびれるような一瞬が過ぎ去つた時、朝日は、いつの間にか、佐助の向う側にもう一つのうごめく影を見出していた。

しのび笑う声は、おきんのものであつた。

佐助は、もう朝日の方へは体を向けなかった。そして、この夜を最初として、朝日は、その後もたびたび佐助に呼び出された。

もちろん、母親の若菜に知れぬはずはない。事実、彼女は何度か佐助に厳重に注意を与

えたようであつた。

が、いったん地がねを現わした佐助は、もう以前のようにおとなしくはなかった。それどころか、彼は、朝日の素性をバラすということに盾に、逆に若菜を脅して、その都度あべこべにいくらかずつ金を巻き上げていた。

佐助にしてみれば、朝日との情事は、一種名状できない魅力があつたようだ。

男であつて男でなく、女であつて女でもない朝日の持つ、特異な体は、ただの遊びに馴れた佐助にとって無上の宝物のように思われたいらしい。

このことは、実を云うと、佐助自身の、当初に想像したものとも違っていた。なぜといって、佐助が朝日をおきんとの同じ闇に引き入れたのは、それが、おきんとのことに、油を注ぐための目的だったからである。

ところが、日がたつにつれ、佐助は、普通の女体に対する以上の興味を、朝日に抱くようになっていった。

ある日、朝日が例によって出会茶屋に赴くと、そこには佐助の姿はなく、おきん一人がぼつねんと坐っていた。

「佐助さんは？」

朝日が聞くと、おきんは、思いつめたような眼で朝日をみつめて、

「太夫、後生だから、お前さんあの人から離れておくれよ」

泣きそうな声で云う。

「えッ、あの、あたしが佐助さんと！」

朝日は、びっくりしたように眼を見張ったが、すぐに、あでやかに笑うと、

「まア、おきんさんたら……何を云うのよ。

あたしに佐助さんと別れろなんて……おかしいじゃないの？ せっかくですけど、それはお断りしますわ」

ニべもなく云い放った。と、

「畜生ッ！ く、く、口惜しいッ！」

矢庭に、おきんは立上って朝日にむしやぶりついて来た。そして、逃げようとする朝日を、おきんは、髪の毛をつかんで引きずると、狂ったように、続けざまに叩いて、

「畜生々々々々！ このかたわ！ こ、殺してやるッ、恥知らず……」

涙をポロポロこぼしながら叫んだ。

が、その時、

「ええ、このあま、何いしやアがるンだッ」
だしぬけに声がして、飛び込んで来た佐助がおきんを叩き伏せていた。

「やい、おきん、て、手前は太夫に何をする気だ！ 太夫にやア罪はねえ、恨むんなら俺を恨むがいい！ 間抜け野郎ッ」

佐助はおきんを尻眼に、倒れている朝日を抱き起こすと、

「お前、け、怪我はしねえかい」

やさしくいたわるのだった。

「ち、ち、畜生ッ！ 覚えといでよッ」

眼前に、この上もなく熱ッぽい情景を見せつけられて、せつな、おきんはきりきりと眼尻を裂いたが、次の瞬間、脱兎のように廊下に走り出ていた。

「あ、おきんさん！」

朝日が、呼んだが、

「なに、放つときねえ！」

佐助はその手をつかんで立たせなかった。

六

おきんは、それっきり、一座に戻らなかった。

その代り、それから間もなく一座の小屋には、時として眼つきの鋭い男たちが近づくようになった。

「畜生、おきんが密告やがったな？」

佐助は敏感に気がついていった。

彼は、以前に、何気なく心を許して、女に自分の過去をしゃべったことを後悔した。きつと、腹いせに、それをおきんがその筋に密告したに達しない。

が、暫くは何事もなかった。

秋から、一座は浅草奥山に小屋替えした。

朝日の手裏剣投げは、日を追って江戸の人氣を博して、入りは上乘だった。

ところが、その朝日の艶姿に食指を動かして、執ように座敷の取持ちを云ってくる客が何人か現われた。

なかでも、番町に屋敷のある二千石の寄合旗本坂部甲斐守は、その持っている権力にも

のを云わせて八方から手を廻し、朝日を取持てと迫った。

若菜太夫は、当惑したあげ句、遂に、朝日を本来の男に転化させようと決心した。も早それ以外に法はないと思ったからである。

佐助と、朝日が、向島の料理屋で死の相談をしたのは、若菜がそれを番頭格の与兵衛に打明けた同じ晩であった。

「太夫、お前、俺と死んでくれ」

はじめに云い出したのは佐助の方だった。

佐助は、もうこの時には、自分の逃れられない運命を、悪党は悪党なりに察知していたようであった。この日頃、小屋への出入りに目明しらしい男の姿を見ることがないのが、その何よりの証拠だった。

彼らは、もう、のつびきならない証拠を掴むだけ掴んだに違いない。つまり、その、綱を投げる前の小康なのだ。これは、目明しのよく用いる手である。

その夜、佐助は初めて朝日に己れの過去を打明けた。

「どうせ捕まりやア島抜けの大罪だ。生きて二度と娑婆は踏めえよ。だったら、俺あ、太夫、お前さんに殺してもらいてえ」

「佐助さん、よく分りました。朝日はよろ

こんでお前と死にます」

「え、本当かね、太夫……」

「嘘はつきません。あたしや佐助さんが好きなんだもの……それに、今日、おっ母さんが与兵衛に云ってました。あの旗本の坂部さまがしつこいから、もう何もかもハッキリさせてあたしを男に返すんですって……嫌です！あたし、今さら、男になるなんて！あたしは女で、佐助さんの胸に抱かれたまま、死にたいんですもの……」

「あ、ありがとうよ、太夫……礼を云うぜ。お、俺ア、お前にすまねえと思ってよ。だが俺あ、考えたぜ。宇都宮で、は、初めて太夫を抱いた時、俺と太夫は、なんとなく行きつく所へ行くような、そんな気がしてなア」

「佐助さん！」

朝日は、美しい眼もとに、えんぜんたる色香をにじませると、いざり寄って男の膝に身を伏せた。

二十九日――

おきんの失踪したあと、手裏剣打ちの人的は代っておあさという年増女が引受けていたが、そのおあさが、舞台の蔭で出を待っていると、いきなり背後から近づいた影が、腕を

回して首をしめ上げて来た。

佐助は、おあさの軀を暗がりには引きずり込むと、手早く、その衣裳をはいで身につけ、かつらと布れでおあさに成りますと、裏方の声に乗って舞台に出て行った。

「よう！日本一ッ」

「千両々々！」

満場の掛声と、嵐のような拍手の中で、朝日と舞台を距てて向い合った時、佐助は、生れて初めて充実した自分を意識した。互に、そらそうとしない眼と眼が、宙で発止とぶつかって火花を散らした。

朝日の、匂うような面上に、薄い微笑がうかんだのを佐助は見た。

（ざまア見ろい！もう誰にだって俺を捕まえるこたあできねえンだぜ！）

佐助の頬にも勝利の微笑がおのずと浮ぶ。朝日の手から、手裏剣がキラッと光って飛び出した。一本、二本、三本……そして、最期の一本が……その瞬間だった。

「佐助！」

朝日の口からひとこと、自分と呼ぶ声が洩れたのは。

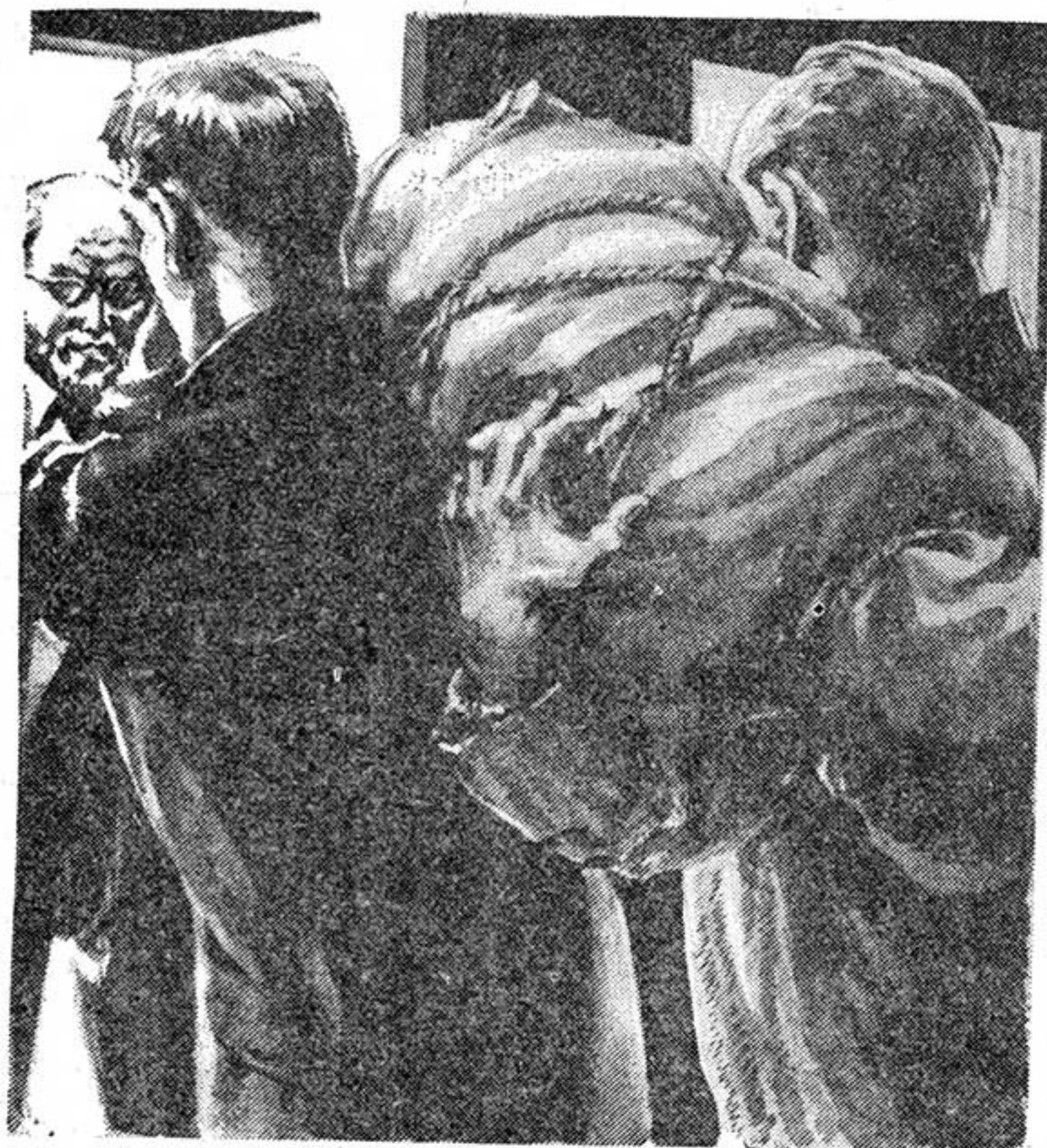
手裏剣は、佐助の心の臓に突き立っていたのである。

――了――

死 体 買 い ま す

海外実話小説

★なア、おい、こんなうめえ仕事はねえよ。汗水たらして働く十倍も
の金が、死体一つで入るんだ。品物がなけりや作りだしたらいい★



柳 生 巨

秋 吉 巒・画

時 今から一三〇年ばかり前、一八二七年
ころ。

所 スコットランド、エジンバラ。

ノックス博士 エジンバラ医科大学教授。

バーク アイルランド人の靴直し。

ヘレン バークの内縁の妻。

ヘイア スコットランド人の下宿屋の主人

マッグ ヘイアの情婦。

メアリ 美人の娼婦。

病院街の黒い影

十一月の寒い夜だった。黒い大きな建物が
幾棟も重なりあって、今にも白いものが降っ
てきそうな空までつづいているような気がし
た。ながい煉瓦塀がどこまでも伸びていて、
新月が雲の上になかったら灯をもたなくては

歩けまい。

そこは、スコットランドの古都エジンバラの医科大学地区、俗に病院街と呼ばれている昼間でも陰気な、気味の悪いところだった。遠くのほうで、どこかの寺院の鐘が十二時を鳴らすのが微かに聞えた。二つの黒い影が構内にあるノックス博士の家に近づいた。なにか大きな袋をかついでいる。博士は、当時のイギリス解剖学の権威、非常に熱心な学者で、学生たちにも人気があった。

二つの黒い影は、音もなく扉に吸いこまれ博士の家を半周して裏手へまわった。そこは解剖教室の入口でもある。

ドアが開いて、ほんやりした黄色いランプの光の中に、フランネルの寝巻姿の、小柄な初老の男があらわれた。禿げ上った顔に眼鏡をかけ、その奥にキラキラと、眼が光っていた。

「おはいり」はッとするような大声だったがやや昂奮してたかぶっていた。

「待っていました」

ノックス博士は、ランプをかざして二人の男を案内した。廊下の突当りに入ると、大きなランプが明るく部屋を照らしていた。円形

教室。後方へ次第に高く机が並び、谷底に蠟布を張った大きな解剖台があった。

「そこに置いてください」

二人の男は、かかえていた長い袋を台の上にとしんと載せると、一人が、せかせかと袋をめくりだした。

袋から出てきたのは、中年の男の死体だった。

博士は、しばらく、その死体をあちこちと調べていたが、

「死んでから、あまり時間が経っていないようですか？ 何で死んだのです？」

「酔っぱらって。さよう、卒中とか言うやつなんでさア」

博士は、じろりと二人の死体持込人をながめた。パークのほうは、五フィート五インチそこそこの小男。丸顔で、華奢な手足をしていた。石炭すくいのシャベルのような平たい才槌頭をしていて、からだ小さいから余計に頭でつかちに見えた。赤い髪の下に額が飛びだし、褐色の眼が異様な光を放っていた。

なにかにとり憑かれたような感じで、肩や腕はがっちりしているくせに、妙に弱々しいところがあり、いちど見たら忘れられない風采

だった。異常に頬が高く、ユダヤ人のように鼻の先が曲っていた。

もう一人は、彼が住んでいる下宿屋の主人ウィリヤム・ヘイア、長目の顔の、たえずおどどしている痩せた男だった。

二人とも、年のころは四十前後。

「十ポンドでいいでしょう？」

二人は眼くばせをしあい、パークが医者にうなずいた。

「では、五ポンドずつ」

二人は、腹の中で眼をまるくしていた。これらの予算では、まア一ポンドだろうと思っていた。病院では死体を買いたがっている、という漠とした噂を耳にして、パークは、とうとうノックス博士を訪ねた。いくらで買うとは言わなかったが、もし持ってきてくれたら必ず買うと約束した。それが、十ポンド！まさか、そんなに高いとは夢にも思っていなかったもので、とっさの間、返事も出なかった死体一つで半年はラクに食っていられる。「もう一つ大急ぎで欲しいんですが、ありませんか？」

二人は顔を見あわせた。

「なんとか見つけやしよう」

パークは、きつぱりと答えた。

「なるだけ新しい、ちゃんとした死体。あとで免倒が起らないのでないといけませんよ」
「わかってやす。なるだけイキのいいやつを持って来ますよ」

二人は、五ポンドの大金に心もうきうきと外へ出た。ふだんなら、ぞつとするような冷たい通りだったが、かれらには春の花園のようになつてゐた。

「おい」ヘイアが、小声で相棒をふりかへつた。「あんなことを言つて、まさか、墓でも掘る気じゃないだろうな」

「よんどころなかつたら掘るさ。こんな、うめえ仕事はねえよ、ヘイア。なんなら、殺して売つたらいい」

死体払底

殺して売る。なるほど新鮮な材料になるだろう。しかし、いくら儲かるとはいへ、人間を大猫のように簡単に殺すわけにはいかない。すぐに手がうしろにまわるにきまつてゐる。
「あいつは、おあつらえ向きの独りもんで、ぼつくり行つた奴だったからよかつたが、そうそう巧い金儲けは転がっちゃいない」

「転がつていなかったら、おれたちで転がらすまでさ。な、おい、ヘイア、おれが汗水たらして働く十倍もの金が、死体一つで入るんだ。かりに三月に一つ担ぎこんだつて左団扇だア。品物がなければ作りだしだらいい」

「おめえ——」

「いまさら殊勝な氣を起すねえ。おめえだつて安下宿の亭主でよ。満足に入らねえ安家賃で、年中しよんぼりしてゐて爺いになつてしまふがオチさ。たまにやマッグに晴着の一枚も買つてやつたらどうだ？ 一晚中、よろこんで寝かせないぜ」

ヘイアは、前のおかみさんと情婦のマッグとイザコザがあり、正妻を追ひだして情婦を女房のようにしてゐた。派手な、遊ぶことが好きな女で、年中ぶつぶつ亭主の非を鳴らしてゐた。

「あれを喜ばせる？」

「そ、それにかぎるよ」パークは囁いた。

「おれたちや何も悪いことをしたんじゃないぞ今夜、持つて行つたやつなんか、どうせ無駄に土になつてしまふんだ。それに、身寄りのねえ下宿人が死んだら、けっきょく、お前が仕末しなくちゃならねえ。ああして先生のと

ころへ届けられや、葬式費用は浮くし、それこそ一挙兩得、亡者も本望だ。おれたちの懐をこやし、学問のためになるんだからなア。まだ二人ばかりいるじゃねえか、独りぼつちの奴が」

ヘイアは、ぞつとして靴直しの顔をみた。

「とにかく一杯やつて、次の金儲けを考えようや」

かれらは、何を相談しあつたか知らないが翌日、もっとも簡単な葬列がヘイアの家から出た。下宿人の一人が卒中でたおれ、町はずれの共同墓地に葬るのであつた。何を詰めたのか、適当な重さの棺は、しっかりと蓋をされ、とどこおりなく埋葬された。附添はヘイアと情婦のマッグ、それに靴職人パーク夫婦だつた。その費用は、まことに微々たるものであり、十ポンドという大金にくらべると物の数ではなかつた。

それにしても、ドクター・ノックスは、なぜ死体を買うのであろうか？ 彼は、まじめな学究であり、パークが想像したような怪しい理由はなかつた。

「あの医者だつて眉唾ものさ。おれたちから十ポンドで買つて、あんがい肝や脳味噌を途

方もねえ値段で売ってるんかもしれねえぞ。
なんでも、ユダヤ人の占師は、人間の肝や子宮などを高く買うそうだ」

実際には、死体がなかったのだ。それは、ほんのちよつとした起りからだったが、今ではスコットランドばかりかイギリス全土にひろがって、誰も死体を学校や病院に出したことがなかった。ある男が、新墓を掘って、死体を病院に売った。巧妙な売り方だったので病院も気がつかなかった。これが後でバレー大問題になり、宗教家たちが騒ぎだし、人々は解剖用に、死体を提供するのをイヤがりはじめた。たまたま、生前の本人の承諾を得て解剖すると、親戚たちが騒ぎたて、群集が大学病院を囲んで石を投げる仕末だった。いろいろなデマが飛び、バークがユダヤ人云々と言ったのも彼の発明ではなかった。

ノックス教授は、はたと困った。病院で死ぬる患者も、医者たちを憎々しげに睨みながら、親戚の者が早々に引取ってしまう。わずかに刑務所から回される死刑囚の死体があるばかりだ。彼は、熱心な学生たちの顔を見るにつけ、本や画だけで我慢せねばならない情なさを口惜しがった。しかも、ドイツやフラ

ンスでは、着々と解剖学が進歩し、新しい発見や新しい手術方法などが発表されている。

スコットランドは旧式の国である。もちろん進歩的な人も多くいたが、一般大衆の動向には叶わない。一時的にせよ、死体を病院に渡すなどという流行(?)が民衆をつかんでいくのだからどうしようもなかった。

五日後の夜中に、ノックス博士は、例の二人の男の来訪を受けた。

「ほら、もう一つ」バークは長い袋を解剖台に放り投げた。

「早かったでしょう、先生」

女房たち

「ジョゼフさんの具合はどうだい？」

「あんまりよくないようだわ。寝たつきり起きられないらしい。お前さん、だいぶ景気がいいらしいが、いったい、どこで稼いできたんだえ？」

「親方がまた雇ってくれたんだ。半月ぶん前払いしてくれてよ」

「へん、嘘だったってダメよ。あたしや、今朝、市役所通りで親方に会ったんだよ」
「えッ！」

「ほらね、あんな顔して。そしたら、親方がバークのやつ、近頃どうしてる？ 腕はいいんだが怠け者で困る、期日を切った仕事を持っていてフツと休んでしまう。ひとつお前さんから話してみろ。お前さんから託を入れたことにして、また使ってやってもいい、とね」

「冗談いっちゃいけねえや。誰が、あんなケチな親方のところで二度と働くもんか。なに金？ 金なら腐るほどあらア。ほーれ、な」

バークの内妻ヘレンは眼をまるくした。

「お前さん、なにかやったね？」

「やったよ。さ、かわいい女房に二ポンドやる。好きな物を買いやがれ」

「いやだよ、そんな不浄な金」

「不浄な金だと？ ちゃんと筋の通ったもん

だ。俺が泥棒でもしたというんかい？」

だいぶ酔っているから声が大きくなった。

「どんな筋の金かえ、この二ポンド？」

「まだ、こっちに倍以上もあるんだ。ヘイア

と一緒に儲けたんだ。嘘だと思ふならマッグに訊いてみな」

内妻ヘレンは、胆をつぶしてヘイアの部屋へ駆けこんだ。その建物は、ターナークローズと呼ばれていた場末にある二階家で、マツ

グは二階の一部屋にいた。もともと、ヘイアが下宿人として二階に住ませたのだが、本妻を追い出してからも、ずっとその部屋に住んでいた。

「あら、とんだ邪魔だったわね」

ベッドに抱きあっていた二人に、ヘレンは立ちすくんだ。

「いいのよ。いまごろ、なにに？」

何かで裸をくるんで、マッグが起きなおった。

「ヘイアさん、うちのひとと何をやったの」
亭主は、むっくりと半身を起した。

「あいつ、しゃべったか？」

「しゃべりやしねえよ」

うしろで声がしてパークが立っていた。

「あたしや知ってるよ」

マッグが皆の顔を見くらべた。

「なんだと！」

「お前さんたち、何か売ったね？ こないだの葬式の棺は軽いみたいだったよ」

「このスペタ！」

パークが女にとびかかった。ばらりと身体をつつんでいた布が落ちて真ッ裸があらわれた。

「なにするんだ！」

亭主がとび出し、つかみ合いになった。

「ま、ま、あなたってば」

四人のうちで、いちばん利口だったヘレンが、喧嘩が大きくなったらマズイものがあるのをさとして他の者をなだめた。

それから暫くすると、さっきの騒ぎはどこへやら、四人は、さも楽しそうに飲んだり食べたりしていた。女たちも酔っぱらい、男のほうも圧倒されていた。彼女たちは良人の秘密を知ってしまった。いったん死体売却の事実を知り、いかにボロい仕事を呑みこむとかえって彼女たちが大胆になり、さかんに次の売却をけしかけた。

「ときに、ジョゼフは、だいぶ弱っているそうじゃないか？」

「ああ脹れてきちゃ、もう三日と保たんな」

「何の病氣？」

「おたふく風邪さ」

「おたふくって子供の病氣じゃないの？」

「大人がなると助からないそうさ。毒が身体にまわるとオシマイさ」

「おい、ヘイア、ちょっと来い」

パークは下宿の亭主の腕をつかんだ。その

眼の光に他の者は、はッと打たれた。

「あなた」

「いいから、来い」

二人の女は、酔っぱらった男たちが部屋を出て行くのを呆然と見送った。

その夜遅く、『早かったでしょう、先生』と、パークが一個の死体を解剖台の上に投げだしたのだった。

「この人は何で死んだのかな。ふむ、だいぶ顔が脹れている」

教授は、ゆっくりと死体をしらべた。

「さア、何ですか？」

「耳下腺炎のようすな」

二週間のちに第三番目の死体がノックス博士のところを持ちこまれた。ズツクの袋から取り出されたのは、がっしりした体格の紳士で立派なヒゲを生やしていた。

「ほほう、これは、いい材料だ」

医者は喜んだ。しかし、ヘイアの下宿にはそんな男はいなかった。かれらは、どこからその死体を持ってきたのであろうか？

メアリ・パターソン

クリスマスが近づいていた。ヘイア夫婦と

パーク夫婦は、急に派手になって、いつになく沢山の御馳走を買いこみ、女房たちは新調のドレスで小娘のように浮き浮きした。

市場などに行くと、まるで変わった人間のように見えた。新しい服、新しい靴。クリスマスの晩は、みんなと一緒に、着飾った二組の夫婦は、『御使いの天使は歌う』を歌いながらターナークローズを練り歩いた。

その翌日の午後、一人の近所の者が、クリスマスおめでとう、とヘイアの家に入って行くと、主人とパークが顔をよせてひそひそ話をしていたが、誰かが入ってきたと見ると、急にパークがハンケチを眼にあてた。

「どうしたんです。クリスマスというのに」
「伯母さんが死んだんだ」

パークはすすり泣いた。

「伯母さんが？」

「お袋も同様な人だった」

ヘイアも貰い泣きをした。来客は、ほうほうの態で引きあげた。その後姿を見やって、二人はニヤリと笑った。

新年早々、中年の女の死体を持ちこまれたノックス博士は、れいによって五ポンドずつ渡しながら、眼鏡の奥でまばたきをした。

「どうも、袋はいけな
いね。スリむけたりし
て感心しない。こんど
から何か他の物に入れ
てくれませんか」

「ああ、それならね」
パークは簡単に返事を
した。「女房がお茶を
入れる大きな箱を持っ
てます。なんでも、昔
から女房の家にあった
というおっそろしく旧
式なやつなんで」
「それがいい、それが
いい」

春になった。パーク
は、ともすれば羽目を
はずしそうになったが
女房のヘレンが、しっ
かりと手綱を引きしめ
ていた。しかし、パー
クは、かねてから目を
つけていた女があった
メアリ・パターソンと



R

いう評判の女で、貧乏人は相手にしない娼婦だった。どんな男も見とれる肉感的な美人でパークは、これまで、何度も彼女を見かけたが、貧乏な靴職人になど鼻も引っかけなかった。

「ちくしょう、お高く止まりやがって。どうせ金で自由になるインバイじゃねえか」

棄ぜりふを言って、いつも見送るのだったが、いまは自信がある。金がある。ある日、町で彼女をつかまえて、なれないよそ行きの言葉を使った。

「ご一緒に一口いかがですか」

「あら、あんた靴屋さんだったわね」

女は蓮っ葉に流し目を送った。

「おどってくださるの？」

金の力は恐ろしい。メアリは商売柄、目が高い。靴屋のパークが、ちかごろ金廻りがよくなって、身なりもバンとし、女房も品が出てきたことを知っていた。だが、これまでは口も利いてやらなかった男だし、女については堅い男だという評判だった。

だが、アブク銭を握った男は、かならず女に無茶な金を費うものだ。メアリは、みすみす靴屋を逃がすのは惜しいと思っていた矢先

だったから、まさに渡りに舟だった。

一杯のんだ二人は、さてどこへしけこもうかと迷った。うんと遠出すればよいが、とりあえず近くにといいと頃合いの場所がなかった。パークも、そこらに顔が知れているし、女はエンジンバラ中の人を知っているといってもよい。

「ほかの旦那がたはどこで会うんだい？」

「家へ来る人もいるけれど、たいていは一流旅館か料亭へ行くのよ。そうね、スコット・インがいいわ。あそこにしましようよ」

とんでもない、とパークは手をふった。いくら懐が暖かいといったって、スコット・インなど靴屋風情が行けるかい。

「お前さんの家へ行こう。いちばん簡単だ」

「だめよ、田舎からお母さんが出てきてるから今のところマズイのよ」

「そいつは弱ったな」パークは、せっかくのチャンスを目の前にして、なんだか、そのまま女を、逃がしてしまうような気がして慌てた。「そうだ、弟のところがいい。あいつなら話がわかる」

「すぐに奥さんにわかるわよ」

「大丈夫ってことよ。まかせとけ」

弟のコンスタンチンは、エンジンバラの警察に何でも納める御用商人である。行ってみると弟は留守で、戸口のところに女房一人がいた。

「ちょっと、このひとと話があるんだ。二階を借りるぜ」

「あら義兄さん、ごちそうさま」

「ヘレンにだまってるよ」

「はいはい」

笑いながら若干の金を受取った。そうでなくとも、ちかごろ、ちよくちよく貸してあるので文句を言う筈もなかった。

二人が二階へ上ってから二十分もすると、コンスタンチンが戻ってきた。

「だめよ、二階へ上っちゃ」

妙な笑いを浮べて女房がとめた。

「なんで？」

「義兄さんが来ているのよ」

「兄貴がいるから、どうして？」

「女のひとと一緒によ」

「誰だ？」

「誰だか知らない。レディよ」

コンスタンチンは、階段の下から上を見上げた。そのときであった。ふらふらと、バ

「クの女房ヘレンが、足とりも不確かに戸口にあらわれた。」

「どこにいる？」

「誰が？」

「白はくれちゃいけないよ。うちのひとだよちゃんと知っているんだ」

あきらかに酔っていた。それにしても、なんと早い直感だろう。おそらく、良人の行動をうかがっていて、ヤケ酒をあふり、見当をつけてやって来たにちがいない。

ヘレンは利口な女だったが、人一倍のヤキモチ妬きが欠点だった。酔うと、聞いてもらえないような卑猥なことを喚きちらしてパークに食ってかかる。パークも、これだけには閉口していた。だから、これまで女出入りがなかったというのも、一つには貧乏のためでもあったが、女房が怖かったのが大きな原因だったのだ。メアリとの密会も、弟夫婦のほうに口が堅かろうと思ったのだったが、もうそこを、獵犬のように嗅ぎつけられてしまった。

猛り狂った獵犬は、二階に上って行った。男と女の黒りあう声や物がこわれる音が聞えた。

「この助平！ 牢屋へ送ってやるから。あんたが何をしてるか、ちゃんと知っているんだ」ヘレンの叫ぶのが階下まで聞えた。それからまた一しきり、ぎゃあぎゃああと喚きあうのが聞えたが、急にしーんとしてしまった。

「来ているかい？」

ふらりとヘイアが顔を出した。ただならぬ弟夫婦の顔色に、階段を一足とびに駆け上った。

「や！」

ベッドの上に真ッ裸のメアリがたおれ、ヘレンが床にうつぶせて泣いていた。パークはこれも半裸体で、気が抜けた人間のように呆然と突っ立っていた。

「こいつが」パークの声はふるえた。

「つまらねえことをしゃべりやがったんで、この女が驚いて逃げ出そうとした。金切声をあげかけたんで、つい、口をふさいだ」

「ふーむ」ヘイアは腕を組んだ。「どうせ知られたからにや仕方ないさ。おい、くよくよするな。なんでもねえことじゃないか」

「殺すつもりはなかったんだ」

「だからよオ」ヘイアはパークの耳にささやいた。「こいつを先生のとこへ持って行きあ

いいじゃねえか」

情夫探偵

メアリの死体は、ノックス博士のところに運ばれたときは、まだ温かった。

「ほほう、きれいな女のひとだ。死んでから一時間もたっていない。どうしたんです、このひとは？」

生きているような、みずみずしい裸の女。

つい先程、あんなに自分を有頂天にした、この腰、この乳房。パークは、ぼかんと夢見る者のように台の死骸をながめた。

「先生」ヘイアが横から口を出した。

「こんな素晴らしい上物だ。すこしはイロをつけてくださいな」

「だめだね。いくら綺麗な女だって、わたしは同じことだし、今は暑いさかりだから、すぐ腐るんでね」

「暑いときは安いですか？」

「氷代が嵩むんだよ」

メア리를解剖するとき、学生たちは緊張した。

「どうも見たことがある女みたいだな」首をかしげる者があり、ある学生は、

「おい、あれはメアリ・パターソンだよ」

とも囁きかわした。しかし、ノックス博士は、いつになく張りきって、

「ほら、これが卵巣じゃ。若い女の材料は滅多にないから、よく見ておきたまえ。この指先くらいの、一見して脂肪のかたまりのような卵巣が女たることを支配する」

学生たちのひそひそ話は耳に入らない様子であった。

とにかく、町の名物女、メアリ・パターソンが掻き消すように居なくなってしまった。

いちばん、やきもきしたのは、彼女の家で、

いま帰るか帰るか首を長くして待っていた情夫のマクローグリンだった。彼女が、母親が来ていると言ったのは、じつは彼女がいたからだだった。

マックは、流れ者のヤクザで、いつのまにかメアリのヒモにおさまっていた。女は、ときどき旦那衆と遠出をして、四日も五日も帰らないことがある。なあに、今日にでも、ひよつこり戻ってきてキッスの雨を降らし小遣いをたんまりくれるだろう。

たかをくくっているうちに一週間たった。

そろそろ不安になって町へ出てみた。みんな噂をしている。どきッとして、彼は、くんくん鼻を鳴らした。

「あの女は、パークと一杯やっていたぜ」
そう言う人を見つけた。彼女が消えた前の日である。

「たしかに、この眼で見た。暮れがた、二人とも少々きこしめしてキングズスクエアを東へ歩いて行った」

それからそれと、蛇のような執拗さで、失った女の足跡を洗っていった。情夫の執念のようなものであった。そして、とうとう、パークの弟コンスタンチンの家までたどりついた、ちょうど、ヘレンが不意にあらわれたように。

「知らないね」夫婦は首を横にふった。

「このところ兄貴はとんと姿を見せないよ」
そこで、ぱったりメアリの足跡は途切れてしまった。マクローグリンは、歯がみをしたが、なおも、あきらめずに別の方面を嗅ぎまわった。

コンスタンチンは嘘をついたのだ。あの日二階がひっそりして暫くすると、パークとへ



異色風俗作品集

倒錯の夜

価 二〇〇円
四〇円

鳥羽 瑛子・作

お待たせ致しました!! 好評売切れのところ、第二版出来!!

○F誌でおなじみの鳥羽瑛子女史の異色傑作を集めた単行本「倒錯の夜」はあまとりあ社の夜シリーズ第四巻として発行されましたが、あまりの好評に予定部数を突破し

遂に増刷する事になりました。

○前にお申込下さいました方には、売切れの為に御迷惑をかけましたが、増刷出来ましたのでお手許までお送り致しました。

○お問合せの手紙を戴きました方には、前述の旨御返事差上げましたが、もう御送金下さいまして大丈夫です。

○「密夜」松井籟子著「男たちとの夜」津

レンが、何気ない顔をして降りてきて、どうも飛んだ迷惑をかけてすまなかった、晩飯でもおごろう、さアさアとせきたてた。

「あの女は？」

「ヘイアがなだめている。うまく片をつけるよ。俺たちは居ないほうが都合がいいんだ」と説かれて四人で町へ出た。料理店まで行かないうちに、パークは、何か口実をつくて弟夫婦をヘレンにまかせてどこかへ行ってしまった。

これが真相であったが、コンスタンチン夫婦は四時間もたってから家に帰ったので、もちろんヘイアや女の姿はなく、寝室もきちんと何時ものとおりであった。

ところが、マクローグリンは、もう一つ妙な話を聞きこんだ。しかも、当事者は巡査だった。

「パークとヘイアのやつがね、あの雑踏の真ん中で立往生しちゃったんだ。鉢樽を運んで

田加寿子著「官能の夜」龍胆寺雄著の三著と共に皆様の机上を耽美の文章で彩どって下さい。

○東京・中野・江古田一あまとりあ社宛

いたが、手押車の心棒が折れてな。わしは、近くで二輪馬車を借りてやった」

「どこへ行くと言っていましたか？」

「さアね、なんでも病院用だと言ったわけ」

人のよさそうな巡査は思いだしてくれた。マクローグリンは病院をうかがいだした。十月三十日の夜、ヘレンは、お茶箱の中に一人の少年の死体を見た。正確にいうと第十一番目の死体だった。

「ああ」

彼女は気を失ってしまった。

「しっかりしろ」

パークがウィスキーを吞まして蘇生させたが、彼女は、口も利けないほど仰天していた。「あの子は白痴の子でしょう。ああ、あたしたちはおしまいだ！」

スコットランドでは、白痴をいじめると必ず天罰できめん、ことに白痴を殺すと一家が

破滅すると昔から言い伝えられていた。

「なに言ってやがんでえ。迷信だア」

パークは一笑に附した。

その日はヘイアの情婦マツグの誕生日で、彼女は我儘を通して近所の連中を呼んで小宴を開いた。子供を入れた箱は、広間の隣の部屋に置いた。夜中になって運ぶつもりだった。みんな、わいわいと飲み、騒いだ。それが最高潮に達したとき、ふいに隣室に女の悲鳴が起った。

「あれ、あれを」

ぶるぶる慄えながらヘレンが部屋の隅を指していた。

あおい顔をした一人の白痴の少年が幽霊のように箱の上に腰をかけていた！

幽霊話はすぐ町にひろがった。マクローグリンが警察にころがりこみ、パークたちは鋭く少年のことやメアリのことを追及された。

パークの殺人方法は口を手で塞ぐという簡単なもので、少年は仮死から生きかえったのだった。

「ウィリヤムパーク、殺人犯人」

こういう説明がついた髑髏がエジンバラ大学の解剖学標本室にある。

連載時代伝奇小説

刺客弁天

中林節三
山田彬弘・画

動くともなく

動くともなく、すうっと襖が開いた。

お絹は、それを首筋にひえびえとした夜気が流れた、と感じて、闇の中でふっと目を見ひらいた。

その途端、夜気の流れは止んだ。襖が締ったのだった。音もなく。

江戸橋質両替商長崎屋の奥の部屋である。

(?.....)

お絹は、急にひとり寝の自分が恐わくなった。

誰かが、部屋の中に忍びこんだ……。

めざとい処女感覚であった。それにお絹は睡っていないかった。

昨日、長崎屋の隠居四郎兵衛が死んだ。

今日は四郎兵衛の葬式があった。

お絹は四郎兵衛の孫娘である。

一代で、巨万の富を築いたと言われる四郎兵衛から、目の中に入れても痛くない程に可愛がられた孫





何も見えない。相手は、闇でも

目が見えるらしい……。

「絹どの……戴きたいものがあつて参つたのです……昨夜、そなたが父の惣右衛門から受取つた刺青小町番付をこちらに渡して戴きたいのです」

「知、知りません、そんな……」

お絹は、相手が同じ女なのに、寢床から飛び起きて、部屋の隅に立ち、やっと声に出した。

「知らぬ筈はありません。刺青小町番付の一位は、そなたの名が書いてあるというではありませんか」

「あッ……」

お絹は蒼ざめた。

（どうしてそれを……？）

燐石をカチツと打合せる音。

ぽーっと、消えていた行燈が明るくなった。その瞬間、忍んだ女の

黒い影が大きく天井まで部屋いっぱい揺らいだ。

忍び装束。

お絹は、生れて始めて見るものであった。

顔をつつんだ布から出ている両目が、そのお絹を見凝めた。と、その目に不審の色が流れたが、それはすぐ消えた。全身柿色の装束だ。

「そなたから出さぬとすれば、こちらで探すまでです」

あつと、息を呑むひまもない。後に廻った女忍者の腕に、お絹は喉

つたら如何です……」

お絹はまた、愕きで息を呑んだ。

女の声が、お絹の寝ている足許の方でそう言った。

（だ、だれ？……）

お絹は、声が出なかった。それでも、ふしどから半身を起して、屹つと、声のした方を見た。

刺青小町の寢所に音もなく忍び入つた異形の者！ 巨万の富の謎を柔肌問う！

を扼された。

「うう……」

思わず、お絹は両手で、喉を巻いた腕をゆるめようとする。女のたしなみも忘れて、裾を乱して、それもすぐ背を反らして爪立ちして畳を蹴る。と、女忍者の右手が、伸び切ったお絹の腰の下じめをプツリと切った。

「あッ！」

お絹はあわてる。

ぱつと、素肌につけていた緋の長襦袢が、左右に割れて、露わになった前身をかばおうとしたお絹は、

「うっ……」

と、呻き声をあげて、夜具の上に俯つ伏せに倒れた。

「ない、肌につけてないとする……」

と、これは、お絹から長襦袢を奪った女忍者の呟き声だ。

その時と同じく、一間置いた隣りの部屋では、なまめいたふしどの上に、これは小柄な一見職人風の男が立っていた。

その足許に、お絹の妹の志保が、後手に縛られた裸のからだを海老のように折り曲げて転がっていた。

「おい、刺青小町番付はどこに隠してあるんだ。云わねえとそのからだをなくさむぜ」

あッ、と、志保は、お前のからだをなくさむといわれて、

「あ、姉のお絹が……」

と、口走った。

「なんだと？……姉のお絹だと……フン、ドヂリやがったか。長崎屋には若え娘が二人居たのか……てめえも肌に刺青なんかしてやがるか

らてつきりそのお絹だと思っていたが……けッ、で、そのお絹の部屋は何処だ！」

志保は、首をねじって襖越しに目で示した。

「畜生、余計な手間をかせやがって」

男は、志保に手早く猿ぐつわをかけると、そのまま仰向けに押し倒して置いて、フツと灯を消すと部屋を出た。

お絹は、からだをちぢめて俯伏していた。その背に、見事な蛇身の刺青が彫られていた。それを見凝めていた女忍者の手から長襦袢がふわりと投げられて、その蛇身を蔽いかくした。

その時、女忍者が忍び入った襖が、ガタガタと揺れた。

お絹は、投げられた長襦袢で裸体をかくし、その襖を見た。板張りの上に襖紙を貼った戸だ。錠はなかった。その戸がガタガタ揺れるだけで、開けようとしているのに開かない。

女忍者は、チラリとそれを見て、

「刺青小町番付は？」

お絹の目が、揺れ動く戸から女忍者を見る。

と、そのお絹の目は、畳に転がっている箱枕に走った。

「わかった——」

すいと、女忍者の手がその箱枕に伸びた。

その時、やっとガタガタしていた襖戸が開いて、

「あッ、小町番付！」

女忍者の、箱枕の抽出しから取り出した紙片を見て叫んだ。

この男も、お絹は知らぬ男だった。

男は、ぱつと、女忍者に飛びつくように体当りを加えた。

「あッ、貴様……女だな？」

男はひどく驚いたらしい。小町番付は女忍者の手から、その半分が男の手に破り取られていた。

さっと、女忍者は開けっ放しの襖から廊下へ出た。

「待て！」

だっと、女忍者を追って出た男は、

「痛ッ、ううっ……」

悲鳴を上げて、廊下にうずくまった。

何か、トゲ様のものが、足裏を刺したのだった。

「畜生、何を撒き散らしていきやがったんだ……」

それでも、始めて奥の部屋に異変を感じて、灯火を持って駈けてくる家人の物音に、^{びく}駈をひきひき、女忍者の開けて逃げた雨戸から庭へ逃げた。

「お絹！ どうしたのだ！」

父の惣右衛門が、廊下を駈けながら声をかけた。

「あッ、廊下に何かいっぱい……？」

家人と、傭人は、手燭で照らした廊下を見てハッと息を呑んだ。

わからない筈だ。

そこに一面に撒かれているのは、忍者の使用するひしであった。水中に生じ稜角ある堅い外皮をかぶる実を結ぶ菱の実を乾し固めたもので、トゲ様のものは益々鋭くなり、どう撒かれてもその上を知らずに歩く者の足裏を深くつらぬく一寸大の物で、忍者が逃げる時追う者を避けるために使用するものであった。女忍者が使用したのだ。別に鉄ひしもある。これは四本トゲで、常に三本で立ち一本は垂直に上を向くようになっている。

ひしで、廊下で驚いた者達は、開け放しのお絹の部屋へ入って、ま

た驚いた。板襖の下に鉄で出来た金具が落ちていたのだ。これも忍者が使う戸締り器だ。女忍者が部屋へ忍び込んで仕掛けたのだろう。どうりて錠のない襖戸が仲々開かなかった。

お絹は、その時には、女忍者に剝がれた長襦袢を着ていた。

「泥棒が入ったのか、お絹？」

「はい……」

「何を盗られたのだ」

「小町番付です」

「小町番付を？」

惣右衛門は、首を傾けた。何故そんなものを、誰が盗みに入ったのか？ それも嚴重な戸締りを開けて……。

「ど、どこも怪我はせなんだか？」

「はい、どこも……」

ふっと、お絹は頂垂れた。女忍者に、裸体にされたことを思い出したのだった。

家人は、それからこの騒ぎに起きてこない妹娘の志保を不審がつて一間隔てた部屋の襖をひらいてアッと驚いた。そこには裸にされた志保が後手に縛られ、猿ぐつわまで嵌められた姿で、なまめいた夜のふしどの上にその裸形を藻掻かせていたのだった。

刺青 小町番付

昨夜――。

それは長崎屋の隠居四郎兵衛の通夜の晩であった。

江戸で、金^{かね}を扱う者が大半集って居たろう。ほかに名のある商家の主人が来ていた。全部で四五十人は居ただろう。

「父の遺言でございますから、これから父の蒐めた物を一統様に気張って成可く高価に買って戴きます。その金を貧しい人達に恵んでやれというのが四郎兵衛の最期の言葉でした」

惣右衛門はそう言って一座を見廻した。

その席には、奇人を通った四郎兵衛の、数々の蒐集品が並べられていた。洋燈、大理石の置時計、懐中時計、遠目鏡、木椅子、象牙の紙切ナイフ等々、何もかも当時としては珍らしい外国の品々だった。特に目立ったのは径二尺はある地球儀だ。そして何枚かの海図。

それらのものは、人々が想像するよりも二倍も三倍も高価に買われた。

最後に惣右衛門が取り出したのは、一片の紙片であった。

「これは、四郎兵衛が道楽でつくったものと思われます。『刺青小町番付』と題書がしてあります。四郎兵衛は刺青というものにひどく興味を覚えたらしく、今夜この席にもお出を願っている刺青の名人と謂われる彫宇之さん、彫金さんとも、また所用があつてこれになかった彫辰さんともひどく懇意でこんなものを残したのだらうと思います。変っていることと申しますと、これにはどこそこのだれというような有名な方の名はありません。読んで見ますと、第一位にお絹、二位に志保、三位は空白、四位美代、五位縫と十人程の名が記入してあるきりです」

惣右衛門がその言葉を切った時。

「お父つつあん、それはあたしが貰って置きたいのですけど……」
言い出したのは、この席に居たお絹であつた。お絹は、番付に一位にされて、その羞恥であろう、美しい顔を上気させていた。

「ははは、お前の一位は身最負だらうが、まあそういうならしまつて

置きなさい」

惣右衛門は『刺青小町番付』を、笑いながらお絹に渡した。

「長崎屋さん、仏になった隠居は一代で巨万の富を築いたと噂される人だ。蒐めた珍器を売り立ててその金を貧しい者に施せというのは奇特な遺言だと感じ入りますが、一体ご隠居は蒐めた莫大な金をそっくり残して、不用品ばかりといったら叱られるかもしれないが、まあ要らない品々を売り立ててその金だけを貧乏人に配けろというのは、仏の悪口をいうようで気がひけるが、ちと料見がせまくはございませんかな。それともその方の仏の遺言はあなたが握りつぶしたというのなら話は別ですがね」

そう言い出したのは、仏と生前最も親交のあつた同業の唐津屋の隠居だった。だから遠慮もなくそう思つたことを口に出したのだらう。

「それは私もおかしいと思いますのは、仏の死んだ後に、私にも一歩も中を覗かせなかつた一番倉に入りました私も吃驚したわけですが、あるのは今皆様にお買上げ戴いた品々だけで、私も想像していた金は一文もなかつたのです」

「フーム」

惣右衛門の言葉で、腕をこまねいて首を拵つたのは、問い正した唐津屋一人だけではなかつた。誰も彼も、ここに集つた人達は、長崎屋の隠居は少くとも十万両、多くては五十万両から百万両位の金は土蔵に積んであると日頃想像していたことだった。

「いや、何とも不思議な話です。しかし、ないものはないのでしょうか……ハハハハ……よくわかりました。有りそうでないのは金と言いますからな、長崎屋さんもその例でしたね。いやよくわかりました。それでは私としてももう一奮発して貧乏人のために千両を投げ出しま

しょう」

そう言った唐津屋は、広間の隅で、こっちを見る蒼い顔をしているお絹に微笑をうかべて、

「どうですお嬢さん、先程あなたがしまわれた刺青小町番付を千両でこちらにお譲り渡し願えませんか」

唐津屋にいわれて、お絹は途法に暮れた顔をした。

「折角のお話ですが、祖父の片身としてこれだけはあたしが持っていたいのですが」

「成程、その番付の一位にあなたの名があっちやアこれは立派なご隠居の孫娘に対する片身品でしたな、いや、それでは諦めましょう。ハハ、でもこっちから言いだしたのだ、その番付を買い取ったつもりで千両は後程店の者に届けさせますよ」

唐津屋はそう言うと、磊落に笑って見せた。

お絹はその時、唐津屋の目が異様に光ったのを見落さなかった。ぞっと、背筋に水をかけられたような冷たい、執念というような目だったのである。

それが「刺青小町番付」だった。

それをお絹は盗まれてしまったのだ。

同時にそれを求めて、忍び込んだ者があったのだ。

一人は女。

一人は男。

それも小町番付は半分ずつ裂かれて、それぞれの手に渡ったのだった。

お絹は、すぐ思い出したのは唐津屋の、昨夜の蛇を思わせる目であった。

しかし、その小町番付はなんの価値があるというのか。それまではお絹にはわからなかった。

怪盗風太郎

自分が忍び込んだ長崎屋の、志保の部屋で手間取って、それから踏み込んだお絹の部屋には、一足先に忍びこんでいた忍び装束の女に、先に手に入れられたとはいえ、半分は自分の手に奪った刺青小町番付を懷に、忍び装束の女を追って長崎屋を逃れた男は、跛をひきひきそれでも足裏を痛めた者とは思えぬ身軽さで、夜更けの往来を駈けていた。

その男は、ぎょつとしたようにいきなり立ちどまった。闇の中で摺れ違った者があったのである。

「ホホホホ、これは軽業の蜘蛛七さんじゃアないか」

「エッ？ ああ、こりゃアお柳さん……」

「どうしたのさ、見てりゃア長崎屋から逃げ出して来たようだけど、いつ両国の軽業小屋から抜け出して泥棒になったんだい」

お柳と呼ばれた女の言葉は、男を咎めるのではなくからかっているのだった。

「こいつにはわけが大ありなんだ。見逃しといて貰いたいな。それより、この道を女が駈けていかなかったかね？」

「女？ さあ見なかったようだね」

「只の女じゃアねえ、こう忍び装束っていうんだろう、目だけ出して全身をこう柿の渋で染めたようなものをつけた女だ」

「忍び装束？ 見なかったといやあ嘘になるかしら……大方お前さんが追いかけている女が本当の女忍者ならあたしらの目にはとまらない

ねえ、忍者というのは風のように速く駆けるというもの」

「チエッ、それじゃアこれで勘弁してくんな」

「いいよ、お行きよ。でも断つとくがあたしはつばくろお柳だよ、ちよいとお前さんの懐から貰ったものがあるけど、それを承知ならその女忍者を追いかけていきなよ、どうせその忍者は若い娘だったんだろう」

「げッ、そいつは困る。けえしてくれ。な、頼む、お柳さん……」

「いやだよ。人の物を掬るのはあたしの稼業さ、掬られるのがそっちの間抜けというもんだよ」

「畜生！」

だっと、そのお柳に飛びついた。

「フン、はなしたたらっ、お柳さんは大の男嫌いだってえことしつてゐるだろう」

口では強気なことを言っても、男の力には敵いっこない。

蜘蛛七というのは両国の掛小屋で軽業をしている男なのだ。臂力が人並以上に発達している。

「ううっ……」

お柳は、夜目にも白い肢を裾から覗かせて藻掻いた。

と、いきなり、ぐいぐいお柳の喉を締めつける蜘蛛七の腕の力が抜けたと思うと、蜘蛛七のからだは五六歩たたらを踏んで危なく踏みとどまって立直った。

いつの間にかお柳の前に、男の影が立ちふさがっている。

「畜生！」

蜘蛛七は唸った。それでも軽業できたえた自分の腕力を造作なくしびらした相手の男の力を怖れてすぐ飛びかかろうとしない。

「ホホホ……」

お柳は、男の蔭からその蜘蛛七を覗いた笑った。

「やめときなよ、蜘蛛七さんのお手に合う相手じゃないやね。言いおくれたがさっきから連れで話しながら歩いていたんだ。今ふっと姿を消していたから大方お前さんのいう女忍者でも追いかけて来たんだろうよ。折角だから紹介しようか、この男が風太郎という男だよ」

「あッ！」

蜘蛛七は思わず唸った。

風太郎の名は、今江戸では誰知らぬ者も居ない怪盗なのだ。武家屋敷といわず、高家、富商を問わず、風のように襲っては財宝を煙の如く奪い去る盗賊。

だれもまだその正体を見たという者は居ない。その風太郎が、いま自分の前に立っている男なのだと知って、蜘蛛七は思わず大きな吐息をつくのだった。

「お行きよ蜘蛛七さん、またお目にかかろうよ」

お柳は、蜘蛛七にいうと、風太郎を促して歩きだした。

蜘蛛七は、その二人の後影を見送って、また深刻な深い溜息を吐いた。

「そうだ」

と、その蜘蛛七は、風太郎とお柳を見送っていて急に思いついたようにそう呟くと、風太郎達と反対の方角へ駆け出した。

「どうだい、女忍者だというじゃアないか。追いかけても無駄だったろうよ」

お柳は、風太郎にそう訊いた。

「ウム、素ばしっこい女さ」

「そうさ、お前さんがおそいんじゃない」

お柳は、かみかうようにそういうのだ。

「じゃ、お柳、わかれるぜ」

「おや？ どうしてさ……久しぶりに会ったんじゃないか」

お柳は未練気に風太郎の顔を見て言った。

「さっきの蜘蛛七という男な、どうも気になるんだ」

「何故さ、始めて会った男じゃアないか」

と、お柳は不審そうな顔をした。

「始めて会ったって、長くつき合ってたって、気になるのは気になる」

風太郎はそんなことを言ってもう蜘蛛七の消えた方へ歩き出している。

「フン、全く風太郎って男は変ってるね。昔の色女に会ったってなつかしそうな顔もしなければ濡れようとも言わないんだから」

お柳は淋しそうに口の中でそう呟いている。



土蔵の中

それから一刻後、蜘蛛七は石町の質両替唐津屋の内庭に忍び込んでいた。

その顔は、何か重大な物思いに沈んでいた。

「やあ、お前さんか」

廊下に出て来た老人は、蜘蛛七を見ると、そう言葉をかけた。何しに来たという軽蔑の響きがその短い言葉にあった。

「旦那——」

そう呼びかけた蜘蛛七の声は、弱々しい、哀願の色をふくませていた。

その蜘蛛七に、

「もうお前さんには用はない筈だぜ。見事に刺青小町番付は奪えなかった、それでお前さんに頼んだ仕事は終わったんだよ。お礼の二十両は今朝渡した筈だ」

「旦那——その二十両はお返ししますから、お京を返しておくんなさい」

「お京？　ハハハ……お前さん、この唐津屋をどう見なすった。今朝程私が頼んだ時、間違いなく子の刻までにはあの小町番付を長崎屋から奪って来て届けると約束しなすった。その時、失敗したら命を差しあげますと云いなすったのは何処の誰ですね。二十両は小屋で博奕を打って負け、今日中には先方に金を渡すか恋女房を渡すか二つに一つをしなくっちゃならないというので前金で二十両を渡したのだよ。それにだ、お前さんは小町番付を奪うことに失敗すると真っ直ぐ両国の掛小屋へ飛びなすった。私から貰った二十両は先方へあげて女房と

何処かへ逃げようと考えなすったのだ。と、これは私が見たのではない、そう思ったのだ。それで女房は一足先にこちらへ連れて来られたと知ってからやっと私の前へ現れたってわけだ。私は一旦人に渡した金は受け取らない。それにお前さんの命ももう不用になった。それに先方の男に私は二十両の金を遣って、お前さんの女を連れて来たのだよ。しめて四十両でお前さんの命のかわりにお前さんの女房を買い取ったわけだ。お前さんはどっちみち女房は人に博奕で取られたと諦めるんだね。それに二十両はお前さんの懐に入っただ。勘定にはお釣がくるというわけではないかな」

「しかし……旦那、小町番付は必ずあつしがその内きつと手に入れて持って参りますから」

「断るよ。それは小町番付を取り損ってその足ですぐここへ駆けつけて、さア約束だ首を取ってくれと言ったんなら別だがね。私は信用出来ない男には二度と用を頼まないことにしてあるんだ」

「旦那——」

「フフ、恐わい顔をしなすったね。懐には七首でも入っているのか」
そう笑いながら言った唐津屋の右手が、ゆっくりと懐へ入ると、取り出した短筒がピタリと蜘蛛七の胸許に狙いがつけられた。

蜘蛛七の顔は、見る見る血がひいていった。

「懐の七首をこちらに渡して貰おうか」

蜘蛛七は、七首を出すとそこへ投げ出した。

博奕で二十両を負けたら女房のお京を譲ると賭けて負け、とにかく明日の子の刻迄待ってくれと相手に頼み思案に暮れていると、小屋の博奕へ来ていた伝吉という男が唐津屋に行つて見ろ、命を預けるといふやア二十両位御の字で貸してくれると云われて、蜘蛛七は唐津屋へ行

き、二十両を渡されて長崎屋の娘お絹が持っている刺青小町番付を奪い取ってくるよう言いつけられたのだった。そして結果は、小町番付の半分は手に入れたのに、つばくろお柳という女掏摸に巻き上げられたのだった。

「蜘蛛七さん、お前さんは自分の女房を私が玩具にすると考えているようだね。お見せしよう、唐津屋は他人の女房を取ってなくさみものにしようなぞとさもしいことは考えない男だよ。ついてくるがいい」

唐津屋は、短筒の先で蜘蛛七を導いていったのは、数多く竝んだ内の土蔵の一つだった。

その土蔵の扉を開けると、中に居た手燭を持った男が、近づいて来た。

「お客様をお連れしたよ」

「へい、お待ちして居りました」

蜘蛛七は、その男の顔を見ると、さっと顔色を変えた。小屋博奕に顔を見せていて、蜘蛛七に唐津屋へ行けと言った伝吉だった。

「女は入れてあるだろうね」

「へい、ちゃあんと……子の刻になると同時に此処へ連れこんであります」

それに頷くと唐津屋は蜘蛛七に向って、

「お聞きの通りさ、約束の子の刻迄はお前さんの女はお客様として扱って来たよ。約束を私は違えるのは嫌いなのだ。しかし、今は女は私の物さ。——伝吉、女を中から出してこの男に見せてやるがいい」

唐津屋の声に、伝吉は明りを持って奥へ入っていった。ほうっと、明るくなった土蔵の奥に、木格子がはまっている。私牢が出来ていたのである。

蜘蛛七は、その私牢の中に、お京が後手に縛られて俯つ向いている姿を見た。

伝吉は、私牢の中からその女をひき摺り出した。

「格子に括るがいい」

唐津屋の言葉に、お京は、伝吉の手で木格子に立った姿で、後手にした両手首だけを括った縄の先を結びつけられた。

「お京……」

蜘蛛七の口から悲痛な声が洩れた。

「あッ」

お京は顔を上げた。

「お前さんは余り近寄らぬことだ」

唐津屋は短筒で、お京に近づこうとした蜘蛛七を退けた。

「伝吉、その女から衣類を剝ぐがいい」

「へい？ 素っ裸にするですかい」

「構わぬ。七首を持っているだろう、それで帯を切るのだ。着物も裂いていい、どうせもう着ないのだからな」

「へい」

伝吉はお京に近寄って、帯をつかもうとして、

「あッ、この阿魔——」

よろけて、立直ると女の頬をピシャリツと伝吉は打った。無造作に女に近づいて、女の足に蹴られたのだった。

「よしっ、跳ねねえようにしてやる」

そう言うのと、いきなり伝吉はお京の片足を抱くようにつかんで、ぐいとひらくと、足首を縄で木格子に縛りつけようとした。

「畜生、畜生ッ！」

お京は、暴れながら、自由な片足で伝吉の肩を、胸を蹴る。

伝吉はそれでも片足を木格子に括りつけ終った。

もう片っぱの足も、伝吉はおさえ込むと、今度は蹴られないので、前より早くお京の足首を木格子にくくりつけてしまった。

「どうだ、これで蹴ろうたってそうはいくめえ」

伝吉は、それからお京の帯をつかんでそれを七首で切った。ゆっくりした愉しむ動作だった。伝吉は女が甲斐なく抗らうのを楽しんでいるのだ。

「フン、いい恰好だ」

「畜生ッ、どうする気だいこんな恰好にしてッ！」

お京は、叫んだ。

羞恥と口惜しさに全身を喘えがせた。

唐津屋はそのお京に寄ると、短筒の先を胸に押しつけた。

「畜生ッ、一思いに殺すがいいやッ！」

「そうはいかないよ。一思いに殺すのには惜しい器量をしているからな。私はお前さんのような結構な顔の女を見ると虐めて見たくなるのだよ」

唐津屋は、お京の胸に押しつけた短筒の先をぐりぐりもむように動かして、

「それにそう悶えるからだは軽業で鍛えたんだろう。素晴らしいよ」

「畜生ッ、お前さんはあたしを騙して呼び寄せといて鬭り殺しにするのかい！」

「そいつはお前さんの亭主に云ってもらおう。ただ私はお前さんを私の物として自由に扱っているのだよ」

「殺すんならさっさと殺すのがいいんだ！ あっ、何をするんだい、

うっ、やめなったら……！」

「畜生ッ！」

蜘蛛七が、堪えられなくなってお京を責める唐津屋に飛びかかろうとした時、唐津屋はお京を絶叫させた短筒を、くると蜘蛛七に向けた。

じりじりと蜘蛛七は退いた。

唐津屋はふつと微笑すると、

「伝吉、女を打て。そこに弓の折れがあるだろう」

「へい」

伝吉はそこに落ちていた弓の折を拾うと、ビュッと振り上げた。

唐津屋は、自分の背中でお京が何処をどう伝吉の振り弓の振れに打たれて悲鳴を上げ、もだえ、のけ反っているのかと、それを苦悶の表情で見ている女の亭主の顔色で読もうとしているのだ。

「どうだ蜘蛛七さん、これで女をなくさもうとしないのがわかったろう。安心しておかえり」

「旦那……」

「帰れといっているのだ。可愛がった女がいい恰好で責め殺される最期を見せまいという親心を仇にするのか」

唐津屋は、短筒で蜘蛛七を土蔵から出すと、ふらふらと闇に姿を消す蜘蛛七を見送って、土蔵の中に戻ると、ぐったりしているお京を見凝め、その胸に短筒を向けた。

轟然たる銃声とともに、うすれる煙が去ると、お京は全身を振るようにもだえていた。だが苦痛はすでに感じぬであろう。

やがてこと切れたお京の裸身を見て、

「伝吉！」

と叫び、唐津屋は顎をしゃくった。

「へい、彼奴を殺りますんで」

ぱっと飛び出した伝吉は、唐津屋に飼つてあるやくざに蜘蛛七を追わせて息の根をとめさせようというのだった。

隠密の娘

「そなたにしたら、思いもかけぬ失敗だったな」

「はい、面目もございませぬ。なにせ相手は軽業に長じているように身軽く、あつと思つた時には半分を捲り取られて居りました」

「そなたがそう申すのなら、只の男ではないかもしれぬ」

麻布等町の川村清兵衛の別邸だった。

話しているのはその清兵衛と、娘の千世である。

二人のあいだに、長崎屋のお絹の部屋から奪つて来た刺青小町番付が、半分後半を引き千切られたのが置いてある。

川村清兵衛は、御裏門番頭だった男だ。今は御勘定吟味役だ。取り立てたのは今の筆頭御老中水野越前守忠邦である。で、すぐにも勘定奉行にもなろうという男である。その男の娘が長崎屋に忍びこんだ女忍者と同一人だったのだろうか。

それには清兵衛のことを話すよりほかない。

その清兵衛は、吹上御庭番も勤めたことがあったのだ。この御庭番というのは、四代將軍吉宗が、紀州から本家を相続したとき連れて来た者である。桜田の御用部屋に住つていて、総数が幾軒あるか、何程禄を貰っているのか、平生何をしているのか、ということの一切わからないものだった。いわゆる隠密御用をする。目見以上と以下とが入混つていて、將軍が庭に出られた時には直接命を受けたり、報告した

りする。老中に対しても同様である。大体は將軍についているのだが御用の次第では老中に直にも云うことの出来る身分なのだ。

千世は、だから隠密の娘なのだ。しかし、千世は今は忍び装束を脱いで、ただの娘として坐っていた。

「父上、お伺いして置きたいことがございます。私が今夜忍びこんでこれを盗み取つて参りましたが、これに如何なる価値があるのでございましょうか」

「これか、これはな、長崎屋が溜めた金が秘められてあるのだ。もしかすると百万両はあるかもしれぬ」

「これに……？」

千世は驚いて父の顔を見た。

「それだけの金があればなんとでもなるのだ。僕はこれまで御老中の水野様には何かと御取立を蒙ってきたが、この上に百万両あれば勘定奉行もすぐなら町奉行にもなれるであろうよ」

「町奉行と申せば、先の南町奉行の矢部駿河守さまは御不運でございしましたね」

「矢部様も折角望んでいた町奉行になったのに、今度の桑名へお預けの身では致し方ないの。鳥居様が蹴落したのだ」

「矢部様も筒井様を蹴落したと聞いて居ります」

「ウム、山だちは山で倒れ、川だちは川で果てるというが、矢部様は探索好きで水野様に取り入つて南の町奉行になったのだ。それが鳥居様の探索好きにしてやられて町奉行を棒に振つたのだ。かわつて南町奉行になった鳥居様を蹴落すのはわしだ」

「父上もお氣をつけ遊ばせ」

「なに？　そうか、ハハハハ、わしは大丈夫だ。いやそれは冗談だ。

気をつけねばなるまいな。何しろこの頃のご政道は江戸開府以来の乱れだから。いくら筆頭御老中の水野様がついているとは申せ、大きな声ではいえぬがその水野様がいつ倒れるかわからぬご時世だ」

「水野様も危ないのでございますか？」

千世は吃驚した目で父を見た。

「わからぬ。水野様にも敵が居るからな。御老中の土井様、真田様、これは敵だ。それに近頃名奉行と謂われる北の町奉行遠山左衛門尉様も水野様の敵だ」

「遠山様もそうなのでございますか」

「ウム、それでな、いづとう御政道がかわってもかわらぬ金というものを欲しいのだ。それでそちを

長崎屋へ忍ばせたのだ」

「お役にも立ちませんで」

「なに、よい。でも遠山様も長崎屋に一度に刺青小町番付を狙って二人も忍び込んだと知ると長崎屋のかくし金を嗅ぎ出すかもしれぬな、刺青といえは遠山様も背中に桜の刺青をしているという噂だ。遠山の金さんなぞといわれて下世話に仲間通じていると、いうからの」

「世話では遠山様の刺青を

遠山桜と申して居るそうです」

「しっているのか、ハハハ、とにかく長崎屋の娘を攫い出さねばなるまいな」

「絹をですか？」

「そうだ、わしの使っている男が長崎屋の通夜にもぐり込んでいてな長崎屋は一文の金も残さなかったというし、かわりに妙な刺青の娘番付を遺したと報告があったのだ。その番付を唐津屋は千両で買おうとして絹という娘に拒絶されて失敗したそうだ。唐津屋は反水野派に金



を供給している男だな、小判の鑄直しを策しているよ。うだ。その胸にいつも一物を持つ男が不思議なことを云いだしたとわしは考えた。唐津屋は無駄金を使わぬ男だよ。それでわしも気づいたのだ。もしかすると唐津屋はその場で気づいたのかも知れない。長崎屋四郎兵衛は娘の背に金のかくし場所を刺青にして彫ったのか

も知れぬ、とな。するとそなたが忍んだ折同じ忍んだ男は唐津屋の手の者か知れぬな。或いはその辺の事情を知ってる者だろう。だが長崎屋の娘を攫い出すのは難しいぞ。長崎屋も今夜の騒ぎで岡っ引風情でも儲うだろ、それから山様か鳥居様の耳に入るとうるさいな。しかし急を要することだ。長崎屋の娘を唐津屋にでも先に奪われては長崎屋のかくし金は儼の手に入らぬかもしれぬ」

「承って置きます」

「ウム、わしが出張ればいいが、これでわしも仲々忙しい身でな」

「父上、それからこの刺青小町番付は、一位が絹と、書いてございます。二位は志信、これも長崎屋の娘です。三位だけが空白であとはまた名が書いてあります」

「ウム、そうだ、わしは絹と申したがこれはもしかするとこの娘番付に書いてある娘の内だれの肌に、長崎屋が金のかくしたかはわからぬ



か！」

清兵衛の声が高くなった。

「はい、もしかすると……」

千世の顔に、血が上って美しい羞恥の色が現れるのを見て、

「馬鹿！ そちのは別だ」

清兵衛は娘を叱りつけた。

それでも清兵衛は内心その娘を気の毒に思うのだ。

千世は背に刺青が刺してある。忍者としての激しい修業を清兵衛に強いられ、ある日樹上から背より落ちて千世は失心した。その時に背

中に痣が出来たのだ。それを清兵衛は気の毒がり、名人刺青師宇之吉にその痣をかくすために彫らしたのだった。図柄は蛇である。清兵衛としては魔除けに彫らしたものだだった。

彫らした蛇身の刺青のためか、それとも自然にそうなったのか、その痣は千世の肌から消えて、あとに見事な蛇身の刺青だけが残ったのだ。

ぬ」

「もしかすると、この三位には……」

「千世！ その三位に、誰が入るか承知しておるの

しかし三位だけが空白とすれば、その三位に位する娘の名がわかれば百万両はわしの手に入ったも同然かもしれ

な。

それに、清兵衛が娘を気の毒に思うのは、娘の青春を忍者の修業で奪ったことだった。

(しかし、もうすこしだ。わしが首尾よく百万両を手に入れたら、しかるべき家柄から婿を迎えてやる)

清兵衛はそう思った。

「退らしていただきます」

「ム」

千世は、顔も上げずに父の前を退った。

そして自室に坐った千世は考えこむのだった。

(不思議だ。あの長崎屋の姉娘絹はわたしに似ている。あの行燈に火をいれて見て驚いた程だ。知らぬ者が見たら同一人と思うだろう。それにあの絹の肌には蛇身の刺青があった。これも偶然の暗合だろうか……しかし、いつか父上に女の姉妹でもあったらと言ったら父は苦笑して、死んだ母を怨めとおっしゃった……)

千世は、自分に余りにも酷似しているお絹に気を取られて、不覚にも刺青小町番付を半分捲り取られたのだった、と思った。

しかし、そうではない。千世は同じ小町番付を狙って忍んだ男にからだをぶつつけられて、声無き悲鳴を、千世は自分の知らぬところで上げていたのだった。

千世の成熟したおんなが、不覚を取ったといつてよかった。

男といえば父の清兵衛以外に言葉を交わしたことの無い千世は、不意にその時男のからだに体当りを喰わされて、不思議な困惑を千世のからだを感じたのだった。それにお前は女だなと言った男の言葉が、千世をその場から、男の手に渡った刺青小町番付の半分を取返す気を失くさせ、ただそこからすこしでも早く逃げ出す行動に出してしまっ

たのだった。

千世が父の清兵衛の前で、顔を上気させたのは、そういうわけがあったのである。

十方手裏剣

お絹は、疲れてうつらうつらしていた。

時折雨戸に当る風の音にも、襖が開いたように思えて、ぎょっと、目を開ける。

襖には、錠がかかっている。昨夜、曲者が忍び込んでから、父に頼んでつけて貰ったのだ。

しかし、祖父の死、通夜、葬式、昨夜の出来事とつづくと、お絹は疲れ切っている。いつしか、とろとろとまどろんでいた。

襖の向うで、何か、かすかな物音がして、それがつついているように感じたが、厚い板襖には錠がかけてあると思ひ直し、それに怯えているからなんでもない音も気になるのだと、強いて自分をねむらそうとした。

と、――

お絹は、ハッと目をひらいた。

暗くしてつけっ放しの枕行燈の薄明りで、ハッと目をやった木襖にぽっかりと丸い穴が黒く開いているのだ。

何かまたいやな夢を見てるのかと、その暗い穴を凝っと見ていたお絹は、今度は、はっきりと驚愕の目を見ひらいてしまった。

その暗い丸い穴から、ぬっと、手首がはいり、腕が伸び、内側からしっかりとかけた錠を、ピンと、それは魔性の物の手にかかったように、鉄で出来た錠が、いとも簡単に開いてしまったのだ。

(男の腕……)

お絹は、その腕が、毛むくじやらの太い男の腕なのを見た。

昨夜の男の方が、また忍び込んで来たのか？

しかし、男の手に入れようとした刺青小町番付は、すでにこの部屋から持ち出されているではないか……？

(では、別の男が？)

男の腕はすでにお絹には見えない。お絹が見ている襖には、丸い穴が黒くぼかりとあいているだけだ。そこからはいった男の腕が、内側からかけた鉄の錠をはずしたとは信じられないようだ。

(悪い夢！……)

が、

「あッ！」

お絹は、声を立てようとしたが、それよりも早く、板襖を開けて入って来た男はお絹の叫ぼうとした口をふさいでいた。

苦しい！ お絹は暴れる。その苦悶の目を閉じた顔を冷たく見ていた男は、

「刺青小町番付は？」

声が出ないお絹は顔を振った。

「かくすか！」

男の手が、お絹の襟を、ぐいとかむ。

「うっ」

「何処にある？」

「ううっ……」

「フン、いい手触りをしている」

お絹は、余りの屈辱のために、気が遠くなりそうだ。

と、

「来たな！」

お絹の懷から手を抜いた男は、ぐんとお絹に当身をくれた。

「ウッ……」

そのまま、お絹は男に抱かれたまま気を失ってしまった。

そのお絹は、見たであろうか。

男が黒づくめの異装なのを。

忍び装束――

この男も、忍び装束をしているのだった。そして両刀をたばさんでいる。忍者か？ 板襖に穴をあけたのは小坪切という忍び道具の一種だ。その黒装束の武士は、気を失ったお絹を横抱きになると、登音も立てずに廊下へ出た。

と、

「御用！」

「馬鹿ッ！」

その二人の口から発せられた声が同時だ。黒装束はそれっきり何事もなかったように、雨戸がはずれている所から庭へ軽くふわりと飛び降りた。お絹を抱いているのを、すこしも負担にしていけない身の軽さだ。ただその折、お絹の寝間着にしている緋の長襦袢の裾がはらりと割れて、夜目にも白くうつくしい肢が太腿のあたりまであらわにうかびあがった。

その時になって、どきりと、廊下から庭へのめるように倒れ落ちた者がある。黒装束に苦もなく当てられた岡っ引の銀蔵だった。

それも振り向きもせず、お絹を横抱きにした黒い影は、高い塀に近寄ると、そこにかけてある縄梯子を伝って板塀の上に立った。と、

ひらりと身軽く塀の下へ飛び降りながら、ピュッ！と、黒装束の顔を狙って風を切って飛んで来たものを、黒装束の右手が振り払って、お絹の白い肢をじかに夜気に吸わせて無事に地上へ降り立った。と、黒装束は、お絹を横抱きにしたまま一間ばかり横へ飛んだ。

その瞬間、黒装束の塀から降り立った、恰度その顔面の位置に、唸って飛んで来た物がガッ！と音を立てて、板塀に深々と突き刺さった。

「十方手裏剣」

お絹を横抱きにした黒装束は、塀に突き刺ったものを見もせずに呟いた。凝ッと、それが飛んで来た位置を睨んでいた。

十方手裏剣とは、十字の形をした忍者独特の必殺の手裏剣なのだ。

「……………」

黒装束の口から、無言の気合が放たれると、ピュンッ、と手許から飛んだ物がある。

「うっ……」かすかに、遠くでうめいた声が上がった。

黒装束は、お絹を抱えたまま、呻き声がした位置へゆっくりと近づいた。再度の襲撃をこの男は警戒しているのだった。

だが、黒装束が傍近くに立つまで、二度と相手は襲撃の手を加えなかった。無駄だと思ったのだろう。

「フフフ、あの時に十方手裏剣を投げて居れば勝ったものを。この娘の命を考えたのがやはり女だな」

黒装束は、己れが投げた八方手裏剣を躲し切れずに、踢んで高腿をおさえている、これも忍び装束の女に言った。

それは、千世だった。

「口惜しそうな顔だな。しかし美しい目をしている。その忍び装束の下にも美しいからだをかくしているのだろうか。フフフ、ここでその

装束を剝いで調べて見ようか——何を恐わい顔をするのだ、この娘を抱えていなければおぬしを引つ摺って、その美しいからだをたのしむのだから惜しいことだ。と云っても俺の抱えている娘も美しい娘だよ」

「その長崎屋の娘を、どうして摺ったのです！」

千世は、黒装束の言葉を、振り捨てるように、屹と言った。

「フン、それは俺の方で訊きたいことだ。長崎屋のかくし金の秘密を、読んだおぬしは誰だ」

「……………」

「おい、云わぬと装束を剝ぐぞ！」

千世の手が、千世の装束を剝こうと踢みこんだ黒装束の胸を狙ってふところ刀で突き上げた。

「馬鹿め！」黒装束は、曲げた膝をバネにして後へ跳んでいた。

「フフフ、なかなかやるなおぬしも。それでいくとおぬしの股に飛んだ俺の八方手裏剣も大した傷ではなさそうだ。今夜は、見逃して置こう。そのうち引つ捕えてその装束を剝いておぬしの見事な裸身を愉しませて貰う。俺は名を言って置こう。雨月弦之丞という者だ。伊賀者でも甲賀者でもない、俺の流儀は雨月流だと承知して貰い度い、ハハハ、少々手荒い流儀さ」

「雨月流？ で、そなた唐津屋の者か！」

「俺は鳥居甲斐守の手の内だ。そうだ、おぬしの名も聞いて置こう」

「千世」

「ウム、覚えて置く。じゃ折角股の傷を養生してくれよ。今度会った時、そこが傷になっていては興味が薄れるからな」

そう云うと、雨月弦之丞は、千世の口惜しそうに睨む目を背中に、お絹を抱いたまま闇の中に姿を消していた。

(未完)

外は、雨が降っていた。夜だった。中庭に面した三部屋つづきのアパートのなかで、すらりとした濃い髪の娘が、しずかに動いていた。

つて、雨に濡れた窓を見つめた。中庭で、足音がしたみたいだった。

彼女は耳をすました。居間から

たしかに、こんどは、はっきりと中庭に人の足音がした。足音は近づいてきた。そのときとつぜん、自動車のヘッドライト

意に、台所の戸が外から中へ開いた。

ほんやりと灯がさしこんでいる台所にはげしく雨が吹きこんだ。

はじめ、彼女は、暖炉のそばの長椅子に腰をかけて膝を抱いていた。うつくしい娘だった。無雑作にアツプにした髪に、白い、小さなりボンを結んでいた。やや厚い血色のよい唇、まるで全部が瞳のような黒い眼だが、いかにもものうげでけだるそうである。うすいだぶだぶのバジャマをつけそれを透して、若い、びちびちした身体が、見えていた。背が高く、よく胸が張った、いきいきとした娘だった。

椅子から立ち上ると、次の部屋のドアを開け、居間を通り抜けて台所に入った。流しのところに立

十二時をうつ陶器時計が聞えた。その音にも耳をかたむけた。なんだか、かすかな、変な気配が感じられた。

が、向うの通りを、さッと照らした。彼女は、両手を頬にあてて足音が聞えた玄関のほうに向きなおった。だが、意外、そのとき、不

娘は何も言わなかった。流しのそばで身じろぎもしなかった。男は、しげしげと彼女を眺めながらゆっくりと戸に門をかけた。そう



雨の夜に娘一人の部屋に逃げ込んだ悪漢の話

朗 一 宅 三

一人の男が飛びこむと、びしやりと戸を閉め、あえぎながら彼女をねめつけた。「動くな。動いたらお陀仏だぞ！」

「……………」

男は、ドアに身体をはりつけて、何かを待つようにしばらく呼吸をしずめていた。何事も起らなかった。表の通りを、ときどき車が走りすぎ、ぎらッとヘッドライトが光っては消えた。「声をたてたら、つまらねえことになるぜ」

しながらも聞き耳をたてていた。雨の音がはげしい。屋根を鳴らし空罐をたたいていた。

「こちらへ来て、おかけになりません？」

「なんだって？」

「こちらへ来て、おかけになりませんかと言っただけよ」

「ほう？ 濡れてるんだ」

「誰だって濡れるわこの雨じゃ」

彼女は肩をすぼめたが、相手は咆えた。

「ふざけるねえ！」

ふいに、彼女は、居間の中に駆けこみ、サフラン色の、やわらかい光を投げている灯のそばへ寄った。

ノドの中で、低い声を発しながら、男は、すばやく床を踏んで彼女をつかまえた。しずくが垂れている、びしょ濡れの顔を彼女の顔に近づけた。その指は、彼女の腕に食いこんでいた。ぼたぼたと髪から滴り落ち、服は破れ、泥がつ

き、骨まで濡れていた。

彼の眼は、やわらいだ。かすかにうなずき、そっと手を女の腕にそって下げると、ぎゅっと腰をつかんだ。腰をなで、お尻のほうへ動かしした。彼女の唇が、なかば開いた。

用心ぶかそうな男の声だった。

「ひとりかい？」

返事はなかった。

「ふん、——俺が誰だろうといいさ。なにもかにも構うこっちゃねえ。お前みてえな赤ちゃん、独りで、ここに居るたア。色男が来て抱いてくれるのを待ってるたアな」

彼女は、何も言わず、びくとも動かなかった。それが、男をいらさせたらしかった。とつせん彼女を自分のほうに引き寄せた。かた肥りの身体が、ぐつと締められ、背中が弓なりに曲り、乳房が彼のほうにそびえ立った。女を抱きしめていたが、あきら

かに女ばかりに気をとられてはいなかった。たえず、あたりに注意をしている気配が感じられた。外では何の物音もしなかった。ただ同じリズムの、ひっきりなしの雨が聞えるばかり。

若い男だった。疑りぶかそうに彼女をながめ、じいっと赤い唇に見入った。

「オーケイ」

自分を安心さすように呟くと、顔をかがめて、彼女の唇を味わった。ゆっくりと口を動かし、次に荒々しくキスした。すると、彼女の腕が上って、彼の首にまきついた。彼の指は、パジャマの下肉をしっかりと掴んでいた。

「畜生！ なんて真似しやがるんだ？」

女を突き放し、ふかい息を吐きながら、げんな顔をして疑いぶかく彼女を眺めた。

「俺ア、今夜人をバラしたんだ」彼は大きな声をだした。「追われ

ているんだ。ポリ公どもが俺を追ってるんだ」
じろりと娘をにらんだが、反応はなかった。
「ラジオで聞いたろう。賞金がか



けられてるんだ。ワナにかけよう
ってのかい、俺を、え、おい？」

娘は、だまりつつけている。

「色仕掛けてやつで——こっそり
電話しようってんかい？ そうだ
ろう？」

「あんたのことなんか、知らない
わ」

「白ばくれるねえ」

男は、いそいで室内を見まわし
せかせかと電話器のところへ行く
と、壁から電線を引きちぎった。

「これならいいだろう」

吐きだすように言った。

「なにか御用はありません？」

「な、なにを企んでやがるんだ？」

「なんにも」

彼の声は、いかにも彼女を蔑ん
だ調子になった。

「ふん、このアマ、虫も殺さぬツ
ラしてやがって」ばちんと指を鳴
らし、彼女のからだを突ついた。
「これで、たぶらかそうたって、
そうは行かないぜ。とんだ芸当だ

どうしようというんだ？」

「これから寝るだけよ」

「そんなこと、言ってるんじゃない
え！」

乱暴な、あざけるように言った
が、一抹の不安がこもっていた。

「お前の色仕掛のことを言ってる
んだ。わかってるだろう、パンス
ケ」

彼は、彼女のそばに近寄った。

「俺にや、ちゃんと、解ってるん
だ。ちゃんと嗅いでいるんだよ。

聞えるかい、おい？ はっきり言
ってやろうか？」

彼女は苦笑いをして向うを向き
椅子のところへ行って腰をおろし
しずかに脚を組んだ。白い布が、

まるい太ももをくつきりと表わし
びったりとパジャマが身について
何も着ていないように身体を浮か
ばせた。

男は、それを睨みつけ、唇をな
めた。そのとき、彼の後方で一台
の自動車が停まった気配がした。

息を殺し、じいっと、耳をたて
た。

「なにか用がありましたら？」

ふいに、彼女が、おなじことを
言った。

「だまれ！」彼はどぎまぎし、彼
女に身体を曲げてのぞきこんだ。

「誰かと一緒に住んでいるんだろ
う？ やがて、そいつが戻って来
るんだらう？ そうだらう、おい
？」

「あたし、独りよ。ほんと」

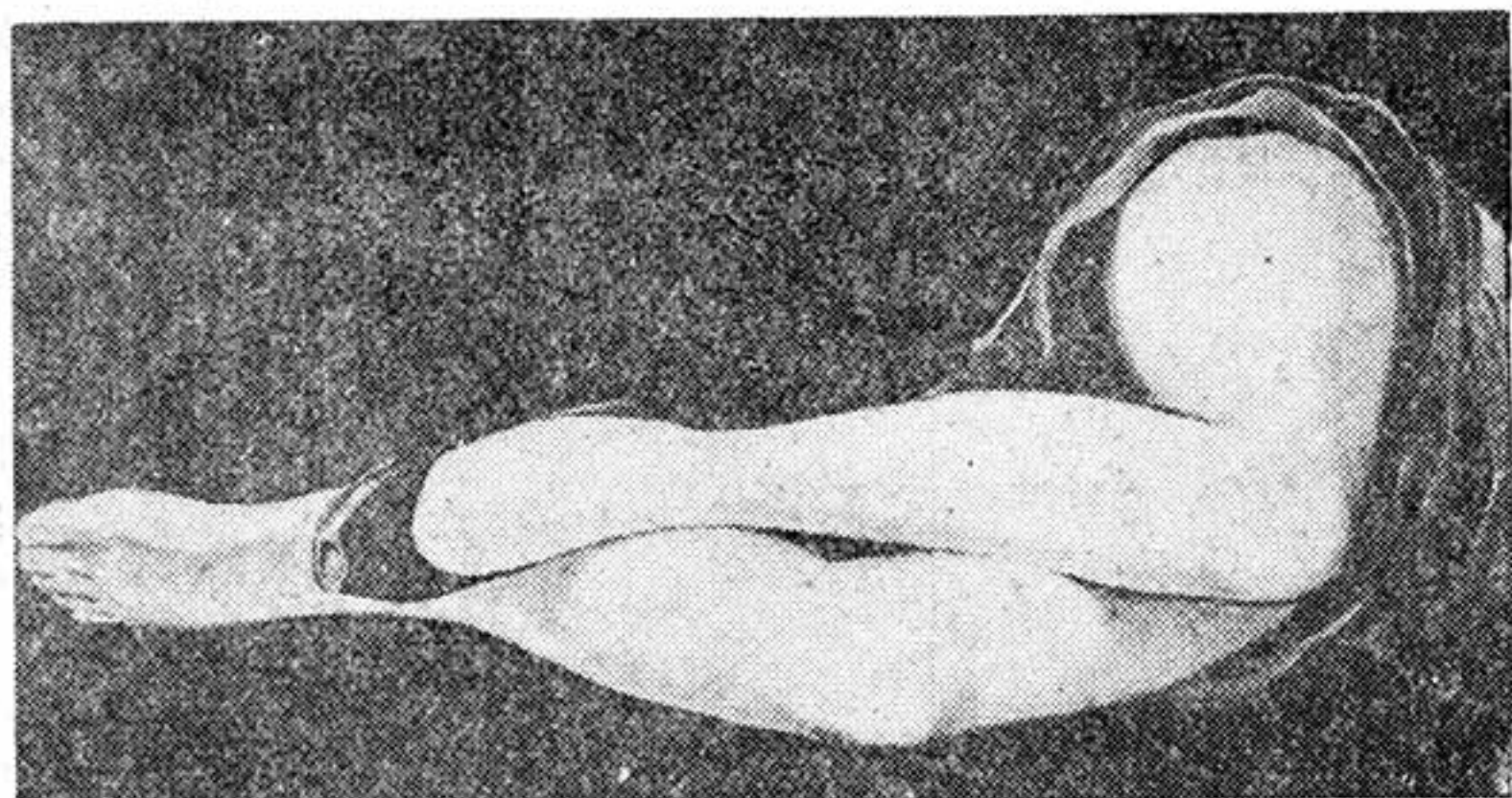
「俺ア、こいつを持っているんだ
ぜ。ほら、見ろ。こいつを、お前
に使わねえと思ったら御見当ちげ
えだぞ」

腰のあたりからピストルを取り
出してひけらかした。

「こいつで人を殺したんだ。二匹
やったかも知れん。下水の中に射
ちこんだ。聞いているのかい？」

「そんなこと面白くないわ。つま
んない」

彼は、すこし離れたテーブルの



上にピストルを置き、はじめて、
かすかに微笑みながら、戻ってき
た。娘をつかむと、ぎゅうと抱き
あげ、自分のほうに引き立てた。
彼女の唇が開いた。

「なぜ、止めようとしらないんだい？」

彼女は、かすかに微笑んだ。

彼の声は変わった。半信半疑の調子だった。

「お前、やっぱりパンスケなんだな。インバイめ！」

「ちがいます」

両腕を痛いほど掴んで、はげしく揺すぶった。

「なら、何なんだい、お前は？」

彼女は眼をとじた。

「はじめ言ったとおりよ。独りであるのよ。そのとおりよ、ほんとに独り」

「嘘つけ！」

「そのとおりです」

「なめるな、共同便所め。ごまかすなつてことよ。なんか企んでることは、ちゃんと解ってるんだ。ふん、蓄生め。ひどく濡れちまった。お前も、こんなに、濡れてるか？」

「ええ、濡れてもいいわ」

彼女は身じろぎしながら薄いパジャマをなでた。男は、息をのんだ。

「かまわねえと言うんだな」

その手は、夜着の上から彼女の肌にさわり、あるときは乱暴に、あるときは慎重に、荒々しくそこらをはいまわった。じつとりと額に汗を浮かばせ、かすかに呻く娘に荒い息を吐きかけた。

「どうしてボーイ・フレンドを持たないんだ？」

「持つときもあるわ」

彼は口惜しそうに歯のあいだからしゃべった。

「そろそろ、そいつが、やってくる頃じゃねえのか？」

「誰も来ません」

「じゃ、お前は、お前が思ってることを俺がするもんだと覚悟をきめてるってワケだな」

あらあらしく両手をかけて力よく引き寄せた。

「いい気持よ、強く抱かれると、

ほんとに」

「ちえッ」男は舌打ちしたが、一段と強く抱きしめようとした。

「てえしたタマだ。これでボーイフレンドもねえたア、とんだカマトトだ」

「ほんとよ。まだ疑ってるの。ほんとだってば」

男は、不安そうに部屋を見まわした。

「嘘をついてやあがる！」

男が触ったところが濡れて、パジャマが身体に張り付き、いよいよ、ふつくりと女の曲線が描きだされた。とつぜん、彼は口を重ね彼女はノドの奥で呻いた。もう一度、彼女の腕が、男の首にまきつく。

「ちきしょう！」

また彼女を突き放した。あいかわらず疑いぶかい表情だった。じろじろと頭から足の先まで眼をばわせ、手を肩におくと、ふいに引き寄せて、口いっぱいキスし

た。それから頸筋に、耳に、髪に熱っぽく唇を押しつけた。彼女ははげしく彼にすがりついた。

「ラリイ、愛して。おねがい、愛して」

「誰だ、ラリイって？」

娘は答えなかった。勝手に叫んだ。

「やめないで、ねえ、愛して、愛してよ、ラリイ。ああ、あんたが誰だって構やしない。もう途中で止めないで！」

彼女は、男にかじりつき、いらだたしげに、ぐったりとなった。彼は、いまいましげに女を抱き上げると、す早く寝室のほうへ行こうとした。

「おお、ダーリン、やめないで、ね、やめないで」

そのとき、そのドアが外側からぶつかられて壁のほうに傾き、掛金がこわれた。

二人の警官が、ドッと室内に飛びこんだ。

次号予告

隠密
覚書

(第九話)

怪異蠟人形

次号掲載
乞御期待

作・島本春雄
画・中島喜美



「あいつだ！」
つづいて濡れ単の別な男が二人
部屋の中に駆けこんだ。若い男は
窓にとびついた。
轟然と部屋じゅうが鳴りわたり
なにもかもごっちゃにやって響き
煙り、混乱した。一声だけ、娘の
悲鳴が、その混乱の中をつらぬい
たが、その場にぱったりとたおれ
た。

窓の外、土砂降りにたたかれて
片手でノドをおさえて男が投げつ
けたように転がっていた。血みど
ろのシャツを、まだらに雨が洗っ
ていた。
二度ほど、ふわッと息をして、
死んだ。
「大丈夫ですか、ミス・スローン
？」
一人の警官が、彼女を椅子の上

に抱き起していた。
「たしかに、この辺に追いこんだ
んだが、なかなか見つからなくて
ね。隣の女のひとが、どうも、こ
こで何かが起っているらしいと知
らせてくれたんで。よかった、よ
かった」
「もう大丈夫ですか？」
「奴は死にました」
「ああ」

彼女は、また気を失った。
警官たちは、豪雨の中に照らし
出された死体の処置にとりかかっ
た。
「危いところだったよ。ほんの紙
一重だった」
「まったく、必死に気を張って保
ちこたえていたんだよ、あのあき
盲の娘は」
(了)

前に「振袖小姓捕物控」が映画化され、また、小学生
毎日に連載された作品の映画化「白蠟城の妖鬼」は異
常な好評を拍した。ここにまたラジオでおなじみの風
「雲こだま城」が映画化されようとしているとき、鬼
才島本春雄の妖筆はいよいよ冴えて、本誌独占隠密覚
書第九話は佳境に入る！ 次号掲載、御期待下さい！

地

獄

から

殺

しに

来

る

男

眞野 碧川

麗 新・画

1

北海道網走刑務所——私が、日本のさいはてのこの監獄へ、教誨師として赴任して来てから、もう、かれこれ三年になる。

この刑務所の沿革を調べてみると、昔は、ここには多く長期刑の兇悪犯が収容されていて、そのためか在監中の事故が少なくなく、集団脱獄などしばしばあったことが記録に誌されているが、戦後は内地の刑務所と同様、短期刑の軽い懲役囚も沢山収監されており、また行刑が、民主化されて来たためもあってか、脱獄をくわだてる者などほとんどなかった。私がここに勤めていた三年の間にも、脱獄事故はわずかに二件しかない。

そしてその一つというのが、怪奇的というか、幻想的というか、いかにも北海の果ての監獄に起った事件らしい雰囲気のものなのである。

そう、はっきりと時日を憶えている。去年



の十月二十三日。

その日の朝、私は、役所（刑務所）に出勤するとまもなく、懲戒房の倉房看守を通じて同監房に収容中の日立景吾という受刑者から面会の申込を受けた。

「重大な事で至急に江原先生にお話し申しあげたい」

というのである。

この刑務所にも、教務課長以下四人の教諭師がいるが、この日立景吾という男は、入監当初、私が面接して、教諭上の調べをした者で、年令三十一才、顔の蒼白い、痩せ形のなかなかの好男子。性格はひどく内攻性らしい様子だった。

犯行当時は、釧路市のある銀行の貸付主任を勤めていたが、その銀行の得意先だった独身の女歯科医に迷い、そのために公金横領、公文書偽造、詐欺等の罪を犯して捕えられ、懲役三年の刑を受けていた。

網走刑務所は、日本で唯一の農園刑務所と

いわれているだけに、受刑者の大半には、馬、牛、綿羊、豚その他の牧畜作業や、伐木、耕作等の外役作業をさせているのだが、社会で知能的な職業に携っていた者は、印刷関係の作業に従事させている。日立景吾も、入監後ただちに一工場と呼ばれている所内の印刷工場へ配置されたが、つい最近（去年十月当時）何やら事故を起して、懲戒房へ入れられたと聞いている。

さて、私は、日立の面会申し入れを受諾しすぐに教務課まで連れて来るよう懲戒房の看守室へ電話した。

まもなく、受刑番号五八五号日立景吾が、看守に連れられて、教務課の部屋へはいつて来た。なにやら興奮の醒めやらぬ風な面持をしている。

看守が立ち去ると、私は、部屋の一角に板囲いで境した面接所に招き入れた。

「先生、私はゆうべ人を殺して来ました」

日立は、いきなり、突っ立ったまま、そう云った。

私は一瞬愕然とした。なるほど、かれが重

大な用件だというはずである。私は緊張した「殺したって？ 一体、誰を殺したのだ！」

「西成川百代です。いつかも先生に申しあげましたように、私の犯罪の動機をつくった女です」

「バカを云いたまえ。その西成川とかいう女性、社会の……しかも東釧路だかの遠い所にいる人じゃないか」

「そうです。ですから、ゆうべのうちに房を脱け出して、ハイヤーで東釧路へ行き、百代を殺してから、すぐにここへ戻って来たのです」

「……………」

私は啞然として、日立の顔を見た。

網走から東釧路までは、汽車で六時間余もかかる長距離である。いかに自動車で疾走したとはいえ、一夜の中にそんな器用なことができるだろうか——こう疑うのだが、日立の顔は嘘を云ってる顔ではなかった。否、むしろ真剣そのものの表情である。

私はとりあえず、日立をそこに待たしてお

特集 いりてみちくちあ

刑期が終るまでは絶対娑婆に出られない身だ。しかしどうしてもあの女を殺してやるんだ！

き、席を立て、電話で懲戒房担当の看守を呼出し、日立の房である二十二房の窓の状態をすぐに点検してくれるよう頼んだ。

すぐ、返事があった。

「窓枠の鉄棒が一本、完全に切られております」

それは自分の落度ともなるので、おどおどした看守の声だった。

日立の云ったことは、やはり事実だったのだ。

懲戒房の看守から、看守部長へ急報したと見え、中川看守部長が色めきたった顔で教務課へとんで来た。さっそく日立を取り調べたことから、看守室の方へ来させてほしいというのだ。

「わかりました。ですが……」と私は云った。

「日立自身、取調べの前に私にいろいろ話したいことがあるらしいようですから、一応私が聴いた上で、そちらへ連絡します」

看守部長も、教誨師には一目おいている。私の言葉に、かれは黙ってうなずいて、ひきとっていった。

私は面接所に戻ると、日立に云った。「どうして西成川を殺す気になったか、又、

そのほか話したいことがあったら、何ンでも心おきなく話してみたまえ」

「ハイ、先生にだけ聴いていただきたいことがあるので、面会申し込みをしたのですからもちろんお話しいたします」

云って、日立は、私の向いの椅子に腰をおろした。

日立の語るところは、こうであった――

2

日立が、西成川百代に対して、はっきりと殺意をもったのは、その日から七日前の十月十六日、まだ一工場にいたときである。

その日の昼の食事時近い、十時半ごろのこと、日立は、自分の職場の鑄造場で、手廻しの鑄造機をコトンコトンと廻していた。

廻すたびに、鑄口から、細長い脚をつけた鋭角的な活字が、ピョコリピョコリととびでる。日立は、把手を廻しながら、その鑄だされたばかりの熱い活字を、ひよいひよいと片手にうけては、出来くあいをながめて、会心の微笑をもらす。

日立は、この小さな鑄造の機械が好きなのだ。かれのような、比較的刑期の長い中級者（受刑者には、つとめて来た期間の長短によ

って、一級から六級までの階級があり、日立は当時三級であった）は、このような骨の折れる仕事につかなくともよいのだが、進んで担当に願ひ出て、七カ月ほど前の入監以来、ずっと、鑄造場の責任者として働いているのも、この機械への愛着からにはかならなかった。そんな偏執的なところが、かれにはあるのだ。

日立は、活字の脚をボキリと折り捨て、コトンコトンと機械を廻しつづける。

輪転機の音。断裁機の音。文撰場の音。製本場の紙折りの音。この印刷工場は、生き生きと動いていた。

「日立、面会だゾ」

と、声があった。受刑者たちから「グマソ」と綽名されている井村副担当が、ヒゲの濃い大きな顔に、人のよさそうな微笑をうかべながら立っている。

「また、きつと女房だナ。早く行ってやれ」井村副担当がつづけて云った。

「はア……」

日立は、早くもこみあげて来る嬉しさを堪えながら、鑄造機を助手の須田に托すと、工場の戸口でかれを待っている若い看守について、面会所に向った。

井村副担が云ったように、また日立自身も
そう思っていたように、面会者は妻の類子だ
った。

日立は、ちかごろしみじみと妻への強い愛
情を覚える。そして、それは、西成川百代と
のことで苦労させたことを思い、また、彼女
を懲役人の妻にさせてしまったことを考える
と、つくづくと妻への不憫さを感じ、その不
憫さが、そのまま愛情となつて加算されるの
だ。それだけに、毎月一回かならず来る妻の
面会が、かれには何よりの楽しみとなってい
る。

「このごろめつきりお丈夫そうになりました
こと」

日立の顔を見るなり、妻の第一声だ。

「氣もちがおちついたし、それに生活が規則
的だからネ……お前も顔色がだいぶよくなっ
たじゃないか」

北海道生れの女特有に色が白いが、その白
さに紅みがさし、膚にも脂がのつて来たよう
に、思えたからだ。

二人の横の椅子で、面会担当の看守が、紙
の上にペンを走らせている。

——ほくたちの会話を書きとっているのだ
ろうが、コンなつまらないやりとりまで、シ

カツメらしい顔で書いてるのだろうか。

と思ひ、日立はふとおかしくなった。

何を笑っているの？——というふ
うに、妻も眼で笑っている。春風颯蕩とした
雰囲気だったが、

「そうそう、うちの近所の奥さんで、西成川
さんへ歯の治療に通つての方から聞いたンで
すが、あの人、こんど元の東京へ戻るンです
って……」

何げないふうで、妻が云ったことで、日立
は、いままでの和やかさが、一遍にケシ飛ん
だのみか、強い衝撃を感じた。

「西成川が東京へ？……近くか」

「ええ、なんでも、今月の二十三日に立つと
か……」

「そうか……が、そんなことはどうでもいい
ことだ。それより、お前の今の勤め先のぐあ
いは……」

などと日立は、心中のショックにわざと他
事に紛らした。

面会時間はまたたくまに過ぎた。日立は、
妻と別れて工場へ戻りながら、途々、

——百代の奴、ほくがこわくて、内地へ逃
げるにちがいない。内地へ行かせてしまつて
は、もう行方が判らなくなる。その前にひっ

とらえて、八つ裂きにでもしてやりたい。

そんなことを思う。

香具師の用語を借りれば——そう、百代の
だまし方は香具師のそれに勝るとも劣らない
ものだから——タンカハツタリ（弁舌でだま
すこと）ランハツタリ（美服でだますこと）
ヒンハツタリ（札ビラきつてだますこと）の
三拍手で、巧みにかれを信用させておき、し
かも、豊艶そのもののような肉体をエサにし
て、次から次とあらゆる手段、そ
れも自らは法に触れぬような手段
で、かれに莫大な公金を横領させ
て、それを着服したあげくの果て
に、勤め先の銀行にかれの悪事を
密告した西成川百代。そうした彼
女を、日立は、いままでどのくら
い憎んだか知れない。
が、その後ようやく、百代のハ
ツタリにウカウカとだまされた自
分の不明をも恥じるようになり、
氣もちもだいぶおちついて来たの
だが、今、その百代が内地へ去る
と知って、またまた、日立の胸底
にくすぶっていた、彼女への憎悪
の念が燃え上つて来たのだ。

集りてみずくちあ

——そう、たしか今月の二十三日に釧路を立つとか聞いた。あと七日間……それまでに……なにかして百代を殺してやりたい。

イヤ、殺してやるゾ!

日立は、はつきりと殺意を決めた。

3

その日の午後、日立は、石上本担当から、煙突掃除を命ぜられた。

煙突掃除は、工場内でタッタ一つの火を使う作業である。鑄造の役なのだ。が、また、それは「役得」でもあった。

というのは、受刑者でも外役の連中は、看守に引率されて、刑務所の塀外に出られるので、社会の風景にも接することができ、また、異性の姿なども見られるが、戸内作業の者は、入監したら最後放免になるまで、そうした情景にはお目にかかれない。ところが煙突掃除だけは、高い屋根の上から、あこがれの社会の景色を目のあたりに望見することができるからである。

「おい、島、エントツ屋だ。手伝ってくれ」

日立は、ヤスリ場で活字磨きをしている数人の中の一人に、こう声をかけた。

「はいッ……」

いせいよく答えて、島と呼ばれた若者は、びよっこんと立ち上った。

二十一、二、目の覚めるような美少年である。光るような雪白の膚、敏捷そうな、くりっつつぶらな眼、クッキリと鮮やかな桃色の唇が、特に印象的だ。一ト月ほど前、常習スリのヤマ(犯罪)で収容されて来た男だが、日立は、この若者をアニコ(チゴサンというほどの意)のようにして、目をかけて可愛がっている。美貌の魅力もさることながら、日立は入監以来、悪の美にも惹かれて来ている自分を感じている。

日立と島は、鼻、口を手拭でマスクし、ズボンの裾をからげると、井村副担当に裏口のカギを開けてもらって、庭へ出た。

煙突の下に、携えて来た梯子をかけ、二人は、馴れた格好でスルスルと屋根に上る。「どうです、親方、やっぱりシャバはいいですねエ……」

島は片手で煙突ブラシを握り、片手で塀の彼方を指差した。

刑務所の高い石塀越しに、「社会」の風景が展開されていた。

北海道特有の葎葎きの屋根々々。その一つ、二階家の欄干に、紅い布団が干してある。

干物台に、白いカッポを着つけた女が動いている。その下の細い道路を、子どもが二人馳けていく。荷馬車が通る。——「社会」にいて見るならば、何の奇もないそれらの一つが、二人の胸には、実にめずらしく、美しく、ビーンビーンとぶつかって来る。

干物台の女が、クルリとこつちを向いた。

——あッ、百代……

ハッと思ったはずみに、日立は思わず足を踏みすべらした。

「あッ!」

とさけんで、島がひきとめるより速く、日立の軀は屋根から下へ転落した。

「どうした? 日立、親方らしくもないじゃないか」

下で看視役をつとめていた井村担当が、ゆつくりと日立にちかよって来た。

「どこか怪我しやせんか?」

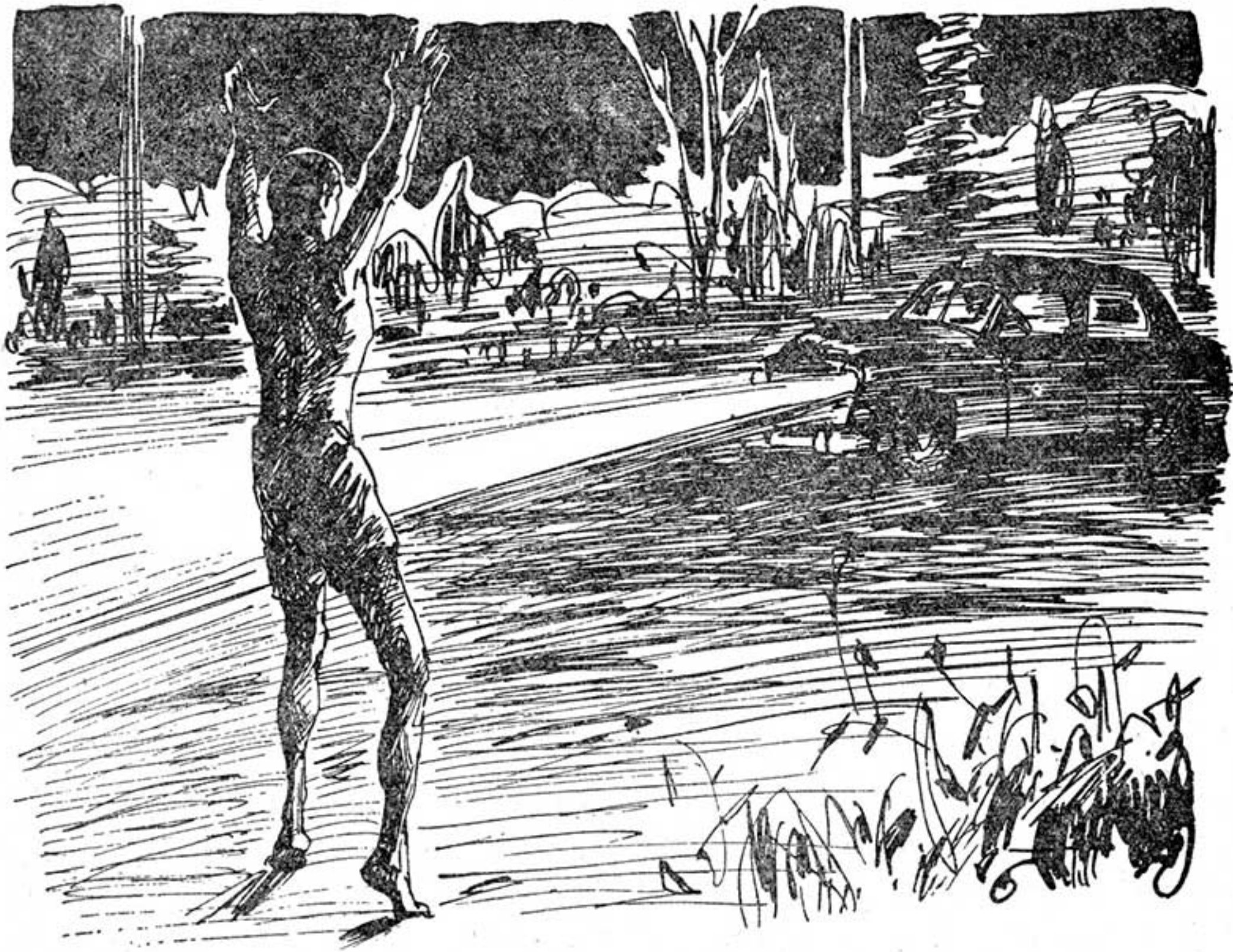
「はア……」

日立はおのが身体を見回した。大腿の外側に、ズボンの上に大きく血がにじんでいた。

「うん、これはすぐ治療せんけりゃいカン」

云うと、井村担当は、サッサと裏口の戸の方へ歩いていく。

「じゃ、行きましょう、親方」



早くもハシゴをおりて来て、日立を見守っていた島が、片手で日立の背を抱え、片方の肩をさしだした。

島の肩につかまって立ち上りながら、日立は、ふと、足もとに一挺の小さなヤスリが落ちてゐるのに気がついた。

——そうだ、いままで忘れていたが、さっき工場で作業中に、ひょいと上衣のポケットにはうりこんでおいたのだが、今、屋根から落ちたときにとびだしたんだらう。

こう思つて、ヤスリを拾い上げ、ふたたびポケットにすべりこませたが、瞬間、日立の頭蓋に、天来のようにピーンと或ることが思

い浮んだ。

——脚の怪我とヤスリ……こいつは、うまくいくと、脱獄にまで事が運べるかも知れないゾ。今のさつき、物干台の女を百代と見たのは、もちろんむなしい幻覚だったのだろうが、その百代の幻覚が、彼女を殺すための脱獄に導いてくれるというのも何かの因縁か。

4

日立は医務室で治療を受けた。切り創ではないので深くはなかったが、創面が大きく、医務の雑役（これも受刑者がつとめてゐる）が、薬を塗布した上に、幅広いホータイをグルグル巻いてくれた。

願つていたとおりである。日立は、そのまま便所にはいると、ポケットのヤスリをとりだして、脚のホータイの内がわに、巧みに隠し入れた。

看守に附添われて、工場へ戻ると、日立は素知らぬ顔で作業をつづけた。立仕事はできないので、鑄造機は助手の須田に任せ、自分はヤスリ場に坐つて、活字磨きである。

まもなく、終業十分前になった。ヤスリ場のヤスリは全部引き上げられて、器具箱におさめられた。

日立が、油雑巾で鑄造機を清拭していると須田が異様な面持でちかよって来た。

「親方、ヤスリが一挺足りないんです。一番小さいやつが——」

「何、ヤスリが足りない？」

日立は顔色をかえた。演技のむずかしいところである。

「冗談じゃない、もう、あと五分で『器具点検』じゃないか」

ええ須田はオドオドとうなずく。ある官庁で機械技師をつとめているとき、御用商人にポケットへ金包みをほうりこまれ、「収賄」で捕われたこの中年男は、技術的の頭脳はすぐれているが、小さな性格なのだ。

「ぼくは今日は、朝から面会だの煙突掃除だの治療だのと、ここにいなかったで分らないが、他の職場からヤスリを借りに来たものはなかったのか？」

「ぼくの知ってるのは、昼間機械場の李さんと植字の横山さんが一挺ずつ借りに来ました、二つとも大きいヤスリで、それもすぐに返しに来ました」

「困ったナ。……仕方がない、二人で手分けして心当りをたずねてみよう」

と云って、日立は、須田を機械場の方へ、

自分は文選場へ走って、そちこちと尋ねて回った。もちろん、ないものが出て来ようわけはなかった。

日立は、担当台の大時計を見上げた。五時四十三分。「器具点検」までに、あと二分を余すのみだ。

担当台では、石上本担当が、すでに鑄造場のただならぬ気配を見てとったらしく、苦りきった表情で、こつちを凝視している。

また、各職場からも、終業の用意をすませた受刑者たちの眼が、一斉に鑄造場に集中している。

日立はすでにカクゴをきめていた。かれは担当台に上り、本担当にヤスリの紛失したことを報告し、陳謝した。

「何ッ、ヤスリが足りぬ？ いまごろになつて何を云うかッ」

受刑者から「オオカミ」とあだ名されている石上本担当は、吠えつくように、日立を叱咤した。

日立にとっては、叱咤されるくらいはカクゴの前だが、本担当にしてみれば、ヤスリの紛失は、重大な問題なのである。それが脱獄の危険を孕んでいることはもとよりだが、ひいては、本担当自身のクビの問題にもかかっている。

る。左遷が目の前に控えているのだ。石上本担当が怒声を挙げるのも無理はなかった。日立は、黙々と担当台をおりた。

そのあと、本担当は、井村副担当と何か相談しあっていたが、結局、鑄造場を除いた他の職場の「器具点検」をすませ、責任者の日立と助手の須田を残して、全員が、いつもより厳重な「検身」の下に、ひとまず舎房に帰されることになった。

列をつくってゾロゾロと工場を出てゆく受刑者の中に、日立は、島の子どもっぽい姿をみとめた。

島は、看視の担当のスキを窺い、日立に向って、ニコツと微笑を送って来た。

日立もすぐ目礼を返した。

——さよなら、島公。これで君ともお別れだ。おそらく永遠にネ。所詮は、男ばかりの世界の中のはかない代償恋愛にすぎないのだが、一ト月ばかり、君はすいぶんぼくの慰めとなってくれた——

との目礼を。

受刑者全員が工場を出ていったあと、残された日立と須田は、一人ずつ担当控室に呼ばれて、中川看守部長、石上本担当、井村副担当の三人から、かわるがわる詰問された。

「ヤスリを隠したのは、何かお前に怨みをもっている者が、お前を陥れるためにやったかまたは、ヤスリを借りていった者が、返すのを忘れてる中に、あんな騒ぎとなってしまうので出しそびれたのか、どちらかだろうが、その疑いがあると思われる者の名を云ってみろ」

というのだ。

「心当りはありません」

日立はそう答えるよりほかなかった。

次に須田が控室に呼ばれ、日立は舎房に帰された。

——これで、脱獄への第一の難関は突破した。と日立はホッと息を吐いた。

5

翌朝、「起床」の号令がかかると間もなく日立の房の鉄扉が、外からサッと開かれた。

「五八五、転房！」

舎房担当がどなった。

日立は手早く夜具布団を畳むと、それを両手で捧げもった形で、房の外に出た。

待っていた看守に連れられて、日立はそのまま、七カ月余を起床して来た一舎をあとにして、長い渡り廊下を幾曲り、懲戒房へ入れ

られた。

階下第二十二房……それがかれの独房だった。

懲戒房といっても、房内はふつうの房と変りはなく、壁に据え付けの洗面台兼用の卓と便器兼用の腰掛、それと折畳みの鉄製寝台が一つ。

では、何が「懲戒」かというと、ここに入れた者は、まず食事を減食させられる。日立は、いままでの五等飯を七等飯に減らされた。約三分の一の減食だ。

も一つは、起きてから寝るまで、寝台の上にじっと正座していなければならぬことである。房内作業などはもちろん許されず、運動にも出されない。これは、受刑者にとって、いかなる虐待にもまさる懲戒となるらしい。

が、日立は堪えた。脱獄、そして殺人という重大な目的があるからである。それをこの房にいる間に、成し遂げなければならぬ。

かれは、終日寝台の上に端座しながら、西成川百代を呪いつづけた。呪いつづけながらいかにしてこの獄を脱け出し、いかにして百代を殺すべきかを、あれこれと思いめぐらした。

房を脱けだすためには、窓の鉄枠をヤスリ

で擦り切らねばならぬ。が、舎房看守が、足音のしないゴム裏の靴で、間断なく廊下を巡り回りながら、視察孔（房の鉄扉に、立って眼の高さの位置にあけられた、郵便受の口くらいの小さな覗き穴）から房内を観察するので、容易にできるものではない。

日立はまず、看守の巡回状態を研究した。

この舎房では、看守は、朝昼夜の三交替になっているが、その一人が大分ルーズ型であることに、まもなく、かれは気がついた。この看守は、深夜などは、一時間おき、ひどいときは二時間おきくらいにしか巡回しない。

そうわかると、日立は脱獄の下準備にとりかかった。このルーズ型の看守が夜間の番となったときに、深夜そっと床から起きだして脚のホータイの下からヤスリをとりだし、鉄枠の一本を擦り切りはじめた。

が、万一、視察孔から覗かれたときを慮って、便器に跨って、用便をしている風を装いながら、手を伸ばして仕事をするのだ。

音のせぬように、ソロリソロリと擦り切るのだから、時間はかかる。完全に一本を切断し終ったのは、二十日の明方近くだった。

翌る二十一日の夜は、巡回のメメな看守の番だったので、その夜は断念し、いよいよ二

十二日。

十月二十二日夜。

今日こそ決行しなければ、永遠に臍を噛まねばならぬ。その夜が明けてしまえば、百代は内地へ逃げてしまうのだ。

その夜八時、「就寝！」の号令がかかると日立は、手早く掛布団の下に枕やら円座（ゴザ）でつくったザブトン。食事の時に床板に敷いて用いる）を入れて、人の臥ている態にくった。

視察孔から廊下のようなすを窺うと、その夜は例のルーズ型看守の番なので、何んの気配もない。

すぐに窓にちかより、窓ガラスを開け、切断してある鉄棒をとりのけると、日立は首尾よく房を脱けだした。

そのまま、かれは、背を屈めながら、広い刑務所の構内を塀へと走った。

牧舎の方から、牛や馬のいななきが聞えて来る。

学生時代に棒高跳びなどもやって、運動神経の発達している日立は、高い石塀もうまくのりこえることができた。

かれは往還へは出ず、山沿いの道をとった。青い囚衣を着ていては、人に訝しまれるので

途中そっくり脱いで草原の中に隠した。

北海道の十月下旬といえば、内地の十二月の氣候だ。日立は寒気に膚を凍らせながら、裸で駆け走って網走の駅近くへ出た。

通りかかった、一台のハイヤーを呼びとめた。

「そこで辻強盗にあつて、身ぐるみ剥がされてしまったんだよ。家まで急いでやってくれたまえ」

「お宅はどこです？」

「東釧路だ。ちょっと遠いが、家で着る物をとって来たら、すぐまたここへ戻って来るんだよ。まだ用が片づかないから」

「そうですか、じゃ、やりましょう。でも、裸のままじゃ、途中でポリさんにあやしまれるし、第一、寒くって仕様がなんでしょう。

これでよかったですらお着なさい。足の方は、ここに毛布があるから、くるまっ तरीやいいでしょう」

運転手が、自分の着ていたジャンパーを脱いで、貸してくれた。

日立が中に乗りこむと、車は釧網線に沿って疾走しだした。

釧路川沿いの百代の医院の前に着いたときは、運転手にきくと、零時を十分ほど過ぎた

ということだった。

日立は、ジャンパーを運転手に返すと、しばらく待っているように命じ、車をおりた。

医院といっても、百代の家は、門構えの堂たる邸宅である。この大きな屋敷に、彼女は一人の看護婦と一人の女中と共に住んでいるのだ。日立は裸体のまま、門内の闇の中にすべりこんだ。

階下は真暗だが、百代の居間である二階の一ト間には、仄明るく灯が点いていた。

かつてしばしばあの部屋には寝泊りしたことがある日立は、勝手知った裏手に廻り、戸外から直ぐに二階へ通ずる外梯子を上った。

ドアの把手を回すと、音もなく開いた。

——百代の奴、誰かの来るのを待ってるのだナ。男に違いない。

日立は、憎悪の念と絡みあつて、真毒の炎をかッと燃え上らせながら、足音を殺して室内に忍びこんだ。とたんにむっとする温気。

百代がいた。彼女は深夜というに、部屋隅の大きな姿見の前に、こちらに背を見せて、ほとんど全裸に近い姿で立っていた。

一年ほど前には、日立を惑わし、酔い痴れさせた、牡丹花のような豊艶な躰。……その甘美さが、いまはかえって、日立の怒りを烈

しくする。

——うぬツ、いまこそその軀をひとくれの骸にしてくれるゾ。

日立はあたりを見廻した。傍の小卓の上に先端の尖った大型のフルーツナイフが置いてあるのに目をとめた。すばやくそれを手にとると、日立はさツと百代の背後に迫った。

鏡面の中に、日立の姿をみとめた百代は、

「あッ……」

驚愕と恐怖の叫びを挙げて、階段の方へ逃げようとする。

日立は、大手をひろげてそれを遮ると、逆手にもったナイフで、百代の身体をやたらむしように突きまくった魂消えるような声を挙げながら、百代がバツタリと倒れた。

その上にのしかるようかうにして、日立は、百代の双の乳房の間を

一突きした。

内地への出立を前にして、看護婦と女中には暇を出したのか、この騒ぎに階下ではコトリとの音もしない。

日立は急いで階下へおりて、湯殿で返り血を洗いおとすと、茶の間に吊るしてあった百代の物らしいヤビロとスラックスを身に着けた。



タンスの小抽斗をさぐると、財布が現れた。その内から五千円の金を摘みだすと、日立は勝手口から戸外に出て、待たしてある自動車へとってかえした。――

6

「百代を殺してしまえば、私もその場で死んでもよかったのです。イヤ、死にたかったのです。それを死なずに戻って来たのは、すべてを先生にお話申しあげ、お詫びしたかったからにはかなりません。人間の妄執というのが、どんなにしつこく、強いものか……この内にいた七カ月の間、先生の教誨を聴いたり、宗教書を読んだりして、一時は妄念を払えたかにみえましたが、結局、やはりダメでした。……」

一切を語りおわって、日立は、力が脱けたように、ぐったりとうなだれた。

私は一応かれを懲戒房に帰すと、すぐに看守長に電話して、日立の殺人状況だけを告げ東釧路の所轄署へ問合わせてもらうよう頼んだ。

まもなく、看守長から返事があった。それによると、西成川百代が昨夜深更、自宅二階の居間で殺害されたことは事実だということ

だった。

そして、致命傷は心臓部の一突き、また、被害者の身体が傷だらけであったこと等、日立の自供どおりだった。

ただ、兇器が違っていた。日立の云うのはフルーツナイフということだったが、所轄署からの返事では普通のナイフの大型のものだということだった。

また、被害者が異様な格好で殺されていたというのだ。眼に大きな黒いマスクをかけ、脚の片方にだけ黒いズボンを穿いていたというのである。

だが、細かいことは、日立が興奮の極に見誤ったのかも知れない。

「とにかく、もう一度日立を呼び出して、調べることになしよう」

こう云って、看守長は電話を切った。

と、私が受話器をおくや、すぐ、またけたましく電話が鳴った。

懲戒房の舎房看守からである。

「日立が房の中で死んでいます」

というのだ。

瞬間、私は、

――やったナ。

と思った。

――百代を殺してしまえば、自分も死にたいと云っていたのだから、舌でも噛み切って自殺したのだナ。

すぐ、私は懲戒房へ駆けつけた。

二十二房は鉄棒が切られているので、転房させた十九房の中で、日立は完全にこときれていた。

口を開いてみると、舌も噛み切っておらずその他自殺らしいようすも見えない。早速、医務室へ死体を運んで検診してもらうと、青酸嚥下による毒死ということだった。

青酸など、房の中では、手に入るはずがない。とすると、かれが、百代の家からさがしだして、隠しもって来たものを嚥下したのだろうという皆の意見だった。

その日の夕方、東釧路署の刑事が、自動車を飛ばして、網走刑務所へやって来た。

被害者西成川百代の鏡台の抽斗から、遺書らしいものが現れたとのことで、それを持参したがた、日立の自供の事情を聴きに来たというのである。

刑事の示した百代の遺書――というよりは手記――には、次のようなことが記してあった。

「私はあの人を怖れる。獄中にいるはずなの

に、日立は、いつも私の部屋の窓から、私のようすを覗きこんでいる。

あの人はきつと私を殺しに来るにちがいない。それも、あの人がいつも私にしてたような、むごい虐め方で……。

ああ怖い。

私があの人を嫌いになったというのも、あの酷い虐めようが厭で厭でたまらなかったからだ。

ところが、嫌っても嫌っても、あの人は私につきまといて来た。

このままでは、きっと私は虐め殺されてしまうと思ったから、あの人の虫歯の治療をしてやるときに、虫歯の窪みに致死量の青酸をつめて、その上をゼラチンで膠着させておいたのだ。一定の時日が経って、ゼラチンが溶ければ、喉に流れこんだ青酸のために、あの人は死んでしまう。そうすれば、誰でも自殺と思うに違いない。

ところが、あの人は私を殺すために、毎夜のように、ようすを窺いにやって来るのだ。

あ、来た来た。

いよいよ私を殺しに来た顔だ。とても、明日内地へ出立するところではない。どこへ逃げて、あの人の生霊は私を追っかけて来る

だろう。

そのくらいなら……あの人のむごい虐め方で殺されるくらいなら、いっそ自分で死んだ方がいい。私は自殺……」

手記はこれでポツンと切れている。

私の話も、これで、とめていいのかも知れない。

が、よく納得のいかない人のために、蛇足ながら、二、三附け加えておこう。

日立が百代を殺したと自供したのは、つまりは、殺したと幻覚したのである。幻覚、幻聴は精神分裂症的の者には、よく現れる徴候で、偏執的な性格の日立は、懲戒房で終日正座している間、百代を呪いつづけ、彼女にたいする殺人方法をあれこれと思いめぐらしているうちに、幻覚と現実とがゴツチャにまじってしまったわけなのだ。

百代の場合も、日立恐怖の念から、かれの姿形を幻覚するようになり、被害妄想に襲われて、ついにみずから命を絶ったのである。

そして、その自殺方法も、日立の加虐を嫌い怖れながら、被虐症でもない彼女が、幻覚のままの形をとり、自分で自分の身体を虐待しつつ、自分の心臓部に、ナイフを突き刺し

た。

眼の上の黒いマスクと片方の脚に穿いた黒ズボンで、男性つまり日立の姿を象どり、また、乳房のあたりや裸の方の脚は女性つまり自分自身の姿と見て、それを鏡面に映しながら、他殺の形で自殺した。一人二役を演じたわけだ。

(文章構成上、固有名詞が必要だったので、網走刑務所の名を借りたが、この一篇はあくまで小説であることを附記する。かつて作者が網走刑務所取材のために尋ねたとき、同所の北川教育課長から所内を案内してもらった縁もあり、お許しただけと思う。——作者)

産 制 コ ン ド ー ム

— 有 名 品 1 8 種 —

衛生サック (送料共・切手代用可)
(イ) 普及品 (打二〇〇円見本一〇円) ハート
美人赤・サンテックス・小夜衣・アイデアル・
ラポルカ
(ロ) 中級品 (打一七〇円見本一五円) グリ
ンバード・Sボルカ・ハート美人ライフ・Sカ
ツビー
(ハ) 高級品 (打二二〇円見本二〇円) 白雪・
カツビー・ニューグリーンバード・ブラッロ
(ニ) 特級品 (打二七〇円見本二五円) ハート
美人金・イージー・レナウン金織・ブラック
(香料)
(ホ) 特別品 (半打三六〇円見本六〇円) ファイ
ツシユス・シン……見本組合せも一打以上は願
います産制案内・サービス券 (一打一枚) 同封個
人名で送ります……御求めになつて御不満なれ
ば返品に応じます (ハ) 印は事後処理容器付
東京都文京区白山御殿町32の8 都商會

放

浪

の

記

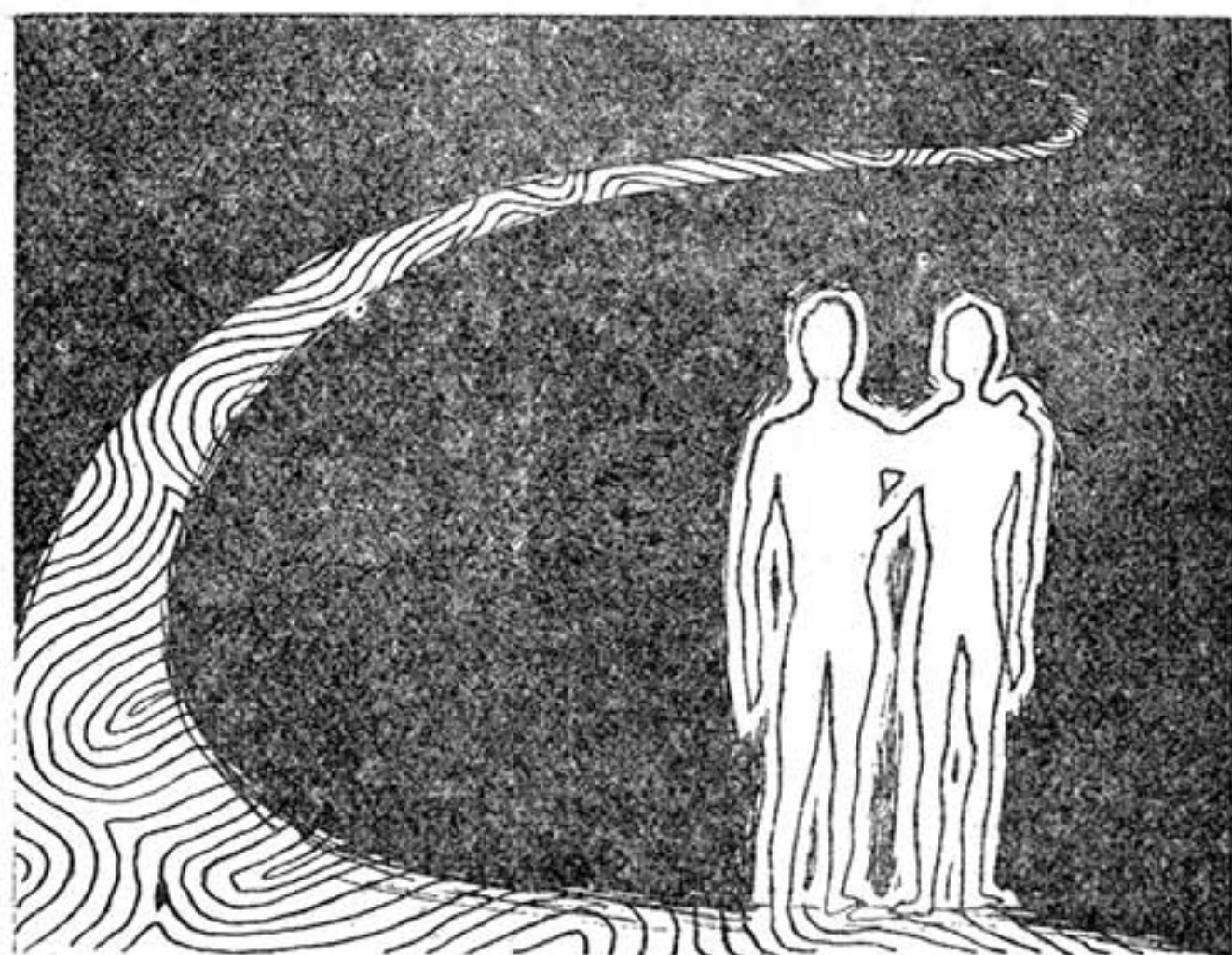
(五)

伏見 和夫

「僕は、かつて僕をこの道に引きこんだ人達を、一方でこよなく愛し、一方では心の底から憎まずにはいられない」

です。考えてみるとこんな話を兄さんにしたのは随分恥かしい、それなのに、是非兄さんに聞いて欲しかった。僕のすべてを兄さんに知ってしてもらえることに、一種の安心感があるのです。でもあんな経験、いわゆる「解剖」の経験というのは案外ある人が多いのではないのでしょうか？そして大部分の人がそれをただ青春の日の一つの出来事として忘れて行く。その内の幾人かが終生逃れることのない、この妖しい世界へと引込まれる契機となっているのです。好奇心からの人もあるでしょうし、又本質的に生れた時からそうした性質の人もあるでしょう。一度踏み込んだらこの世界から容易に脱け切れない、それだけの魔力がこの世界にあるのですね。しかもその欲望はたやすくなし遂げられないのです。

さて前の報告に書き洩らしたのですが、大阪を去る前日。あのタケシと最後？の半日を過しました。同じ宿命に苦しみ、同じ悩みを煩悶し合う者のみを知る、あの通じ合う心の流れに、お互いに浸ったのです。今までお互いに守り続けてきた肉体の交渉も、この時だけはどちらからともなく求め合いました。真実の理解者と別れ去る悲しみが、涙でグシャグシャになりながらも、互いの体の温かみに燃え溶け合っていたのです。「早く帰って結婚しーや」そしてポツリと「幸福な結婚――」



三月十×日 兄さん、いよいよ待ち兼ねていた春ですね。その後の御様子は如何ですか？今日は兄さんへの報告第十一号を送ります。この前の報告で僕の少年の日の、あの悪夢のような経験をお話して、あるいは兄さんに刺激を与えたのではないかと思います。でも僕としては何だかあれでさっぱりしたような気がします。いつも心の底に秘めていたものを瞭け出した、そんな気持ちになれたの

とつぶやくタケシの淋しそうな顔。そんなタケシの言葉が僕を無性に惹きつけてゆくのです。「もう一ヶ月帰るの延ばしー」またそんなことを言い出します、「こんなにゲイ・バーが流行ってるのを見て、それでもあんた帰るんか？ あんたは理性的だ、気が薄いんやな」そういつて僕にしがみつくとタケシです。

そうしてこの血がどくどくと音立てて流れる火の接吻、恍惚としての夢幻の世界にいる二人でした。今こうして故郷の我家にいてもあの日のことが脳裏に去来して、僕は苦しい！とても苦しいのです。どうにもならない事を何度繰返しても、馬鹿らしいと反省もしてみるのですが、やはりこれが僕の命、僕の生甲斐なのだという事を思い知らされるばかりなのです。僕はもうどうしたらいいのです！一体どうして生きて行ったらいいのです？ 若し逢わないでいることが、この世界から逃れられる確かな方法であるというのなら、僕は唇を噛みしめてもう誰とも逢いますまい。

若し、如何様にしてもがこうとも、この世界に生きるより以外に道がない、それだけしか生きられぬと言うのなら、僕は一生誰かを側に置いて暮らしたいと思うのです。——前者のみが今実行し得る唯一の方法———そう思

うのです、たとえ成功は不確実であるとしても。寒いですが日の光はもう春を告げるように暖かです。冬よ早く去れ！ きっと季節の変化と共に、僕の心も変わることでしょう。春の日差しと共に、兄さんと逢える喜びもやってくると思じています。又たよりします、元気でいて下さい。

☐三月×日 兄さん、お便りと写真をありがとう。Tさんのこと、もっと早く兄さんにお知らせしておくよかった。僕もTさんにあした写真を手に入れてくれるように、お金を渡したままになっているのです。Tさん（七月・八月号参照）から、確かに送るがもう少し待ってくれという手紙はもらっています。その内に送ってもらえるだろうと思っていますが、兄さんの方でもそんな事があるとする不安ですね。それにゲイ・バーの佐久良（八月号参照）で会った時にも、すぐ送るから貸してくれといわれて、千円渡したのですがそれもそのままになっています。しかしこれはそのままになっても仕方ないのでしよう？ 一夜を遊んでもらっているし、ビールを御馳走になっていますからね。でもそれならすぐ送るからなどといわないで、もっと気持ちのよい取り方をしてくれたら良いと思っています

す。まあその辺のこと、やっぱり用心してつき合った方がよいでしょうね。

兄さんが送って下さった写真二、三日中に必ずお返しします。みんなよい子ばかり、夢の世界の少年のようにさえ思えます。それにして兄さんが羨しい、あんな可愛い少年たちに慕われているんですからね。あの山口の子、たしか十八才でしたね、あの濃い形のよい眉、丸くてふっくらした唇、とても素晴らしいの一言に尽きます。それから四国の少年、やっと高校二年になったばかりというところが、まるでもぎ立ての水気たっぷりの新鮮な果実の魅力を感じさせますし、殊にあのあどけなさすら残っている、そしてニコツと笑った口もとからのぞく白い健康な歯並びの…… 兄さん！ しかもこれらの美しい可憐な少年たちが、やはりホモ愛者であることが僕をたえようもなくうれしくさせます。今まで探し求めても居ないとさえ思えた、あの理想の少年たちが現実存在する、いやたてえその肉体に触れ得なくとも、存在している事実を知り心が躍るのです。あの少年たちが過去にホモ愛を誰かから教えられた？ とすれば、その誰かが妬ましい思いがします。しかしあの少年たちはそれを経験し、若しくは

経験することを熱望している。かつて僕が少年の日に経験しそれに憑かれたように、この少年たちもそうであり、まだまだたくさんいるに違いありません。このことがどんなに僕のインフェリオリティ・コンプレックスを救ってくれたか、今まで、自分一人であった心の負担があつさり解消されたのです。

でも兄さん、今兄さんが山口なり四国なりへ行く機会があつたとして、そしてG少年なりS少年と逢うことが出来たとして、兄さんはすぐ目的？を遂げることが出来ますか？その勇気がありますか。僕だったら……：そう僕だったらきつと駄目でしょう、平素あれほど少年と燃え合うように愛し合いたいと熱望しながら、話をしてお茶でも一緒に飲む、そんなきれいなことしか出来そうもない。経験談やこの世界の哀しみを語り合い、せいぜい手を握って別れるくらいが落ちでしょうね。しかし二回目は、僕は初めて燃えたいと思うでしょう、全く別人のように積極的に行動するに違いありません。そして……もう離れられなくなってしまうのです。遠くの人とは容易につき合えないし残念ですね、兄さんのところにはずい分多くの人からレターが来ているのですね。山口県に居るものがこの辺に居

ないはずはないでしょう、もし許されるのでしたらその少年たちに紹介して下さい、もし逢えるなら無理しても逢ってみます。兄さんの分の情熱もこめて愛してもみましよう、よかったら紹介して下さいね。

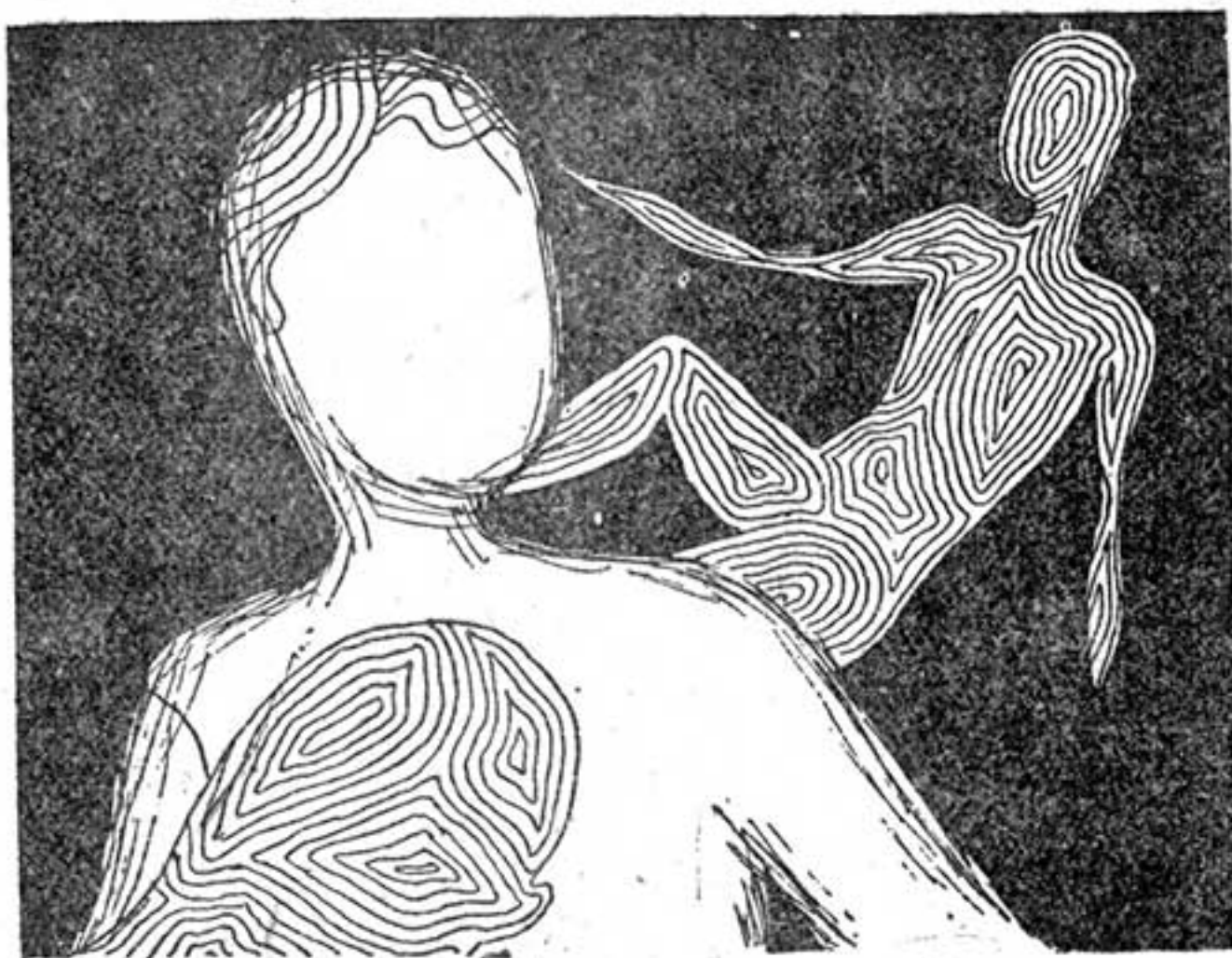
大阪を去って大分たちました、帰った当時のあの胸が押しつぶされるようだった苦しみも、今では少しずつですが薄らいできました。これは故郷の風物に和んだのか？それともあきらめがさせる業なのか。でもこのままでは性欲のない唐変木になり果ててしまうかも知れません。そうそう週刊Y誌が特集で男の同性愛について大きく取り上げています、もう読まれたか知りませんが念のためにお知らせしておきます。十八日にはきつとお逢い出来ると思います、兄さんも楽しみにして待っていて下さいね。

三月二十×日 兄さん、許して下さい。又約束が違つてしまいました。僕のその時の行動を全部兄さんに知っていただくことによつて、どうか僕が初めから兄さんを偽るつもりでなかったこと、心変りしていいことを知っていただきたいと思ひます。こんな訳で今日の報告、第十三号は、兄さんへの釈明という辛いことになってしまいました。

京都での講習は予定の通りに終つたのです。京都の人で文通していた或る人を通じて知り合つた人がいるのです。兄さんの所へ行く前の僅かの時間を利用して、一度逢つてみようと思つたのです。それで教えられていた通り電話で呼び出したのです。河原町の朝日会館の前で落ち合いました、二十五才というそのD君はやせぎすの優しい感じの青年でした。ぶらぶら円山公園から観音さんの方をぶらつきました。D君は何も知らないといひていました。それで色々僕との過去や経験を話してやりました。「君が考へているようにこの世界は美しいものでも楽しいものでもない、同じ異常者という意味では、ホモ愛者はむしろ誇りを持ってよい、でもそれ以上に苦悩という重荷は耐えきれぬほどの責苦でさえあるのだ」と話してやり「君は今ならこの世界から逃れられる、女の人が好きだと思ひそう信じこめば、それでもう平凡な生き方が出来るのだ」と勧めてやつたりしていたのです。それで別れて兄さんを訪ねるつもりでした。兄さんにお借りしていた本も、カバンに入れて持つて来ていたぐらいです。だのに……：ずるずると夕方になつてしまつて、帰りの汽車の時間もあり遂に行けなくなつてしまつたので

す。D君とは四時ごろから二時間ほど、小さい宿で休みました。——この人も僕と同じようになるかも知れない——とその時思ったのです。「誰彼なしにつき合うのは嫌だ」とD君はいうのです、僕も兄さんと最初に逢った時はそうでした、でも今ではほとんど選り好みはしません。この世界で如何に相手を求めることが困難であるかを、身にしみて知ったからです。今では誰とだって、目立って嫌悪を感じない限り、性欲の満足を得るためにのみ一緒に寝ます。これは墮落でしょうか？でもこの人たちはただ性の交渉があるだけで、愛情も心の交流ありません。いわば片輪のつき合いにしか過ぎません。やはり真実の愛とははっきりと区別しているつもりです。在阪八ヶ月のある永い雇歴の間に知り合った多くのホモ愛者、又何も知らない一般の友人たちの内で、僕がとにかくにも心を燃やしたのはただ二人。そうです、兄さんとタケシ。兄さんとのあの抱擁の一瞬、僕の全身はたとえようもない満足感、幸福感にふるえるほどでした。又大阪での最後の二ヶ月、タケシ（七、八月号参照）に注いだあの愛情の不思議さ。あの僅かの期間の奇妙な交際？僕の全心全霊で愛したプラトニック・ラブで

した。今では純愛という言葉にあてはまる心の持ち方が出来ません。兄さん！僕の心はもう純粋ではないのです。もちろん身体も不潔そのものです。僕が若しまだ大阪に居たと



したら、心の純粋さのかけらとてない、そのくせ素晴らしい技巧派になっていたに違いありません。今は相手がいないだけで、技巧派となる術とてありませんし、さりとして失ってしまった純粋さも、清潔そのものの肉体も帰

っては来ません。いや、そうじゃない。僕には初めから貞操感も潔癖感もなかったというのがほんとうかも知れません。このD君もこのまま行けば、果てしない迷路をさまよい歩いて来た、僕のようにすべてを失った男になるのだと思えるのです。

僕は今では、かつて僕をこの道に引きこみ、交渉を持った人たちすべてを、一方でこよなく愛し、その一方では心の底からの憎しみを投げつけずにはいられないのです。このD君だって決してその例外ではないだろう？いや、この人は必ず僕を限りなく憎み怨むに違いないのです、そのくせ一生忘れることの出来ない愛情を抱きながら……。

こんなことで、京都の雅びた風景に新らしい思い出が又加わり、その結果として兄さんを失望させてしまうことになってしまいました。でも許して下さいね、僕の悲しい性がさせる放浪。さまよえる小羊であることを兄さんは知っていて下さいますね。来月は八日ごろ講習がある予定ですので、その時は必ずお逢い出来ると思います。一段と春めいてきた京都にくらべて、故郷の町は忘れられたように、いつまでも冬が押しかぶさっている感じで、冷たい風が無慈悲に吹いています。でも

もうこれもあと二、三日もすれば……頑固な冬もやがてはうれしい春と替わることでしよう。兄さんの御元気な姿に接する日を楽しみにしています

弟より

三月二十×日 兄さん御免なさいね、やっぱりあの日は待っていられたんですね。入れば違いに兄さんからのお手紙を受取って、兄さんの淋しそうな姿を思い、手紙だってもっと書き方があったのにと、ほんとに心から済まなく思います。それなのに兄さんは、僕が体

でもこわしているんじゃないかと心配さえて下さっている。兄さんのその温かさが優しい心が僕を兄さんに魅きつけてしまうのです。兄さんが御心配下さっている家の商売の方も、まあまあらしいです。親父が実権を握っているの、僕には一体どうなっているのか見当もつきませんが、お義理にももうかっているとはいえないようです。でもいずれにしても僕は元気一杯で働いていますから安心して下さい。兄さんが僕の田舎へ来ること、もうしばらく待って下さいませんか。それまでに兄さんに逢って話しておかねばならないことがあるのです。手紙ではどうしても書けません、僕が逢いに行くまでとにかく待って下さいね。それに京都あたりは春のきざしも

伝えられているのに、この町はまだ粉雪が舞い、北風がつむじを巻いているのです。兄さんの身体にきつと悪いと思います。兄さんの病気がもし悪化でもしたら……僕は一体誰を怨んだらよいのでしょうか。とにかくもうしばらく時期を待って下さいね。

今、春休みで高校二年生になる甥が遊びに来ていますが、でも僕は何も出来ないし、又しないでしょう。

四月×日 兄さん。今日は報告、第十五号です。今月の初め、僕の町は観光祭で町中が賑わい、どうやら春らしくなって来たようです。僕は商売が商売なので、こんな時こそ忙しくて見物どころではありませんでした。祭の終わった今日の街は死んだように静かです、でも暖かい日射しに戸外への誘惑をこらえ兼ね、桜の開花とともにまたどっと人で賑わうのも近いことです。この間K新聞の「実話」に「男ばかりの世界」というのが出ていました。兄さんの世界によく似た実話が語られているので、ひょっとしたら兄さんの文ではないかしら？ と思いながら読みました。あれからの僕はよくいえば平穩無事な毎日。しかし単調で無味乾燥で味けない日を送っています。雑誌などの文通欄への投書を何回となく

考えています。淋しくてたまらないのです。僕の町の近在の同好者を探したいだけなのですがどうでしょう？ 京都や大阪にはあっても、この町にないということは、僕にとっては全然ないということになります。何故なら小さくとも狭くとも、今の僕にとってこの町は僕の唯一の世界、今生きている世界なのですからね。兄さんの方はその後新しい便りがありますか？ それから山口のG、四国のSの二人の少年是非紹介して下さいね、文通だけでもしてみたいと思いますから。

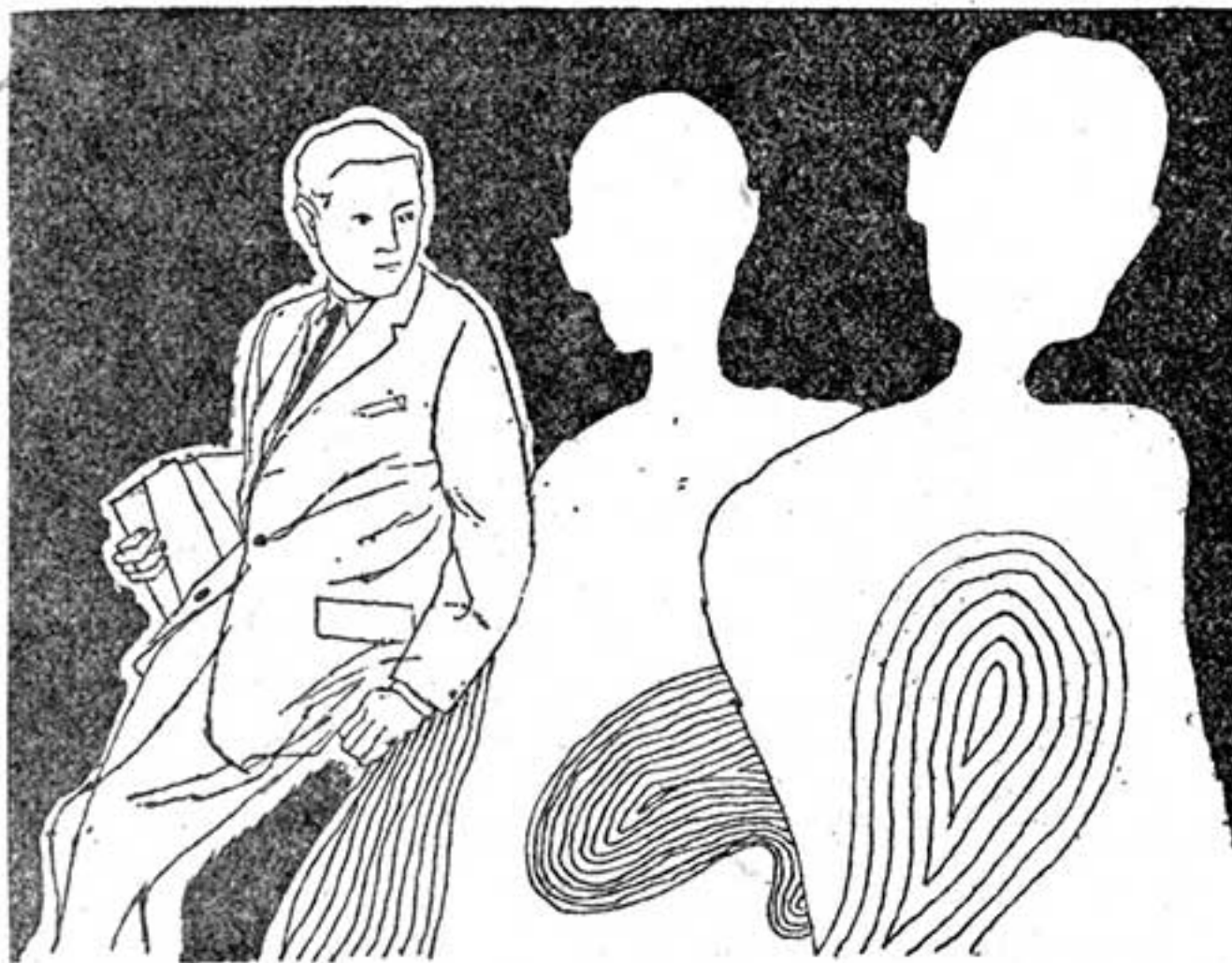
四月二十×日 兄さん、お元気になっています。しゃいますか。僕は相変わらず元気ですが、余り変化がないのでつい御無沙汰してしまいます。連休で雲一つない上天気、誰もが思い思いに生きることの歓びを味わっていることでしょう。

中学時代、小高い丘の斜面で海を見下しながら、草いきれに胸をつかれ、こみ上げてくる不思議な欲望に、背に当る小石の痛さも忘れて、友達と不思議な愛撫の一刻を過したのも、こんな雲一つない青空の春の日でした。今日もその昔と同じように、クローバーの中に頬を埋め、震える胸を大地にくつつけて、

ひたすら或る事を思い願っているのです。僕の
の前には中学生が三人……

「先生、練習しよう」といって学校へ僕を誘
った彼ら。ラッパを吹き、歌を合唱し、校庭
の片隅で一緒にパンを噛った昼時。唯々僕の
願ったのは、あこがれのみを残して何事もな
く無事であることでした。やっと思春期に差
し掛ろうとしている彼らの清らかさ。そのう
なじはあどけなさを残して優しく、その瞳は
つぶらで何の疑いも知らず、血色の濃い頬は
若さと健康を湛えています。あの不思議な魅
力を持った赤い唇、そしてチラリと見える白
い歯。抱きしめてみたい、思いのままに愛撫
してみたい。羞恥に真赤に染まるだろう弾力
のある肌を吸ってみたい。いつもいつも心に
抱きつづけ、幾度も幾度も描いて来たあのこ
とを実行してみたい。若し僕が教師であるこ
との自制を打ち捨てて、彼らをぐっと抱きし
めたら……彼らはきつと驚ろいて身体を固く
するでしょう。何をされるのかと不安で蒼白
になるかも知れません。でもやがて彼らはぐ
ったりとなり、僕に身体をすり寄せてくる？
そのことを思うと僕はたまらなくなってくる
のです。きっと天国へでも昇ったような幸福
感に浸れるでしょう。一度青春の歓喜を、そ

れが暗い吐け口であるにしても、この歓喜を
知った彼らは、きっと僕の身辺から離れよう
とはしないでしょう。教師と教え子というだ
けのつながりでなく、人間としての深いつな
がりが出るのです。こうして、生甲斐ある



生活が出来るとしたら。でも悲しいことにす
べては空想の世界から一步も出ていないので
す、どこまでも僕のひとり相撲にしか過ぎな
いことなのです。悲しいけれどこれが現実の

姿なのです。荒れ狂わんばかりの心を外に、
現実の私は優しく親切な評判のよい一青年
教師でしかあり得ませんでした。意気地がな
いかも知れませんが、これが偽りのない僕な
のです。そして僕が教師の職を抛うって故郷
を去ったのも、こうした内面の葛藤に悩み苦
しんだ揚句に、この苦しみに耐えかねた揚句
に選んだ道であつたのです。この異常？　な
野心と教師としての良心の闘いにもう疲れ果
てた僕の、最後に残された逃避であつたので
す。もちろんこれは最終的に解決されたこと
ではありません、教師という職から放たれる
ことによって、自由な立場からこの少年た
ち、教え子たちに対する自責から解放された
い。このことによって改めて白紙の立場から
少年たちと結びつけられたらという、打算が
かくされています。生徒たちに人気のあつ
た僕です。元教師として愛慕されていた僕に
少年たちは、今までよりもっと伸び伸びと
近付いてくるであろう、そして教師の立場か
ら離れて自由な立場で僕は接してゆけるだろ
う、もちろん愛！　することも可能であらう
と。でも兄さん、こんな僕の計算も、心から
信頼して近付いてくる少年たちを前にして
は、余りにも間違いだらけのものでした。この

少年たちに与えるショックと混乱、たとえそれが一時的のものであるにせよ、僕には到底実行に移すだけの勇気が出てこないのです。そして空しい放浪の日々がつづいているのですが、決してこの夢、少年たちをあらゆる点で愛したいという思いは今でも消えてはいないのです、いや消えるどころか以前にも増してつづてくるのです。でもいつかは実現する、いやさせるつもりです。兄さんに紹介していただいた山口のG君、或いは四国のSちゃんによっても！今のところ文通だけですけれど、兄さんが紹介して下さったせいか僕を信用して、何でも打明けて書いて来ます。その内に逢えるチャンスもきつと出来そうですよ。その時はうんと報告を書いて兄さんを羨しがらせてあげますよ。

そうそう久しぶりに大阪時代の僕に返った話を報告しておかないと………実話物類の雑誌は必らず店頭で目を通しています、P・F欄を見るのです。かつて兄さんと僕が知り合ったのもこの欄があったからですものね、こうして頁の隅から隅までを、丹念に一件毎に調べてみると、ホモ愛者らしい求友の文章に五、六人はぶつかります。やはり東京とか大阪といった大都会に多い、そして九州地区に

割に多いのは伝統？ともいえるのでしようか。もちろん僕はそうした大都市や遠方の人には初めから諦めて、もっぱら近郷近在の人を探します。でも仲々狭い地域ですので少いですし、年令やその他で条件の合わない人もあります。それだからこそ毎月々飽くこともなく探します。今月号を探していた僕はその片隅にそれらしい文句を発見しました。兄さんも御承知のように、ああしたP・F欄は字数が三十字足らずに制限されています。しかも人に知られたくない性向ですので、明らかにホモ愛者であることを書いている人は少いのです。たとえば「三島文学愛好者兄弟のように親しめる清潔な同性の友と文通交際したし青春を真実の友情で楽しいものとしましょう」といったように三島文学愛好というところで自らがそれであることを現わしていたり、「女性嫌いで通っています健康で明朗な十七才から二十才までの可愛い弟を求めます充実した青春を友情の交歓で美しく過ごしましょう」といったように女性嫌いという言葉でそれと分らせたりしています。一般の人には何を意味しているか一寸分らない、しかしこれらの文章を見たホモ愛者には、まるで敏感なアンテナのようにキャッチされるので

すね。この人もそういった表現ではありましたが、僕には一読で万事了解したのです。幸いにして僕の町から一時間足らずの所に住んでいるのでした。早速便りを書いたのですが、その返事も来ないで本人が直接僕の家へ訪ねて来てしまったのです。ちよつと驚きましたけれど、僕だってそれぐらいの事は、時と場合によってはやり兼ねません。従ってこの人の行動を突飛なこととはいえませんが、批判することも出来ません。御承知のように僕の名前は一寸読みにくい字でしよう、それで名前を間違っていたらしく、応待に出た女中が変な人だというし、母は母で一体どうした友達だと心配そうにするし、そうしちよつとした障害が、僕の心にブレーキを掛けてしまったのです。少なからず熱の覚めた冷たい血が流れるのを意識しました。何にしても家ではまずい……これがはつきりしたその時の僕の気持でした。それで家へは大阪時代の友人だと偽って、彼を促して早々に家を飛び出したのです。話をきくと、年令は二十三才だそうで、ずっと東京に居たのですが、町で知り合った三十才ぐらいの人に強制されて交際が始まり、余りそれが烈しくなってきたため周囲に知れそうになり、東京を逃

出して来たのだといいます。親も兄弟もない天涯の孤児だということなど、飲屋で酒を飲みながらいろいろと知りました。時間を大分

過ぎてから彼を連れて家へ帰りました、もう商売の方も終りで電灯がついているのは風呂場だけ、家人が風呂に入っているらしく湯の流れる音がしています。彼を連れて一応僕の室へ行きました。ところが室の中に入った途端に彼は僕に必死でしがみついてくるのです。しっかりと抱きついて離そうともしないのです。僕はまだ起きている家人たちが気になって、その手をほどこうとしました。家では僕のこの性向は知らないのですし、もし分ったらあの昔気質の父の怒り、気の小さい母の嘆きに大変な騒ぎになるでしょう。

「今は駄目！ もう少したってから君の室へ行くから」そういつて彼の手を解こうとする「行っちゃいやだッ何とかして！僕の身体を兄さんのものにさして」哀願するような彼の熱い眸です。「家にばれたら大変じゃないか、な、離せよ」といいながらも、さすがに僕も血がカアッと熱く燃えてきていました。眉を寄せ、悲しそうな顔をする彼が見ていられなくて、僕は素早く電灯を消して室から飛び出したのです。平気な顔で家族のおしゃべ

りの中に入り、彼は客扱いとして客室へ案内させました。

夜の一時半ごろになって皆が寝静まった様子なので、僕はそっと床から抜け出して彼の室へと行ったのです。そして今度はすべてを知り、又僕のすべてを彼に与えてやりました。

翌日、彼が線路の向うに去って行ったのを見送りながら、彼とももう二度とは逢わないだろうと思いましたが、例のごとくちよつと珍らしかっただけで、知ってしまうともう何も残らない、味気ないものでしか過ぎません。こちらから汽車に乗ったりして逢いに行くまでの情熱も湧きそうにもない、面倒臭いことではない。そして彼も二度と姿を現わすこととはあるまいとそう思ったのです。一度で好きになるということは、この世界では稀なのではないでしょうか。ほとんどの人がまるでメロドラマのすれ違いのように、あっさりと一度きりで離れ遠去ってゆくのです。何の未来もなく一度きり、摘み捨てた花のようにあっさりと忘れてしまうのです。ただ一日一夜だけを火のように燃えて、その一瞬の歓楽にだけ酔い痴れて、そして次の日はもう他人のように、まるで何事もなかったかのように別

れてしまうのですね。まるで花火のような愛情の交歓が終れば、また新たな相手を求めて悩み苦しみ探し歩くのです。考えてみれば愚かな宿命かも知れません。これは百分の一の愛情です。文通していても逢うまでが花。あれこれと相手を想像し、その声から容姿、その肉体の隅々までを想像し、それを自由にしたい自由に愛撫したいと思う、この時期が何ともいえない陶醉感が味わえるのです。悲しいホモ愛者の多くが持つ習性。浮気というかも知れませんが、僕は決してそうとばかり思えません。理想の相手を発見するまでの肉体履歴なのです。しかもホモ愛者の理想はとても高いのです、教養もあり男性的な容貌であって、清潔で優しくなどなどとても難しいものです、そう簡単に探し得られるものはありません。そのくせ度々顔を合わせるソドミーでないノーマルな友人たちの中に、そうした理想のタイプに近いものを発見しているのです。ソドミーでない友だけにこれは片思い？ ただ好意と友情を示すだけで、精神的に自らを慰さめるだけのことです。もちろん心の中では幾度もその友を犯しつつづけていることでしょう、そのために悶々として睡眠夜もあるぐらいに……。

ある逞しい婦人への手紙

中野 満 寿 男

その婦人とは、時々電車の中でお会いするのですが、もちろん言葉などかける親しい間柄ではありません。

ただその大柄な逞しい身体を秘かに拝しては、どうしようもない心のうずき、胸の中に涙を流して身もだえするばかりなのです。思い余った私は、その婦人に手紙を書きました。

電車の中でお会いしたとき、混雑にまぎれてそっとその婦人のポケットにしのばせようと思ったのです。

しかし二度、三度、機会をうかがいながら、

とうとう今まで実行することが出来ませんでした。

私は、その手紙を、その婦人、私にとって尊い女神であり女王である方に、差し上げられなかった代りに、「裏窓」に託して私の心の悲しみを晴らしたいのです。

お名前も存じ上げませず、お慕い致しました。よりもう何日になることでしょう。

私は苦しいございます。貴女様の恋の奴隷となり果てて、しかもお言葉一ついただけない身の悲しみ、貴女様のおそば近くお仕え

出来ません不幸に、私は吾と吾身を呪っております。

お笑いにならないでくださいませ。

たしかに貴女様は私よりずいぶんお年が多うございます。

私は二十七歳、貴女様はもう三十路を半ば過ぎておいででございます。でもそれが何でございましょう、世の人はとにかく、私はむしろ、それが嬉しいのでございますもの。『おば様』とお呼びしたいような貴女様の腕の中に、この身を残りなく投げ出してしまいたい心の私なのでございますもの。

でもこんな私の願いも、どうせ貴女様は叶えてはくださらないでございましょう。

それどころか、反対に恐い顔でお怒りになるのでしょうか。

いやです。

そんな恐い顔をなさらないで……。

私の心は悲しみでふさがりそうです。どうかお願いです、お優しいお顔を見せてくださいませ。

そして、その逞しい双のお腕で私をしつかり抱きしめてくださいませ。

貴女様の腕の力で私の体がこわれてしまい

ます程に強く強く抱きしめてくださいませ。

おば様（と呼んでもよろしゅうございましょう）をお慕いして恋の奴隷となりました私の、この心も体も、全部がもやおば様の物でございます。

おば様の所有物です。

焼こうが煮ようがおば様の心のままです。

私は喜んでおば様の足下に身を投げ出します。私は私の総てをおば様に捧げお尽くし致したいのです。それが私のおば様に差し上げる事の出来る唯一の貧しい贈物なのです。そして私の最大の喜びなのでございます。

おば様のお心のままに、生きた人形のように弄ばれて、小娘のように……。そうです。

まるで男の胸に抱かれた小娘のように、おば様の腕の中に身をくねらせて限りない幸福に溺れて私は泣きたいのでございます。

こんな女のような私の願いは、年上の、しかも遅ましいおば様でなければ叶えてくださる事は出来ないでございます。

ああ、いっそ私は、女になりとうございませう。

女でしたら、おば様も心やすく私をおそば近く召し仕えさせてくださるでしょうに。



でもおば様の心一つで私はいつでも女になれるのでございます。おば様さえ強く、男のようなお気持ちになってくださいますならば、私は弱い女になれるのでございます。

おば様の巻いておいでの赤いお腰を私の細い腰に巻いて、私はおば様にかしずきます。

そしておば様の強い腕にねじ伏せられ、遅い足に圧しつぶされながら、おば様のお体に接吻させられるのです。

お腰を巻きつけられた男の私が、男のパンツをはいたおば様の腕の中で人形のように、

息もたえだえに弄ばれて思いきり泣いてみたのでございます。

私の貴いおば様、苦しい哀しい私の心をお察しくださいます。そば近く召し出してくださいます。

おば様の愛の鞭をお与えくださいませ。おば様の足にキッスを贈ります。

お心のままになる奴隷より

強い遅しいおば様へ

あぶちっく・みすてりい

人

差

指

の

妬

み



朝山蜻一

古正英生・画

一

私——という人間について、今は何も云わない事にしておこう。

その私が、秋村大助を訪れていたある朝のことである。彼は楽団のサキソホン奏者で、銀座のキャバレー、カセイクラブに出ていた。夜おそい職業だから、私が尋ねた時は、まだ寢床の中にいた。

「秋村さん、お電話ですよ」

雑談をしていると、アパートの管理人が彼を呼びに来た。

「いまゆきます……」

体格のいい彼は、パジャマの前をはだけたまま出ていったが、間もなく、顔色を変えてもどってきた。

「兼島が死んだんだって！」

「ナニ？ 兼島が？ 誰かに、かつがれたんじゃないのか？」



私は、驚いて云った。

「だって僕たちは、ゆうベクラブがはねてから、兼島と飲んだじゃないか！」

「イヤ、嘘じゃない。店の弥々子から電話なんだ。今朝、弓子の部屋で、突然、死んでしまったんだ。心臓麻痺だそうだ。行ってやらずに、早く帰らなさい……」

「ほんとなら、僕も行こう」

何と云うことだ。半分、嘘のような話だった。ゆうベ私は銀座の飲屋で、三十分ほど兼島と一緒にいた。それから別れたのだが、兼

島はと

ても死にそ

うな男には見え

なかった。

彼は、秋村と同じバン

ドのピアニストだった。ゆ

うベカセイクラブを出たのが、十

二時だった。行きつけの一杯屋で、秋

村と私が兼島と三人で、酒を飲んで別れた

のが、零時四十分頃だった。その時、兼島は

いつもと変わらず、陽気で調子よく、五六時間

後に死ぬようには、とても思えなかった。

「僕は、ここで失礼する……」

兼島と私たちは、同じ方向だったのに、彼

は、そんな事を云った。

「今夜は、別宅かね。結構な身分だ」

秋村が、ひやかした。兼島は独り身だった

が、同じカセイクラブで働いている小堂弓子

と関係があった。それで彼は、自分の部屋へ

帰らず、弓子のアパートへ泊る事が多かった。

「われわれとつきあってたのは、弓子を待つていたんだね？」

私がそう云うと、華奢な兼島は、少しの酒で赧くなった顔を横に振った。

「いやいや、そうじゃない……」

兼島は、おかしそうに、独り笑いをしていた。すると秋村が、また云った。

「といって、これから、御婚約の綾瀬嬢を尋ねるといふのは、どういうものかね？」

「いや、とんでもない！」

少しあわてて兼島は云った。何としても、女にもてる果報な男である。

「いいよ。お前みたいにしあわせな男はいないよ。勝手にするがい……」

秋村は、諦めたように云った。

兼島は、どこへ行くとも遂に云

わずに、私たちと別れた。それから、十二時間とはたっていないなかつた。

私と秋村は、五反田に小堂弓子

幸運児の夢を断つた一夜の惨劇！情痴の果てか？情況は彼女を差して動かない！

特集 あらちく*みすてりい

のアパートを訪れた。彼女は、愛人の突然の死に、起きる元氣もなく、床の上に泣き伏していた。しかし、兼島の死体はなかった。電話を聞いていなかったら、部屋の様子は普段と変りないものだった。だが部屋の中は、確かに異常な空気に閉じこめられていた。

傍らには、室戸弥々子が付添っていた。そして部屋の隅に、見馴れぬ男が坐っていた。「あたしも、あまり突然なので、驚いてしまったわ……」

弥々子は、打ち伏している弓子のそばで云った。その布団へは、おそらく何度となく兼島と二人で寝たことであろう。彼女は、兼島の残り香を嗅ぎ尽そうとでもするように、顔をつけて泣きぬれていた。

「心臓麻痺だって？ 彼は酒に弱いくせに、はしこをするからねえ……」

ゆうべ、私たちと別れてから、さらに飲んだのにちがいがなかった。

「それがねえ……」

と、弥々子は、不満そうに云った。

「すぐ来た医者は、心臓麻痺だって云ったんだけど……今朝になると……」

「ゆうべって、何時ごろなんだ」

秋村が云った。

「今朝の五時ごろだったそうよ……」

「そうか……。話を飛ばさないで、兼島が帰ってきただけのことを、順を追って話してくれないか……」

「そうね。あたしが来たのは、七時ごろだったけれど、それまでのことは、弓子さんから聞いたから……」

弓子は、声こそ出さなかったが、依然として泣きつづけていた。隅の男は、だまってたばこをふかしながら、私たちを、それとなく見守っている様子だった。

二

弥々子は話しつづけた。

「兼島さんが来たのは、五時頃だったそうよ……。ひどく酔ってたらしく、入って来るといきなり、弓子さんの寝ているそばへ来て、横になってしまったんですって。しかし酔っているだけで、格別苦しそうでもなく、酔うと寝るのが癖だから、そのまま弓子さんも寝てしまったんですって……」

ところが、どの位たったか分らなかったけれど、突然、兼島さんは、胸をかきむしって苦しみ出したので、弓子さんは眼が覚めたのですって……。水、水……って叫ぶので、コ

ップへ水を注いで持っていくと、もう兼島さんは水を飲む氣力もなく、弓子さんが、口移しに水を飲ませると、そのまま息が絶えてしまったのだそうすわ……」

それで、すぐ弓子さんは、かかりつけのお医者へ飛んで行ったのですけれど、こんなに朝早くと思つて、時計を見ると、まだ六時過ぎたばかりだったそうよ。だから一時間とちよつと寝ていたんでしようね。お医者は、すぐ来て診察してくれたけれど、もう駄目だったそうで、心臓麻痺だろうって云ったそうよ。でも、今まで兼島さんを診たことがないし、分らないからって云って、変死の届を出したんだそうよ。

ひどいお医者さんね。いくら診たことがないからって、弓子さんはかかりつけじゃないの……。変死の届を出すなんて、自分のヤブを証明してるようなもんだわ……」

そう云って弥々子は、ちらっと隅の男を見た。男は、それが聞こえなかったように、知らん顔をしていた。

「だけど、医者としたら、診断に自信がなかったんだろうねえ」

と、秋村は云った。

「ヘッポコ医者なのよ……。それから弓子さ

特集 いりすみ*くちうあ

んが、あたしの処へ知らせに來たので、すぐ來ただけけれど、弓子さんは、兼島さんに取りますがついて泣いてばかりいるので、あたしはどうしていいかわからなかったのよ。

すると、九時頃だったわ。監察医務院からだっていう自動車が來て、四人ほどの人が入って來ただけけれど、兼島さんを、一と目みると、顔色が変わって、あたしたちに、いろいろな事を聞くのよ。だから、いま云ったような事を話すと、四人は廊下へ出て、ヒソヒソ話をしていたけれど、また入って來て、確かにそれに、まちがいないかって聞くの。嘘なんか云うはずがないじゃありませんかって、あたし腹が立

ったわ。すると、では、仏様は引取って行きますがついて、弓子さんを見ながら、しかし、この方を決して外へ出してはいけません。一人、つけておきますから……と云って、三人で兼島さんを、運んでいってしまったのよ……」

そう云って、また弥々子は、隅の男を睨むように見た。
「外へ出るなって云ったって、好

きな人に死なれて弓子さんは、それどころじゃないわ。実に不親切な人たちね……」

弥々子は、憤慨するのだった。秋村は、その男の方を向いて云った。

「そうなんですか？」

「ええ、その通りです……」

その男は、案外、さっぱりした態度で云った。

「悲しまれている御家族の人に、大変失礼とは思いますが……。それに、あたしたちの役目じゃないのですが、やむを得ないので……」

男は、警察関係の者ではないらしく、おそらく医者なのであろう。言葉も丁寧だし、気さくに云うのだが、といって、同情的な態度でもなかった。

「もうしばらく居させてもらいます。そのうち何とか云ってくるでしょうから……」

「何か、不審な事でもあるのですか？」

秋村は、男に質問の矢を向けた。

「いま私としては、何も云えません。そのうちに結果を知らせてくるでしょうから……」

男は、それ以上は、何も云わないのだった。

兼島の死体はなく、弓子はただ泣きつづけるだけだったし、弥々子はおそらく何も分らないだろうから、秋村としては、これ以上、ど

うする事もできないだろうと思えた。

「どういう点に問題があるのですか？ 話してもらえませんかね」

「そうですねえ。解剖の結果が出ない事には断定できませんから。いまは云う立場にはないのですが……」

「何時ごろ分るんですか？」
男は、時計を見て云った。

「もう、今にも連絡があると思うのですが……」

「ちょっと、こちらへ御足労願えませんか」
弓子や弥々子の前では、話しにくいと思っただのらう。秋村は、男を誘って廊下へ出た。私もついていった。

「どうでしょう。個人的にでも、お話し願えないでしょうか」

「では、私が云ったと云わないでください。いずれははっきりした事を、お聞きになるでしょうから……。実は、死体にシアンの匂いがあったのです……」

「シアン？ 青酸加里ですか？」

秋村は、顔色を変えた。

「多分、シアン化ナトリウムだろうと思いますが……。青化ソーダとも云いますが」

男は、医者らしく平静に云った。秋村は、

返事をしなかった。深い物思いに陥った様子だった。やがて、決心したように、静かに、しかしキッパリと云った。

「自殺でしようか……」

「そうかも知れません……。何か、自殺の動機といったものがありましたか？」

「さあそれは……。僕たちも深いことは分りませんが、あるとは思えませんね……」

「御本人とは、お親しいのですか？」

「ええ、同じ仕事をしてましたからね。ゆうべも、一諸に飲んだほどで、そんな様子は全然ありませんでした……」

今度は、男が黙ってしまった。おそらく、男も秋村も同じ事に思い至っているのではないだろうか。つまり男は、動機がなく自殺でないとするれば、他殺という事になる。ところがそうになると、当然、女、即ち弓子に疑いがかかってくるであろう。また、秋村は、男がそう思って弓子を疑い、見張っているのだと推測しない訳にはいかなかったのだ。

三

「連絡のあるまで、待つより仕方がない訳です……」

やがて、秋村は云った。これ以上、この話

はしたくないといった態度だった。三人は、また部屋に入った。弥々子は私たちを疑わしそうに見た。しかし弥々子も秋村も、何も云わず、沈黙が続いた。

それは、恐るべき疑いだった。青酸が死因だとすると、弥々子のした弓子の話というのは、まだ完全には話されてないのに違いなかった。真実は隠されているのだった。

青化ソーダだったとすれば、それが兼島の体内に入ってから窒息するまでには、数分とかからないはずだ。とすると、兼島は、この部屋へ来てから、弓子の寝ている間に、それをのんだのであろうか。そう考えるより、外にはないであろう。それなら彼に、自殺をする動機がなければならぬ。

では彼に、その動機があっただろうか。それを推測する事は不可能だった。私たちから見た兼島には、自殺を決行させるような原因は何もなかった。それどころか、目下の彼は人生で、最も華やかな時期にあったはずだった。ジャズピアノリストとしての彼は、東京のジャズ界では、五指のうちに入る男だった。収入は多く生活は楽だったし、情婦としては弓子が居た。その上、彼は近く、ある実業家の娘の、綾瀬美枝と結婚する話が決ってい

た。

問題があるとすれば、ここにあったであろう。しかし、弓子については、この問題ではすでに諒解ができていると、兼島は云っていた。また、解決していなかったとしても、これによって、愛人に去られる弓子の方には深刻な悩みがあったであろうが、兼島の方は、自殺まで考えるほど追いつめられた心境にあったとは思えなかった。もっとも、綾瀬美枝は、現在のところ兼島に弓子という女の居る事を知らないはずだった。もしそれが美枝に知れて、婚約を断ったとしたら、兼島には大きな打撃だったろう。しかし、ゆうべの彼には、そんな気配は少しも見られなかった。

私は、その先を、考える気にはならなかった。弓子は私たちの仲間だった。話の分る彼女が兼島の云ったように、彼の結婚を諒解したとしても、女の心が、そう簡単に割切れるものかどうか。彼女の身になれば暗たんたるものがあつたであろう。しかし、といって思ひ余って嫉妬に狂った彼女が兼島を……。

そう考えることは、私には苦しくてできなかった。だが、彼が自殺でないということになると、必然的に彼女は疑われる立場にあつた。私が、それを考えまいと努力したところ

で無駄だった。現実が、私たちを否応なしに新しい現実面に直面させた。

午後一時頃だった。二人の男が、やって来た。それは監察医務院からではなく、警察からだった。彼等は刑事だった。

「警察の者ですが、小堂弓子さんという人、居るでしょうね」

二人の男は、入ってくると、床の上に打伏している弓子に、早くも眼をつけていた。

「居ますが……」

秋村が云った。

「すみませんが、ちょっと警察まで来ていただきたいのですが……」

言葉は丁寧だった。

「理由があるのですか？」

強い言葉で、秋村は云った。

「兼島という男の死因は、青酸加里だと云って来ました。それで、私の方では、すでに兼島さんと小堂さんについて、方々へ問い合わせたのですが、その結果、自殺か他殺か、どちらにしても、小堂さんにお聞きしたい事がありますから、ちょっと来てもらいたんです」

刑事は、事務的な口調で云った。

「なにしろ本人は、ショックを受けて寝てますから……」

と、秋村は続けた。

「出向くのは無理じゃないでしょうかね」

すると刑事は、少し意地を張って云った。

「しかし、それは一層不利になりますよ。最

近、別れ話が二人の間にあったそうですね。

「……」
「こちらは、殺人容疑で来ているのですから……」

「クラブの誰かがしゃべったな、と私は思った。」

「あたしが、兼島を、殺したって云うんです」



か？」

突然、弓子が半身を起して、鋭く叫んだ。髪を乱し、いまは涙も涸れた眼を赤くし、全身に人間とは思えないほどの妖気をたたえていた。

「とにかく来てもらって、話を聞いた上で、話を決めますから……。一応、来て欲しいのですがね……」

刑事は、ねばり強かった。

「それじゃ、なんだって、殺人容疑だなんて云うんです！」

秋村も鋭く叫んだ。

「あたしは何も知りません！ あたしはあの人を、殺しません！」

立ち上って、弓子は叫んだ。

それから弓子が、もはや、完全に狂ったかのように喚き、暴れた事、秋村と刑事との息のつまるような応酬、その惨たんたる情景は私には説明もできないほど、哀れにも愚かしいものであった。

「秋村さん！」

最後に弓子は、秋村の胸に取りすがって云った。

「あたし。……誓って云います。決して兼島を殺したりなんかしません。あたし、あの人

を愛していました。あの人のしあわせを喜びました。あたしは清く、身を引くつもりだったのです……。お願いです。あたしは何もしなかったことを信じてください！ 証明してください！ きつとできますわ。事実がそうだったのですから、まちがいありません！ お願いします……」

秋村も、可哀そうな弓子を、しっかり抱きとめて云った。

「分るよ。君はしない！ 君がするはずはないよ。信ずるよ。いいとも、僕が必ず立証してみせるよ！」

そう云って彼は、弥々子と私に、云うのだった。

「弥々子、ついていってやってくれ！ それから君も、一緒に行ってくれ！ 僕は、ちょっとする事があるんだ。彼女の為にね。僕は行くところがある。今日はクラブを休むからピアノとサックスの代りを頼む！」

その時、さらに弓子の疑いを決定的にするような事が持ち上った。一人の刑事が、無礼にも鏡台の引出の奥から、茶色の封筒を探し出した。その中からは、葉の包みが一つ出て来た。葉包紙には薄い鉛筆で、セイサンカリと仮名で書いてあった。

「これは、あんたのものだね」
刑事は云った。

「でもそれは、何年も前に、一つだけ、ひとからもらったのよ。あたしが死にたいと思った事があったからですわ。でも、忘れていましたわ……」

弓子は抗弁した。しかし、どうする事もできなかった。結局、刑事の要求を入れるより道はなかった。弥々子と私は、弓子についてゆく事にした。刑事の二人は、残ってさらに部屋を調べるといふ。何を思い、何に馳られているのか、秋村は私たちを円タクに乗せると、私が振り返るうちに、ひょう然として、どこかへ立ち去って行った。

四

警察の判断は、こうであった。兼島の死が青化ソーダによるものであり、しかも弓子に云うように、死ぬまえに一時間以上も彼女の部屋に居たのだとすれば、彼の死の原因は、彼女の部屋で起きたものと判定せざるを得ない。自殺か他殺かという事になると、兼島に

特集 いりすみ★ちうぶあ

は自殺の動機がないのに、弓子には動機があり過ぎる。男が情婦のある事を隠して結婚しようとしている時、捨てられる女にしてみれば、殺しても飽きたらぬ思いがするのは当然だろう。おそらく女が男を殺す動機は、ただこれ一つだと云っていいほど決定的な条件であるというのだった。

しかし、弓子は、頑強だった。

「何と云われたって、覚えのない事は云えません。あたしは、絶対にやりません。あの人が結婚するという噂を、はじめて聞いた時は目もくらむほど彼を憎いと思いました。しかし、結局、あたしは、彼の妻になる資格はない女だと思わない訳にはいきませんでした。今まであの人は、あたしを愛してくれました。その間の楽しかった思い出だけで、あたしは満足する気になりました。ほんとです。あたしは、きれいに彼を放してやるつもりでした。決して彼を不しあわせにしてはいけな

いと思っていたのですもの、あたしが彼に薬を飲ますなんて、とんでもない事です……」
刑事の、手を換え品を換えての執拗な訊問にも、弓子は一貫して否定しつづけた。

しかし、刑事の方は承知しなかった。彼女の部屋から出た薬包紙が証拠だと云うのだった。

た。私と弥々子は、ただ黙って、事のなりゆきを見ているより仕方がなかった。秋村が何かの目的があつて動いているのだから、それを当てにし、期待するより道はなかった。

私と弥々子が、カセイクラブにもどつてくると、しばらくして、秋村が、円タクで帰ってきた。彼は一人の中年の品のいい男を連れていた。その男は、なぜか、ひどく顔色が悪く悄然としていた。

「弓子はどうした！」

せき込んで彼は聞いた。

「駄目なんだ。向うでは、彼女の持つ動機を絶対的なものと信じているんだ。それに、発見された薬包紙が物的証拠だと云うんだ。幾つかあつたうちの使い残りにちがいないと云うんだ」

そして私は、詳しく事情を説明した。

「デカなんて、ばかなもんだなあ。そんな古い薬なんか問題にならんじゃないか。重要なのは確かにその動機なんだ。兼島のように、女があるのに別の娘と結婚する男は、世間にはいくらもあるが、女の身になってみれば殺したくなるだろう。だが、弓子ばかりじゃない。もし兼島に、ほかに女が居たとすれば、その女にも動機は同じようにある。そう

だろう？ 僕はふだんから、兼島の生活を知っていたから、当てがあつたんだ。それで、ゆうべ僕たちと別れてから、朝の五時まで兼島の居た場所と、その相手突き止めようとしたのだ」

そう云って、秋村は、連れている男を振りむいた。

「それで僕は、この平安友治君を探し出したんだ。浅草の酒場キユロットのマスターの平安君だ。マスターと云うより、マダムと云つた方がいいかも知れない……」

秋村と平安友治との眼が合うと、平安はニヤリと、女みたいなしぐさをして、笑いかけたが、すぐやめた。

「僕が追及したら、平安君はすでに観念していたとみえて、あっさり自分の行為である事を認めたよ」

それから秋村は、時計をみると、そろそろと立ちあがった。

「僕はいそがしいんだ。もう一つ行く処がある。電話をかけてあるから、結果は、もう出てるかも知れないが、確かめてくる必要があるからね。僕が帰ってくるまで、平安君の相手をしていてくれ。彼が、どういうトリックを使って兼島を殺したか、そのほか彼と兼島

との関係など、その間に聞いてくれ。僕は、すぐもどつてくるから。……それから一緒にみんな警察へ行こう」

そう云つて秋村は、私と平安を残して出て行った。

五

私は平安に、軽い飲物をすすめて話した。た。

「キュロットと云うと、あの氣の方の店でしたね」

「そうですわ……」

平安は、恰幅のいいのに似ず、甲高い声で女のように話した。

「浅草では、あたしのうちが、一番よく知られておりますわ……。いらっしやった事、ありません？」

「二三度ありますよ。どこかで見た顔だと思つていました。兼島とは、その方の関係で……」

私には、容易に想像ができた。立派なからだをしているこの男は、若くて華奢な兼島を女のように愛していたのにちがいない。

「いま考えるとあたし、とんだ事をしてしまいました。その時は、のぼせて氣が狂つて

いたのですわ。憎い憎いと思うあまり、とうとう取り返しのつかない事を、してしまいました……」

悄然と、平安はうなだれるのだった。

「もう、七八年になりますわ。あの子がまだ二十前の頃から、あたしたちは、一緒でしたのよ。あの子の為には、あたしはお金の事でも仕事の面でも、云いつくせないほどの、お世話をしたものですわ。あたし、一生、あの子と暮してゆくつもりでしたわ……。それがあの子ったら、結婚するなんて、云い出すのですもの……」

「兼島に、弓子という女のある事を、知つてますか？」

「存じておりますわ。兩三度、お目にかかった事もあります。そんな事、何とも思いませんわ。遊びに女の子の一人や二人あつたつて、あたし、何とも思いませんが、いい処のお嬢さんと、結婚するなんて、云い出されると、絶望ですもの……」

なるほど、そんなものかと、無粋な私には分つたような分らないような話だった。

「ゆうべは、一時過ぎに來ましたわ。かなり飲んでいましたが、それからまた飲んだんですわ。昔はそうでなかったのですが、近ごろ

は、あの子、飲まないと、そういう氣にならないのですわ。あたしもまた、飲んだあの子が好きなのです……。半分、意識を失つたようになつて、トロンとして寝ているあの子の着物を脱がすと、まっ白な肌が、天津桃のようになつて赤く色づいている……。食べてしまいたいと思うほどですわ。

結婚なんかしないでつて云うと、もう決つてしまつた話だから、駄目だつて云うの……。そして、もう來ないつて云うのよ。今までもそんな事があつても、またもどつて來たんですけれど、ゆうべはあたし、なぜか、ほんともう來なくなるのじゃないかと思つて、氣がでなく、すねて、どうしても云う事をきかないのを、やつとなだめすかしたんですけれど、妙にセンチメンタルになつて……。そのうちに訳が分らなくなつて、それならいっそのこと……と思つて、つい、あんなことをしてしまつたのですわ……」

夢を見ているように、またその時の事を回想するように、眼を細めて平安は話した。

「それで、兼島に、どうしたんですか……。おそらく、あなたの処に居てから、二三時間後に、兼島は死んだ事になるのですが、それを可能にするようなトリックがあつたのでし



よう」

「まあそうですが」

平安は、女のように顔を赧らめて云った。

「それを聞かせてください……」

「でもそんな事……」

羞かしくて、云えませんわ……」

かんじんの話になると、彼は云わないのだった。彼は、女のように羞かしがるという恐れ入った手を持っているのだった。

「秋村さんにも云わなかったのに、あの方はそれを当ててしまったのよ。あの方からお聞きになるといいわ……」

そこへ、秋村は帰ってきた。

「やつぱりそうだったさあ、平安さん。行きましようね。あなたの

代りに、気だてのいい女が一人、罪を着せられようとしてるのだから……。可哀そうですね」

彼は、立ったまま平安に云った。

「行くでしようね」

「ハイ……。もうこの上、罪を作りたくはありませんわ……。覚悟しております」

平安は、静かに云った。

「君は、どこかへ行っていたのだ。分ったってどういう事なんだ。僕には、さっぱり分らないが……」

私が云うと、彼は薄笑いをした。

「それは、車の中で話すよ。少しも早く、弓子を解放してやろうじゃないか……」

そこで三人は、外へ出て円タクを拾った。

六

「僕はいま、大塚の監察医務院へ行ってきたのだ……」

秋村は、事にのると、すぐ話した。

「そこは、東京に起った自殺者や変死者の死体を解剖する処なんだ。そして死因を確認して家族に返す訳だ。もし、犯罪の疑いがあれば、警視庁へ引渡す……。兼島の死は、彼に動機がないから自殺とは思えない。自殺者は

ほとんどの場合が、何らかの形で、遺書に近いものを残すものなんだ。それが彼にはない。自殺でないとすると、どうしても弓子が疑われることになるんだ。

青酸の場合は、からだの中に入れば、忽ち反能を起す。弓子の部屋に一時間も居てから死に、それが青酸によるものだと思えば、加害者を弓子以外には求められない、時間的な限界が、この薬品にはあるんだ。警察が確信的に弓子を追及しているのはこの為だ。その上彼女には重大な動機がある。そして、彼女を加害者とすれば、事件は簡単に解決がつく。

僕だって、そういった条件だけから云えば、弓子が犯人である場合もあり得ると思った。頭から彼女の犯意を否定していた訳ではない。しかし僕は、彼女の人柄を知っているし、今朝の彼女を見て、そう思いたくなかったのだ。それで、できるだけ事をする気になったのだ。それが、うまく成功した訳だ。「君は、前から兼島と平安君の関係を知っていたのかい？」

私は聞いた。

「うん、薄々知っていた。彼と一諸に、キュロットへ行った事がある。その時の彼と、この人との態度を見て、僕は推察したことがあ

る。それで、すぐ行ってみたのだ」

「君自身が認める青酸の時間的限界については、どう考えていたんだ……」

「それについても、ある予想を僕は持っていた。だから僕はやってみる気になったのだ」
「話してくれないか。実は、この人は、君に聞いてくれと云って、話してくれないのだが……」

秋村は、含み笑いをした。

「実は、こと閨房に関する事だからね。ちょっと話にくいのも無理はないさ。およそ毒物というものは、自殺する意志が本人にない以上、承知で毒物を口に入れる奴はいない。とすれば、本人が気がつかないうちに、酒に溶かすとか、食物にまぜるとかしくは駄目だ。ところが、青酸の場合は、呑みくだした直後に人間は死んでしまう。そこで平安君は、この人でなくてはできないトリックを考えだしたのだ。」

今まで、あらゆる殺人にトリックは使われている。時間的なトリックにしろ、機械的なトリックにしろ、いろいろあるが、これについては江戸川乱歩氏のトリック分類表というのがある。その特質は、すべて人間のからだ以外の場所に設定されている事だ。殺される人

間が、自分のからだにトリックを仕掛けられるのを、おめおめと黙って甘受するという事は、あり得ない事だからね……。ところが平安君は、この奇想天外なトリックを発明した初めての人物なんだ。この人は、大分前から兼島との間に最後がきたら、それを使うつもりでいたのだろう」

車に揺られながら、秋村は、手を前に出し人差指を一本だけ延ばしていた。それは、平安の方を向けてはいなかったが、犯人を指差しているように見えた。

「この人はまず、板状の膠を手に入れたのだ。それを湯の中に入れて軟かくする。餅のようになつたのを、手の上でこねて、まんじゅうの中に餡を包むように、シアン化ナトリウムを包み込んでしまったのだ」

彼は、まだ人差指を出していた。しかし、普通に人を指差すようにはなく、九十度回転させて、握った掌が上を向いていた。そして人差指を上向きにしていた。車が、凸凹道にかかると、バウンドして、彼の人差指は、何かを突き刺すように上下した。

「こういう風にして……」

と、彼は意識的に、指を上下させているように見えた。

「平安君は、兼島を愛撫している時、菊座に指を出し入れしていたのだ。菊座と云うのは木々高太郎氏が命名した言葉なんだが、つまり人間の後ろの出口の事だ。また、この世界では、女性的な言葉を使う方がいつも受身とは限らない。相手によって立場は、その度に変る。ゆうべ兼島は、受身になって愛されていたのだ。兼島は酔っていたし、いつもの事だから気にしていなかった。そこで平安君は膠のまんじゅうを、菊座に当て、人差指で挿入した。それから、さらに直腸深く押し込んでしまったという訳だ」

疾走する車と街の騒音にさまたげられながら、私は熱心に秋村の話を聞いていた。

「それで膠の口が開くまで、三時間ちかくかかったのだ……。僕はそれを、いま監察医務院へ行って確かめてきたのだ。解剖の医者は無論、腸を縄のように手繰って、裂いていったのだが、最後を少しばかり残してしまったのだ。そこから溶けかかった膠の塊が発見された。僕は、この眼で見えてきたよ」

そう云って秋村は黙ってしまった。車は急カーブを切って街角を曲った。

「つまらない事を聞くが、監察医務院の医者は、すぐ青酸死だと分ったのに、最初に見た

医者は、なぜ気がつかなかったのだろうか」

「それも、菊座から入れたからだ。口からのめば、直後にも鼻を刺す甘酸っぱい匂いがするが、それがしなかった。時間がたてば、特有の徴候が現われてくる」

「もう一つ、君は弓子の持っていた薬包紙を問題にしていけないが、どういう訳だ」

私は、また愚かしい質問をした。

「紙に包んだ薬なんか、一二年もそのままにしておけば、湿気を吸ってしまうからね。メリケン粉みたいなので、砂糖の代りにも使えないよ……」

その時、車は警察署の前に停った。

次号予告

—アブチック・スリラー—

刹那の密室

★のたうつ女体の決定的瞬間に挑む男！

大原沢司

すんなりと伸びた肢体、なやましくうねる

曲線。その美しいものに苦痛と恥

辱を与えた時の抵抗！ 全

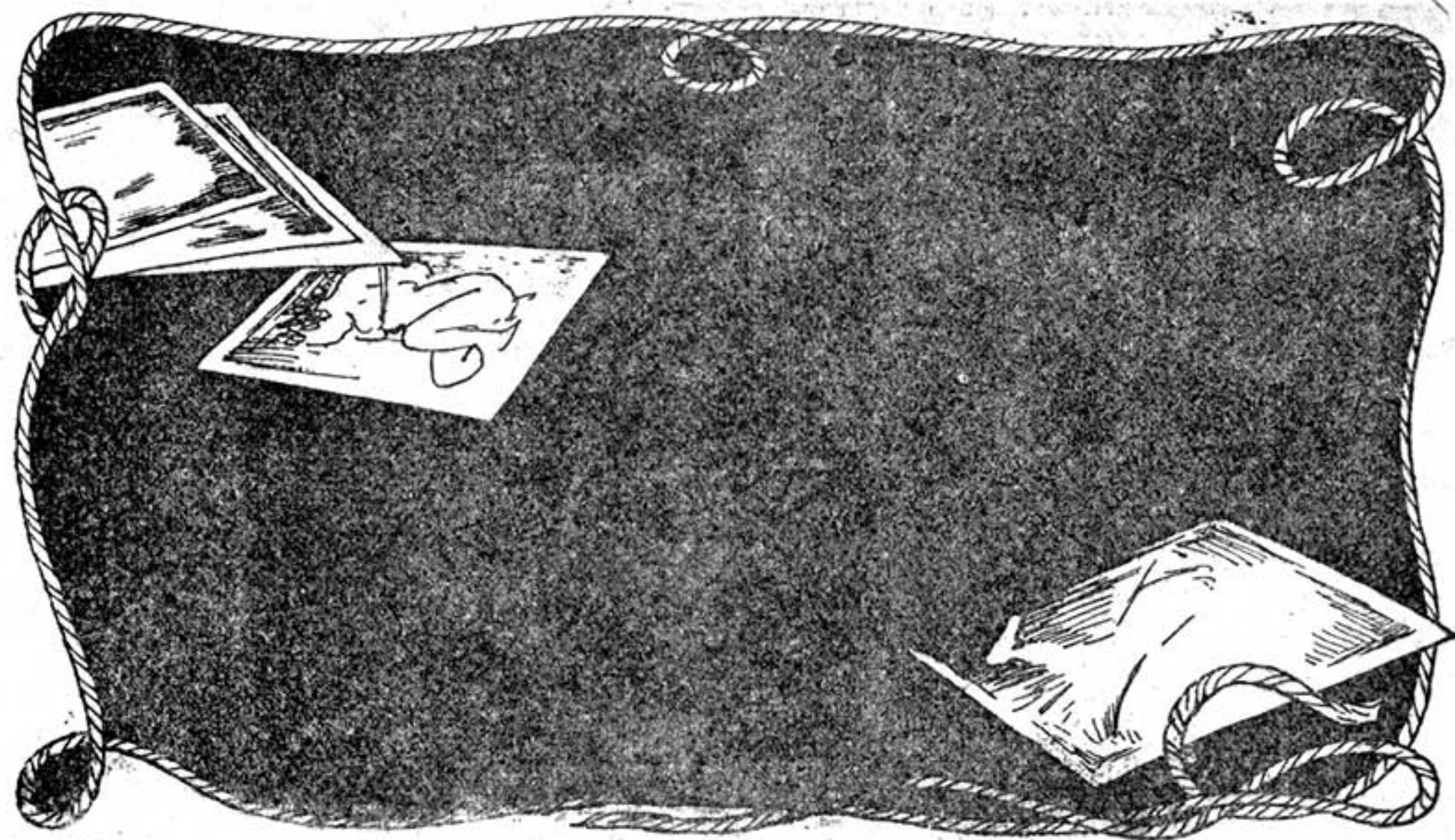
身が歪み屈伸する！ 一瞬

をはずせば地獄の狂態とも

なるう。しかし、ここにこ

そ最高の美があるのだ！





金曜日の戦慄

鳥羽瑛子
絵・表多玲子

ある金曜日の夜

金曜日の夜は外出することにきまっていた。これはもう、かなり以前からの、江間浩平の習慣だった。

グレイのワイシャツ、ぐつとくらしい焦茶の背広、それに黒のソフト、黒靴。ネクタイさえ茶と黒の縞だから、人眼には陰気で奇異にさえ写るのだが、彼には、ひどくピッタリする。つまり江間はこうした服装が、彼の楽しみにしている、金曜日の夜の外出に最もふさわしいものに思われるのだ。

江間はアパートの自分の部屋に鍵をかけると、その鍵をもてあそびながら、階段の方へ歩き出した。ところがその鼻っ先にドカンとドアが明いた。そして、あっけにとられた江間のソフトの端をこするように、若い女の肉付のいい肩がユラリと廊下に出た。

竹岡ルリ子だ。江間の隣室に住んで、有楽町の×劇に出ている、と云っても勿論ワンサ

特集 いりてみ☆ちくちくあ

で、ライン・ダンスにやっとこの春から出るようになったのだが、さすがにのびのある、見事に引緊った姿態だった。ルリ子はしかし、立止った江間を振り返りもせず、鼻唄まじりにその大柄な腰をひねると、悠然と歩き出した。膝下までのトレアドル・パソツに、真紅のセーター、それが二つともピタリと彼女の軀に喰付いて、歩行につれて得も云われぬ曲線を醸し出す。今流行のカリブソ調の長い髪が背に散っているあたりもひどく官能的で、そそるように揺れるのだ。

江間は今月もひそかに×劇に行つて、この竹岡ルリ子の舞台姿を見た。それはヒマワリ色の水着姿の群舞の中の一人だったのだが、彼の眼にはひどく際立って見えた。しかし今ついで間ばかり前を歩いているルリ子の後姿は、圧倒的なボリュームを持って、彼を押しつぶしそうにさえ見えた。肩のふくらみといい、ウエストの切込みといい、奔放でさえある腰の曲線といい、江間には一点の非の打ちどころもないように思われた。つまり、このくらい彼の好みに合った女体も珍しかったのである。

しかし、彼のそんな讃嘆にもかかわらず、ルリ子の方は江間に対して、一向に無頓着だった。と云うよりも、普段からまるでハナもひっかけないと言うような素振り、簡単に無視してしまうのである。

この時もそうだった。江間は、トイレにでも行くらしく廊下を曲ったルリ子の、弾力そのもののような姿態を暫く見送ってから、やっと階段を下りかかった。約束の九時にもう間もなかったのだ。

それから三十分後に江間が姿を見せたのは、新橋に近いある暗い喫茶店のボックスだった。

「やあ、お待たせしました」

ほの暗い喫茶店でも、一層暗そうな片隅のボックスに、彼はそう声をかけた。

「いや、どういたしまして」

答えたのは、まだ三十前後らしいのに、ひどく老けて見える男だった。何時ものようにヨレヨレのレインコートだが、形のつぶれたハンチングのひさしをグッと下げているのが、妙に陰気で油断のならぬ印象を与え兼ねない。相当な色男のくせに、それがどうも崩れて見えるのだ。

例によって、ゆっくり辺りを見廻してから、江間は口を切った。

「どうです？ 何か収穫ありましたか？」

「ええ、まあまあですがね」

相手の黒瀬は氣を持たせるような微笑を浮かべてから、大ぶりの封筒を取り出した。

「どうも、江間さんは眼が高いんで閉口なんです、これなんか、ちよっと変った構図だと思うんですが……」

それは奇怪な絵画と写真だった。江間は充分辺りに氣を配りながら胸にふれる程手元にひきよせて、その奇体な絵と写真に見入った。

絵の方は半紙大で、縛られて宙づりになった若い女の姿が描かれている。時代ものらしく、ガックリと島田の根がくずれて、緋の腰巻一つだが、それも半ばははだけて、雪のように白い太腿が空しく宙を蹴っている。尖った乳房のあたりに二つ三つ、紅色の傷跡さえ生々しく後手に縛られてグッと振り仰いだ顔は苦悶に歪んで髪を噛んでいる。

そしてその下には、まるで幽鬼のような白髪の老婆が、弓の折れを手にしてこの傷ましい生贄を見上げてゐるのだ。

写真の方はグッと現代的だった。だが、趣向には、少しも変りがない。若い人妻らしい女が縛られ、猿ぐつわをされて、責められる情景が、次々に六、七枚の写真になっている。それはまったく、奇怪とか云いようのない代物だったのである。

だが奇怪と云えば、それ等の絵や写真に見入っている江間の表情も至極不思議なものだった。何時もの、底に冷めたさを潜めた、もの憂い表情が一変して、異様にねばっこくギラついている。彼はまるで珍しい玩具を与えられた幼児のように、息をはずませながらその絵画に引きずり込まれている。

場所が夜の、しかもあまり流行りそうになく、客の殆んどない暗い喫茶店だけに、もしその光景を見た人があったら、きっと背筋が凍るような、無気味な戦慄に襲われたに違いない。

奇怪な妄想について

「頂きましょう。いくらです？」

暫くしてから、江間は疲れたようにそう云った。

「そうですねえ」

煙草ばかりふかしていた黒瀬は、その煙の間から、チラと狡猾そうな視線を、江間に投げかけた。

「長いお得意さんだから勉強しても、五千円は頂かないと……」

「五千円？」

「はあ、その写真の方はとにかく、絵の方は肉筆ですからねえ、それ

も名前を云ったら御存知のような画家が、まあアルバイトのように描いたのですからねえ、滅多に手に入る品物じゃないんです」

まだ喋りつづけている黒瀬の前に、江間はふくらんだ紙入れから千円札を五枚抜き取って並べた。

「なるほど、これは肉筆だし、ずい分迫力もあって、精密に描いてある。しかし僕は……」

取引きが済むと、もう見るのも嫌だと云うようにソッポを向いたまま、江間は低い声でつづけた。

「本当のところ、時代物には興味がない。島田鬚や腰巻などには、大した魅惑は覚ええないのだ。やっぱり現代の女、それも若くてピチピチした女でなければ……」

「なるほど」

「しかし、この写真の方はひどい。まるっきりこしらえものだ。八百長です。モデルも悪いが、とにかく形ばかりの絵そら事で、全然迫力と云うものがない」

「ははあ」

「僕はね、生々しい実態が欲しいんだ。或いはそれらしい迫力が欲しいんだ。こんな芝居じみた、ナンセンスなお茶番じゃ仕様がな。僕の部屋には、こんな写真なら山ほどあるんだ」

「なるほど、しかしですねえ」

黒瀬は江間の亢奮した顔を見ながら、ネッチリとつづけた。

「江間さんはもうずっと以前から、あつめておいでだから、そうそうは変わったものがなくてねえ、これで毎週変わったものを手に入れるのもなかなか骨が折れるんです」

「そうだろう。そうに違いない。しかし、僕はモノさえよければ、二

万でも三万でも惜しくない。何時も云っているように、失礼だが金に糸目はつけないから、もっとズバ抜けたのを集めたいんだ」

「なるほど、そうでしょうなあ」

黒瀬は急に卑屈な調子で、合つちを打った。

「そう云えば、この写真のモデルなんか、ただ、デクみたいなものです」

「そう、モデルが悪いんだ」

江間は熱っぽい口調で繰返した。

「こんなブクブクの、だらしなく肥った女じゃしょうがない。もっと引緊った、それでいてのびのびした姿態の、若い女だ。肥ってちゃいけないが、胸も腰もグツと張って、ウエストが外人のようにくびれた女だ。髪の毛は茶色で、長いヤツを肩にたらしめている。眼が大きくてちよつと顎をしゃくつたような、高慢な表情の女だ」

喋りながら、江間は自分があの竹岡ルリ子そっくりの女の像を、口走っていることに気がついた。しかし、そう気付くと、何故か彼は一層ケシかけられるように、異常な執拗さで喋らずにはいられなかったのだ。

「いいかね、その女には、燃えるようなヒマワリ色の水着がよく似合う。そいつを縛るんだ。後手に縛り、逆海老に曲げて足も縛る。紐は登山用の、赤いナイロンのザイルがいい。それを細い鞭で打つんだ。場所は真白いタイルの浴場がいい。真赤な血が流れ出る。水着は半分とれかかる。最後にはその張りきった二つの乳房と乳房の間に、グサリと短刀を突きさす！」

憑かれたようにそこまで口走ってから、江間はパッと正気に戻ったように口をつぐむと、脅えたように辺りを見廻した。

ずっと向うの入口近くにアベックが一組いるだけで、他に客の姿はない。ボーイたちも所在なさそうにテレビの廻りに集って、盛んに大口をあけて笑っている。丁度ジャズのと自慢の時間で、せき立てられるような調子の、けたたましい唄声が流れてくる。

嗜虐的な絵画や写真を持ち歩いて、案外に多いその方面の需要を満たすことで、結構生計をたてている、この黒瀬と云う妙な男の他には誰も江間の奇怪な性癖に気付いた者はないはずだった。

次週の金曜日

その次の金曜日の夜、江間は又外出した。勿論黒瀬に会う為だった。

昼間は実直な銀行員として、上役同僚のウケもいい彼がこの金曜日の夜を唯一の楽しみに生きていると云えば、彼の知人たちは恐らくあつけにとられるに違いない。彼の金曜日の夜の外出は、今日ではもうずい分久しい習慣になつてしまっていた。

江間が、自分の性向の異常さに気付くようになったのはもうずい分以前のことだった。好ましい女を見ると、その女を縛って、自分の思いのままにいたぶることを空想するのだ。その空想にうっとりひとりで切っている時は、実に楽しいのだ。

幸いなことに、根が臆病な江間は、その嗜虐趣味を実行に移すことはなかったが、その代用を、絵画に求めた。ありとあらゆる嗜虐的な絵画を集めて、そのコレクションに

特集 いりすみ*くちあ

とり囲まれて暮すのだ。

この蒐集も困難はあったが、偶然のことから、それを商売にしている黒瀬と知合ってから、彼に依存した。五年前に死んだ親から、かなりの財産をゆずり受けていた彼は、コレクションの費用は惜しまず使うことが出来たのである。つまり、江間は黒瀬にとっては、もっとも有難いお得意先だったのである。その黒瀬に例の喫茶店で会うと、彼は珍しく手ぶらだったが、ニコニコしながらこう云った。

「さあ、出掛けましょう。大変な掘出しものを見つけたんです」

「掘出しもの？」

「まあ見てください。凄いもんですよ。きっと江間さんの御気に入るはずです」

黒瀬の浮き浮きと張切った調子に誘われて、江間はもう胸を躍らせていた。

黒瀬がこんなに云うからには、きっと珍しい逸品が見られるに違いないのだ。

「ちょっと遠いんですがね」

黒瀬はそう云いながら、友人からでも借りて来たらしい古自動車に江間を乗せた。

外は風まじりの冷雨だった。車は遠くににじんだネオンをのぞみながら、奇妙に暗い裏町ばかりを突走った。何処に行くのか、何処を走っているのかわからなかったが、江間にとっては、そんなことはどうでもよかったのだ。

その古めかしいフォードが停ったのは、小じんまりした洋館の前だった。これも古めかしい木造だが、庭はかなり広いらしく、辺りは真暗だった。

黒瀬は鍵で玄関を明けると、板張りだが食堂風になっていて、案外ドッシリした家具の並んでいる部屋に彼を案内した。

「ここは、一体何処かね？」

「ここですか」

黒瀬は上機嫌で、ニヤニヤしながらこたえた。

「主人は少々変わったところのある人ですがね、あなたとはきっとお話が合うでしょうな」

「ふむ、やはりコレクションをやってる人かね？」

「まあそういったところです。今留守ですから、ちょっと待ってください。すぐ帰って来ますからね。そうだ、今夜は冷えますから、待ってる間にブランデーでもやりませんか」

黒瀬はそう云うと、まるで自分の家のような気軽さで、戸棚から大きなブランデー・グラスをとって来て並べた。

「私は酒はからきし駄目ですが、江間さんはイける口でしょう。さあ寒さしのぎに如何です？」



そう云われると、火の気のない部屋はひどく寒かった。江間がグラスを干すと、黒瀬は如才なくまた酒をそそいだ。

その時、すぐ横の柱にかかっている時計が、ダルそうに時を刻んだ。

「十時ですな」

そう云う黒瀬の声が聞えた。だが江間はどうしたとか、ひどい睡魔に襲われて、返事するのも臆劫だった。まるで地の底にでも引きずり込まれるように睡いのだ。

江間は何時の間にか大きな安楽椅子に、深々ともたれこんでしまっていたのである。

その深夜の浴室

何の関連もなく、不意に眼が覚めた。

江間は吃驚して辺りを見廻した。すぐ黒瀬のことが頭に來たが、彼の姿は見えなかった。主人らしい人もいない。たった一人で、眠り込んでしまっていたのだ。

神経質な彼が、他人の家で眠ってしまうことなど、正に稀有のことだった。それにどこか頭の隅が鈍く、重苦しい。

黒瀬やそれから主人と云う人はどうしたのだろうか？



耳をすましたが、辺りはシーンと静まり返って、人気のある様子はない。江間は急に不安を覚えて立ち上ろうとした。その時のことだ。

ボーン、ボーン、ボーン

と、すぐ頭の上で鈍い時計の音がした。ふり仰ぐと針は丁度十二時を指している。

そして、それを見ると同時に、

——十時ですな——

そう云った黒瀬の声が彼の思考の中に甦えつていた。

——ちょうど二時間もの間、眠りつづけたのだろうか？

毎夜寝つきが悪く、催眠薬を常用している彼にしては、不思議なことだった。しかし、彼はさっきのまま、安楽椅子に深々と坐り込んでいるのだ。

江間は落着悪く、モゾモゾと立ち上った。だがその時、自分のワイシャツからズボンの膝にかけて、ひどく、濡れていることに気がついた。何かインクでも飛散ったように、黒く濡れているのだ。

「黒瀬さん！」

江間は思い切って呼んで見たが、勿論返事はなかった。

だが、その代りのように、江間は妙なものに気がついた。ちょうど自分の足元から、何か紐のように赤い長いものが、クネクネとのびているのだ。よく見ると、それは登山用の赤いナイロンのザイルだったのである。

ザイルは江間の足元からこの部屋を横断して、横手のドアの向うにつながっている。江間は何か激しい好奇心にかられると、引きずられるようにそのドアを明けて見た。

其処は小じんまりした洗面所になっていて、脱衣所も兼ねているら

しく、籠が二つばかり転がっている。すぐ眼の前の硝子戸の向うは浴室らしく、電気が煌々とついている。そして、赤いザイルは硝子戸の隙間を通過して、その浴室へとのびているのだ。

相変らず家内は不気味に静まり返っていた。江間は一、二分間躊躇してから、思いきって、その硝子戸に手をかけた。だがその戸が勢いよくすべった途端、彼は我知らず驚愕の叫びをあげていた。

女！ 女がいたのである。ヒマワリ色の水着をつけて、海老のようにそらした臍を縛られた女が——。あの赤いナイロンのザイルは、この真白いタイル張りの浴室までのびて来て、その女の両手を後手に縛り上げていたのである。いや、女と云うより、女の死体と云った方が正確だったろう。彼女は苦悶にねじれた臍を白い浴槽にもたせかけたまま、ミジンも動きはしなかったのである。

江間は硝子戸にしがみついたまま、再び声にならぬ短い叫びをあげた。

黄色い水着、青い華奢なハイヒール、くびれたウェスト、そしてカリブソ調とやらの茶色で長い毛髪、それは正しく、彼のアパートの住人、竹岡ルリ子のものであったからである。

ルリ子は、常日頃彼が讃嘆の眼ざして盗み見た時のように、大きな眼を一杯に見開き、ちよつと顎をしゃくったような高慢な表情のまま死んでいたのである。

江間は、彼女の手や足にいくつもはりついた紅い鞭の傷跡を見た。

それから、半ばはだけてしまった水着と、その豊かな双の乳房の間の無惨な傷！ 鮮血は其処から溢れ出て、白いタイルを染めて流れていた。

つまりそれは、江間が何時も夢に見、妄想に描いていた、理想の嗜

虐図に外ならなかったのである。

江間は激しい驚愕と、同時にクラクラと目まいのするような恍惚感に襲われ、ぼんやり突立っていた。不意に地球の回転が静止したような、不思議な時の流れだった。浴室はこの華麗なパレードをくりひろげながら、物音一つ立てなかったのである。

だがその時、ついに異様な哮咆があがった。江間が、彼自身のワイシャツやズボンにベッタリとついている、先刻の黒く濡れたシミに気がついたのだ。

血！ それは血以外の何ものでもない。返り血！ だとすれば、竹岡ルリ子を殺害したのは、自分だと云うのだろうか？

江間は恐怖にひき吊った瞳を見開いたまま、シリシリと後ずさりした。そして先刻のドアに突当って、静まり返った屋内に、その音が不気味に響き渡ったのを知ると、そのまま無我夢中で走り出していた。

椅子やテーブルに突当りながらやっと玄関に出ると、今度はまるで救いを求めるように両手をあげながら、暗い深夜の見知らぬ街を、転がるように走った。

それでも、網膜にこびりついた、あのヒマワリ色の水着姿の竹岡ルリ子が、赤いザイルをひきずりながら、自分を追ってくるような恐怖に引き裂かれていたのだ。

恐怖の一週間

それから三日間、江間はウロウロと街の中を歩き廻って過した。恐しくてアパートには帰られなかった。

特集 いりすみ★ちくちくあ

もしかしたら、竹岡ルリ子の死体が発見され、アパートのあの部屋に帰って来ているかも知れないのだ。そして、自分は既に殺人容疑者として、指名手配されているかも知れない。江間自身には、直接手を下した覚えは少しもないのだが、あの時の種々の状況を考え合わせて見ると、犯人は自分以外にはあり得ないのだ。

不可思議なことだが、事実はいくまで事実だった。そして、あの殺人の状態が、日頃彼が妄想し、渴仰していたイメージをそのままに実現していることが、彼の疑惑を決定的なものにしていた。

あり得ないことだが、しかし、俺が殺したのかも知れない——。とうとう彼はそう思うようになっていた。

あの時俺は、何故かひどく睡くなった。その朦朧たる精神状態の時に、不意に何等かの理由で竹岡ルリ子があの場所に出現したとしたら——。日頃抱いていたイメージを、現実に行ってしまったのかも知れないではないか——。

それに、自分では自覚がないにしても、ひょっとしたら、夢遊病的な傾向が自分にあったのかも知れない。何故あの場所に、思いもかけぬ竹岡ルリ子が現われたかは、謎だ。この謎は黒瀬に尋ねれば判るかも知れないのだが、彼とはあのまま連絡がなかった。江間は彼との取引の秘密性から、黒瀬には自分の住所は教えていない。勿論彼の住所も知らなかった。彼とは毎週一回金曜日の夜に、例の喫茶店で会えば、それでよかったのだ。つまり黒瀬に会おうと思えば、次の週の金曜日を待つか仕方がないのだ。とにかく江間は、今や自分が無意識に犯してしまった殺人を、信じないわけにはゆかなかった。踊り子の竹岡ルリ子は、彼の呪われた性癖の犠牲になって、その若い命を失ってしまったのだ。

江間は打ちひしがれた表情で、一日中雑踏の中をまぎれて歩いた。一人になることが無性に恐かった。財産も、銀行員としての将来も、すべて御破算だった。待っているのは牢獄か、冷めたい絞首台だけなのだ。

しかし、三日目の夜になって、街に華美なネオンがともる頃になると、彼はすっかり疲れ果ててしまっていた。無縁の雑踏の中を、棄猫のように、ウロウロ歩き廻ることに、耐えられなくなってしまうていた。



何でもいい、欲も徳もなく、落着きが欲しかった。ぐっすり寝られる場所が欲しかった。

それに、この三日間と云うもの、眼を皿のようにして新聞を漁っているのだが、派手に掲載されるはずの、「美貌の踊子殺し」の記事はまだどの新聞にも現われないのだ。

三日経っているのだから、もう死体が発見されそうなものののに、一向にそんな様子は無い。

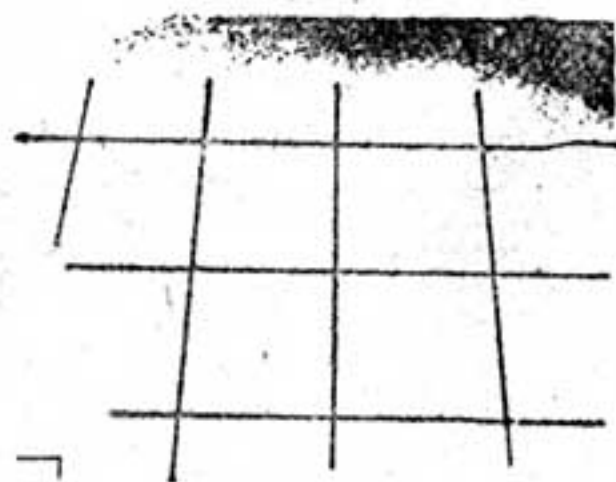
まだ発見されないのだろうか――？

江間はすっかり傷めつけられてしまった脳細胞に、再びあの華麗な死体を思い浮べながら、そう考えた。しかし、そんなことも、もうどうでもよかった。とにかく彼は、その最悪の不安状態から抜け出す為にアパートに帰ることに決めたのだ。逮捕されるなら、それでもいいとさえ思った。どうなったところで、今より悪い状態があるうとは思えなかった。彼は、それ程傷めつけられ、追いつめられていたのである。

警官が張込んでいるかと思われたアパートは、しかし平静で、誰も彼の帰宅をはばむ者はいなかった。江間は三日前と同じ自分の部屋に入り、倒れるように自分のベッドに横になった。何一つ変わったことはない。

江間は躰中の神経を耳に集めて、隣室の気配をうかがった。だが物音一つしない。電気も点かない。何気ない静寂があるだけなのだ。

翌日も、翌々日もアパートは平和だった。あの夜から五日目の夕方、通りかかったアパートの監理人



「え？ ああ、竹岡さんですか？」

た。

に、江間は思
い切って、声をかけて見

中年の監理人はキョトンとした表情で、

「そうですな、そう云えばあの子は暫く見掛けませんな」

それからちよつと顔の表情を崩すと、のんびりつけ加えた。

「なにしろ若いし、踊り子商売だからね、何処かに素敵な恋人か、豪勢なパトロンでも出来たのかも知れんですよ。えーっと、最後に私が見たのは、あれは確か金曜日だったと思いますよ」

江間は急いで、この監理人と別れた。竹岡ルリ子が、金曜日の夜にこの世から居なくなったことは、彼自身が、一番よく知っていたからだ。

それにしても、今になっても彼女の不幸な最後が新聞に出ないのが不思議だった。江間は居たたまれぬ焦燥に襲われると再び街に出た。盛り場をうろつき、何気なく有楽町の×劇の前に出た。

正面の前に、ズラリと並んで足を上げた、ライン・ダンスの大看板が上っている。江間はここで半月ばかり前に、燃えるようなヒマワリ色の水着を着たルリ子を観たのだ。だが、もう彼女はいない。江間は自分の手にかけた美しい女の、哀れな死を葬うようなつもりで切符を買うと、会社帰りらしく、威勢のいい若い男女の群れに押されながらノロノロと劇場の中に入った。

舞台では南国らしい椰子の下で、若い男女が情熱的なデュエットを踊っていた。そしてその背景が後にグッと開ける

と、江間にも聞き覚えのある賑やかなメロデーが流れて来て、赤、黄緑、青、ピンクと、五彩の水着を着た踊子たちが、舞台の上手から下手から、客席の真中から、まるで降って湧いたように躍り出てくるのだ。

江間は殆んど放心したように、その目まぐるしく動く五彩の色の渦に見惚れた。この前の時は、この中にルリ子がいた。しかし、もう彼女はいいないのだ。

それでも彼は、その色の渦がほぐれて、舞台の前部に一直線になって張り出して来た時、無意識に左から三人目に視線を投げた。半月前には、其処に彼女がいたのだ——。

「あっ！」

江間は、悲鳴のように短く叫んだ。相変らず、燃えるようなヒマワリ色の水着の踊子が其処にいた。そして、それは竹岡ルリ子に外ならなかったのである。

ルリ子がいた。生きて、踊っているのだ。大きな瞳も、しゃくれた顎も、彼を悩ませたウエストの曲線も、すべてルリ子のものだった。

しかも右に左に、せわしなく足をあげながら、彼女は江間の驚愕を嘲笑うように、華やかに笑ってさえたのである。

再び金曜日の夜

特集 いりすみ*くちあ

あの謎の夜から丁度一週間目の金曜日の夜、江間はすっかり疲れ切った表情で、例の喫茶店に行った。この喫茶店は相変らず不入りで陰気だ。しかし奥のボックスには、何時ものように、もうちゃんと黒瀬が待っていたのである。

「やあ、江間さん！」

黒瀬は上機嫌らしく、馬鹿に調子のいい声をかけてよこした。

「どうしました、元気がないじゃありませんか！」

しかし、別段彼の返事は聞こうともせずにつづけて喋った。

「どうです？ この間はいかがでしたか？」

「この間？」

ギクリと軀をこわばらせた江間を、黒瀬は媚びるように見上げながら、

「白らっぱくれちゃいけませんよ。さすがのあなたも、あの趣向は大分ショックが強かったようじゃありませんか。何しろ絵や写真じゃなく、実物ズバリですからねえ。御気に召したら、三万円頂きたいんですがね」

「三万円？」

「ええ、御気に召したら、金はいくらでも出すって御約束ですからね三万円でも、私の儲けはいくらにもなりやしません。家や自動車を一晚借りてますし、それに、妹の奴にもアルバイト賃をたんまりやる約束ですからね」

「妹？ あれは君の妹だったのか？」

「ええ、あれは私と違って割とスジがよくて、×劇で踊子をやっているんです。私はちっとも知らなかったんですが、妹の奴、偶然あなたと同じアパートにいたんですってねえ、驚きましたよ。おかげで彼奴か

らさんさん叱られました。死体の真似はしていたものの、あなたが出て来たんで、妹も実は気絶しそうになる程驚いたそうです。あなたがおっしゃる女に、妹がよく似てるもんで、私がさんさんくどいて承知させたんですが、相手があなたと判った以上、もう恥かしくてアパートには帰れないって云いましてね、実はあの夜から、私の家に駆け込んで来てるんです」

「あの人が、君の妹さん？」

「ええもう、ドーランやら血糊やらで、支度が大変でしたよ。妹の奴も怒って、アルバイト賃の値上げを要求しますしね、三万円じゃ、まったくお安いんですぜ」

「なるほど」

「あの時、私はかくれていて、あなたがあんまり驚かれたから、出て行こうとした時には、もうあなたは、転げるように見えなくなっちゃってね。まったく、これでもずい分苦労と工夫をしたんですから、三万円は実にお安いんで……」

江間はその時黒瀬に三万円を払ったまま、もう二度とこの奇妙な商売の男には会わなかった。

そして、彼の部屋を埋めていた、沢山の奇怪なコレクションも、全部焼いて煙にしまったそうである。

(おわり)

倒錯の夜

鳥羽瑛子 著

定価 二〇〇円・〒 二四円
好評発売中！ あまとりあ社

賭博場裏話

偶

(ちようはん)

奇

川口映治



ここで私は一席、ばくちの講義をぶつてみたいと思う。

なぜこんなものを書く気になったかという、私が今日までに読んだ小説や、物語りに出てくる博奕に関する場面の描写は実に出鱈目で、たいていは『これなら有りそうなこと』位で片づけてある。

それが第一線第一流の作家であっても、実に平気で間違ったことを書いている。

従ってその用語等に至ってはほとんど嘘っぱちだ。

映画等にもよく賭博開帳のシーンはあるが、全部と云っていいほど実際と違ったことをやっている。

一例を挙げると多くの場合、久利加羅紋

紋の兄ちゃんが腹に晒を巻いて、禪一つの素っ裸で鉄火場の真ん中に陣取り、伏せ壺をやっている。『ショープ』声がかかると壺をパツと上げる。するとさっきから客人に混って見ていた男前の旅人が、待ったツと叫び、そいつアイカサマだ、とドスを抜いて壺に突っ込む。すると床下に刀の突き抜けたのが映って、そこにいた三下がビツクリして逃げ出す。

つまり伏せ壺の下に居て、針または錐のようなもので裏から賽コロをヒックリ返して、その出た目を変えようというのであるが、こうしたことは実際にはできないことで、床下に居て上で伏せる賽の目が見える道理はないのである。

博奕の法則として、壺皿は畳の上に伏せるのが常識であるから、こんな厚い物は神通力でも透視できない、仮に硝子をはめ込んだ上に伏せると(その時代には硝子は無いが、たとえばの話である)下から賽コロの裏は見えるが、それはただ見るだけで、針も錐も通らないから駄目である。

何も私は、作品のあら探しをして喜ぶわけではないが、ろくに調べもせずに博奕のことを書いたり、読み方も知らずに人の名を書いたりこうした誤りを平気で公開するなどは、ジャーナリストとしては誠に無責任だと云いたいのである。

博奕の用語についても、先に書いたような、イカサマ、とかインチキ、と云うような言葉は玄界、即ちプロの仲間ではめったに使わないのである。

それは、イガム(歪)と云う語を使うので、そんなイカサマだのインチキだのと云っているようではまだまだお素人さんである。

だが物語りや映画に出て来るばくちうち、それが一流の金筋であっても例外なくインチキだ、なんていっている。かつて一度も、そいつあいガミだ、というのを読ん



だことも聞いたこともない。

それで一般の社会人には必要のないことがただけれども、こういうものであると云うことだけを知ってもらうために書かざるを得なくなった。

次に、賭博の種類、用語、その他のことを書いてみよう。

(種類)	(用具)
カ ナ	札
丁 半	賽
本 引	賽又は札
マ ツ	賽
三 取	札
チ ョ ボ	札
四 一	札
ム シ	札
六 百 拳	札
八 八	札
ナ ガ	札
タ オ シ	札
コ イ コ イ	札
ド サ リ	札

以上の他に外国ものも沢山ある。

(用語)	
イ ザ イ	前の通りに再び出た目。
イ タ 師	カブの或種の歪みをする者。
イン ケ ツ	取り目なしの別語。
イ ガ ミ	不正のワザ。
バ イ テ ン	博奕場へ来る物売り。
バ チ	スパイした事をサインで味方におくる。
ニ ゲ	10 20 30、ジャストの目。
ボ ン ヤ	博奕をする家。場所。
ホ シ	博奕場でできる借。
ボ ク	警察の手入れ、綱が降りる。
チ キ リ	札順。
ヌ ケ カ ン	取られるとカンカンになる、グロッキーになる。
ヌ ケ	取られる。
大 虫	大きな勝負をする者。
大 ム	相手の不注意や失敗を見つける。
ワ ラ イ	勝負なし。
カ ス リ	上前、コボレ。
カ ワ	胴の外の者。
カ タ	順番で一番初めの方。
ヨ ゴ レ	垢抜けせぬ服装、ジジムサ
イ。	イ。
ダ イ ス ケ	歪みのネタ、ダイスケが拳る。
相 談	妥協。
ナ マ ズ	手ぎわが悪い、下手、ドジ。
流 す	忘れて勘定に入れない。
ム シ ゴ マ	受けた金を引かずにそのまま張る。
ウ ケ ル	取る、勝つ。
ウ ワ テ	その前。
ノ バ シ	全部、半分でない。
狼	手強い勝負師。
ク ス ボ リ	金の無い者。
ク ウ	取る、勝つ、負かす。
ク サ リ	負ける、取られる。
ゲ ン カ イ	玄人、プロ。
ケ ン 師	歪み師。
ゴ ー リ キ	博奕のルールに精通した胴の助手。
コ シ ヤ	小勝負。
コ マ	金の代りをする道具。
テ ッ ポ ー	無手の勝負、口張り。
テ ラ 師	博奕の世話役。
ア シ	取られた金の不足分。
ア ラ	勝負の圏外に在る者に与える金。

サ シ 二人だけの勝負。

客 人 素人、トウシロウ。

キ レ 勝、負の度合。

モガスケ 行動の洗練されていない者

ボンナカ 懐具合。

この他まだいろいろあるが省略して、次にタブーのことを記してみよう。

勝負をしている者の後を通ること。

後に立つこと。

もたれかかること。

肩に耳をかけること。

手で顎突っ張りをすること。

人の札に手をかけること。

以上の事が相当厳格に、してはいけないこととして戒められている。

また次のようなシンクスもあるので、ついでに記してみる。

凶、齒が抜ける。または夢。

〃、行く手を動物が横切る。

〃、履物の緒が切れる。

吉、蛇をみる、またはその夢。

〃、刃物で斬られる、または夢。

〃、葬式に逢う、または見る。

これ等は極端に嫌ったり、喜んだりする事柄で、彼等の世界ではまた種々縁起とか

迷信が根強くその精神を支配している。

以上は主に関西方面を標準として書いたので、関東、九州、その他、所によって多少の違いはあるが、大体は、これで一まず通ずるのである。

次に、てら師と合力の事を少し書いてみよう。

まず、てら師であるが、これがないとばかりのメンバーが組めないのである。

てら師になった者は先に盆屋を決めて、何日の、何時から、どこへ、誰々を集めるというプランを立て、その決め時に参加してほしいと頼んで廻り、確客を取っておいでから全部に連絡し、その折に必要な食料、飲物、用具等を用意し、指定の盆屋に集まってもらうのである。

そうしてなるべく自分は勝負に手出しをせず、それまでの努力あるいは消耗品の代償として、上ったてら銭を取るのである。

大体の原則として、盆屋へは上り総高の三分五厘を渡し、残り六分五厘はてら師のものなのである。

しかしこれがなかなかの投機的事業で、つまり水物である。

何の事故も起らず、長時間スムーズに勝

負が進行すれば、小は一万円位から、大は十万円以上にもなることがある。が、一寸つまづいて調子が悪くなると喧嘩が起きたり、停電になったり、一番の大虫に用事ができて早く席を立たれたりして場に上りがなく、それまでの投資が無駄になりそれだけ損をすることもある。

そこで、このてら師には、どんな者がなるかという、負け続けて勝負に臨む資金の切れた者、または順番で決めてその番に当たった者等がある。

しかし、このてら師にもピンからキリまであって、顔の良い清水の次郎長級の者なら、一々頭を下げた頼んで廻らなくても、今度は俺がやる、とただ一言いいさえすれば、無理な算段をしてもたいていは集まってくる。が、これが三下のクスボリとなる

とメンバーの組立てにも大変苦勞をする上に、なかなか上等の顔触れがそろわず、従って大きな場銭も上らない。

博突打ちがてら師になるのは一寸選挙のようなもので、自分の力をみるバロメータともなるのである、日頃の行いによって人から尊敬されている者は自然と盛会を極め、自らその貫禄を示すのである。

てら師は開帳中はそのゲームの進行係りであると同時に、世話役でもあるから、場の中で起った事はすべて責任を持たねばならない、もめことが起きたら治める。また足を出したり鉄砲をやったりした者の尻拭いもしなければならぬし、不意によそののグレン等がやって来ても手際よく捌き盆中へ上げて人に迷惑をかけないように片づけるなど、相当骨の折れる仕事である。

それから、てら師なしでやる場合もある。例えば玄界仲間の誰かが不時の災難に逢うとか、病気になるって永く困っている時や、親分級の家慶中事に対しては、一席設けてそのてら銭の上りを贈る。これらはこの世界特有の美しい情宜の現れであろう。

また映画や読物のことになるが、ばくち場という例外なく、その親分がてら箱を引き寄せてその実権を握っているが、それだといつの場合もてら銭は親分のものであるが、この社会の筋道や仁義からいってそうはできないのである。

やはり困っている者に、順番または親分の意向によって、てら師としての権利を与えていたのである。それでも親分、貸元ともなれば常に自分の家に盆が立つのだから

盆代やいろんなカスリで結構やっていけたのである。

余談になるが、映画弥太郎笠をみていると三度笠で顔を隠して入って来た弥太郎がパツと笠を投げるや、親分の前に立って、『関の弥太郎だ、こいつあ貰っていくぜ』とドスをきかせ、そのてら箱を持ってスウーと出て行く。弥太郎の恐ろしいことは皆知っているから、親分始め、代貸し、用心棒、子分、と一同何の手出しも出来ずにはんやりみている、実に胸のすく場面である。その親分は悪だからここで一般の人は喝采を贈るのであるが、これをばくち打ちの社会からみるときは、この弥太郎のやり方は小面憎いのである。なぜかといえば、悪の親分を泣かせるのはいいが、しがないてら師のものをフンダくすることになり、一緒に泣きをみせるからである。こういうことは弥太郎のようなプロのばくち打ちのなすべきことではないのであって、仮に私の書くシナリオならここで弥太郎がてら箱を持てから、『今日のてら師はどいつだ』という。隅の方で慄えながら頭を下げている奴をみて、

『そうか、その分だけあくれてやらあ怖が。

るこたあねえ、手前のようなクスボリまで痛めやしねえ』と、幾分でも掴み出して、パツと投げたおいてから出て行くことにする。そうすれば、さすが弥太っぺ、道楽の垢が抜けていると、大変好感が持てるんだが。しかしまあ、これで一般の人は知らぬながらに承服しているんだから、画面のテクニクの上から考えて、そこまではやれないのかも知れないが、もしこのような本当の筋道を監督などが知っていたら、先に述べたようなことは良心的にできない事だと思う。

次は、普通の人あまり知らないが、博突場の合力の事を少し説明してみよう。

これは、どんな者がやるかという、すでに金が無くて勝負のできない者、またはやっているばくちのルールに精通した者等で、一人前にこの道の飯を食った、よほど達者な者でないとできないことである。

まず、本引の合力のことを書いてみるが胴が正面に座るとその両側、つまり胴の左右に一人ずつ合力が座る。その前に張り手即ちカワが座る、これを太鼓の陣という。胴と皮とがなければならぬという洒落であろう。

そこで、勝負が始まり、カワが張り終わら合力から勝負ツという声をかける、そうして抜けた分は取り集め、受けたのは金や駒を付ける。この金を付けるというのがなかなか大変で、張り方だけでも何十通りとあり、また、張ってある金高も人によってまちまちで、非常に複雑であるが、合力も熟練者になると、これをサッと見ただけで間違えぬようスピーディに金や駒をつけてしまうという技術を持っている。

合力をやるほどの者はすべてこういうものの特殊な勘定法を知っていて、一例を挙げると、この本引の張り方でよくいうところの、スイチ、は当たった場合、四、五となるから百円に対し四百五十円の勘定になるしかし誰でも百円とか千円とか勘定のしように張っていてくれればいいが、人により、また金や駒の有り方によって六百円であったり、七百元であったりする。そこでこの計算法は六百円のスイチの場合はそれを、半分の三百円とみて、それに九を掛けると三九、二十七という答が出るから、当たった場合は二千七百元であり、また、七百元のように奇数の時はそのまま九を掛ける。そうして六十三と出た答を半分つまり

二で割ると三千百五十円、と、このような計算法があるので、知らない人が見てその迅速振りに驚くのである。

だが、これも相当この道に年期を入れた者が、鋭い直感を働かせながらのことで、未熟の合力などで、金の扱いがモタモタしていたり、スローモーだったりすると、ゲームの進行が渋滞し、何となく一座が白けて胴やカワから文句が出る。

合力は勝負中は座ぶとんを敷くことができず煙草を吸うことも禁じられている。従ってカワの方からみすみす無理とわかった文句が出て、たとえば性の悪いのの一つや二つ殴られても、抵抗はおろか口返答もまかりならぬのである。

そのくせ、合力には重い責任があつて、大勢いるカワの手つきや態度に絶えず気を配り、ルール違反やイガミに注意しなければならぬ。

合力の報酬はどうかというと、所や、環境によっていろいろ違うが、胴の生き、すなわち殖えた金高の五分、つまり一万円の利益が上っていれば五百円の割合で、時には十万円以上も利益のある事もあるから、これを何回もやれば合力の収入も案外馬鹿

にならない。だがこれは調子の良い時のことで、運悪く胴が腐ったりすると、長時間勤めて一文にもならぬ場合もある。いずれにもせよ負けることの絶対でない、手堅く凌ぐには絶好の仕事である。

ここで、ケン師、即ち一般にいう、インチキ師のことも少し書いてみよう。

私の知っている男でKといって九州小倉の者だが、この道のベテランで関西方面では二三人に数えられるべき達人である。

そのインチキ技術の巧妙、神速の業は実に大したもの、ドサ廻りの奇術師などは足下にも寄れぬ腕前を持っている。

賽コロでも札でも、その扱いと手さばきはまったく見事なもので、たとえば、畳一枚位向うにマッチを置き、それにこちらから三個のダイスを投げる。すると三個ともキチンとマッチの上に乗っている、しかも丁半の目がピタリと出ている。何回やっても失敗しない。札の操作もその通りで、今手に持った札が煙の如く消え失せるかと思ふとまた現れる。一人前のばくち打ちが二人も三人も見ている前でそれをやってみせるのだが、どうしても見破る事の出来ない実に絶妙の神技である。

だが、世の中は面白いもので、これほどいい技を持っているのだから、いつも勝負に勝って常に大金を持っているかというところではない。それでいて、たいていは人に雇われ、幾分かの歩合を貰いながら知らぬ土地へ流れて行き、歪んでは次の土地へ隠れ、騙しては逃走し、時にはダイスケが拳って袋叩きに逢うという危い瀬戸を越えながら、放浪の生活を続けているので、所詮は悪は栄えぬという實際を、身を以て示しているに過ぎないのである。

それから、素人がよくいう、プロとばかりをやると怖いといって、いつでも歪まれているように疑るが、それは間違っている。

ある男のいった事だが、世の中のどんな商売でも、どんな職人でも腕を磨き、名人上手といわれるようになるほど良い金とられるようになるんだが、ばくちだけはそうはいかない。下手くそのナマズはいつの場合も歓迎せられてどんな場所からでも貰いがかかるが、余り上手になると、カモではないから恐れをなしてメンバーに加えてくれない。博奕と喧嘩はどうしても一人では出来ず相手がいることだから、こうして敬遠されボイコットを喰っていたんでは商売

にならない、つまり下手はもうからないし上手は交えて貰えないという困った職業なのである。

そこで、こういうことのないようにと人への当りも柔らかく誰にも好感を持たれるように、つまり怖がられぬように努めねばならない。

以上のような次第だから、素人を相手に歪む等の事は以ての外で、プロになるほど正直である。また、二つには、こちらは永い年期を入れて充分仕込んだ腕だし、相手はアマの客だから、何も歪んでまで取る必要はない。そのままでも大丈夫付け目はある。良い職人と悪い職人との違いがあるんだから、お素人衆のお金を頂くのはまず時間の問題ということになる。

だが、中には千人に一人位の悪質なのがいて素人の客人を集めて歪もうとする如き不心得者があるとすれば、それは、私と力道山と喧嘩をするのに、力道山が私を騙し討ちにするようなもので、総ては必要以上のこととなるのである。

博奕は面白いだろうということをよく聞くが、なかなかどうして、他人様が考えているほど面白い楽なものでは決してない。

食事、睡眠が不規則で、換気の悪い密室内で、勝負中は寸時も心の緊張を解くことは出来ず、エネルギーを消耗することにおいては如何なる重労働も及ばないと思う。これが面白いようではまだまだ素人である。どんな事でも、それが一つの職業ともなれば、決して第三者がみるほど面白いものではない。

次に普通の人で、カブや丁半のように単純なものを一寸覚えた時分は、誰でもかまわぬ相手さえあればやりたいもので、面白くてたまらぬ時である。そうして一番自惚れの盛んな時でもあるから、さっと向う先きが見えず、負けても、取られても、今度を取り返してやろう、今度こそはと、つい深みに陥ることになる。

こんなのを本職の方では七面鳥といって鴨以上に評価し、手ぐすね引いて降りて来るのを待っているのである。

サンザンこの道で苦労したあげく、ようやく自分の力が自分でわかる頃になって初めて、プロとの太刀打ちができるので、二年や三年の浅い経験では、よほど馬鹿目でもつかぬことにはまず勝目はないといえるだろう。

次に博奕打ちの仁義のことだが、これは今でも相当やかましくいわれている。たとえば、

○ 甲の者に日時を決めて、そのグループに参加するよう頼まれているのに、それをすっぱかして乙の方に行ってしまうのはいけない。

○ 世間では百円の信用がなくても、場では一万や二万は借りられる、しかしこれには無言の契約があつて、その決めた時に必ず返せるだけの自信がなければならぬ。もしこの返済が遅れたり、または払わなかったりすると、どこへ行っても勝負に手出しはできず、時にはリンチを受けても文句はいえない。

○ 仲間の誰かに金を借りていて、まだ約束の期限が来っていないからそのままである場合、その債権者とは勝負はできない。だからあつちこつちで借りてあると、たとえもうかりそうでも、手出しはできない。

○ 甲の者が、乙の者より、煙草銭とか酒代だといって、何程かの金を貰った場合も、乙の者と勝負をすることができない。

○ 甲の所で盆を敷いているのに、その附

近または少し位離れていても、連絡のあるルート圏内で、同じ時に乙も丙も盆を敷くことはできない。それは甲に対してある意味の挑戦であるから。

○ 一度でも金を借りた（恩義）のある者が負けてしまつて手出しができずに傍観しているのに、自分だけ勝負することはいけない。先方が黙つていても、有るだけの金をその恩人に廻して、自分が傍観者となるのが本筋である。

○ てら師、合力、クスボリ等は食事、入浴、その他の事を一人前の勝負師より先にするとはいけない、この世界では大勝負師程階級が上であるから。

この他にまだ細かい事は相当あるが、まずこれだけの事をわきまえていればよいという程度の仁義の概要である。

これらは憲法で決めた第何条というようなものでもないことはもちろんだが、彼等の世界だけに通用する不文律が、下手な国法以上の權威をもつて厳存しているのである。

とにかく、博奕打ちという職人の命とする道具は金である。従つて馬鹿でも何でも金さえ持っていれば顎をしゃくつて物がい

えるが、反対に金のない者は、総理大臣でも、知事さんでも、そこにいるかとも云つてもらえない、実にハッキリした社会である。

さて、これは余談になるが、私の友人で一寸面白い男がいて、こんなことを云つた。「俺達のばくちが何故悪いのだろう、自分の金で、自分が勝負をしているんだ。商人や政治家や実業家だと云つてゐる奴等のしていることは何んだ、秤の目を誤魔化したり、大嘘をついたり、八の価値しか無い物を渡して、十の金をふんだくる陰險な企みばかりしているではないか。そこへいくと博奕はどうだ、取つても取られても、張つたら張つただけ、正味そのままの実に堂々たるものではないか。こんなの禁ずると云う憲法が大体おかしいや」

で、私は、

「商売はその取引きに物品が介在しているからいいが、博奕はつまり現なまに手を出しての直接取引だから、すべてが極端になる、云わば、普通の商売は竹刀の試合で、ばくちは抜き放った真剣勝負であるから、精神的に鋭い影響を及ぼす、だ

から間違いが起りやすい。で国家の治安維持と云う線からみて、やらんようにしろと云っているんだ」

私がこう云うと、

「君の云うことは判るような気もする。だがこのばくちをやかましく云うのと、闇米を取り締まるのとは俺にはどうもズバリと納得がいかなのでね」

これなぞは一種の団子理窟のようではあるが、そうでないような所もある。

さて、私はここまで、あたかも博奕の講義録みたいなことを書いて来たが、これを以て賭博を奨励し、または啓蒙の資にするなどは毛頭考えているのではないのだから誤解なきよう断っておくが、まんざら何の目的もなしという訳ではない。というのは今までに発表された、この道についての嘘や間違いを訂正したいというおせっかいな気持ちと、また一つにはある博奕打ちで、一種独特の生き方をし、波瀾万丈の半生を、徹頭徹尾ギャンブルの鬼となつて、遂に終りを全うしたという男のことを小説風に書いて、近く発表してみたいと思ひ、それにはどうしても、此社会の本当の事を書かぬと実感が出ないので、今の中に一人でも

余計にこの拙文をみておいて貰いたい念願からなのである。

云うまでもなく、ばくちは禁じられた遊びであるが、さっきの男の云ったことのよきに、其用具の販売には高税を掛けて許し闇米を取り締りながら、すしや、井を売らせるのと同じで、どうにも納得のいかない矛盾を感じるが、これによって起る悲劇は数知れず、自ら窮地に近づきつつもなお隠然たる力を以て後を絶たぬと云うのは、考

えるべき何事かがあろう。

無法と暴力、義理と人情の錯綜する彼等の世界に、高い教養を求め、崇高なる人格を望むは無理であろう。その多くは無学で封建的で、すべては浪花節的勧善懲惡の物語に、随喜、悲憤の涙を流しながら、多種多様の賭博とともに、賭博者も、何百年も昔から滅びることを知らず、今なお人生の裏側に生き続けているのである。

密 ひそかよ 夜

松井 籟子著
《官能感溺作品集》

定価二〇〇円

東京都中野区江古田一

あまとりあ社

送料各冊四〇円

男たちとの夜

津田加寿子著

《赤線女給十年の手記

定価二二〇円

竜胆寺 雄著

《耽美派異色作品集》

定価二二〇円

官能の夜

鳥羽瑛子著「倒錯の夜」は目下重版発売中！（86頁御参照）

近刊予定・武野藤介著「悪女夜色」を御期待ください！

あまとりあ社の

夜シリーズ

窓



足腰立たぬ青年は如何にして若い命をすり減らしていったか？

木原さんは、新聞広告を見てこの家を訪ねてきた三人目のひとでした。一目みて、ひどく気に入った様子です。いや、気に入った、などというものではなく、一種のショックをさえ受けたようです。

「うむ」

と、中年男のふんべつくさ

い顔つきでかんがえる風でしたが、

「で、条件はどうなのでしょう。条件は……」

もう、どうしても借りないではおかないぞ、

といった、つきつめたものが、その口調には感じられました。

「はあ、わたくしどもは、お家賃さえ、その月々にちょうだいすれば、それでよろしいのでございますよ」

「すると、権利金とかシキ金なんか……」

「はあ、そういうものは一切……」

チキ生、なんてうまい話だ、木原さんが躍りあがりたいた気持を押えているのが、私にはよくわかりました。

岬 洋之助
山田 彬弘・画

「よろしい。さつそく決めさせていただきましよう。さつそくね」

ひったくるような勢いで木原さんは、貸借の具体的な手続きを促すのでしたが、さすがに自分の一人ぎめがテレくさくなったと見え「やあ」

と頭へ手をやりながら、

「申しおくれましたが、こういう者です。小説を書いているのですが、適当な仕事場がなく弱っていたんですよ」

肩書のない、木原龍夫という名前と、住所だけを印刷した名刺をさし出しました。

「あ、それで……」

なるほど、と私は思いあたるのでした。

木原さんの前に、二人ほど家を見にいらしたのですが、その二人とも此の家を見たとなん、脅えたような表情になって、

「あ、そうですか。では、なおよく考えてみて、後で返事をする事にしましょう」

というようなことを口走りながら、ろくに条件もきかないで、あたふたと立去ってゆくのでした。それは、この家ぜんたいの、なんともいえない陰気で不吉な表情のためだったかも知れません。洋館とは名ばかりで、外側のモルタルは剝げ落ち、そのヒ、割れから雑

草がのびています。が、まして印象的なのは家ぜんたいをベツトリと覆いつくしている蔦の葉の、毒々しいまでの青色でした。それはそのさかんな野生の繁茂力で、此の家ぜんたいを、まっ青な死衣のように覆いつくそうとでもしているようでした。なんというのでしよう。家ぜんたいが、まるで大きな棺桶のような様子をしているのです。はじめて訪れる人には、とくに、その印象がつよいのでしよう。そして、そのバケモノ屋敷のような家に私のような陰気くさい老婆が、世間とは没交渉で、ひっそりと一人で住んでいるのですから、なんとただごとでない感じがするのかも知れません。

ところが、木原さんはちがっていました。家をながめるその目つきは、はじめからつよい執着と愛情にかがやいていましたし、その頬は、いとしい人にゆき合った時のようにかすかに上気してさえいました。はじめ家を見に来た二人の方が、思みおそれたものに、逆に木原さんは惹かれたようです。私が木原さんの職業をきいて、

「なるほど」

と思ったのは、そのことでした。表面は快活で気サクな世俗の人ですが、やっぱりどこ

か変ったところがあるなあ、と思ったのです。それと同時に、娘時代にはかなりの文学少女でもあった私は、木原さんの仕事にフト好奇心を唆られて、それとなく書いているものの傾向などをたずねて見ました。すると木原さんは、

「いやあ」

それがクセであるらしく、頭へ手をやりながら、

「人様にひけらかすほどのものじゃないです。できれば、仕事も隠しておきたかったのですが、どうせ判ることだと思って」

察するに、木原さんは、何の誰それ、と人に知られている部類の小説家ではなくて、無名にちかい人だったのでしよう。年輩から言っても、木原さんは、そのことに一種のヒケ目を感じている様子です。

「このことは、あまり触らないほうが、いいのだな」

私はそう思いました。

で、結局、木原さんはここを借りることになったのです。木原さんにさしあたって使っていたのは書斎になっていて洋間と、それと廊下を距てて向い合っている六畳の日本間ということなのですが、必要に応じて、ほ

かの空いている部屋を自由に使ってもいい、ということにしました。そして私が、木原さんとはいちばん遠い反対側の、四畳半の茶の間で暮すことになったのですが、これはいままでも通りです。

話がきまると、木原さんは、

「どれ、書斎の座り心地を、試して見ますかな。ここが我々の戦場ですからね」

そう言いながら、もうすっかりわがもの顔に、書斎へ入ってゆきます。私はそのヒマに手ばやく台所へ行ってお茶を淹れ、書斎へ運んでゆくと、そこでまたしばらく座りこんでとりとめもない雑談を交します。もう貸借の話はすんで、木原さんは明日、当座の必要品と、泊れるだけのものを持ちこんでくるという事になったので、ふたりともホッとした気分でした。木原さんは、窓に向って据えられた机に背をもたせ、回転椅子をまわして、こっち向きになっていましたが、そのとき、窓の向う側で、カラカラという、乾いた音がしました。五十坪ばかりの空地を距てて見える家の二階で、洗濯物を干しているその竿の音です。

その音につりこまれるように、窓の外をふりむいた木原さんの横顔が、一瞬、かすかに

緊張しました。その二階の、ちようと露台のようなところで、ショート・パンツひとつという恰好の、十八くらいの若い女が、洗濯物をひろげているのです。こちらの窓のすぐ外側には、一本の無花果の樹が立っており、大きな葉を拡げています。その葉と葉が、微妙にかさなり合っているあいだが、ちやうど一箇処、ほどよく空けていて、そこから向うの露台が、不整形な額縁にでもハメこんだように、鮮やかにのぞけて見えます。そして、その額縁の中を、ショート・パンツから惜気もなくむき出した、たくましい太股や肩や腕が真夏の日を浴びて、これ見よがしに動きまわっています。そのたくましく精気をみなぎらせた太股や、スラリと伸びた肉づきのいい足や、覆った布地を、突然、激しくつきあげている乳房のたくましさは、私たちの娘時代にはなかったものです。いまの若い娘たちはそれを風や太陽や、男ともだちの精気のなかから吸い取って、ゆたかに自分の肉体にもりあげているのでしよう。ニクたらしいほど、

特集 いりてみる*ちくちくあ

大映しにされたその肉感。それは五十をすぎた女の私がかいま見てさえ、思わず息苦しくなってしまうほどの、過激で強烈な真夏の午後の風景画でした。

木原さんも、すくなくならずショックをうけたようです。急に口数がすくなくなり、そちらの方へ、気を取られている様子で、その表情には、なにか、迷いのような翳が感じられます。その横顔を、それとなくぬすみ見ているうち、突然、私の脳裏に、あの思わしい不吉なできごとの記憶がよみがえってきたのです。

「どうせあの事は、何時かは木原さんに知れてしまうにちがいない」

私は、そんな気がしました。この家にまつわる、それも、木原さんがいま原稿を書いているあの部屋で起った、おそろしい出来事のことです。木原さんのような仕事の人は、そういうことに対しても、とくべつな嗅覚を持っているにちがいないのです。

「それなら、いっそ、こっちから話してしまおうか」

とも思いました。木原さんは風変わりだから案外驚かないかも知れない。はじめ、木原さ

んが此の家にとくべつの執着を見せたときから、そんな予感はあったのです。

木原さんが書斎にしているその部屋で、二年前に甥はみずからの命を絶ったのです。重症のリエスとの、ながい闘病のはてに……

その死をみとったのは、甥の母親、つまり私の姉と、私の二人だけでした。甥の名はサトルというのですが、姉はサトルを鍾愛していました。欧州航路の船長だった夫を、海難で失ってから、その愛は一人息子のサトルに病的なほど集中していましたが、思春の頃からサトルがこの死病にとりつかれはじめ、ほとんど身動きもできない状態で、ながいながい病床についてしまうと、母親の鍾愛ぶりはさらに狂おしさを加えてゆきました。そして彼女は、最後のサトルの看護婦として身をすりへらしてゆくことに、たった一つの生き甲斐を感じていたのです。サトルのためなら姉は糞便をすることさえ、辞さなかったでしょう。私が見かねて、

「姉さん。そうまでしなくとも」

と、たしなめると、彼女は私の手を取って涙ぐみながら、そうしなければいられない心情を、切々として訴えるのです。

「姉は狂っている」

私は、そう思わないわけにはゆきませんでした。だいたい、私たちの一家には、その系統があったようです。私が一生結婚を拒絶して過し、女のくせに心理学や、しまいには心霊から呪術のようなものにまで深入りしていたのも、そうした不吉な家系への、抵抗だったとも言えるでしょう。

リエスで寝たきりの若者、それを狂ったように鍾愛しつづけ、世間との交渉さえ絶てしまったようなその母親。そして、よるべのない身を、そこへ寄せている陰気な老女。それだけでも、この家は十分風変わりでした。しかし、サトルの自殺、それから半年あまりたつて、悲嘆の果ての姉の病死。と兇事が相ついで、この家の異妖性は、いよいよ確証された感じでした。姉にしても、手のつくしうでは、そうまで死期を早めることもなかったのですが、頑として医者の手を拒みつづけ、衰弱と低血圧のはてに燃えつきた灰がくずれるように、此の世を去っていったのですから、一種の、時間をかけた自殺と言えないこともありませんでした。このことは、サトルが死を遂げた時から、私には予感があったのです。死因が死因ですから、会葬の人もありません。一晚、死体を安置して、姉と私だ

け通夜を行い、あくる日出棺という順序ですが、午前一時ごろになって、私は死体の番を一時姉にまかせ、ひとまず寢床に入りました。あとで姉と代るつもりだったのです。どのくらいねむったでしょうか。ふと小用をもよおして寢床をはなれた私は、廊下のはずれにある便所のところまで来てはっとなつて立止りました。姉の声です。いやにハッキリと、陰にこもって囁々と、死んだサトルを掻き口説いているのです。

「いまに、お母さんも、サトルのところに行きますからね」

そうかと思うと、

「そう。おしっこかい。いまさしてあげるよ。よしよし」

子供をあやすようにしています。姉は狂ったのだ。私は総身に水をかけられたようになりました。そのまま、そつと足音を忍ばせ、洋間のところへゆくと、ドアを細目にあけて内部を窺いました。

「ああ」

そのとたん、私はじぶんの顔から、血の気のひいてゆくのがハッキリ判りました。なんというあさましい姿でしょう。安置された死体を抱き起すように、その死衣をはだけなが

ら、ペロペロとなめまわしているのです。

そして、時どき、なめるのを止めては、サトルの顔をつくづくとうち眺め、

「よし。よし」

などと言いながら、また、ところきらわずなめまわすのでした。そして、あかるい電気の下で、恍惚と酔ったようになっていたその表情が、此の世のものとも思われぬ異妖なものに眺められました。

「神かけて、この光景をあらしめてはならない！」

私は次の瞬間、心の中で絶叫しながら、ドアを蹴ひらくようにして、部屋の中へ躍り込んでいました。ほとんど夢中でした。姉の後髪をつかんで、ひきずり倒したのを覚えています。死体をかたわらに、なんというあさましい地獄の叫喚だったことでしょう。やがて発作が終ると、しずかな姉のおえつの声が、部屋のうちに起りはじめました。姉の死は、もうこの時に用意されはじめていたと言えるでしょう。私は、姉やサトルの、その死の原因になった思まわしいものを呪封するかわりに、姉やサトルの、生命そのものを、まちがえて呪殺してしまったかも知れないのです。私は、そんな、不吉な女だったのかも知れない

いのです。いま、姉もサトルも死に絶えてしまった此の家に、墓場の番人として、私の余生は封じ込められてしまったのです。

「そうだ。木原さんに、洗いざらい話してしまおう。それでイヤなら、出て行かれても仕方がないのだし……」

一人で背負い切れない不吉の影を、木原さんに分担して貰おうというのでしょうか。

この家にある秘密を、木原さんに話したい

誘惑が、しだいに私の心を、つよく捉えはじめていたのです。

私は木原さんにそれを話す機会をじっと窺



っていました。しかしサトルの死や、サトルを死においつめたものについて、すっかり知っていたというわけではありません。ただ、私はサトルという若者を、ある距離において観察していたので、盲目的に溺愛していた姉とちがって、その秘密を、いくぶんでも嗅ぎだすことができました。

サトルは、性的なことでは、ひどく苦しみなやんでいたようです。女を知る前に、動けない寝たきりの病人になってしまったので、女性のからだや、それに密着した心理の動きは永遠にサトルにとって謎であり、そのゆえに、燃えるような、渴望の対象でもあったようです。

ある時、ふとしたことから私はサトルが自瀆をしているらしい、その証拠物を発見したのです。それは、固くまるめられた、一つのちいさな紙屑でした。サトルの部屋の窓にスレスレに葉をひろげて立っている、無花果の本の根元に、それは夜露のしめりをふくんで、捨てられてあったのです。一種の直感とも言いましょいか。庭を掃いている時、私はそれを目にとめたのです。そして、はしたないとは思いましたが、強い好奇心にかられるまま、それをひろいあげると、そっとひろ

げ、鼻先にちかづけたのです。何に使用された紙屑であるか、そのことはもうあきらかでした。私は物蔭でそれをたしかめると、他のゴミや紙屑といっしょにゴミ箱に処分したのですが、このとき、心の片隅には強い疑惑が、きざしはじめていたのです。

使用した紙から言って、それがサトルのものであることは、疑う余地がありませんでした。そして、そのあたらしさから推して、それが昨夜中のできごとであることも……。 (庭は毎朝掃くわけでもなかったのも、一、二日前の紙屑が転がっていることも、あり得ました)

それにもまして、

「ああ、やっぱり……」

と、そのことを私に確信させたのは、つねになく朝おそくまで昏々とねむっているサトルの顔が、なまなましいやつれを見せていること、そして、その目の下のところに、うっすりとかかっている、病的なうす黒い隈でした。そうしたサトルの顔は、かつて見たことのないものです。病氣以外に、サトルの精神や肉体に、なにか烈しく有害な刺戟が加えられたことは、あきらかでした。 「それにしてもおかしい」

と思えるのは、糞便の始末さえ人にしてもらっているほどのサトルに、そのこと自体は別として、後でそれを窓外に投げすてるほどの、肉体的な機能が、あったかということ。サトルがそれをベッドのそばにある便器や、紙屑カゴに捨てるのなら、もっと仕事はかんたんだったでしょうが、窓の外をえらんかだというのは、おそらく発覚をおそれるのとそれを、できるだけ自分から遠くへ、遠ざけてしまいたいという気持だったのでしょう。犯行者が、兇器を河などに投げすてる気持にも、通ずるものがあつたのではないでしょう。か。おそらくサトルは姉も私も、ゼツタイにくるはずのない深夜をえらび、想像もできない長い時間をかけてソロソロと後始末をしたのではないでしょう。そして、窓の外に漆黒の闇は、秘密を埋没させ消滅させる場所として、この上もなく屈強なものに思えたにちがいありません。じっさいは逆で、朝になつてしまえば、すべてはあかるい光線の中にてらし出されてしまうのですが、もう何年もベツドに寝たまふのサトルは、可哀想に、そうした現実的な判断がにぶって来ていたものと思えます。無理もないのです。たしかに、活動的な精神や、現実的な判断が通用する、あ

かるい白昼の世界とは別なところで、何年も何年も、寝てくらしたのですから……。サトルだけではありません。姉、それに私もふくめて、この家の澱んだ古沼のような空気の中に生きていくせいか、多少、世間とはズレたところがあつたのです。

とにかく、このことがあつてから、「サトルのからだには、私たちが気がつかない力がねむっていて、イザという時にはそれが動きたすのかも知れない。そして、ふだんは、本人さえ、そのことに気がつかないのではないか」

と思うようになりました。絶対に足腰の立つはずのない重病人が、地震の時、ふだんは想像もできないたしかで家の外まで這いだしてきた実例を、私は思い山していました。そして、夏でも毛布をびったりからだに巻いたまま、硬直した棒のように横になつてミイラのようなその寝姿に、なんとも言えない不気味なものを感じるのでした。しかし、そうした私も結局サトルの自殺については、病気だとか、絶望だとか、そんな世間なみの理由でかんがえるほかはありませんでした。自殺は催眠薬自殺でした。サトルは、ふだんから、母親に頼んでは催眠剤をとりよせて常

用していましたが、そのなかから、つねに致死量をストックすることだけは忘れなかったようです。そして、つまり、死を何時も自分の手中にあたためていくことによって、生の支えにしていたようです。サトルというのはそんなところのある子でした。

ところが、サトルが死に、そしてその後を追うようにして姉がなくなったあと、家の中を片づけていた私は、意外なところから、意外なものを発見したのです。

この部屋は洋間で、天井などすべて漆喰いで固めてありましたが、横に六尺の押入れがついていて、その天井だけが、日本風に羽目板になっていきます。押入れの中を整理しながら、私はふと、その羽目板が、少しズレて何か紙包みのようなものの、はしっこがのぞいているのに気がつきました。

「なんだろう」

羽目板をさらにずらせ、バラバラと降ってくるゴミをかぶりながら、その紙包みをひっぱりだしました。それは、もう変色しかけた新聞にくるみ、その上から細ヒモで十文字にしばった、書物かノートのように四角くて平べったいものです。ひらいてみると、意外にも、それはサトルの手で克明に記された日記

帳と、もう一つは小型のスケッチ・ブックでした。サトルは、もともと絵をやっていたので、そのころのスケッチ・ブックが残っているのに、なんの不思議もありません。がそのスケッチ・ブックの各頁に、所せましとぎっしり描かれたスケッチは、私をおどろかせるに十分でした。それは、一人の若い女の、表情とその肉体の細部、さらにその肉体の、はずかしい、秘められた構図を、まばたきもしない執拗な努力で追究した、一種の祕画の集大成のようなものになっていたのでした。そして、そのモデルになっていたのは、まぎれもない、あの女でした。このスケッチ・ブックと、日記帳を対応させると、私たちがまったく夢にだに想像しなかった、サトルの隠された病床生活と、死へ追いこんだ経路のようなものが、暗闇になれるにつれ、少しずつ物の形が見わけられるように、おほろに浮び上ってくるのでした。

私はまず、あの女について語らなければなりません。考えようによっては、彼女こそサトルの精気を吸い取ってヌケガラにし、ついに死へ追いやった下手人とも、いえるでしょうから……。しかし、彼女自身、それを知っ

ていたかどうかは別です。その女は、サトルが自殺する二日くらい前から、あの露台のある二階の部屋に引越してきて、それから、三ヶ月もいたでしょうか。サトルが死ぬとまもなく、どこかへ姿を消してしまいました。むろん、二つのできごとには、べつに関連はありません。五十坪ほどの空地を距てた、二つの窓と窓の中で起った、それぞれ別なできごとだったのです。

この女が、出現した前後の自分の心象風景を、サトルの日記はこんな風に説明しています。

○月○日

この熾烈な色情は、なんによって誘発されるのか。空を流れる白い雲。物干で、へんぼんとひるがえっている洗濯もの。蝶々。ヒラヒラと動く、おもしろいもの。すべて色情の対象でないものはない。そしてこの方形の窓の視界だけが、オレのすべての世界だ。かほそいもの。風趣のあるものはよろし。

○月○日

洗濯物がふたつ、青い空を背景に、風にふくらんだり流れたりしながら、おどけた踊りをおどっている。一つは男の寝巻、一つ

は女の寝巻だ。からみ合ったり、はなれたりしている。中味の人間はスポツと抜け落ちているが、寝巻は意志を持っているようだ。男と女の夜。ああ。漬す。

○月○日

赤い寝巻がヒルガエツテイルノハ、ソノ屋根ノ下ニ若イ女がイル標識ダロウ。ア、鯉ノボリノヨウダ。

といった調子の文面でノートはぎっしり埋められています。そして、ある日突然、あの女が現れるのです。

○月○日

このショックに比べると

花が咲いた、などという形容は、なんと陳腐な死語だろう。まるで、いちめんの炎の海へ投げこまれたように、ただもう目の前は、真紅の世界だ。女は露台にキャンパスの椅子をひろげると、ぐったりそこへ寝そべった。そして、ものうげにタバコのけむりを空へ吐きあげている。海浜でもなければ見られないような、ほとんど裸体にちかい服装で……自分は成人した女が、こんな風になっているところを、こういう距離と角度から、観察することははじめてだ。目がチカチカして息ぐるしい。胸がドキドキする。自分の生理は、この挑発に、とうてい耐えられそうもない。

その女は、なんでもオメカケさんらしいという近所の噂でした。サトル



の日記は、女が引越して来た時の、第一印象を書き記しているのです。荷物を片づけ終って、ほっと一息している女の姿を、窓からかいま見たのでしよう。

そんな服装で、人に見られていることもかまわず、むしろこれ見よがしにのうのうと寝そべっていたりするところ、やはりかたぎの女とは思われませんでした。オメカケというのは、本当だったようです。それをウラ書きするように、好色らしい四十がらみの男が、チョイチョイその二階を訪れては、一夜を明して帰ってゆく様子でした。二階一間の部屋借りとは言っても、階下は、その家の持主である或る町工場の、材料置場のようになっていたので、いわば水入らずの独立家屋と同様です。ふたりが、露台のところでフザケたりしているのさえ、それはもうまともには見られないようなものでしたから、夜になってからのことは、想像に余りがあります。サトルはとくに、その部屋の内側で起っている夜のできごとに、想像力を刺戟されるらしく、日記の頁は、それを暗示する字句で、いっぱい埋められています。

ただ、叙述が非常にみじかい乾いた文章で簡潔にしめくくってあり、暗示的、象徴的に



さえなってきたるのが目立ちます。たとえば「潰す」とか「淫す」とかいうのは、大体の想像はつきますが「哭す」というのは、充されることのない切ない欲望に、慟哭するともいうことなのでしょう。そうかと思うと「視線には、動物的な電気か、放射能のようなものがあるらしい。彼女は自分の視線を十分意識して、ワザとああいふ風にふるまうらしい」というような一節もあります。「二人で露台でフザケていたと思ったら、手をとって室内へ消えた。窓はひらいたままである。死角に入っているのだ。昼間だというのに……」とか「おしろいを落した朝の女の

顔。夜の生理がマザマザと」といった風に、日記を埋めたすべての字句という字句は、そのことに関連していたのです。ところが、日記には、ある日、ほとんど一寸角くらいもある「決行!」という二文字で、そこで突然終わっていました。あとはむなしい空白のページばかりでした。そのころは、記述も順序を無視して、ななめに書いたり、余白にデッサンが描かれてあったり、らくがきそのままの乱雑さで、日付さえなかったものでその「決行」が何を意味するのか、自殺と直接関係があるのかないのか、それは依然としてナゾでした。死ぬまでの、あいまいな心の動きは大体

わかるのですが、すくなくとも、直接に死につながる動機としては、よほど強力なものがなければならぬはずだ。

「それが察してやれないでは、サトルも浮べないかも知れない」

私は、なぜかそんな気がするのでした。

「ええ、知っていましたよ、大体の事情はねえ」

木原さんは、平然としてそう言いました。

ある日、私は思い切って、それとなくサトルのことを切り出していたのです。自分ひとりの胸におさめておくのが、どうにもやりきれなくなったのです。ところが、木原さんが「知っていましたよ」

ケロリと言うので、私はなんだかはり合い抜けが、してしまったほどです。私が、「それで、御存知でいて、別になんともございませんでしたの？」

「われわれは因果な商売でね。取材とあれば墓だつてあばくし、死体をマクラにひるねだつてしますよ」

「まあ」

むろん、それは木原さんの言葉のアヤであることは判っていました。これは後で判った

ことです。木原さんは、サトルの話を、それほど深く知ってはいなかったのです。ただいかにも知っているように見せかけ、私にカマをかけて、真相を引出そうとたくらんでいたのです。小説家などというものは、この種の心理工作では、なかなかすぐれた臨床手腕を発揮するものです。私は、すっかりしゃべってしまったのです。もともと、すすんで打明けようと思っていたくらいですから喋ったことに悔はありません。むしろ、この機会に心理家である木原さんの助けを借りて、サトルの自殺の真相を、たしかめたいと思いました。

「で、日記なんかどこにあるんです」

「はい、しまつてございますわ」

「見せて下さい。それから、その絵も」

「……………」

「教育学の分野には、人物画による性格診断法、というのもある。絵画はとにかく心理判断の有力な手がかりですよ。場合によっては、その方が日記よりも、もっと具体的な資料になるかも知れない」

いったん打明けた以上、否も応もありませんでした。私は、サトルの遺品である日記とスケッチ・ブックを木原さんに預けました。

それが、死者への冒瀆にならないよう、心に念じながら…………。

木原さんは、それから毎日、ひっそりと書斎にこもる風でしたが、いく日かたったある晩のこと、恐ろしいできごとが起つたのです。

その夜は夏も終りにちかい、むしむしと寝苦しい夜でした。ところが、夜中になって雷鳴と共に物凄い豪雨になりました。棒のような雨脚が地上を叩き、青白い閃光が、時おり庭先を白昼のような明るさに照らします。

その時です。だだだだっ、という音が、家中にとどろきました。とっさに、

「雷」

と思ったほど、烈しい音です。が、それは雷ではなくて廊下を慌しく踏み鳴してくる足音でした。私は兇変を感じて、パツと起ると瞬間的に電気をつけ、寝床の上に片膝ついて身構えました。その瞬間、廊下から障子をあげたままの部屋の中へ、転がりこんできたのは木原さんです。部屋の入口の畳の上に、サル股ひとつの素ッ裸という姿でベッタリ座りこむと、書斎の方を指すようにして、

「サ、サトル君が…………」

その瞳孔は大きくひらかれ、唇はひきつったように、ワナワナとけいれんしています。

「え？」

私も、背筋から水をかけられたようにゾツとなりましたが、強いて気をはげまし、

「いったいどうしたというんです、木原さん。つめたいお茶でも飲んで、さあ」

私がさし出した湯呑をのお茶を、ぐっと一息に呑んだ木原さんは、いくらか気分が落つたのか

「ああ恐ろしいことだ」

まだ恐怖のさめやらぬ表情で、一瞬間の恐怖を語るのです。それによると、ベッドの上でウトウトしていた木原さんは、窓から吹きこむ雨まじりの突風で目をさましたのです。窓のとめ金を、きっちり倒しておかなかったので、風にあおられて、ひらいてしまったのです。

「チキ生。なんて吹き降りだ」

木原さんは、窓から吹っこむ雨風にたちまちぬれながら窓を閉めようとするが、重い鉄枠の窓は、風にあおられて、なかなか、思うようになりません。いささか、もて余し気味です。その時、はげしい雷音に前後して庭さきが、青い閃光の中にあかるく浮びあがりま

した。無花果の木や、庭中の植物が、狂女の髪のように乱れ狂っています。つづいて一閃また一閃。その断続的な光茫の中に、

「オヤ？」

木原さんは、妙なものを発見しました。動くものです、すでに河面のように、まっ白く水のたまった地面を、ゆっくりと動いてくるものを、よく見きわめようと、一点を凝視した木原さんは、思わず声をあげるところでした。

それは人間でした。地面に四つばいになり、ゆっくりと、しかし迷わず一直線に、木原さんのいる窓に向って進んでくるのです。

そこまで見届けた瞬間、木原さんはそれがサトルにちがいないと確信したのです。判断力があつたのは、そこまでです。あとは夢中で、かけこんできたというわけですね。このとき、一瞬をさかいに雨と風はピタリとやみ美しい月さえ出ていました。死体をさえマクラにすると自称する小説家は、口ほどもなく、まだオドオドと落着かない様子をしていましたが、

「ちょっと待ってください」

書斎にひつ返して行きました。が、すぐ戻ってきて、

「なんでもない。おかしいなあ。たしかにこの目で見たんだが……」

それから、

「ちょうど、こんな風でしたよ。ホラ」

畳の上に四つ這いになると、妙な目つきをして、ソロソロ、私の方へすすんでくるのです。今度は、私が怖がる番でした。木原さんの様子が、真に迫っていたからです。そのうち、私はハッとある事に気がつきました。木原さんの態度が、冗談にしては、少し度がすぎているように思えたのです。

木原さんは、

「コワくて。コワくて……」

いかにもコワそうな、泣き出しそうなふるえ声を出しながら、四つばいでジリジリと肉迫して来ます。

「コワくて。コワくて」

狂ったな此の人は！ 私は直感しました。しかし、木原さんは、狂ったものではありませんでした。幻覚に見たサトルの真似をして、いるうちに、夜の悪い精霊が、その精神にのり移ってしまったのです。木原さんの意図は

特集 あぶちく☆みすてりい

もう明瞭でした。ニッチャリとアブラの浮いた、淫らっぽい顔が、その意図を物語っています。

「コワあくて。コワあくて」

如何に悪食の小説家とはいえ、この夜ふけに、一人居の老女を理不尽な！ 気がつくとは、私に、迫ってくる木原さんの顔を防ごうとするように、腕を自分の顔の前でくの字に折り曲げ、おそいかかる毒蛾でもおい払おうとするような動作を無意識で繰り返していたのです。それが、どんなに無意味な動作であるかを、百も承知の上で……

木原さんはあくる日、ちょっと旅行をしてくる、といって普通の折靴を持っただけで、ブラリと出てゆきました。木原さんの自制でこの六十ちかい老女は、どうやら恥をかかずにすんだのです。もとはといえば、どう何しなくても、私がお婆さんすぎたということがすべてを無事に終らせた原因だったかも知れません。

四、五日すると、木原さんから一通の分厚な封書が届きました。いままでの礼を述べ、近日中に荷物を引取りにゆくから、よろしく頼む、と書いてあります。旅行にゆく、と言

い出した瞬間から、その事は予期していたので別に驚きはしませんでした。それよりも私を驚かせたのは、その後につづいている、木原さんの長い長い文章でした。それは、サトルが、自殺した心理の真相を、サトルの日記帳やスケッチ・ブックから類推したもので、便箋十枚くらいに及んでいます。ことに、私の心に強く触れたのは左のような件りです。

「サトル君のあのスケッチは、想像では描けないもので、モデルに依ったことは確かです。露台の女がその役割を、知らぬまにとめたでしょう。が、それはしよせん、白昼のポーズで、サトル君はさらにそれをつきつめてゆこうとした。それは、夜の秘められた肉体の構図の完成です。そして、サトル君はそれを果した。作品がそれを証明している。それを描いた何葉かのスケッチを見ているうちに、私はハッと一つのことにも思い当りました。そのすべてが、一様に被写体に対して同じ角度を持つている。そして、それは断じて想像画にはあり得ない、なまなましい現実性^{リアリティ}を表現しているのです。第一、女性との交渉の経験のないサトル君に、想像だけではゼツタイに描ける筈がないのです。サトル君は実見したのだ。それなら、あの身動きもできない重症人

に、どうしてその機会があったか。やはり貴女が想像したようにサトル君の肉体には、本人も気がつかない潜在的な可能性が残されていたのです。そして女体への衝動が、さらに制作への衝動がねむっているそれを呼び起した。ひそかに、トレーニングくらいはしたかも知れません。

そして、やろう、と決心した。日記の終末に記されてある決行！ の二字は、それを意味してはいなかったか」

ここまで読んで、私は膝頭がガクガクしてきました。木原さんの言おうとしていることの意味が、やっとわかりかけたからです。

「サトル君はついに決行した。ライフを賭けた大旅行に出発したのです。スケッチブックを携えて……。まず、窓を出て空地を横ぎりあの露台の下に到達する。それから必死の登はんです。サトル君のような人が、そんな放れ業を演ずるなぞ信じられませんが、人間はあるギリギリの関頭に立った時、可能性の限界を超えて飛躍するのです。そして、ついに二階の露台によじのぼることに成功したのです。それから、わななく足を踏みしめながら内部の様子を窺う。その晩は、ちようと旦那が来ていたのです。そしてサトル君は見てし

まった。みながら、その秘態を夢中でスケッチにうつし取った。それと同時に、ある一つの、絶望的な発見をした。それは、しよせん自分という人間は、こうした人生の快樂からはしめ出された、圏外の人間だ、ということ事です。はじめてかいま見た光景のすさまじさそしてそのショックが強ければ強いほど、絶望感も強かったのです。サトル君は、自分の生がまったく否定されたのを感じました。それから、ふたたび、危険を冒して帰路についた。なめくじのように緩慢な軌跡をひきながら、自分の窓にたどりつき、ベッドに戻った時は、もう空は白みかけていたかも知れませんが、サトル君は、ベッドにぐたりとなったまま、もう動く元氣もなかった。精魂をつかい果してしまったのです。そして、もっと悪いことは、なすべきすべての事は終わった、という救いようなない空虚感が徐々に意識を浸しつつあったことです。そこで、サトル君は、もう一勇氣ふるってスケッチ・ブックなどを隠す仕事をする、ふたたびベッドに戻る。あとは、サイミン剤を嚥下することだけでした。何時もの服薬とちがうことは、それが、ふたたび醒めることのないねむりだということでした」

木原さんの手紙はそこで終わっています。

サトルが暴風雨の中を窓に向って這ってくるところを、木原さんが幻覚に見たというのは、その時、もう木原さんの頭の中に、手紙のような推論ができていたせいかも知れません。

そしてその推論をたしかめるために、木原さんは、サトルがしたように窓を抜け、空地を横切り、あの家の露台によじのぼって見たのかも知れませんでした。

サトルが見たあの女は、若い愛人をつくってサトルが死ぬとまもなく姿を消し、おどろいたことに、何喰わぬ顔でその後金にすわったのが、その妹だったことです。いつか木原さんがはじめて此の家に来た時、窓からかいま見、そして何時かの夜、こっそりと露台からのぞき見たかも知れないのは、この妹の方でした。

しかし、もうすべては終わったのです。木原さんがいなくなった後、すっかり閉め切られたままの窓の外では、無花果の木が、大きな実をつけはじめていました。ようやく、秋も深くなろうとしていたのです。

次号予告

アフチック・ミステリー

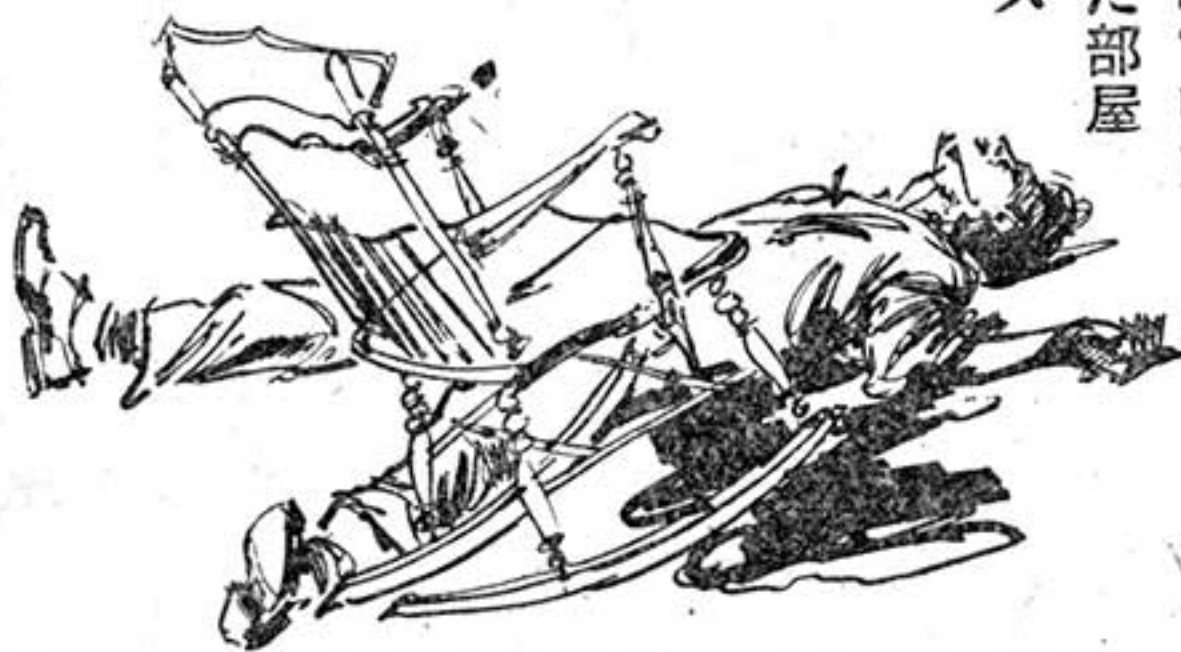
偽装殺人

三宅 一朗

犯人は自分を殺したか？ 犯人が犯人か？ 被害者が犯人か？ 男たらしの女は殺されていた。

鍵のかかった部屋に陰々とガスストーブが燃えて……

次号掲載!! 御期待ください!!



殺意の黒白

|| あぶちっく・みすてりい ||



宇治川 龍

竹中 英二郎・画

プロロオグ

袋小路といつては正確でない。家と家のあわいの、人間がやっと一人通れるほどの隙間口に立って浩は油断なく道に眼を光らせ乍らポケットの中の札を指先でまさぐっていた。

一枚、二枚、しめて十枚——一万円だ。

こんなことは半年ぶりだった。もっとも一万円のうちの二割は案内役の勘太にやる約束。差しひき八千円になり、譲治にその中から千円やれば、手取りは七千円。まあまあ悪くはない。

ちらりと浩はむきをかえ、家の二階へ一瞥くれた。むろん、外へ灯はもれていない。だが、最後に案内されてきた六十がらみの爺が上ってからもう十分はたっている。間違いない始まっている頃だ。

いつもそうなのだが、浩は始まったと思う

頃になると、急に身体の充血を自覚する。と同時に、頭の中でその場の進行状態を描き、浩はほっと大きく溜息をつく。

その場の進行といっても、筋は千遍一律。段取りは馬鹿暗記のように、何度でも頭の中で反芻できるのだ。

灯といえば、二燭の青電球のついている電気スタンドが一つだけ。

客はいつもその電気スタンドを丸く囲むように坐っている。お互い同志の顔を誰だっで見られたくないから、上る前に目のところだけ空いているマスクを浩は客に渡してやる。

そんなマスクをかけた客が五人、そして五人が五人マスクのかげから眼をすえて、すぐ目前一米ほどのところで演じられているものを見ているのだ。

薬を連用しだしてから譲治のもちがよくなった。もつともこういったのは浩でなく、相手役をつとめている浩の女房のマサミ。もとストリップアをしていただけに、マサミの身体はグラマー・ガールに負けはとらぬ立派さ。

客の方にしても、高いときは二千円から、いくら安くても千円はとられるのであり、五分や十分で終ってしまつては文句をいう。譲治に薬をすすめたのはマサミだと浩は睨んでいる。薬の効用で、譲治はこのごろ少くとも二十分は相手してられるようだ。

もうほつほつ最初に客の一人が階段をおりて来る時分だと、浩は後ずさりしながら家の方へ近付いて行つた。

丁度、表の戸へ浩が手をかけたと同時に、階段の踏み板をとんとんと踏んで誰かおりてきた。

「困るじゃないか、そいっというた筈だ。静かに降りてくれなきゃ危い」

降りてきたのはアロハにマンボ・ズボンの若者だった。その若者は、浩の顔をみるなり「おっさん、早く上つてくれ。危いのどうのつていってるときじゃない。大変だ」

浩はぎょっとしたが、全く狐につままれたようだった。裏から踏み込まれる心配は絶対がない。道といえば、この階段を上って行くのが唯一の道。

「どうしたんだ、兄さん」

「上つてくれよ、とにかく大変だ」

第一幕

狭い、上った二階の六畳に、客が他に四人、そしてマサミも、譲治もいた。だが四人の客は総立ちになり、部屋の隅に立ちすくんでかたまっていた。

マサミは、脱いだ長襦袢を抱えこむような姿勢で片膝立てて、これも部屋の隅にうずくまっていた。突確に、そして無意識に脅えでもするように長襦袢で前を蔽つてはいたが、両肩はむき出しだったし、片膝立ちでいるその姿に、浩は我々ら固唾をのむほどの凄壮美を感じた。

譲治は、白いシーツの上にうつ伏せになっていた。

そして、譲治がつつ伏している首のあたりのシーツが、青いスタンドの光で、どす黒くみえた。

いかがわしい見せ物の最中に殺人が起つた!! 犯人は五人の客の中にいる!

特集 あぶちく*みすりい

誰も口を開かなかった。

浩をひきずり上げるようにしたマンボ・ズボンの若者が、そのシーツのどす黒い部分を指さした。

「おっさん、断つとくが俺じゃねえぞ、その四人のうちの誰かだ」

シーツを指さしていた指先が、さっと立ちすくんでいる四人の一人を指した。

指さされたたん、その四人が一斉に口をひらきかけたが、浩は押し殺すような、ドスの利いた声で、

「口をきくな。さわぐとお互いのためにならねえ。動くんじゃねえぞ」

いいさま、ポケットへ手を入れると、小型のピストルを掴み出し、四人にむけた。

「まず坐れ、話を聞こう」

四人がへたへたと崩れるように坐ると、浩はその仲間へ入れというように、銃口でマンボ・スタイルの若者に命じた。

「俺じゃねえっていったじゃないか」

ぶつぶつ小声で喚いたが、浩の眼がキラリと光ると、肩をすくめ、若者も四人の仲間入りをした。

「おい、ちゃんと着物を着ろ」
今度はマサミにこう命じた。

「着るわ。でも、みんな眼をつむってくんなきやア」

ほんの十分か十五分まえまでは、恥らいもおろか、あんなことをしてみせたマサミがこうだったので、浩はふんと鼻で笑った。でも、可哀そうだと思ったのか、五人の客に向うと、

「すまねえ。ああ、いっている。俺がいいというまで眼をつむっててくれ」

最初にうなだれるように眼をつむったのは、六十がらみの爺だった。他の四人も眼をつむった。

こいつらの一人くらい、きつと薄眼でマサミの着衣をみているにちがいないと思ったが、浩は別に腹が立たなかった。それよりも、五人に背をむけて、おずおずマサミが着物を着ている間に、神妙にかしこまっている五人の客を仔細に観察した。

マンボ・ズボンに六十がらみの爺。年のころは三十くらいにみえる会社員風の男。もう一人は区議か何か、そういう役職についていると思える五十近い中年男。そしてもう一人は、浩には見当がついた。画描きか何か、そういう自由職業の男だ。年は三十二三といったところらしい。

「いいわ」

マサミの声に、浩が答えるようにいった。「眼をあけていいぜ」

幕 間

死んだ——いや、殺された譲治は別として浩とマサミはいうまでもないが、客の五人も或る意味では脛に傷もつ身といえた。ことが明るみに出ては、五人とも困ると口をそろえていった。

「じゃア、こうしようじゃないか。今夜のことは悪い夢をみたと思って、さっぱり忘れることにしちゃアどうだ」

賛成だというように無言でうなずいたのはマンボ・ズボンの若者だった。ふん、こいつ前科があるなど、浩は腹の中で呟いた。

「しかし君、忘れるといったって、その人をどうする気だ？」

譲治の死体を顎でしゃくって、区議風の男が口を出した。

「そこは相談だ」

「相談だって？」

「そうよ。忘れろっていったって、人間、そう簡単に忘れられるもんじゃねえ。一札入れてもらおうじゃないか」

「おっさん、何だい、一札って？」
マンボ・ズボンが口を尖らせた。

「見ざる、いわざる、聞かざるの一札よ。こ
っちだってこんなことが明るみに出ちゃア一
大事だ。俺たちはあとで直ぐ巢をかえる。俺
が口を割らねえってことくらいは、みんなに
分ってもらえると思う」

五人の客は、互いに顔をみあわせ、浩のい
った言葉の意味をのみこもうという様子をみ
せた。

「おい、紙と書くものをもつてこ
い」

浩は、自分のうしろにちんまり
坐っているマサミに命じた。

「まア、こんな風に書くんだな。
書くのはあんたにおねがいしよう
じゃねえか」

区議風の男へ、マサミがもつて
きた紙と万年筆を浩がわたした。

「どう書くのかね？」

「こてこて書くことはねえ。今日
の日づけを入れて、あんた方五人
の連署だ。いい加減な名を書いた
ってすまねえぜ。ありていに住所
と本名を書いて、捺印をおすんだ。」

いいな」

区議風の男が書きだした。

「断っておくが、この仏様を始末したら、あ
んな方に引きとってもらおう。だが、みなさん
にヒモをつけるぜ。でねえとヨタの住所を書
いたり、変名を使われる心配があるからな。
そうそう。俺は馬道の浩ってけちな男だ。名は
通っているし、仲間も大勢いる。お互いさま
よ。俺は警察の人間じゃねえから、誰がこい
つを殺ったか探ぐるつもりはない。探ぐって
突き出したってどうにもならねえ。こいつは
殺され損だし、殺した奴は殺し得ってことに
なるさ。どれみせな」
書いた紙に浩は目を通し、いいというよう
にうなずくと、

「さア順に住所と名を書くんだ」

第二幕

それから三日たって。

区議の丸茂伍作は、腹ばいになって、妾の
おしずが先刻枕元へおいて行った朝刊をひろ
げて読んでいた。

伍作の眼が三面記事のある見出しのところ
ではたと止った。

『隅田川に死体浮ぶ。身元不明の裸体男』

みなまで読まなくても伍作には分った。あ
の殺された男だ。とうとう死体が上ってしま
った。あの夜以来、伍作はこの妾宅に泊りき
りで自宅へ戻らなかつた。

馬道の浩という男がヒモをつけると脅した
が、本当に誰か自分を尾行していたのだろう
か？ 死体を川にしずめると、浩の指図で五
人は蜘蛛の子を散らすように八方に逃げた。

伍作は折よく来た流しのタクシイを止め
て、まっすぐおしずのいるこの妾宅へやって
きた。何かいいようのない興奮があとを引
き、狂ったようにおしずを抱いた。だが、お
しずを抱いていながら、おしずがあの見事な
肉体の女に思えてならなかつた。

「どうすればいいんだ？」

喫茶店の片隅でコーヒイをすすっていた春
日一郎が小さく呟いた。たつた今、身元不明
の裸体男の記事を新聞で読んだばかりだっ
た。電蓄がけたたましくジャズを奏でてい
る。一郎はかかえていたスケッチ・ブックを
そっとひろげた。そこには、女の姿態が何体
も描かれてあつた。一郎は女の名を知らない
が、描かれている裸女はみんなマサミそっく
り。あのショウの一瞬一瞬を一郎はあの次の

日から忘れてはなるものかというように、夢中になってスケッチ・ブックに描き止めていた。

「文鎮も上っただろうか？ 指紋は？」

集金の道、新聞社の横の新聞展示板をよみ乍ら、心の中で疑問を抱いていたのは、浩が六十がらみの爺だと思っていた、早川熊吉だった。浩の眼に狂いはなかった。宝積信用金庫の外交係をしている早川熊吉は六十一歳だった。殺された男の頭部を激打した兇器の文鎮に、もし指紋がついていたらと、熊吉はそれを案じた。だが、何かの探偵小説で、水中へおちると、兇器についている指紋が検出できないというのを読んだことを思いだし、熊吉はほっとした様子をした。

「だが、殺ったのは一体どいつだ？」

屋台のマーケットで酎を先刻からすすりつづけていた健が、考え乍ら首をひねった。健は今日もマンボ・ズボンにアロハ姿。

「とにかく、あつという間だったんだからな。暗くなつて、悲鳴とも何ともいえない呻きが聞こえたと思うと——」

田辺正人は、またそろばん玉を置きちがえてしまった。これというのも、あの裸体男の犯罪のせいだ。それに、先刻から正人はおちつかない。電話のベルが鳴るたびにぎよつとなるし、御面会ですと給仕が中へ入ってくる。と刑事がしらべにきたのではないかと胆がちちまる。

幕 間

浩とマサミは、あれ以来安宿^{どや}ずまい。約束だから勘太に二千円はやった。譲治にやらすにすんだから、八千円の手取り。マサミが五千円ほどへそくっていたので、固く食うだけで行けば、二人でどうにか半月はやって行ける。だが、半月たてばどうなるというのだ？

死体が上った以上、検察当局は当然捜査の手をのぼすにきまっている。布団皮から足がついてはと思い、布団皮はいで死体を綿につつんで重しをかけた。譲治はあのとときの姿だから真っ裸、身元は？ 多分分らない筈だ。第一、浩もマサミも、譲治の素姓を知らないくらいだから。

マサミが湯から戻ってきた。磨き立てて、生き生きとしている。浩はそんなマサミをみあげて渋い顔をした。女は魔物だ。この女も

そうだ。あれだけのことがあったのに、けろりん閑としている。殺されたのは、自分の相手をしていた男じゃないか。

「おい、坐れ」

坐り直して浩がいった。

「何よ、こわい眼をして！」

「お前、本当に誰が譲治を殺ったか知らねえのか？」

「何度同じことを聞くのよ。知らないっていったじゃないの」

「ふん」

「何がふんよ。誰だって好きこのんであんなことをやってるんじゃないのよ。お前さんのためを——」

「うまくいうぜ。本当に好きこのんでやってるんじゃないんだな？」

「よししてよ。誰があんな譲治に——」

「とほけるな。薬をやってもたせるようにしたのは、お前じゃないか」

「あたしばかりのせいじゃないわ。五分や十分じゃお客に申訳がないから、何とか考えろっていったのはどこの誰よ」

「そ、それは、そうだったが、何も——」

へどもどする浩を尻目にみて、マサミは立ち上ると、部屋の隅へ行つて床をとりだし

た。

床をしきおえると、流し目

で浩をみて、

「いいじ

やないの、死ぬ者貧乏よ。生きているうち楽しまなきゃ損よ」

片手で帯をとき乍ら、もう一方の片手をの

ばし、マサミは電気のスイッチをひねった。

第三幕

死体が上ってから十日たった。被害

者の身元不明のためといっ

て、モンタージュ写真

が新聞にのった。

だが、そのモ

ンタージュ

ユ写

真は讓治の顔とひどく似ていなかった。とい

うのは、死体を沈める前に、重しにする石

で、浩が顔面をつぶしたためだった。

丸茂区議は十日ぶりで自宅へ帰った。何か

おしずのところにいるのがうとましくなりは

じめたせいもあったし、丸茂自身の判断で

は、どうやら自分たちにとって事態が有利に

展開しそうな気がしたからだだった。この分

行くと、迷宮入りになるかもしれん——そう

思うと、不敵の笑いが片頬にうかんだ。

だが、その不敵な笑いが、あっという間に

消えてしまった。

邸の前で車がとまったとたん、ずっと車の

わきによってきた洋装の美女。

「おひさしぶりね」

女はわざと運転手に聞こえよがしにいう

と、車の戸をあけてのり込んできた。

「運転手さん、銀座へやって頂戴。ね

え、パパいいでしょう、一時間くらい

？」

頬をよせるように女は迫り乍らそう

いった。

「う、うん、銀座か？」

一目で丸茂はこの女が、あの晩自分たちの
眼を、ほんの五六分ほど楽しませてくれた女



だということが分った。ぶーんと香水の匂いが鼻をついた。女は腿で丸茂の腿をこづく。「お酒のんで踊りましょうよ」といった。

幕 間

スカートを脱いでいるマサミのそばで、浩はもうマサミのハンドバッグをひらき、中から札をつかみ出していた。

「あの区議、ちよろいの何のって。すっかり御機嫌になって、これは君の小づかいだよだなんて。よっぽど持っているとみえる。区議の月給っていくら位、あんだ？」

「知らねえ」

ぶすつとこう答えて、浩は千円札を数えおえた。

「十七枚しかねえじゃないか。三千円どうしたんだ、二万円よこしたと——」

「これ買って、これも買ったのよ」

マサミはナイロンのスリッパのはしをつまむと、前をめぐってみせた。

「馬鹿！ 下着やパンツに三千円も出すなんて、阿呆」

「たまには私の買いたいもん買わせてよ。あたしの口一つで二万円になったんじゃないわ。女の買い物に口を出すもんじゃないわ」

「ふん！」

鼻でこう笑ったが、浩は腹の中でペロリと舌を出した。わるい商売じゃない。エロ・シヨウより率もいいし、危くない。やっぱ一札とっておいてよかった。あの一札は金の成る木も同然だ。

だが、区議はいいとして、あとの四人はどうだ？

マンボの若者は、逆さにふっても鼻血も出そうに思えない。あのとときの二千元だって、おそらくまともに稼いだ金じゃあるまい。

雑誌の画描きだといった春日一郎って奴でもボチボチだ。

まア会社員の田辺か、信用組合の早川って爺なら少しはもっているだろう。もっとも、もっていないといったって、脅しは利く。マサミが、殺した奴が誰だか知っていると脅せばいいんだ。つとめの方に一件がばれば、クビになる恐れがある。

「何よ、一人でニヤニヤして。ねえ、久しぶりにウナ井でも食べようよ」

いつの間にか浴衣に着かえたマサミが、ペたりと浩のそばへ横ずわりにすわると、甘ったるい声でこういった。

第四幕

「御相談申し上げたき事有之、恐縮乍ら指定の日時に左記場所まで万障おくり合わせの上御来駕願上候」

こんな文面の文句が、春日一郎の家へ届いた日、同文の書面を早川熊吉も、田辺正人も、マンボの健も受けとった。差出し人は丸茂伍作だった。

同じ日、やはり同文の書面を受けとった馬道の浩は、それをマサミにつきつけて睨んだ。

「お前、この宿の住所を丸茂に教えたのか、馬鹿」

「だって仕方がないじゃないの。もう十万円も貰いでくれた丸茂だもの。それに、こっちは人殺しに關係はないんだし——」

「それはそうだが、一体、丸茂の奴、何を企らんだんだろう？」

「行ってみりゃア分るさ」

マンボの健は、相変らず酎をすすって一人つぶやいていた。

「あの女も来るのかな？」

スケッチ・ブックをひらいて、画家の春日一郎は自分の描いたマサミのヌードを食い入るようにみいていた。

「やり切れない。自殺したい位だ」

マサミにたかられ、二万円ほど絞られた田辺正人が、又、こういう乍らそろばん玉をはじき損ねた。

「ひよっとすると、この丸茂って男は、あの晩の一同をよびよせて、名探偵ぶりを発揮するのかもしれない」

やはりマユミに脅されて、虎の子の貯金を五度にわたって三万円いかれた早川熊吉は、こう呟くと便所へ立って行った。

幕 間

その指定の場所は、国電E駅の近くにある、古色蒼然たる建物だった。建物そのものは由緒付きだった。何でも江戸時代に、目宮新蔵という侍が建てたものだそうで、斬り込みにそなえ、居間と居間の境が段ちがいになっていた。だから、うっかり次の間へ足をふみ入るとき、よほど注意しないと、誰でも踏みちがえて前によろける。

玄関を入って、鍵の手のようにくねくねくねって廊下を大分行った奥の一室が、会合の場所だった。

指定の時間より三十分ほど早く、浩とマサミはそこへ着いてしまった。

「ああ、丁度よかった。あんた方に早く来てもらって助かった。一寸こっちへ来て下さい」

玄関で案内を乞うと、すぐ丸茂伍作がここにこ笑い乍ら二人の前に姿を現わした。

それから二十分ほどしてマンボの健が、おそるおそるといった姿でやってきた。つづいて春日一郎、早川熊吉、田辺正人の順で、役者の顔は全部定刻までには揃った。

終 幕

灯りはついてしたが、応接間はうす暗かった。遠くで柱時計が、ポーンポーンと八時を告げていた。

「——というわけで、今夜みなさんにお集りねがったわけです。馬道の浩さんとマサミさんも別室にみえています。ところで、ざくばらんに申し上げますが、私はとても我慢できなくなりました」

そういつて丸茂伍作は、他の四人の顔を順

ぐりにみまわした。

「運がわるいといえはそれまでです。だが、もうこれ以上、あの夫婦に絞られるのはやり切れない。それというのも、おそろくあの夫婦というより、この五人のうちの犯人のせいなのだ。たしかに犯人はこの五人のうちの一人にちがいない。御承知のように、殺人のあった部屋へは外部から潜入できない。我々五人は、あのちっぽけなスタンドを丸く囲んで熱心に見物していた」

こういつて丸茂は、自分で熱心といったのをあざ笑うように頬を綻ばせた。

「あれが始まってから何分くらいだったか、私は正確にいえない。だが、おそらく五分かそこらたっていると思う。あつという間にスタンドの灯りが消えた。我々は目つぶしを食ったように目をぱくらせた。そのすきに犯人がそっと立ち上ると、おちていた文鎮を握って、譲治という男の頭に一撃をくわせた。(電気をつけろ!)と怒鳴ったのは、君だったね?」

マンボの健を指さして丸茂がいうと、
「そうさ。どなったよ。どなたただけさ。誰がつけたか俺は知らねえ」
「つけたのは僕です」

田辺正人だった。

「手さぐりでスタンドのコードをひいてみると、さしこみが手にふれました。僕は、誰かが足でコードを蹴って、さし込みが外れたと思ったんで、マッチをすって、さし込みをコンセントにつけて灯りをつけたんです」

「田辺さんのいう通りだ」

丸茂は又一同の顔をみまわした。

「灯りがついたときには兇行は終わっていた。そして五人は五人とも、元のすわっていた位置にいた。私に分らないのは動機だ。つまり殺人の動機なのだ。何故犯人はあの男を殺したのだろう？ この動機が分りさえすれば誰が犯人か分る。私はそう思って、私なりにこっさりしらべてみたのだが、動機が全くつかめない。そこで、今夜みなさんにわざわざお集りいただいたというわけだが、これからどういうことが始まるかは、犯人だけには見当がついていると思う」

ここで口を切ると、順々に四人の顔を丸茂はみわたした。

春日一郎は一人こっくりうなずいた。早川熊吉は首をかしげていた。田辺正人は右手をぎゅっと握りしめて、丸茂の顔を凝視した。マンボの健は天井をむいて、煙草の輪を、ぼ

っかりぼっかり吹き上げていた。

暗 転

「元気出さないよ、あの丸茂って男、仲々話がわかるじゃないの。出演料、二万円前払いでくれたわ。元気出すのよ」

万遍なく肌に白粉を叩きつけ乍ら、マサミが浩にはなしかけた。

浩はふんといった顔で、相変らずウイスキーをぐいぐい呷っていた。

「元気つけにのむのもいいけど、好い加減にしないと駄目にならない？」

「うるさい」

「おや、あんたでも照れるのね。ひとにはさんさん恥かしい思いをさせて稼がせていた癖に——」

四人がそろそろ前、マサ

ミと浩は一室に招

かれて丸茂か

ら相談を

うけた。

はじ

めはマサミも尻込んだ。

「だって、もう一度とおっしゃっても——」

「犯人をつかまえる自信があるんだ。協力してほしい。礼はする」

たのみこまれ、浩も渋々承諾した。だが、承諾してしまった後で、慄然とした。ひょっとして、何かの手ちがい、自分も譲治のよう

に殺されてしまうのじゃないだろうか？ 丸茂はいかにも犯人は自分以外の四人のよう

にいつているが、丸茂とて危ないものだ。マ

サミは口一つで丸茂から金をせしめたといっ

ているが当てになるものではない。もし丸茂

がマサミの肉体に執着をもって、今夜のこと

を企んだとしたら、自分の命は危い！

「早く支度しなきゃア、あと十分でみんなが



ここへ来てよ」

大柄の派手な長襦袢姿に着かえたマサミが
そういつて寄つてくると、手をのばしてウィ
スキー・グラスをとりあげた。

「私にも一杯頂戴。私だって、ねえ、あんた
と人前であんなことをするの、今夜が始めて
だもの——」

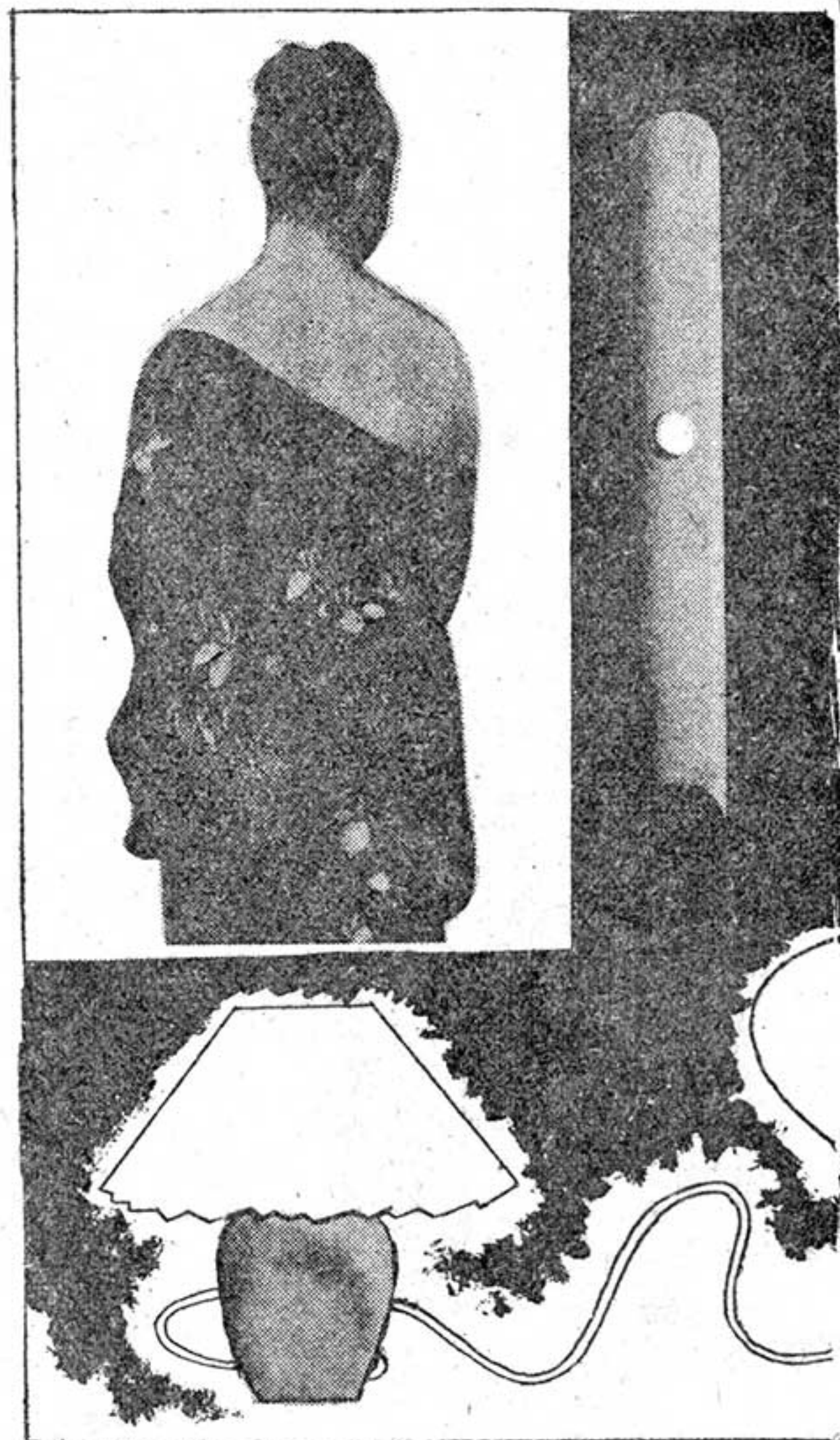
暗 転

左から坐った順に部屋へ入って下さい——
とこう丸茂にいわれたので、まず一番先きに
その奥の一室へ足をふみ入れたのは早川熊吉
だった。そして熊吉は闕のところできょつと
なつて足をとめた。だから早川のあとについ
てきた田辺正人がその背につき当り、熊吉の
肩ごしに部屋の中をのぞいたが、正人もやは
りきょつとして立ちすくんだ。

きょつとしたのはこの二人だけではなかつ
た。その後から来た春日一郎も、マンボの健
も一斉に闕口で立ちすくんだ。

というのは、その部屋の有様が、あの晩と
全くそっくりそのままだったからだ。

奥に床がのべてあり、白いシーツの敷いて
あるそこへ、長襦袢姿のマサミが腹ばいに横
になっていたし、青い小さな電球のついたス



タンドが一つおいてあったし、スタンドから
一米ほどはなれた処に、兇行につかわれた文
鎮とよく似た文鎮が一つおいてあったから
だ。

「さア、早川さんから順に席におつき下さい」

丸茂の声に促がされ、左から順に、早川、
田辺、春日、マンボの健、そして丸茂の五人
がスタンドを中心にして半円を描いて座につ
いた。

丸茂はちらりと腕時計をみると、マサミに

声をかけた。

「どうぞ始めて下さい」

マサミは大した役者だった。お客の方をみ
ると、にこりと笑ってみせてから芝居にとり
かかった。

筋立ては全くありふれていた。マサミの役
はお妾。そして讓治のやっていた役は強盗な
のである。その強盗を今夜は亭主の浩が演じ
るのだ。

はじめの一分ほどはマサミがちらちらと太

腿をちらつかせ、いかにも寝苦しくて眠られないというしぐさをしてみせる。そこへ強盗が忍びこんできて、出刃で脅かしてという寸法。もっとも出刃は本物ではなく、銀紙を貼った木製。

忍びこんできた浩の強盗は、マサミに出刃をつきつけたが、手先が小刻みにふるえていた。

見ている五人は、ここらあたりまでは前にみたこともあったし、それに、互いに索制しあい、横眼でとなりの人間の様子をうかがっているの、マサミの方では張りあいがなかった。

小声で浩の耳に口をつけると「うまくやんなきゃ駄目よ。お客をのせなきゃア」と囁いた。

浩も、はじめのうちは芝居をする気でいたが、こわいわれると意地になった。よし、俺が一世一代の見世場だ——こう思うと熱が入ってきた。それにウィスキーの酔いがまわってきた。マサミの顔をみているうちに、これが芝居か、それとも現実かと、浩の意識が混濁しはじめた。

それにつれて、みている五人の目が、次第に演技に吸いつけられていった。

全く凄まじい見ものだった。

だが、五人のうちの唯一人だけは目をマサミたちにむけていながら、耳を油断なくすましていた。その男は、やがて来るべきはずの瞬間を待ちかまえていたのである。

と、いきなり浩が大声で叫んだ。

「やっぱり貴様は——」

これは筋書にない文句だった。すべてこういうものはパントマイムに定まっている。その戒律を破って浩がどなったのには、浩だけに分かることがあったからだった。

「く、くるしい——。よしして」

首をしめられてマサミが悲鳴をあげた。

そのとんだった。

かちやり——と小さな音がすると同時に、

パツとスタンドの灯りがきえた。

マサミが、きゃーと大声をあげた。

が、スタンドの灯が消えて二秒か三秒たたぬうち、パツと頭上の電灯があかあかと灯った。

そして、文鎮を握って仁王立ちに立ち上がった男。それは早川熊吉だった。

「やっぱり、あんただったんだな」

熊吉の手から文鎮がポトリと下へ落ちた。

「そうだ。私だった。そして、今夜も、この

灯りがつかなければ、私はこの男も殺していたはずだ」

どっかりと座ると、両手で熊吉は顔を蔽った、マサミはあわてて後向きになって長襦袢に手をのばした。その背をかばうように浩が立つと、長襦袢をマサミに着せかけてやった。

田辺正人も、春日一郎も、本当にポカンと口をあけていた。ただマンボの健だけが、にやにや顎をなでながら、横眼で身づくろいをしているマサミたちの様子をうかがっていた。

「早川さん、どうしてあんた、あの男を殺したんだ。訳が分らない」

熊吉は両手で蔽っていた顔をあげた。頬が涙でぐっしりと濡れていた。

「私は、あの男に何の恨みもなかった」

「恨みがないのに、どうして殺したんだ」

マンボの健が、えらそうな顔で聞いた。

「あの女の人は、死んだ娘のチヅにそっくりなんです。だから——」

「だから、どうなんだよオ」

「三年前のことです。チヅは十八でした。夏だったの、縁側の戸をしめわすれていました。二人組の強盗が入ってきて、私たち夫婦をしぼりあげ、みている前でチヅを——。チヅは十八でした。チヅは私たちの縄もとか

ず、たださようならといっただけで、夜の白あけの縁側から出て行きました。ひるごろ、鎮守の池に、チズの死骸が上ったんです。だから私は、芝居だと思ってはいたのですが、何か頭に血がかった上りました。みているうちに、あのマサミさんという女の人が娘のチズで、あの男が強盗のような気がして、それで文鎮をつかむと――」

がたがた歯を鳴らしたのはマサミだった。いきなり、すっと熊吉が立ち上ったので田辺と春日は、まるで自分たちが襲われてもするように、尻さまに身を引いた。

しかし、熊吉は力なく首を左右にふった。「警察に自首します。それから、みなさん方には、絶対に御迷惑はかけません、心配しないで下さい」

こういうとふらふらと部屋を出て行った。マンボの健が後を追おうとするのを、丸茂が腕をつかんでとめた。

「放つといてやれ、気の毒な人だ」

マンボの健は不服そうな顔をしたが、又々腰を下すと、今度はマサミと浩の方をみてこんなことをいった。

「馬道の兄さん。だけど、凄かったな。ねえ、あんなのタダでみせてもらっていいのかい？」

次号予告

連載時代伝奇小説

天

弁

青

刺

三 節 林 中

★四郎兵衛の残した刺青番付は何を意味するか？ 名を連ねた娘達の、白玉の肌にうねる蛇の刺青は何を語る？ 女忍者千世の肌にも同じ蛇身の鱗が光る！ 百万両の謎を読み解くものは果して何びとか？ 波乱万丈の次号を御期待ください！





ある不思議な告白

戀人形

鳴海 玄吉

都築 峰子・画

あるデパートで、マネキン人形を突き倒して、にげ出した男があった。倒れた人形が、床の上に碎け散る音で、大勢の人がいっせいにそちをふりむいた。

「あつ」

という、女店員のさけび声も聴えたようである。

人々の視線の中を、一人のみすぼらしい身なりをした、ちょっと何かの外交員といった風態の初老の男が、背を蹴めるようにして、にげてゆくところだった。男は、ちょうど階段の手すりのところへとびつくようにしてそれを伝って階下へ駆け下りようとしていた。

「あ、あの男だ。あの男をつかまえろ！」

デパートの男店員が、その男を指してさげんだ。まるで、その声に背中をつきとばされたように、初老の男は足をすべらせて中段の踊り場まで転がり落ち、そこで、からだを打って起き上れずになつているところを、駆けつけたデパートの屈強な警備員に、難なく押えられ

てしまった。人形をコワすのは、それがはじめてでは、なかったらしい。警察に引かれていった男は、取調べの刑事に、

「おっさん。いったい、どうしたっていうのかね。いい年をして、イタズラも度がすぎるじゃないか」

あきれ顔で問いつめられて、

「じつは、因果な話なんです……」

と言って語り出したのが次のような話である。

私がよく用もないのにデパートをブラつくのは、人形に逢いにゆくんです。その時の、ちよつと胸がパタつくような感じは、若い時、好きな女の子に逢いにゆく気持と、よく似ています。似ているが、いくらか、ちがったところもあります。まあ、しいて言えば、張見世のお女郎さんを物色する時の、なんともいえぬなまめき立った胸のうちに、似かよったものがあると言えましょうか。そして、私は気に入った人形の前に立つと、思いをこめてじいっとそれを見つめる。そんな時、ヒョイと妙な錯覚が起るのです。人形に視線の焦点

が合っているのです、そのほかのところは、視野のはずれにボヤーツとぼやけて、なにかのかたまりが、にぶく動いているように見えるだけです。それが、ある瞬間に、その動きがピタリと静止したかと思うと、それにつれてデパート中の音響が、スーッと吸いこまれるように消えてしまう。その時は、メージャーを持って何か話しをしていた女店員も、売場と売場のあいだを忙しげに行き来していた女の客も、ピタリとその動きをやめて化石してしまう。今はこんな故障はめったにないが、昔は場末の映画館などで、映写機の故障でそれまで動いていた画面が、ピタリと貼りついたように動かなくなることが、よくあったでしょう。あの瞬間の、時間の流れが停止してしまったような、奇妙に錯覚的な感じ——あれなんです。そして、デパートという巨大な伽藍の内部が、無数の化石した人形によって充されたまま、しんと静まりかえってしまふんです。もっとも、この状態はそう長くはつづかない。ほんの一秒の半分くらいのあいだです。あとはまたすぐ、あのまひるのデパートの喧騒がよみがえってくる。生き生きと

★人形に魂の宿る瞬間のおのき！私はその瞬間を食る為にのみ生きているのだ！

画面が動き出すようにね。が、私は、人形と人間が織りなす、この錯覚的な一瞬が好きで、よく用もないのにデパートをブラつくんです。そして思うんです。たしかに、人形は生きていて、とね。一個の、いや一人の人形と対している時もそうですが、人形が林のように静まりかえって列を作っているあいだを、一人でゆつくり歩いてごらん下さい。たしかに人形は生きている、ということが実感としてわかります。耳をすますと、人形が話しかけたり、人形同志で話し合っているコトバが聴えるんですね。よく、味気ない女のことを、まるで人形でも抱いたようだ、などと言いますが、こんなまちがった、そして人形を冒瀆する表現はないですね。あれは、人形のなまめかしさを知らない人の言うことです。じつは人形ほど愛すべく、そしてなまめかしいものはないのです。

私はもと、Sデパートの夜間守衛をしていました。がらんと人気のなくなった深夜のデパートというやつは、一人で見廻っているぶんには、決して気持のいいものではありません。チャップリンの「モダン・タイムス」には、デパートの守衛に備われたチャップリン

が、深夜のデパートで、大乱痴氣を演ずるく
だりがありますが、あの中にもある程度、深
夜のデパートの空気というものが出ておりま
すが、じっさいは、もっと陰気なものです。

ひるまの、営業時間中のデパートを盛り場
にたとえれば、深夜のデパートは、墓場のよ
うなものです。盛り場と、墓場―じっさい此
の形容はピッタリ来ます。

夜のデパートは、いろんな亡霊がひしめい
ています。鬼哭愁々、という言葉があります
ね。古戦場などに立って、そこで亡びた敗軍
の将兵の魂魄が立ちまよっていて、鬼が哭く
ような、愁々たる風音に、思わず身のひきし
まるような淋しさを感じるものですが、デパ
ートののは、もっと人間くさいのです。

夜、ひっそりとした売場に立って、じっと
耳をすますと、

「ああ買いたい。買いたい」

または、

「ああ欲しい。欲しい」

という、女の執念の声が、野末を吹くうら
枯れた風のように、どこからともなく聴えだ
し、だんだん大きくなったかと思うと、今度
はまた細くかすれてゆき、山彦のような反響
を残して闇の中に消えてゆくのです。これは

生きた亡霊というわけですが、すさまじい女
の執念の声をきいていると、やはり空恐ろし
い気分にとらわれてしまいます。

もう一つ―戦慄を禁ずることが出来ないの
は、懐中電燈の光茫の中に、次々と浮びあが
るマネキン人形の群です。その、蒼白い微笑
の翳を見ていると、いまにも動き出すような
錯覚にとらわれ、足がすくんだようになった
ものでした。ある時などは、人形の目のあた
りが、まばたきでもしたように、黒々と動い
たので、

「あっ」

とさけんで、思わず懐中電燈をとり落しそ
うになりました。よくよく見ると、なんのこ
とはない、どこから迷いこんだ一匹の黒っ
ぽい蛾が、マネキン人形の顔で翅を休めてい
たのが、電燈の光に射られて、少し動いたの
です。それがいかにもまばたきでもしたよう
に見えたのでした。そうでなくても、電燈の光
源が移動するにつれて、人形の顔の陰影が複
雑なくあいに変化するの、いかにも怪奇で
神秘的な感じをあたえます。私はそうした人
形の、黙々たる像に送迎されながら、ゆっく
りとその前を過ぎてゆくのでした。

しかし、人間というものは、およそどんな

状態にでも慣れてしまうものです。月日の
たつうち、はじめは空恐ろしかった、あの夜
の人形の群が、それほどの感じを呼び起さな
くなり、かえって、ある親しみさえ感じられ
るようになっていたのです。

私は、そうした人形の一つ一つに、自分だ
けで通用する名前をつけていました。そして
「今晚は、P子ちゃん。相変らず元気かね」
と言ったり、

「T子ちゃん。御機嫌はどうかね。いつもお
めかしさんだなあ」

そっと肩を叩いたりして、人形に親愛の情
をしめすのです。

もちろん、相手は生命のない物体ですから
それに対して、どうこうという反応があるわ
けではありません。

しかし、そのうちに、ある変化が起ってき
ました。私は、人形たちの表情に、時によっ
て、ごくかすかではあるが、一種の感情の動
きがあらわれているのに、気がつきました。

ちよっと見ただけでは、それは、判りませ
ん。しかし、じっと思いをひそめ、人形の心
によりそうようにして、その顔を見ていると、
たしかにそれが感じられるのです。同じ表情
でありながら、ある時は憂わしげにくもり、

ある時は、さえざえとしている、といったぐあいに――。

「不思議なことも、あればあるものだ」

私は、はじめ、それは自分の気のせいで、つまり、こっちの気持の照り翳りで、人形の顔がいろんなふうに見えるのかとも思いましたが、どうもそうではないらしい。ある時、ある人形なぞは、どうしても泣いているような顔にしか見えないのです。はっ、と思って、そばへ寄ってよくたしかめて見ると、いつもと変りない、あたりまえの顔になってしまします。

つまり、こっちが意識してはいけないので、何気なくフト見た瞬間に、人形のほんとうの心なり表情がつかめるのでしよう。

「これは、おそろしいものだ」

私はあらためて、人形の魂ということを考えて見たのです。もとはといえば、一塊りの土偶にすぎないものが、魂をもち、心をもつようになるまでには、いったいどのくらいの人間の手に触れることでしょう。

昔の人形師が、一体の人形に精魂をうちこんだりしたのとはちがって、いまは機械的にある程度の大量生産もできるような仕組みになっているのですが、それにしても、他の物品

なんか比べると、その製作の過程には、やはり神秘的な要素が多いのです。人の形をつくるということ、つまり造化ということは、すでに神の領域なのです。一かたまりの土くれが、いろんな段階を経て徐々に成型され次第に人の形を整えてゆく時の、見ていてゾクゾクするような感じ――。

あの段階のどこかで、作っている人さえ知らないまに、人形の心が宿ってしまうにちがいないのです。人間のかたち――つまり器が形をととのえたたたんに、心と呼ぶのです。器はみたされねばならない、形あるものは心を欲するのです。

ひるまデパートにくる女の客なぞ、マネキン人形を見て、

「まあ、素敵！」

とは思うのでしようが、それに心を感じる者はいないでしょう。これは無理もない話で日中の喧騒の中では、人形の心は死んでいるのです。感じようとしても感じられない。それが、深更になり、あたりがひっそりしてくると、どこからともなく精霊が下りて来て、人形に宿るのです。

たった一度だけ、私は、そうした精霊の宿

りぎわの、異様にざわめく気配を、この耳で感じ取ったことがありました。叢林のように立っている人形たちのあいだから、

「さあ、私たちの時間よ。早く仕度をしましよう」

うきうきとはずむ吐息や、衣ずれの音や、そうしたものが一緒になったざわめきが、風のように起っていたのです。それは、なんともいえない、胸騒ぎのするように異様な、同時に、この上もなく、なまめかしい一瞬でした。私は、ちがう次元の中に迷いこんできたような不思議な心もちで、しばらく呆然として、その気配に聴き惚れていたのです。

人形が一つだけ、ポツンと置かれていたのでは、こういうことはありません。やはり、人形が群棲している場所、たとえばデパートとか、人形製作所の置場だとかでないと、こういう現象は起らないのです。いっぽんの樹よりたくさんの樹、ちいさい山より深い山――それによって生ずる一種の山気のようなもの、それに似たようなものだと言えるでしょう。

私が、そうして人形の心を感じるようになるまでには、前にも申上げたように、かなりの月日が経っていました。そのあいだには、

人形もかなり入れ替っていました。あたらしい人形をむかえるのはたのしいが、反対に、古い馴染になった人形と別れるのは、なんとも言えず淋しいものです。古い、用済みになった人形は、昨日まで美々しくまとっていた衣裳をはがれて、来た時と同じように素裸にされ、払い下げられるか、廃品置場に放り込まれるかしきありません。人形の顔かたちにも流行がはげしいので、いったん、そうした処遇をうけた人形が、飾窓なり売場なりに、再度のお目見得をするということは、まずありません。思えばハカない人形の命でした。

こんなことを思うのは、いつか私が人形を恋し、それに執着するようになっていたからです。私はこのデパートの数多い人形の中でも、和服売場にあるP子を、とくに偏愛していました。P子というのは、むろん私がたわむれにつけた名前です。

和服のマネキンに使われる人形は、昔ながらの古風な顔かたちをした、いかにも人形らしい人形と相場がきまっていたものですが、このごろは洋風の、大胆な八頭身美人が、この領域にもどんどん進出しています。P子やはり、そうした新しい傾向に属する人形の

一つでした。

私は、たくさんならんでいる人形を、遠くから一目見ただけで、

「あれがP子だ」

とわかりました。そして、ゆっくりと、そのそばに近づいてゆきます。P子の前に立つと、なんともいえない切ない思いがたかぶってきて、息苦しくなってきました。

「P子や。今晚は……」

私は、ねっとり塗りこめるような愛の調子で、そうささやきます。

「今晚は。パパ」

P子も、そう言っているようです。P子是人形ながら、まだ二十一、二才の娘ざかりですし、私はもう五十に手の届こうという年輩ですから、おたがいこんな呼びかけが自然なものでした。

私は、妻も子もない、まったく孤独な男です。十年ほど前には、ある女と夫婦生活をしていたのですが、その女に裏切られて、女に対しては強い不信を抱くようになっていました。孤独な生活も、もう十年つづく、すっかり身についたものになってしまっています。人間に対する私の心は、かたくなに閉ざれてゆく一方です。そのかわりに人形

を愛するというのでは、話があんまりうまざるようですが、たしかに、私の性情のなかには、人形愛とでもいえる、一種の傾向があったのは事実でした。

夫婦生活などというのは、いろんな人間関係のなかでも、いちばんややこしいものですし、生きた人間を扱うことの面倒くささに、

「ああ、もうたくさんだ。勝手にしろ！」
投げ出したくなるのが、一再ではありませんでした。妻は結果的には、私を裏切った恰好ですが、彼女を走らせた原因の一つは、そうした私の性情のなかにあったのかも知れません。

ところが、デパートに勤めるようになってから、それまではハッキリ意識したことのない人形愛が、私のなかで、目覚めて来たのです。

「人形など愛して、何が面白いのだ。人間の女の泣いたり笑ったりは、時に手こずることもあるが、そのためにこそ色事のおもしろさもあるのに……」

と、人は言うかも知れません。が、それは人形愛を知らない人のいうことです。いったん、人形愛に魂を奪われたら、もう悪魔の虜になったものと同じことです。もし私に、生きた

人間の愛人があったとすれば、私は、
「人形になれ！」

呪いをかけて、彼女を封じこめ、化石させてしまったにちがいありません。

私は人形に親しんでくると、ずいぶんイタズラもしました。突然、着ているものを下からハグって、恥かしい恰好にしてやるのです。人間の女なら、

「キャッ！」

と悲鳴をあげたり、大騒ぎをするところですよ。しかし、人形は、悲しげに眉根をよせ、苦悶のあまり心もち全身をよじるようにするだけで、人間のように声を立てたりはしません。その様子は、むき出しにされた、のっぺらポールの肢体を、恥じ悲しんでいるように見えるのでした。が、その、ノッペラポーな、不完全な肢体にこそ、人形独得の、えもいわれぬ妖しい魅力があったのです。

私は子供のころ、女の子の人形をよく着物を脱がせて裸にしてみたものです。着物の下からあらわれてくるものは、人間の脚とは似ても似つかない、ずんどうの、筒のような脚や、平べったい胸などで、上体と下肢の継目が、紙で貼ってあったりします。しかし、それはそれなりに、一種の生々たる感じにあふ

れていて、見る者に、なんともいえない戦慄をつたえてくるのです。

凌辱に耐えている、オカッパの人形のパツチリと涼しげな眼が、なんともいえないチグハグな感じで、子供の心をくすぐってくるの

です。

そうした、少年のころの好奇心が、五十男の私によみがえって来たのです。深夜、野望を秘めて、私が売場の一角に足を踏み込むとはやくも、それに気づいた人形たちのあいだ



に、波のように戦慄のどよめきが広がってゆきました。しかし、そこが人形の悲しさ、全身は一步も動くことのできない釘づけです。

私は恐るべき通力を持った悪魔のように、ゆっくりとそのあいだに分け入ってゆくのでした。しかし、そのうち、悲しい出来ごとが起りました。私が風邪の気味で、二三日休んでいるあいだは、例のP子が撤去されてしまったのです。

「しまった！」

私は唇を噛みました。まだ、その時期でないとはい、安心していただけが不覚です。それはそうとして、P子は、部外に払い下げられたのだろうか。それとも、廢品置場ゆきになったのだろうか。廢品置場に行っているのなら、まだ逢えるチャンスはある。

私は用度の男に、それとなく、そのことをたしかめました。ハッキリした返事は得られませんでした。

「さあ、どうだったかな。それにしても、またどうしてそんなことを、きくんたい？」

そう怪訝そうな風をされては、それ以上追及もなりかねたのです。

「よし、こうなったら、自分で確かめる以外はない」

そう決心した私は、ある夜、廢品置場にそっと忍んでいったのです。むろん、その見回りも、まったく任務外というわけではなかったのですから、忍んでゆく必要もなかったのですが、後めたい目的があるので、なかにか犯罪者のような気持でした。

廢品置場に入るのは、はじめてでした。内部はまっ暗ですが、月のあかるい晩なので、窓を通してさしこむその光が、青白い縞目になって、床を染めています。そして、そのうすぼんやりとした反射の中に、青白い裸像がからだをもたせ合うようにして、無数に立ちならんでいます。そこは、さながら、マネキン人形の墓場でした。衣裳をはがれた彼女たちは、売場や飾窓に立っていた時の、あのはなやかさと生命感をなくして、まったくの死物と化して見えました。

「ああ、P子もこの中にいるのだろうか？」

絶望感が私の背筋をはしります。この暗さの中で、無数にかさなり合って立てかけられた裸像の中からP子を探し出すことは、ほとんど不可能だと思われたのです。

私は、おそるべき根気をもって、人形を一つ一つ物色してゆきました。一列に整然とならんでいるなら、仕事は比較的らかなのです

が、乱雑につき重ねるようになっていたので下積みの部分をたしかめるのは、なみ大抵ではありません。しかし、

「P子はまだ撤去されたばかりだから、そう下積にはなっていないまい」

というのが、私の唯一のたのみだったのです。しかし、P子は、なかなか発見できませんでした。さすがの私も、探しくたびれて、

「ああ……」

かたわらに立てかけられた人形に、かるくよろめきかかって溜息をついた時です。

「おお！」

私は思わず目をみはりました。P子が、すぐ目の前に立っているのです。P子と私を距てている一体の人形をかたわらにどけてやると、それを支えにしていたP子は、ひとりだけにゆっくりと私の腕の中へ倒れこんできました。かえるべき腕の中へかえるといった、この上もない自然さで……私はそれをいったん受けとめ、それから、つきあがる情熱に耐えながら、P子のからだを、床の上に投影されている、月光の青い縞目の中に、しずかに押し倒したのでした。

しかし、そのとたんです。何者かが、この建物をとび出してゆく、脱兎のような足音が

きこえたのは……

突嗟のこととて、私は誰何することも忘れていました。むしろ、自分の犯行現場を見られたという狼狽の方が大きかったようです。

私は、無意識のうちに、いったん床に倒したP子を、もう一度立たせて、もたせかけていました。そして、やっと夜警としての自覚をとり戻し、

「誰だッ！」

と叫びながら、戸口へ突進していましたが、この時、背後で恐ろしい出来事が起ったのです。あわてていたので、P子の立っかけ方が不完全だったのでしょう。私のかけ出した震動で、それがユラリと支点をはなれて前へ傾斜したと見る間もなく、一本の棒のようになり、コンクリートの床へ倒れこんで、ゆきました。私は、それが倒れるところを見ていたわけではない。倒れて、コナ微塵に砕け散る音でハッとふりむき、瞬間、

「P子……」

と直感したのです。つづいて、連鎖反応が起りました。P子の倒壊にひきこまれるように、まず手やかな二三台が音を立てて倒れ落ちると、その波動はだんだん遠くへ伝わってゆき、人形という人形が、将棋倒しに倒れは

じめたのです。その、すさまじい音響と、濛濛たる土けむりの中に、私は賊を追うことも忘れて、しばらく呆然と立ちつくすのでした。

その晩、店内でも盗難があり、私は夜警としての勤務ぶりが不十分だということで解雇されることになりました。が、解雇されるまでもなく、私はあの晩の、すさまじい出来事ですっかり虚脱したようになっていたので、もう勤めを継続する気はありませんでした。それにしても、店の方へ侵入した賊は賊としてあの廢品置場からとび出していった、足音の主は誰なのでしょう。賊の一味か、それともまったく、別な意図で忍びこんできた人間なのか……もし、そうだとすれば、あの男も、私と同じように人形愛に憑かれた男だったのでしょうか。その不思議な男のことは、いまでも、私の心に不気味な影を落しているのです。

P子の事があってから、私の人形愛は、破壊的な性格に一変してゆきました。隙を見て人形をつき倒す。はじめユラリと、あとは急速に弧線を描いて倒れこんでゆき、絶望的な破碎音で終るその一瞬の緊張と、しびれるような快感。それが、変形した私の人形愛の極致なのです。

(おわり)

次号予告

—室町異聞—

盗賊煙丸の最後

藤 琴也

みすのかげにたおやかな女性の影が……。たきこめた香のときめき。

桔梗色のもすそに、黒かみが流れて——。

それこそ求めた御方の蔭たけた姿だった。

——盗賊仲間の意地から、手に入れて見せると言い切った時、煙丸の胸中には遠い日の、御方が女御として入内される十七才の気高い姿が浮んだ。そして、少年の胸にやきついた清い思慕の情が、はつきりと蘇ってくるのを覚えたのだ。

「御無礼の極みながら、こういったすよりほかに……」煙丸は、ふるえる手に女人の肩を抱きすくめようとした——。

時の皇太后通陽門院を求めて忍び入った怪盗煙丸！ 果して望みを果すか？

粘液の壊滅

なめくじ幻想曲

坂 みのる
明 石 三 平・画



どたん場へ来た女は、こんなことを考えていた。

“ねえ、あんた。ナメクジにならない？” ああ、

エデンの昔から男をそそのかすのは女であつた！

もうもうと湯気をあげた熱い
熔岩が骨の中を浸し、髓の奥ま
でくすぐった。

二人はそんなあとの白々しい
体を二匹のマグロのようになら
べて——一寸とはなれないそば
にしながら二度と手もとどかぬ
ような、佐渡と柏崎くらいも遠
い感じで——呼吸を静め合っ
ていた。

と、いう訳で、事件は、ドキ
ドキするようなベッド・シーン
から発端するのである。

その前にもう少し、この二匹
のマグロたちについて説明して

おかねばならない。それもしごくカンタンで
なければ話の腰が折れてしまう。手ッ取り早
く話を始めよう。

男と女が、ふとした偶然とふとした機会で
愛欲のドロ沼に足をつっこんだ。普通のこと
じゃ飽き足らなくなってきたのである。あら
ゆる形——四十八種類、そんなものは古くさ
い。あらゆる状況——満員電車の中、風呂場
野球場、そんなところは一ヶ月で卒業した。

異常度は女のほうが少し高かった。そこで
男は苦心した。叩いた。くすぐった。縛った。
あるいは刺した。しかしその手段の究極がき
た。

そしていま、地獄の底で、白々しい二匹の
マグロとなって身を横たえているという訳で

ある。

——もうこれがおしまいだ。あとは何だ。

あとに残った手段——それは命をかけたすさまじい揺り動かしかつだけだ。恐ろしい奇怪な道具と、劇烈な毒薬を使って、ぐるぐる廻りかける眼玉をすえて、苦悩と陶醉の境地で死んでゆくより仕方がないのだ——

男は、眼をつむって静かな呼吸とはまるで反対のことを、ぼんやりと考えていった。

肉慾の聖者！ そんな言葉を奉りたいくらい、タンタンとそんな思いつきを考え、まるでそれが悟りでもあるような表情であり心境であった。（スゴイコトニナツタモンデス！）

その横で、もう一匹のマグロも、ある考えをまとめていた。血の気のひいた白々とした裸体を長々と伸ばして（スバラシイ体デス）くの字にまげた左手の手の甲を額にあて、うつすらと眼をつむり、眠ってでもいるかのようにならぬとも動かなかつたが、なかなかどうして鋭い異常に昇華した想念が、タタミにひっくり返ったインクのように黒々と拡がってある一つの素晴らしい着想を、つかまえようとしていた。

男は地獄の底へつきあたって、あつさりと

水爆のような最後を考えついた。

女にはまだ生への執念があった。

女にどたん場はない。

常にそこから生きてゆこうというまるでアホみたいな生への執着が、夜の女になったりいかがわしい見世物になっても、不敵なツラ魂で登場するあの共通した執念がある。

その執念が、まだ地獄のそこをガリガリとひっかき廻して、ついにスバラシイ抜け道を発見してしまったのである。着想がまとまると、くの字に曲げた手をだらりと伸ばした。そこにある男の手がふれる。

女はわずかに指をからませたそのままの姿勢で男を呼んだ。

ものうい声である。

「ねエ、あんたなめくじにならない？」

「エッ！ なめくじ……」

「そう。あたしの亭主は下等動物の研究で家庭をかえり見るヒマもなく亡った。毎日毎日みみずは風邪をひくだろうかとか、おけらはなぜ貧しいのかということなどには詳しくはなけど、あたしの体、女を喜ばせることについてはまるで下等動物のように幼稚で単純だった。それをまるで花造りの名人のように開

花させてくれたのは、若い研究助手のあんただった……。だけど今あたしにこんなスバラシイ思いつきをさせてくれたのは、あの人だった！」

「それじゃあの……」

「そう！ あれヨ」

てな、勿体つけた会話で、読者の眼をいたずらにゲンワクさせるのはボクの趣味でない。なめくじのことも手っ取り早く説明しよう。

つまり、男は地獄の底で最後の手段を使おうとしたが、女は地獄の底をひっかき廻してまた新しい情痴の手段を考えついたのである。

読者は、あのなめくじを御存じであろう。雨の日になると、どこからともなく、現れてヌラヌラとした粘液質の体を、小さな体をベツトリと光らせているぞつとするような、下等動物特有の気味悪さ。

だがしかし情痴のどたん場にきた女は考えた。男の体の毛穴という毛穴から、あの、ベトベトと糸を引くような粘液を出さして、異常な妖しい人間にして人間にあらずという恐ろしい感覚の中で耽溺してみたいということだ

ある。

できれば、その恍惚たる快感の頂上がきたときに、本物のなめくじのように溶けてしまつてもよいではないか。

恐らくそれは、かつて全身にシャボンの泡をたててからんだあの温泉の家族風呂における、感覚の比ではあるまい！

健全な読者諸君でも、フム、ひよつとしたら、こらスバラシイもんじゃなかるかと、おほろげながら想像がつくかも知れない。

だが、しかし、本篇はアブチック・ミステリーである。くわしく地獄の底の異常感覚の説明をしているヒマはない。

とにかく彼はなめくじ男になる研究を開始した。

用意はできている。

かつての研究室の主人が死ぬ直前まで課題としていたのがなめくじであつたからである。なめくじの粘液から抽出したペトリアン素は大量に保管してある。こいつを人体に注入すればまだ第一段階に到達することは実にカンタンであつた。生きたなめくじはウジャウジャと培養箱にうごめいている。

男は必死になつて努力した。

女はワクワクと胸をはずませて、その日を待った。

そして女にかけても天才的な頭脳と技術を持つ男は、亡き恩師をものいで、なめくじの研究にも成功したのである。（小説は便利である）

男と女の妖しい情痴の地獄図絵が展開した。女はベトベトからみつき、ピタリと体に吸いつく吸盤のような冷めたいなめくじ男のとりこになつた。

なめくじ男は、その変身と共に、すっかり非人間的な虫けらのような性格になつてしまつた。

なめくじのように陰惨で、なめくじのように執拗な情痴の怪物と化したのである。

そこで事件が起つた。

夜の道であつた。相当おそい。人通りがない。そこを若い娘が一人で歩いていた。痴漢には絶好の舞台である。

うす暗い物蔭から男が飛びついてバサリとうしろから抱きすくめた。いや正確にこの娘の感じたのは、首から背から腰から尻、太股の後、ふくら脛にとりと、恐しい、今までの感じたこともない触感で、人間らしい怪物が

吸いついたのだ。

あッと思つた瞬間くると体をウラ返しに向きを変えられて今度は前面に、そいつが吸いついた。

まるで納豆のように身動きできなくなつてくると、得体の知れない身ぶるいが起つて足の力が抜けた。そして娘が崩れるように失心するとその崩れた体の線そのままに、怪物がギラギラと全身をにぶく光らして折重なつてきた。

つまりこいつが事件である。

悪魔のように破廉恥で、アルセーヌ・ルパンのように大胆不敵な、しかも、全く見当もつかない不思議な粘液を残して、怪物なめくじ男が自分の女だけで我慢できなくなつて暴れたしたのである。

その夜を境として、一人歩きが娘がヒンピンとしてその餌食となつて失心した。

いわゆる、日本の探偵小説風に表現すれば正に夜歩きの娘を恐怖のドン底に叩き込んで戦リツさせたものである。かくてパトロールは強化され、町会は、うす暗い箇所にあわて夜外燈を増設するということになつた。だが、なめくじ男の魔手は少しもひるまな

かった。

そして失心する娘は、夜歩きをやめても襲われた。

ある五階建のアパートに囲われていた女はそのなめくじ男に窓から侵入されて失心した。

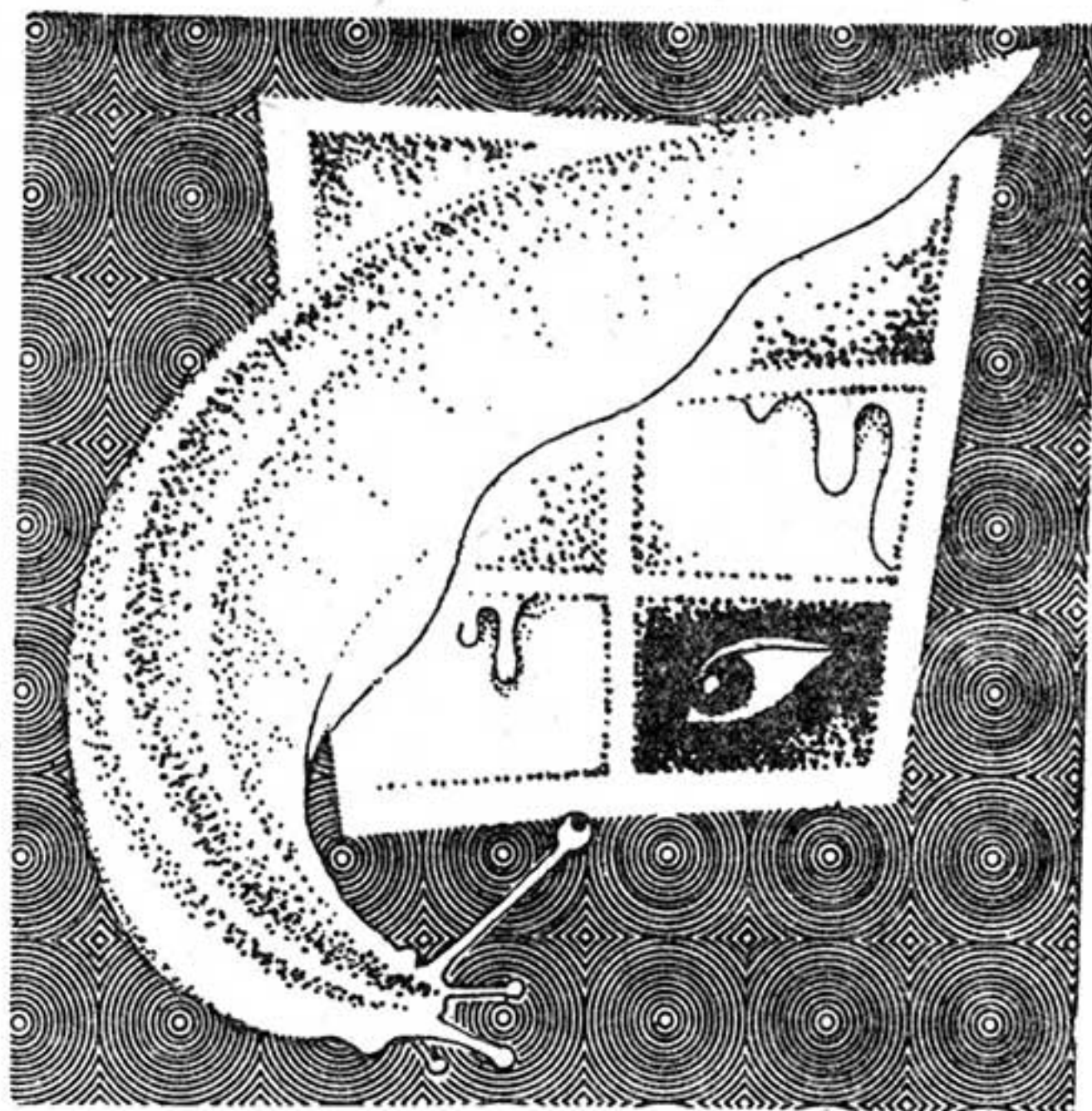
そしてそのアパートの外側には、地上からその窓まで、ベツとりと一条の蛇行状の粘液がたどりついていったものである。

それは巨大なタタミ一畳もあるくらいのカタツムリが歩いたように、秋の日をあびて、ギラギラと重く銀白色にぬれて光っているのである。襲われた全ての女が感じた、あの吸いつく触感通り、なめくじ男は、アパートのカベにベツトリと吸いついて昇っていったものにちがいないのである。

くまなく夜外燈がつけられ、嚴重なパトロールの目をごまかせたのも、つまり、なめくじ男は、人の目の届かぬ暗い高い場所に吸いついて正体をかくしていたということになるのである。

さてそこで、舞台を、なめくじ男とその女のベッドに戻してみよう。

この一日の間に、地獄のように陰惨で執拗



で、恐怖と背中合せの戦慄すべき異常な陶醉と悦楽にさいなまれて、女は、生血を吸いとられたように、おとろえて、精気がなくなっていた。

なめくじ男はまた、我から勝ちとったなめくじ体に侵されて、その皮膚も頭髮も眼の色までがにぶい銀青色に変化していた。わけてもその肌のヌメヌメとした様子は、なんとも

表現のしようがない不気味な変りようであった。

悦楽の失心から覚めた女がノロノロと身を起した。そして、新鮮な空気を入れようとして窓のカーテンをひいた。陽の光りがさしこんだ。

なめくじ男は陽をあびると、あわてて体をベッドの横に落しこんで、その暗いすきまから叫んだ。

「なにをするんだ。カーテンをしめてくれッ。お前、なんてことだッ。

俺が、この俺が、太陽の直射に耐えられないことは知ってるはずじゃないかッ」

ベッドの陰はビショビショと床一ぱいに水がまいてある。男はその水の中をベトベトと泳ぐように体を横たえて皮膚を濡らした。

女の眼は冷たかった。

こんどこそ情痴絵巻の最後がきたことを感じた。

女てエものはズイブン勝手なもので、怪物なめくじ男が、あり余る精力をもて余し、すでに、生血の少なくなったあたしに飽きたらなく

なつて世間の女を犯し始めると、そいつが許せなくなつて、自分が使いものにならないのと一緒に、この男を消そうと考え始めたのである。

一人になれば生きる道もある！ 消す方法はある。

ひょっとすると……。

それは、あの着想したとき、すでに考えていたことも知れない。それは天下一品の完全殺人である。

それで！

女の眼は冷たかつた。

「おいッ！ お前は！ お前は俺を殺そうというのかッ！ おいッ！」

女の眼は冷たかつた。

「お前にはもう力がない。短刀を揮う力もない。しめ殺すこともできまい。ピストル？ だめだネ。ピストルはだめだ！」

男は、のどをひきつらせて笑つた。

「俺の体にはネ、もうまともな血なんか流れてやしないんだ。ピストルの弾丸をブチこんでも、トウフに針を差しこんだようなものさ。弾丸はつき抜けるだけで、その瞬間にひらいたキズ口は、すぐネバネバとふさがつてしま

うだけなんだ。イタクもかゆくも、血の一滴もでないという便利な体質に変化してるんだ！ さあどうだ。どうして殺すかネ。毒薬かい？ それもダメだネ。人間のような高等動物ならともかく、下等動物の俺には、そうヤスヤスと利き目がないもんだ。しかもまだ有難いことには高等動物人間様の知恵と感覚と用心と力が俺にはあるッてエ訳だ。さあどうだ！ どうして殺すかネ？」

しかし女の眼は冷たかつた……。

消す方法が一つある！

だが、この室ではいかにもまずい。

夜がいい！

夜になるとこの男は、また飽きもせず、街の女を恐ろしい悦楽の失心に誘ひこむ！

夜がいい！ そして、そしてああ

その夜がきた！（さあ始まり始まり！）

男は雑草のスープをすすり、暗闇に乗じて夜の巷にでる。

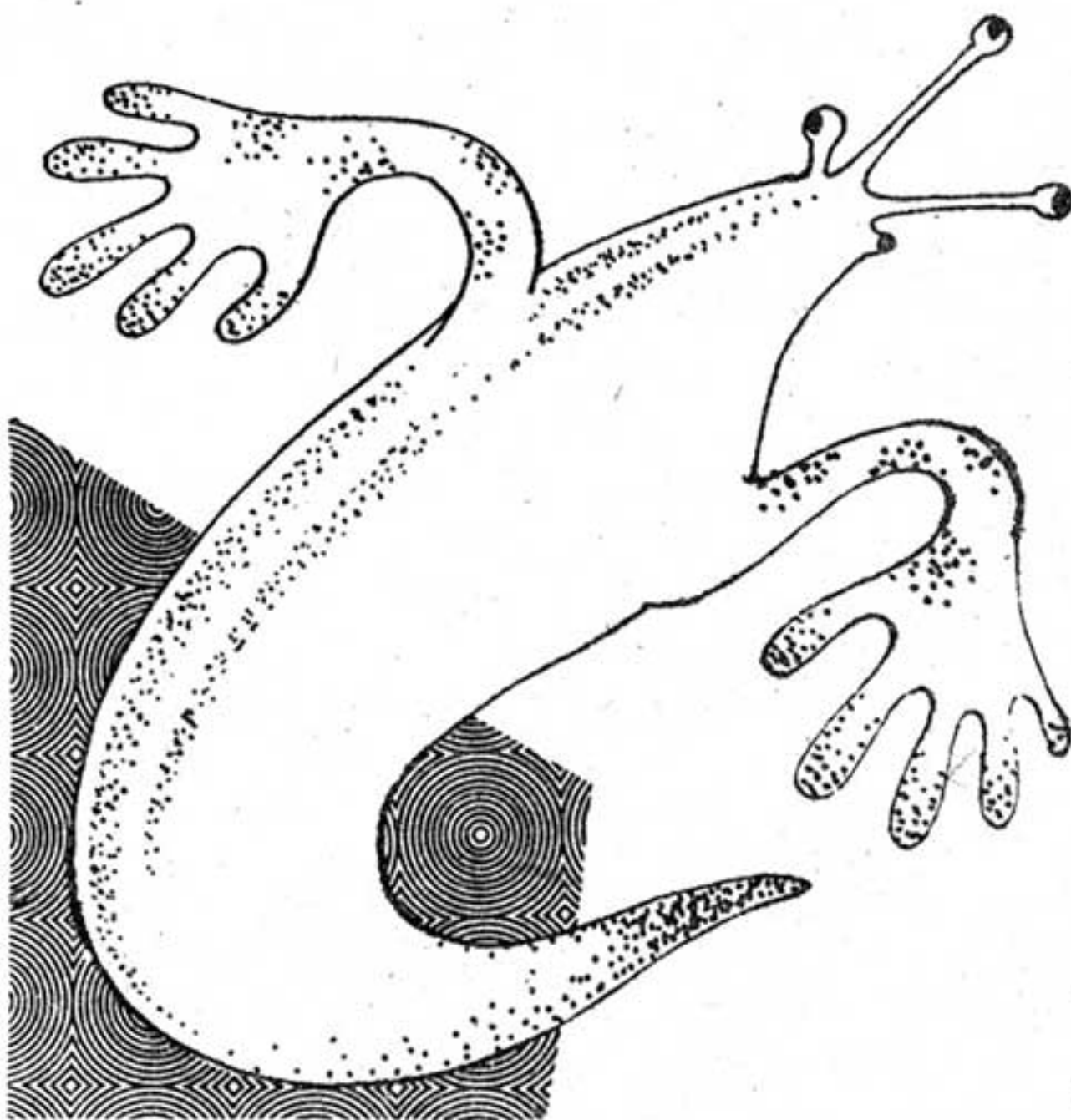
今夜は、どこに吸いついて、蜘蛛のようにアミをはるのだろうか。

恐い女の夜。毎日の新聞がデカ

デカと書きたて、よるとさわるともちきりの怪物痴漢がでるというのに、女の一人歩きは全然なくなったという訳にはいかんものである。

それじゃ小説に都合がよすぎると思うのは早計である。

つまり、余談ではあるがこいつを説明しておこう。（そう思われちゃシヤクだからネ）



一つの例は台風だ。毎年々々あきもせず、吹かれても叩かれても、俺らの町は大丈夫と安心してやられているではないか。

また、俺だけはお目こぼしにあずかろうと思つて、あいもかわらずつづくお役人の汚職もまた然りといった訳である。

マンボか太陽か挽歌族かは知らないが、まさかあたしがといった手合の女がちょっとした郊外の夜道を一人歩いていたのである。

折からの半月が、青白く一本の道を浮びあがらせ、道の左右は点々と最近建ち始めた文
化住宅が黒いシルエツトを浮ばせ、そのシル
エツトとシルエツトをつないで整地されない
分譲地の雑草を野分の風が吹いていた。女の
眼にはそのほか目の前の暗い電柱と――要す
るに、まずは恐れおののく何ものも映つては
いなかったという訳であつた。

ところがいけません。

その電柱の向う半面になめくじ男がへばり
ついていたのである。

バサリ、いやベタツととびついた。指と指
の間、拡げた腕と腋の間にもネバネバと半月
を描いたあの粘液を糸のようにひきながら、
全裸のなめくじ男がおおいかぶさつた。

かくて修羅場は展開した。

そんなときである。

忽然と女の黒い影が現れた。

なめくじ男の女である。

男のあとをつけてきて、ことのなりゆきを
待っていたのだ。

足音をたてないで、ゆっくりゆっくりと女
はその現場に近よつてきた。

あわてる必要はさらさらない。

女は静かに冷い眼ざしで、やがてその背後
にたつて見下した。

一瞬！

女の白い手がひらと宙にひらかれて、白い
雪とも見まがうものが散つた。一ふり二ふり
女の手がひらめいてその白い雪が男の背一杯
に散つて積つた。

「ギャーッ！」

男は物凄しい激痛に一瞬氷のように凍りつい
たがもうおそかつた。

その白い雪は春の日射しに合つたようにみ
るみる男の背に溶けてしみこんだ。

女はそのときすでに数間をはなれて、元の
道へと、あのゆっくりした足どりで引返して
いた。

雑草の中に戦慄していた女は、自分のから
んでいた手がいつの間にか自分の胸と肩を抱
き脚は自分の脚と重なってならんでいるのに
気がついた。そのかわり、おお、なんという
気味の悪さだ！ 粘液が、一ぱいに女の全身
をおおい、そこにはあの怪物の影も形もない
のである。

さて諸君！

廻りくどい表現はあまり得手でない。

つまり、なめくじ男は、女に塩をかけられ
てとけちゃつたという訳である。

塩になめくじ！ という仕掛である。

冬眠の麻痺に陥込む能のある
下等動物が羨しくなるほどに
時の流れはのろくさい！

(ボードレール)

男性の悩みに

最新の福音

男性器發育不全に悩む方は郵券封入御手
紙下さい。自宅に居乍ら解消の良法スグ
御知らせ致します。

兵庫県前ノ庄局区内本条・元祖井上

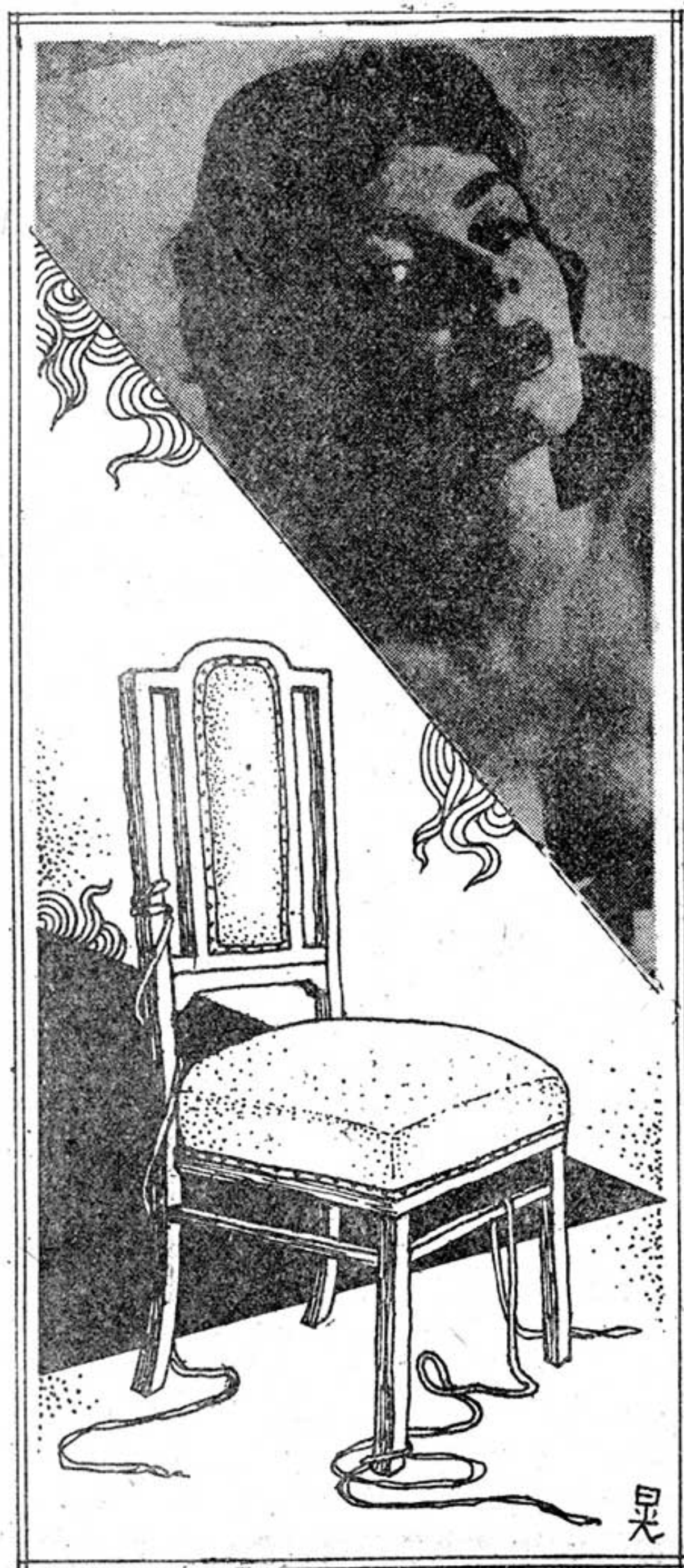
魚人のだらけの痕^(きず)傷

山莊殺人事件

★ 無人の山莊に捕われていた裸の踊子！ そ★
★ れが瞬時の間に姿を消して、見知らぬ男が★
★ ワイシャツを真赤に染めて死んでいる！ ★

松井 籟子

美濃村 晃・画



夜風がもう秋だった。

終電車を御影で降りると、K病院の裏手から六甲の裏山へ通じる道が月に光っている。

草野徹夫はリュックサックをひとゆすり肩で動かして、登山靴をふみしめた。

都会に近い夏山は月夜の晩の登山に限る。天の川が白く流れている。天の川というよ

リミルキーウェイという感じに近い。

人家がなくなってくると、星が光ってくるような気がした。

少し小高い曲り角へ出ると、徹夫はリュックサックを草むらへおろし、一服つけた。風にゆれて煙草の味はあまりうまくなかった。それからおもむろにリュックサックの紐をとき、望遠鏡をとり出した。

星の光から、街の灯の遠い近いまたたきをぐるっと見廻した。

深夜の街は静かに眠っている。

「おや！」

と、徹夫はある一点へ望遠鏡をすいつけられたように向けていたが、いそがしくそれをリュックの中へしまい、見当をつけてかけ出した。

もうほとんど人家のなくなった山道に近く別荘風の建物が建っていた。

その窓からあかるく灯が洩れているのだ。

徹夫は低い柵をまたいでこすと、その窓へ近づいた。

テラスのようになっていて、明るく大きくあけた窓の硝子ごしに、部屋の中の光景が見える。

真白な裸身を螢光燈の光にさらして、ひと

りの女が縛られていた。

坐った女の背に椅子の背を合わせておいて女は後手に椅子の背に少し高めにつり上げられるようなポーズでくくられていた。

足は足で椅子の脚に結ばれている。二つの乳房が乳首をピンととがらせて、前へピラミッドのようにつき出していたが、その乳房の上へも、下へも、縄はまきついていて。

徹夫は窓へ手をかけると、鍵がかかっていたのか、たやすくあいた。

人の家へ無断で入るのは泥棒的行為だと思ったが、この場合躊躇してはいられなかった。「どうしたんです？」

徹夫はまず声をかけた。

女はぐったりと目をつぶったまま答えない。

「どなたかいませんか？」

徹夫は女の縄をときながら、家の内部へ向って声をかけたが、シーンとしている。

徹夫は女の縄をとくと、女はそのまま床につつ伏してしまった。

「もし、しっかりしなさい」

徹夫は女をゆすったが、女は目をつむっている。死んではいない。体は温かったし、息もしていた。ただ女の体中につけられたおび

ただしい痕！ 茶色くうすれているのも紫色にまざまざしいのも、何によって、そして何の為につけられた痕なのか！

徹夫は女をそつとそのまま床におくと、次の部屋をあけてみた。

寝室になっている。

徹夫は女を抱き上げると、寝室まではこんで静かに寝かし、裸身にふとんをかけた。それから一と通り家の中を歩いてみたが人の気配がなかった。

徹夫はリュックサックを窓の外にテラスへおいたまま駅の方へ道をかけおいた。

とにかく警察に知らせて医者を出してもらわないと、女の様子がわからない。電話のありそうな家をたたきおこそうと思ったが、駅前まで走りおりた方が早いように思っただけを急いだ。

駅前の交番からパトロールカーで医者をつれてその家まで引き返すのに、何分かつたろう。それほど長い時間ではなかったはずだ。

しかし、警官と医者と徹夫の三人が、あけ放した窓から部屋にと

特集
あがちく☆みすてりい

びこんだ時、

「あっ！」

と、三人とも同時に叫んだ。

そこには一人の男がワイシャツを真赤にそめて倒れていたのだ。

抱きおこした男の胸に、ナイフがつきささっていったが、血はのどからもふき出ていた。

「違う、違うのだ。妬くな」

男は口走ったが、そのままガクツと首をおとした。

徹夫は寝室にとびこんでみた。
女の姿は消えていたのだ。

二

草野徹夫がまず疑われた。

いると云った女がいない。

そして、男の死体がある。

ましてそのナイフの傷は男の力でなければ通らないほどの深いものだったし、えぐり方もひどかった。

しかしナイフの指紋はもちろん、草野徹夫のものではないし、草野徹夫といえば、アマチュア天文学者で登山家で、かつまたN放送の名プロデューサーであることはこの阪神間

では相当に知られていることだった。

殺されていた男はその家の持主で、神戸でキャバレーを経営している横田元という男だった。

「違う、違うのだ、妬くな」

という言葉が最後に息を引きとってしまった横田だった。

女がいたというのなら、これは当然その女が痴情関係で刺したと考えられる。

しかし、草野徹夫が最初に見た時、女は縛られていたのだ。そして男の姿はなかったのだ。女は誰に縛られたのか、そして、どうして姿を消してしまったのか。

徹夫の言葉によって女のモニタージュ写真がつくられた。

「おや？ これは志摩ユカリじゃないか？」

と、記者のひとりが云った。

「志摩ユカリって？」

徹夫が聞いた。

「知らないんですか？ N放送のプロデューサーともあろう人が……」

「草野君のくわしいのは山と星と、そしてデデンデンなんだから……」

親しい新聞記者達は笑った。

草野徹夫は文楽と歌舞伎に明るい。彼のプ

ロデュースしているのもそうした番組だった。

「いったい、山と星はまあ一応関係ありとしても、それにあの古風な『今ごろは……』というやつをどう結びつけるんだい」

話が志摩ユカリから脇道へそれそうになるのを、

「おいおい」

と押さえて、刑事は別のプロマイドを持ってきた。

「草野さん。あなたの見た婦人というのはこんな人じゃなかったですか？」

それは体にピッタリ合った真黒なタイツをつけて踊っている志摩ユカリの写真だった。

「さあ、この顔はメーカーキャップしているから少しどぎつく感じますが、たしかにこんな顔でしたし、体はちょうどこんな風な、すばらしい体をしていました」

ざわざわと記者仲間の間にざわめきがおこり、嘆声さえもれた。

もし、草野が全裸で抱いて寝台へ運んだ女が志摩ユカリなら、その感触はなんとすばらしかったろうと、誰しもが思ったのだ。

志摩ユカリはヌードダンサーとして通っているが、本当のヌードを誰も見たことはない。

特集 いりすみ★ちるあ

いつも体にぴったり合ったコスチュームをつけている。しかし、それは裸以上になまめかしく、裸以上の魅力を持っていたのだ。

その全裸をもし草野が見たとしたのなら、

「こいつ……」

と、ちよつとうらやむのは当然だろう。

記者達は二タ手に別れて、志摩ユカリのアパートと、いつも踊っているキャバレーラメルにとんだ。

しかしアパートにもいなかったし、もちろん昼間のキャバレーにいたはずもなかった。

ただ、その日、キャバレー、ラメルに横田元が来ていて、彼女と一緒に車で出たことだけわかった。

すると、横田は志摩ユカリを自分の山荘へつれて行ったのだろうか。

草野が見たのは志摩ユカリだったのだろうか。

指紋係は志摩ユカリのアパートへ行って、管理人の立会で部屋を合鍵で開き、彼女の指紋とおぼしきものをいくつかとった。

アパートの部屋の中は整然としていて、彼女の姿はなかったが、情事の匂いも感じられなかった。

三

「ユカ、君本当にやったんやないのやな」

「アホな、あんたまで疑うの？」

「そやかて、横田に縛らせたことはたしかなんやろ？」

「写真とらせただけや」

「でも新聞には全裸と出ているやないか、裸をみせない君が裸になるのは、無理にぬがされたからやないか、それを怒って、その恥しさにカーツとなっていたのを、ちょうど縄をとかれたのを幸い、グサツと……」

「イヤ！ 怖い！ 私がそんなこと出来ますかいな。あんたは信じてくれるやろ思うてとんできたのに……」

「ごめん、ごめん、僕は横田をちよつと妬いているんや。この体を……」

「ウフン、アホ……この体は、あんただけのものやないか」

ユカリは男の胸に顔をつけた。

海が遠くに見える住吉の住宅街の一軒だった。

た。

昼間からカーテンをとざした部屋の寝台で二人は抱き合っている。

「そうや、ユカの体は僕のものや、今日はいくつ印をつけてやろ」

「あんまり痛くしちやいやよ」

「さあ……？」

あいまいな返事で男はユカリの肩にガクツと歯をあてた。

「うっ！」

と低い呻めきがユカリの口からもれる。

男は肩から、胸、腹と、噛んでいくのだ。男の口にとらえられたユカリの肉体はピタツと硬直したように静止し、口をはなすとたん、魚がおどるように身をよじる。するとまた口がとらえる。またピタツと静止する。

ユカリの肉体が波をえがいてうごめき、男の髪がユカリの肌にバサツとふれる。

ユカリがいつもコスチュームをはなさないのは、こうした愛撫の痕が彼女の体をいろどっているからだだった。

「ほんまに横田になぶらせなかったのやな？」

「まだ疑うの？」

「ほんなら刺したのは誰や？」

「私は知らんというてるのに……」

恋人同志の会話というのは、時々合の手を入れては行われるものなのか。

痛い愛撫の合の手が入りながら、二人は事件の話をしているのだ。

「でも見たのやろ、刺した男を……」

「男やと思うのやけど、女かもしれへん。私を縛って横田が御不浄に入っている時や、外から人が入って来たのや。私は間、悪いよって失心しているふりしていたんや。横田も私を裸で縛っているのを見られては、いえ、これはあての趣味ですねんとも云えへんやろ、御不浄から出て来られんようになってしまったんや。その人が私を寝室へねかしていんでしもうたんで、私もそつと着物を着ようと立ち上ったんや。すると部屋の中で云い争う声がするんや。その声がたしか男やったと思うのやけど、そのうち、ギヤアというような何とも云えない声を出したんや、私は恐うて恐うて、もう出て行くこと出来へんようになってしもうた。みると寝室のドアの鍵穴に鍵がつつこんであつたんで、それをそつとまわして寝室の中にかくれていたんや。そのうち静かになったかと思うと呻めき声をするのや。ドアをそつとあけてみると横田が死ん

でいたのや。私、もうどないしていいかわからんようになってしもうて、ここへとんで来たんや、それだけや、そしたらあんた帰ってへん。私、合鍵であけて中へ入って待っていたんや、あんたがやったんと違うか？ 昨夜なんで帰ってきいへんかった？」

「僕は君がやったのかと思ってるし、君は僕がやったと思ってる、おかしい話や」

「だって、さっきラジオでいうていたやないか、違う、妬くなつていうたつて……。あんたが私と横田の間疑うたみたいや。それに、たしかに男の声やった」

「僕じゃない。しかし、警察では君を探している、君がつかまると僕のこと自然わかってしまう。すると疑われるのは僕や」

「ほんまに……そうなるな」

「どないしたらええやろ」

「どないしよう」

二人の恋人同志は体をよせ合つたまま顔を見合わせた。

四

夜のとぼりがとつぷりおりた頃、ユカリは黒っぽい和服に身をつつんで、恋人の岩本勇

の家を出た。

ひとりだった。

和服は勇の亡母のものだったから、体格のいいユカリには寸法が合わなかったが、洋服ほどに目立たないのは和服のもつ融通性なのだろう。

ふだん洋装しかしないユカリだから、これなら少しは探索の目をくらませることが出来るかもしれない。

もちろんラメールは当分休むつもりだ。

勇とどこかで落ち合う相談が出来たのだろう。

ひとりで阪急の駅へ出ずに国鉄の駅へと出て行った。

ユカリが出たあとで、勇はトランクをひろげ、旅へ行く用意をしていた。

すると、ガタンと庭さきの木戸が鳴った。

勇はユカリが何か忘れ物をしてとりに帰つたのかと思った。

そこで縁側の方へ出て行こうとした後から何かガーンと後頭部にショックを感じた。

それから何時間位立ったのか。

フツと身を起そうとすると、自分の体が自由にならないことに気がついた。

目をあけると目の前に誰か立っている。



呉

「気がついた？」

蓮っ葉な口調で女が云った。

かび臭いような匂いの中に、酒の匂いが漂っている。

勇は自分がどこか地下室の倉庫らしい所に縛られていることがやっとわかってきた。

土間に体は長くのびている。

しかし、両手はひらかれて別々に、足も大の字に開かれて別々にそれぞれ古い鉄材のようなものに結びつけられている。

女は勇の脇腹を靴のさきで蹴った。

「よくも横田を殺したわね」

女は云った。

「あんたがユカリの彼氏だということを知っているのはほんの僅かの人達だし、おそらく警察だって知りやしないわ。だから、今頃、必死になってユカリの行方をさぐっているでしょう。いったいユカリをどこへ逃がしたの？ あんたとユカリと共謀して横田を殺したんじゃないの？ 憎らしい！」

女はハイヒールのかかとを勇の腹の上へ立てるとぐりぐりとふんだ。

「どうしてやろうかしら？」

ひとりごとを云ったが、いきなり持っていた革のベルトをふりあげた。

「ビシッ！ ビシッ！」

と、勇の体にベルトが走る。

「誤解だ」

勇は苦しい息をつく僅かのひまに叫んだ。

「何が誤解なの、そんなら云いなさい。誰が殺したか」

「僕は本当に知らないんだ」

「それならユカリの行方を云いなさい」

「ユカリの行方を知ってどうするのだ？」

「聞いてやる、誰が殺したか聞いてやる」

「ユカリも知らないと言っていた」

「あんた会ったのね？」

「……………」

「あの事件のあとで、あんたがユカリに会ったこと、今の一言ではつきりわかったわ。」

「さあ、ユカリをどこへ逃がしたの？　云いなさい」

「……………」

「云わないつもり？　云わなければ云うようにしてやるわ」

女はパチンとライターをつけると、しゃがんでその焔を勇の体に近づけた。

脇の下の毛がジリジリと音をたてて燃えた。

「熱い！」

「熱けりや云いなさい。さあ、どう？」

女はライターの火に勇の肌をなめさせるように、脇の下から胸へとスーッと撫でる。

熱さは激しかったり、弱まったり、焔の近づき方で違った。

勇は息をつめたり、はいたり、その度に荒く胸が波立った。

「君は誰だ？　何の権利があつてこんなことをするんだ？」

「私？」

と、女はライターの手をふととめて、

「知らないの？」

と云った。

「知らないね」

勇がいうと

「横田のイロよ。ただし自称イロ……。横田とは関係ないわ。横田は変った男だから私なんかにもくれない。けれど、私は横田が好きよ。横田の子分もあねこつてよんでくれるわ」

「子分？」

「あら、あんた横田の商売知らないの？」

「キャバレーのマスターだろう？」

「そう……そういうことにしておきましょう。それより、こうやっておだやかに話しているんだから、いいかげんに白状したらどう？　あなたがやったんならやったで、私は私の手であなたを殺しはしないわ。ただ横田が苦しんだだけあなたに苦しんでもらうだけよ。あとは警察にまかせるわ。私はあんたに一指もむくいずに警察に渡すの厭だったの」

「何の関係もない男の為に、大変な心中立てをするんだね」

「相手が嫌つたって好いたって、女がいったん好きになれば、そんなことどうでもいいことだわ。さあ、云いなさい、はつきり云いなさい」

とだわ。さあ、云いなさい、はつきり云いなさい」

女はまたパチンとライターをつける。

勇の体に油汗が浮いた。

「ううッ！」

と、身をよじるのだが、両手と両足にくいこんでいる縄は、勇の体をしっかりとつかまえてはなさなかった。

「知らない！　本当に知らないんだ！」

勇はうわごとのように叫んだ。

「これでも知らないという？」

今度は女は小さいナイフの刃をつきつけた。

「これで横田が刺されたように刺してあげるわ。ただ横田はそれで死んだけど、私はあなたを殺さないわ。ただこうしてあなたの胸から同じように血を流すだけ……」

女は勇の胸にサッとナイフの刃をあてがった。

五

草野徹夫はユカリがどんなに装おつても、すぐにわかった。

一電車違つたら、ユカリは逃げられたかも

特集 いりすみ★くちあふ

しない。

しかし、草野徹夫と同じ電車へのり合わせたのは何かの因縁だったのだろう。

須磨駅でおりたユカリを徹夫はつけて行った。警察には知らせなかった。徹夫は何となく自分の手で自分の疑問を解きたいように思っていたからだ。

須磨浦公園からユカリはさらに山手へ向って歩いていく。

徹夫もだまってついて行った。

そのうち人家もまれになってきた。

徹夫は急いでユカリとの距離を縮めると、いきなりユカリの手を握った。

「あっ！」

とユカリが叫んだ。

「何しはるの？」

「助けを呼ぶ気ですか？ ユカリさん、僕を覚えていてるでしょう？」

徹夫は軽い微笑さえうかべて云った。

「あつ、あなたはあの時の……？」

「知っていたんですね。では失心、

した真似をしていたんですね」

「ええ」

ユカリは素直にうなずいた。

自分の縄を夢中になってといてくれた、この、人のよさそうな男にユカリは警戒する心をといた。

「どこへ行くこうとしているんです」

徹夫が尋ねると、

「もう少しさきに私達が夏場だけ借りた家があるのやわ」

「私達？ 横田元と？」

何にも知らない徹夫は問い返した。

「いいえ、私が私の彼と……」

「じゃ、そこまで行きましょう。そしてあなたの知っていることをくわしく話してください」

「ええ」

ユカリは警察の男ではないらしいこの好人物に、自分と勇の当面している難関をどう突破したらいいか相談してみてもいいと思った。

間もなく二人はその家へついた。

そして、ユカリは勇の寝室で、勇に語ったことをもう一度徹夫に物語った。

「横田元には奥さんはなかったんですか？」

「あの人は変っているという評判やったから……」

「変っているというのはサジストだったという意味ですか？」

「それもあるやろけど、サジストといっても、そんなに女を虐げたりするのやあらへん、ただ、縛った写真をとるだけやし……あの人は女には惚れへんという噂がありましたん」

「女には惚れない？」

「ええ、横田はんはんに夢中になっている女の人がいましてんが、横田はん、みむきもせえへんので、ひとりで熱あげてると……そんな話も聞きましたわ」

「しかしバーなんかへよくのみに行ったんでしょう？」

「ええ、私の踊ってる店へもよく来てくれはりましたし、女の子をからかったりはしてはりました」

「これはどういう店です？」

徹夫はポケットからマッチをとり出した。バー・ジャンとしてある。徹夫はこのマッチをあの家で拾ったのだ。そして自分のポケットにいれているうちに、つい警察に話すのを忘れていたのだ。

「それは……あの……多分この頃名を売って

愛読者の皆様へ

いるゲーバーだと思えますねんど……」

「ゲー・バー? そうか。その面をしらべたらあなたもあなたの彼氏も大丈夫、白になりますよ。そうだ。それに違いない」

徹夫はやつと横田元の最後の言葉を、男性にひっかけて解釈出来ると思った。その方面に必ず犯人がいる!

「それにしても、あとからすぐ来るはずにしては馬鹿におそいじゃありませんか」

「ええ、私は国鉄でのろのろ来ましたんやけど、あの人はタクシーとばすと云うていたんですが……」

「何か起ったんじゃないですか? そうだ。」

こうなったら警察へ届ける方が早い。あなた

もあなたの彼も身に覚えがないのなら大丈夫

です。僕にまかしておいてください。何かの誤解から、事件がとんでもない方へひろがっていかもしれない。そんなことになったら大変だ。行きましよう。警察へ……。僕にまかしてくれまますね」

ユカリはうなずくより仕方がなかった。

こうしてこの山荘殺人事件は思いがけなく急転直下に解決したのである。

岩本勇がキャバレー・ラメールの地下室から血みどろで助けられたのはいうまでもない。命に別状はなかった。

そして、横田元を刺した犯人は、やはり、彼をとりまくゲー・ボーイのひとりだったの

である。

草野徹夫は相変らずひまになると、望遠鏡をリュックサックにいれて山へ登っている。

彼のひまのない時は、「先代萩」に涙をしほる観客の後で、やれマイクが三味線に近すぎるの、エコーがつきすぎるのと、舞台と客席をつなぐ奈落を走りまわっている時である。

そして時々思い出したように、

「しかし……」
とつぶやく。

多分、「しかし、あの体はすばらしかったな」と思っているのではないかと、筆者は勝手に想像しているのである。

了解下さい。

○十月号の目次の一部に誤植がありましたことをお詫び申し上げます。松井籟子女史の「笄呪文」と鳴山能平氏の「紅毛記秘鑑」が題名のみ入れ替って居りました。

○誌友通信十二号はまだ出来ないか? とのおたずねが山積して居りますが、これは不定期なものですから何卒御了解下さいますようお願い致します。近く発行の予定ですがその場合には本誌上でお知らせ致します。

(S)

○毎号一方ならぬ御支援を賜りまして有難うございます。残品の激しい最近の雑誌界に、ひとり「裏窓」のみは店頭にて毎号売切れの盛況で、夏枯れどころの騒ぎでなく編集部・営業部ともに嬉しい悲鳴をあげて居ります。これは、ひとえに愛読者皆様方の御支援御鞭撻のたまものと深く感謝致して居ります。

○尚、店頭に充分行き渡らない事もありまして、御迷惑をかけているかとも思われま

すので、御買い洩れのございませんように

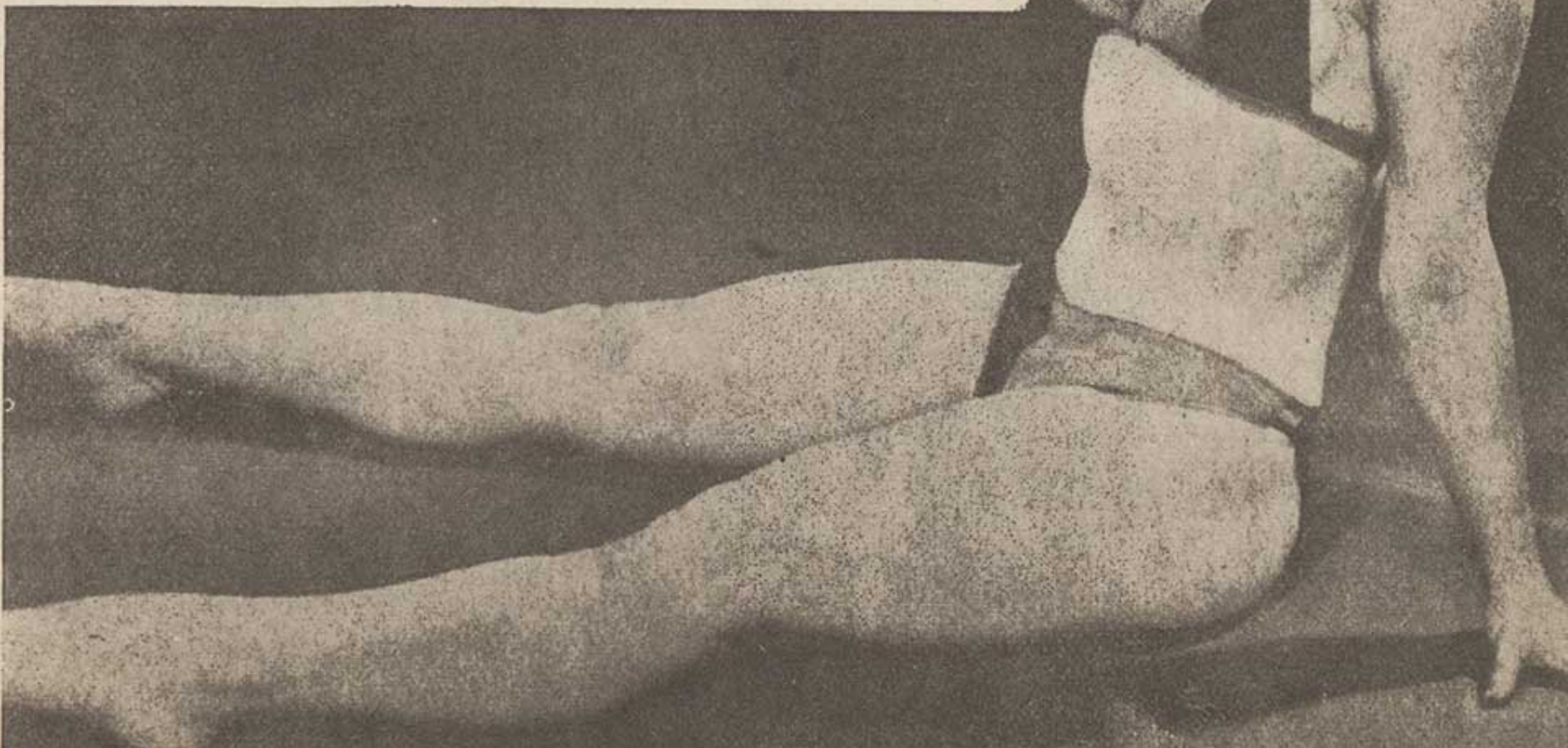
次号も必ず本号お買い上げの書店に御予約下さいますようお願い申し上げます。

○読者通信欄を是非実現させてほしい、との御希望が机上に山積して居りますが、編集部でも以前より此の点は考えて居りました。

○ただ、それによって巷間云われて居ります悪影響のようなものがある事を心配致しますので、そうした欄はこしばらくもうけない方針で居ります。読者の方の御要望は判って居りながら実現できない苦衷を御

海外
★ 写真集 ★
★ 宇野浩二 ★









妖

(ようちゆう)

蟲

京 極 美 岐
都 築 峰 子・画



「おばさま、好きなんですもの」
「氣違いでもないらしい澄んだ瞳で
影のようにつきまとう十七娘。妾はだんく不安になつて来た！」

これは事実あつた事かどうか
私自身わからない。親しい友人
の部屋からそつとお借りしてき
た日記である。書体から見てそ
の友人のものではない。つまり
書き人知れずのものである。日

らしく、生活の為でなく生花の出教授をして
いる。あとは日記そのまま写しておいたから
どんな女性か読み取っていただくこととし、
前口上の筆を置く。

記帳は、大半十日二十日と日附
がとんでいるが、ここに書いた
十四日間は日附が抜けていない
上に数頁にわたる長い所もあり
その間のものは実に面白い記録
なのである。前後の書きぶりか
ら見て三十代に入つた、一度夫
を持ったことのある女性で、両
親は地方に健在。仕送りがある

七月十八日 朝方雨有り、
奇妙な日、銀座のランブルに始まる。世の
中にあんな娘が居るのだろうか。十七、八才
毛長く、目は鋭く黒し。黒ナイロンのシャツ
を肌にしかに着て、その上に男仕立白ナイロ
ンのジャンパー。白の七分ズボンで白革のサ
ンドルをつっかけ、ふらりと、あの店に入つ
て来ると、妾のテーブルにやって来て、向き
合つて座つた。
娘は、カルバドスを注文し、あてのない瞳

で壁絵等を見ていて、手品のように煙草を一本出してくわえ、妾の前のマッチをまるで自分の物を取るようにつまみ、火をつける。

あきれた。妾にはあんな不礼はできない。

必要なら、一寸お借りできませんかと声をかけるだろうし、それより店の人に貰う。マッチは、妾の私有物と十分認められるほど妾の側にあった。妾はむっとした。睨みつける妾にその娘は、また手品のように煙草を一本出すと「吸って——」とつきつけた。啞然とした。こんな娘が日本に居るとは！ 一体この娘は礼儀を知っているのだろうか。

無論断った。すると、別になんということなくひっこめた。せっかくレコードを聞きに行ったのに聞く気持になれず、くやしいが店を替えて他に行く決心をして立つと、

「帰るの？」

そうよと云ってやった。さっさと外に出たが、何と驚くなかれ娘も出てくる。そしてすぐ後をついてくるのだ。不安になる。しかし弱みは見せられない。シロリと睨んでやるとつと横に来て「帰るんですか？」どうしてついて来るのか反対に聞き返してやると「だって、おばさま素的な方だから——」その云い方があどけないので怒りもできない。

気がへんな娘だと思った。

娘は、妾がデパートで買物をしている頃からつけていたと云う。そして妾の通った所を事細かに云った。最後に、「帰るなら車で送るわ」もちろん断った。と、急に瞳をいからせて、

「おばさま、私のこと嫌いね」

くるり背を向けて、後も見ずに歩いていった。変な娘だとまた思った。

ところが、タクシーがアパートにつくと、追うようにグレイの大型高級車が止った。娘の車だった。しつこい。どうしてつけ廻すのか全くわからない。相手が男なら話もわかるし、追払う方法もあるが娘なので何とも仕様がな。

「このアパートなの？」と問う。

どうしてついて来るの？ とまた聞くと「だから素的な方だからって云ったじゃないの」

気狂いだときめたかった。しかしそう簡単にきめられない。第一に目が気狂いのものではない。動作等きわめて活潑だし、車を運転できる。頭がへんなら親達が車等

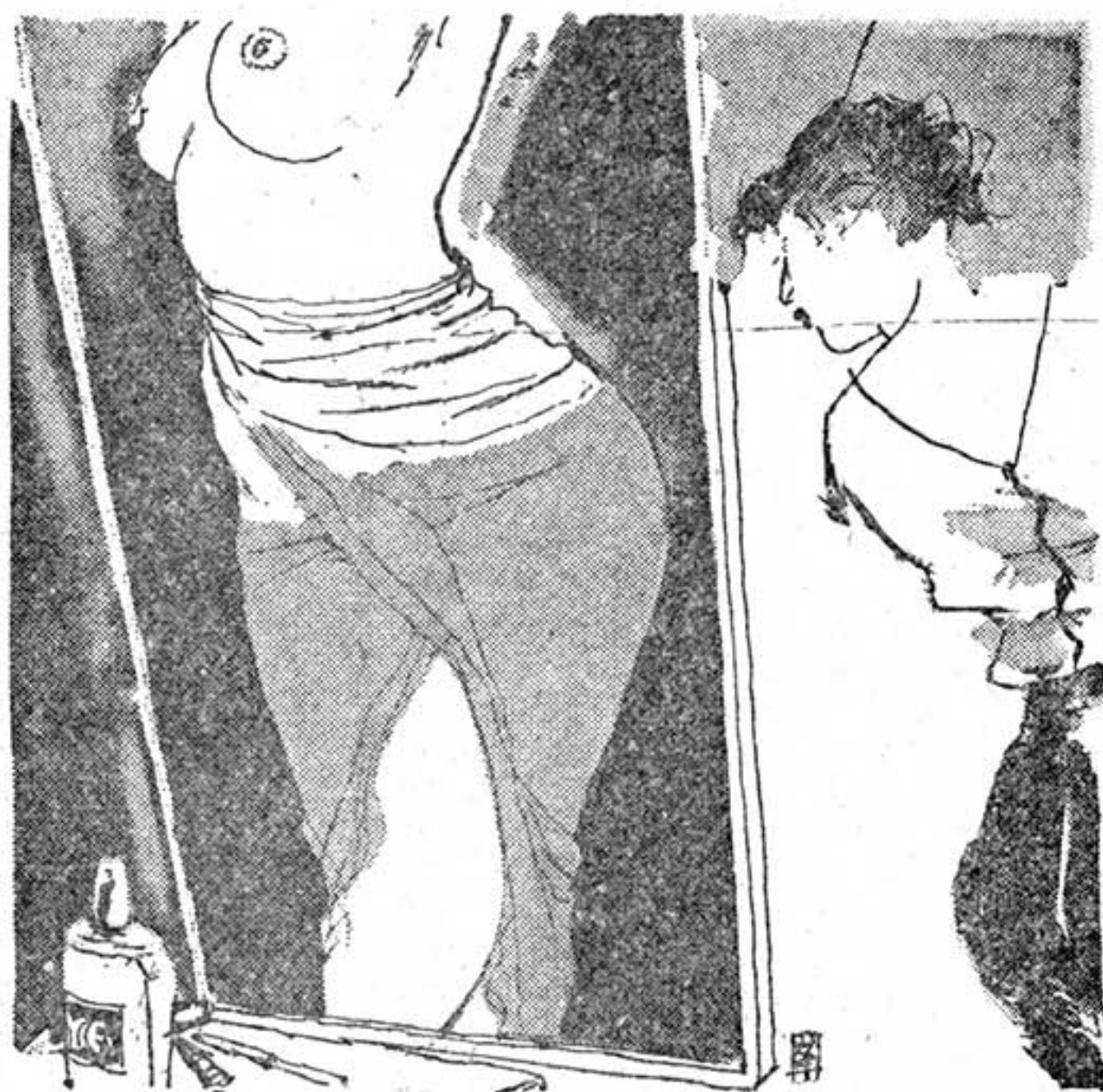
与えまい。

妾はいらだって、「ついて来ないで。しつこくするとお家の人に云うわよ」

「あら、あたしの家やママ達知ってるの？」

「ええ知ってるわ」

口から出まかせに云うと、ふーんという目で妾を見ていて、



「おばさま何んていう名前？」

云いたくないと云ってやると、

「いいわ」と云って門柱の表札を見て、

「美川荘に知ってる人いるかどうかママ達に聞いてみて、もしおばさまがママ達のお友達なら正式に紹介してもらっちゃうわ」

そう云うと、あっという間に車に乗って行ってしまった。

わからない。引力の無い世界に放りだされたような、不思議感が全身を包んでいる。

奇妙な日。全く……。

七月十九日 暑し。暗雲有り。

寺田家出稽古す。

帰ると門の前に娘の車がある。娘の姿はない。不安になった。室に行くと、鍵の降りたドアに寄りかかって娘が居る。妾を見るとニコリしてから、

「嘘つき！ ママはおばさまの事知らなかったわ」

不良じみた目で云う。妾の少女時代には、あんな仕草なぞ嫌らしくてできなかった。娘に対して無関心にする決心をした。どいてちようだいと事務的に云うと、どいたが、妾の後からどんどん室に入ってくる。ジャンパー

を脱ぎ、カーテンなぞ開いて、ちゃっかり椅子に坐ってしまう。

ナイロンシャツから乳房が透けて見えている。

妾は着替えるから外に出てくれと云うと、「いや」と本気で首を横に振り、やにわにテーブルの上の鍵を取り上げ、ドアに差し入れて鍵を掛けると、あっと云う間にそれを外に投げてしまった。全く呆気に取られている妾に、

「邪魔にしたって駄目なもの。鍵がないから出られないわ」

あっさり云ってドアに背を寄り掛ける。

鍵はまだ一つ有るから心配ないが、なぜそんなに妾と居たいのかわからない。それより妾は娘の乱暴なそのやり方に腹を立てた。他人の室にずかずか入って来て勝手な事をする警察に云うわよと云うと、

「云いに行ってる間に、逃げてしまうからいい」

まるで子供だ。電話するからと云うと、電話を見つけて、

「あ電話有る。毎日掛けるわ。出てね、ね」冷汗ものだ。気狂いに違いないと思った。頭がどうかしてはいないとは思えない。

と思うと、自分が娘に腹を立てているのが大人げないと考えた。母親にでも会って妾が付きまとわれている事を云い、何とかしてもらおうと思った。急に同情的にもなれた。また妾がほんとに美しいものに見え、単純にくっついて来るのかも知れぬ。

お家何処？ と問うと、

「ママ達に悦子の事云いつけるのね？ じゃ云わない。それよりおばさま、見ないから着替えなさいよ」

名前は悦子だ。油断させて口を開かせ、住所をつきとめようと考えた。だから娘の云うとおりに着替えることにした。

見るなと云うと正直に背を向けた。思ったら三面鏡に映して見ていたのにあきれた。知らぬふりをしていた。着替えると、

「悦子悪い子でした。鍵欲しいわ、車に忘れ物して来ちゃったの」と甘ったれて云う。そんな事云ったって鍵外に捨ててしまったでしよ？ 出られないわ。

悦子は窓から下を見ていて急に大声で何か云った。下を子供が通っているのだ。そして手早くそばに下っていた洗濯紐を取ると下に降した。子供は面白がって花園の中から鍵を拾い、紐に結んでしまう。

あきれた。

悦子は鍵を手にとると、ドアを開き、出ると外側からまた鍵を下した。

妾はついおかしくなっちゃった。けれどあの肌がむき出し同然の姿で、のこのこ歩かれては、隣近所の室の人達にどんな目で見られるかわからない。冷汗ものだ。

窓から見ていると悦子は大きい紙包みを抱えて下を走って来た。すぐドアから現れ念入りに鍵を下してから、鍵は悦子のどこかに入れられた。

持って来たものは、コカコーラの半ダース箱、それに数個の缶詰、クラッカーが一包みだった。

テーブルに手早く置くと、

「おばさま、好きなもの云って。それから開けるから」

手に登山用の七つ道具のついたナイフを持っている。急にどこからこんなに持って来たのか不安になった。まさか親に与えられたものではあるまい。自分の金で買ったのだろうか？ まさか店先から盗んだのではないと思うが。と、妾のいぶかしい目を悦子は素早く読んで、

「どうしたの？ 悦子を買って来たのよ、お

ばさま変なふうに見えるわね？」

つかつか妾の前に来て、

「じゃいい。ママに、悦子を買って来たものだって証明書作ってもらう。明日までおあずけ」異常な鋭さのある娘だ。明日来るつもりらしいので、

「明日は一日中いないわ」と云うと、

「一日中って午前〇時〇分から夜の十二時まで？」

「そうじゃないわよ」

「じゃ何時から何時まで？」

「わかりませんよ」

と云ってやった。すると妾の目をじーっと見つめていて、

「お婆様、悦子のこと嫌いなら嫌いっておっしゃってよ。帰れって云えばいいのよ。明日も来るなって云いなさいよ」

「そう云っても、妾の云う事なんか平気で貴女聞き流すでしょうに——」

「平気じゃないわ。お婆さまに嫌われたら、悦子泣くわ」

と下を向いて悲しい表情をする。

「どうして妾に嫌われたくないの？」

「好きだからよ」

「どうして？」

「まあ」とあきれた目を上げて

「好きなのに理由なんかないものよ」

溜息が出る。こんな娘といいいじして大切な時間を潰せない。昼寝をして夕方のお稽古がある。寝なければならぬ。早く追い出さねばならない。「妾、昼寝するから、帰る時鍵はテーブルに置いていってね」

ぶつとふくれたかと思うと、

「帰る」

鍵をテーブルに投げて、持って来たものを包みに入れると、急に電話機に近づいて番号を読むと、ニコツとして妾を見て、あっさり「さよなら」と帰って行った。今気がついたことだが、娘はジャンパーを置き忘れているポケットにチューインガム三枚、外国タバコライターが入っている。どうしよう？

困った。ともかく困った。

一体何者なのだろう。

七月二十日 晴、暑し。

逢わぬ事にした。つまり室に居ない事だ。

朝八時半室を出る。帰宅十時二十分。

紙切れに「電話十三回。三回三十分つお室の前で待つ。口惜しい。悦子」と書かれ、ドアにピンで止めてあった。

七月二十一日

八時四十分出る。帰宅八時十分位。置手紙なし。電話は多分掛つて来たと思われる。

ところが、帰途、駅で変な事に出くわした。全くあの娘とそっくりの娘が、改札所の横手に人待ち顔で立っていた。黄色のブラウスに淡水色の麻のタイトズボン。悦子かと感じたが、娘は妾を見ても別に何ということななかった。

他人の空似だろう。悦子ノイローゼになっている。しかし薄気味悪いことだ。

七月二十二日

あれは恐しい娘だ。一体悦子なのだろうか。麻長ズボンに黄ブラウスの娘。妾は一日中あの娘に後をつけられていた。あんなに甘えっほい悦子が、急に他人のように冷い目で、妾の行動を監視する事は、ちよつと考えられぬ。

悦子が二人居るはずはない。妾をこわがらせて嬉しがっているのだろうか？ 探偵小説のようなそぶりをつけて来る。トイレットの間も見張っているのだ。どうしよう。恐い。どこかに逃げてしまわねばいけない。出来るだろうか？ あの娘をまけるだろうか？ ね

むろう。忘れないと狂いそうだ。

七月二十三日

デパートに入り、人混みに紛れてあの娘をまいて、世田ヶ谷の家（注、実姉夫婦がいるらしい）に十日ばかり雲がくれしようとした。

駄目だ。確かに悦子は二人居る。ナイロンジャンパーの悦子と、黄ブラウスの悦子だ。今日は二人ともダリヤのプリント布のワンピースを着ていた。幻でもない。妾が伊勢丹の地階で、冷たい目の悦子をまいて走り出し、表でタクシーを捕えようとした時、もう一人の悦子が乗った自動車が、十米も向うで妾がどこにいくかをつけるため待っている。

おおいやだ！ 妾まで狂いそうだ。なぜこんな目に会わせるのだろうか。明日はどうしてもまいて世田ヶ谷の家に逃げよう。でないと妾は狂ってしまう。ああ、悦子が二人居る。

七月二十四日

駄目だ。黄ブラウスの悦子は妾と一米と離れずにつきまとった。朝早くか夜おそくかにあの娘が家で睡っている間に妾の姿を消さねばいけないのだ。明日にのぼして、出稽古をして帰る。

驚いた事にドアが開いていて、悦子が妾のベッドでぐっすり寝ていた。しかし鼻の頭に汗をかいて睡っている娘はあどけない。

妾のパジャマを着ている。シャツとズボンが乱暴に脱捨てられている。ポケットに定期券とか何かで娘の住所の知ることが出来るものが入っていないか捜したが、何も持っていない。チョコレート箱が床の上に置いてある。

電話がその時来た。すぐ出た。途端に、ガチンと切れた。そつとする程、気味が悪い。振向くと悦子がむっくり起上り、睡い目をこすって、

「いつ帰って来たの？ 起してくださいばいいのに——」

妾は叫ぶように

「パジャマ脱いで早く外へ出て」

その声にちよつとも恐れず、悦子はぱつとパジャマを脱いだ。素裸なのだ。妾は目のやり所なく、どんなにかあわてた。

「レデイにパジャマ脱げなんて失礼よ、おばさま」

妾は娘に背を向けて、早く着替えなさいと云った。素直にパジャマを、妾の前にたたんで返し、洋服も着た。妾はわざと汚れ物のよ

うに洗濯機につっ込んでやった。

悦子は妾のいきおいにのまれたのか、こそこそベッドを直し、妾の前に来ると、

「黙ってお室に入ってごめんなさい」と声で云った。そんなことより一体どうやって鍵を開いたか不思議だ。鍵は二ヶとも妾のバッグの中にある。合鍵が悦子の手にあるとすると妾の室は悦子の私室同様になってしまう。レディの室に無断で入るなんて失礼きわまるわ妾もレディですよ。皮肉に云ってやると、泣きそうな顔で、

「絶対もう入りません」と真剣に云った。それから急にチョコレート箱をもって来ると、大粒なそれを四つ五つ掴み、

「食べて、したら何でも云うこと聞く」おかしくなった。まるで無邪気なのだ。一体あの娘は妾をいくつの女だと思っているのだろう。

怒るにも怒れない。かと云って、食べるからもう妾の前に現れないで——なぞと云えやしない。妾のそんな表情をどうとったか、いらいらとしたそぶりで妾の手の中にそれを掴ませると、

「帰るわ、食べてね」

妾はジャンパーを忘れていた事を云うと、

ニコリして衣桁からそれを取り、ペコリと頭を下げて、さよならと云ってドアを閉めた。

カーテンの間からそっと見ていると、何とはなしに力なく寂しい姿で門を出て行った。そんなに妾が気に入っているのだろうか？

なぜだろう？ わからない。

七月二十五日 あらし。

透明ナイロンのフードのついたレインコートを着て、朝九時頃に悦子がほんやり門柱の辺に立っている。

妾は驚いてしまった。ざんざん降りの雨。

妾は窓を開けて悦子を呼んでいた。原因なぞわからない。妾という女が全然自分で理解できない。悦子は小犬のように跳び込んで来た。

「おばさま。ああ、悦子死にそうよ」

いきなりそう云った。食事の間、端にべったり坐って、大人しくスタイル・ブックなどを見ていた。食事が済むと映画に行こうと云う。

「今日は嵐だから、お仕事はお休みにするのね」と勝手にきめている。

無論こんな日にお稽古はお休みだから、妾

はOKしてやった。電話に飛びついて「車よ」と一言云った。

三分とたたない間に例の車がアパートの玄関に横づけに止ったのには、ただただあきれるのみ。

運転台にはYシャツ鳥打帽の男がいた。男——あれは女かも知れない。一言も口を開かなかった。うなじの生毛が女だった。あれは女だ。黄ブラウスの女？

いやいや考えまい。悦子が二人も居るとは思えぬ事だ。奇怪な事だ。

男——いや運転手は東京駅でさっさと降りる。妾に顔を見せなかった。

ハンドルは悦子に握られ、妾は助手台に席を変えた。早すぎて、四、五十分も嵐の街をドライブして劇場に入った。悦子は妾の手を勝手に奪って、自分のおもちゃのようにいじりまわしている。勝手にさせておいた。映画を見て、カニ料理屋に行こうと妾を連れ込んだのは、日本橋の高級レストランだった。おごらせるのかと思ったら「いいの、後でパパが払いに来るから——」実にあっさりした娘だ。帰りの車の中で、

「おばさま。悦子があんまりべたべたすると暑苦しいわね。これから一日おきに逢いに来

るわ」

また一人できめてしまおう。アパートにつくと、

「じゃ、あさってね」と云って、手をぎゅっと握ると帰って行った。

なんだか世田ヶ谷の家に逃げなくとも平気な気持だ。気味悪さはなくなった。と云って一体なぜあの子が妾に甘えるのか皆目わからない。

七月二十六日 晴天。

約束は守られた。黄ブラウスの娘も見えない。何となく夜になって、悦子から電話でも来ないかと心待ちにするのは、妾があの子を認めてしまったためだろうか？ どうにでもなれ。もう妾がわからなくなった。

七月二十七日

悦子は二人居た。やはり居た。双子。良く似てる。もう一人は京子という。

朝、電話で悦子が、一時頃行くと云ってきたので、午前中に用事を急いで済ませ、室に戻ると悦子がちゃっかり室に入って待っていた。妾を見ると口に一本指を当て「静かに」のサインをする。

見ると全く同じ姿がソファでぐっすり睡

っている。

「妹」と小声で云った。

「京子っていうの。双子」

似すぎた二人を妾はただただ見ていると、
「ねかせといてね、ねたりないのよ」

云いっぷりが姉さん気取りだ。京子の額の汗なぞ拭いてやっている。

「この子が妾の後をつけた子ね？」



「ごめんなさい。この子は悪くないの。悦子

がたのんだからしてたの。悦子が悪いの。でも京子も、おばさま大好きなの。だからおばさま、悦子より可愛がってやって、ね？」

妾は笑って答えずにおいた。でも何が嬉しい気持で妾はそわそわしているのだ。自分の生んだ娘達の誕生日のお祝いをしようとしている母親の気持。全く矛盾した妾の心だ。子供が欲しい。

「悦子さん、何かおいしい物作って上げましょうか」

初めて悦子と名前を呼んだとはしやぎ廻り、妾のエプロンを奪って、

「悦子を作る。何作ろう！」

その騒ぎに、ぱっちり京子が目を覚ました。大きい伸び。目を手の甲でこすり、その可愛さは妾を全く喜ばせてしまふ。この年頃の娘にこのあどけなさがあるなんて、二人は幸福だ。

妾と目が会うと、ポツと頬を染め、ピョコンとソファから起きると、

「今日は」

まつ毛が長く、うるんだ瞳。悦子よりおっとりした口元。しかし他は変らない。白い三分パンツから出た雌鹿の

ような脚。黒ナイロンのシャツから透けて見えるふっくらした乳房。同じだ。

パイを作る事になった。悦子は、パイの皮の原料とアップルを家から持って来いと京子に命じた。全然嫌な顔をせず京子は車をとばして行った。あきれた。京子は悦子に絶対服従なのだ。十五、六分で戻って来た。つまりここから七、八分の辺に二人の家があるという事になる。てんやわんやでパイが出来上がったのが三時近く。洋酒を戸棚から持出してカクテルを作るのは悦子だ。京子はおっぱら悦子の命令ではいいいと仕事を手伝う。全然反対の性質なのかと考えてみた。同じ性質も沢山ある。わからない。テーブルについて話題を二人の事にもって行った。が、家庭の事に口を入れると、「いや、云わない」と拒否する。

ただ中学を出て後、高校に行かず仕舞や歌ピアノ等をそれぞれ先生について教わっていると云う。レコードを聞きはじめて京子は睡ってしまった。すると悦子はしきりに京子の事を話した。「この子、とっても大人しいの」とか「ここにホクロが有るのよ、ママ達初めはこのホクロで二人を見分けたの」と耳の裏を見せたり、「人形作るのが巧いのよ

おばさまに上げるの今作ってる」「でも大人しうだけど度胸はあるの。銀座で男に話しかけられた時、悦子恐しくなってるなら、この子ったら、皆、沢山道を歩いてる中で、貴方誰れ？ 私貴方知らないわ」って云ったのよ、その男逃げてっちゃったわ。この子強いよ、悦子よりしっかりしてるの」

急に妾は、この二人は一体男達についてどう思っているのか知りたくなった。ボーイフレンドいるの？ そう問うと「いないわ、そんなの——」首を烈しく横に振って、

「男の人嫌い。京子も男は大嫌い。それにお友達なんかいないわ。女の友達だって居ない」「どうして？」

「いらぬもの。悦子には京子がいるし、京子には悦子がいるから。それにおばさまが居るもの」

一寸皮肉だったが、「妾のようなお友達が他に沢山居るんじゃないの？」

急に悦子は悲しい表情になって、「そんな人ないわ、おばさま以外にお友達なんか一人だってないわ」

それから怒った目をして、

「おばさまは悦子達のこと不良だと思ってい

るのね。いつもおばさまにしたと同じことをしてると思ってるのね」

烈しい口調で云うと、いらいらした手つきで煙草をつかみ火をつけた。

「お止しなさい。体に毒よ」

妾の声に悦子は早口で、

「おばさま親しくしてくださるけど、ほんとは心の内でやっぱり悦子達のこと嫌ってるのね」あの異常な、鋭い神経質さのある云い方だ。悦子はすぐ煙草をもみ消すと、京子を起こして「帰るのよ」と云ったが、急に妾に向って膝をつくと、

「ごめんなさい。おばさま。悦子はいじの悪い子でした」と云う。妾は面くらってしまつて、手をついてあやまる悦子へ、

「そんな事思っていないわよ」と云ってやると下を向いたまま、

「あさってはもっと良い子になって来ます」

二人はそれから妙に神妙になって、テーブルを片付けたりして帰った。妾の感覚ではあの子のような性格の娘を理解できない。妾がああの年代の娘だった頃、ただニコニコと大人しいのが美德だった。

奇妙な娘達。

妾にはわからない。全くわからない。

七月二十八日 晴、

一日中、気が抜けたようにぼーっとしていた。

原因はあの双子の娘達だ。妾が別れた夫に唯一つ欲しいと今でも考える子種。妾はあの駄目な男からでも、子供を貰いたかった。その、子が欲しいという母親の本能が妾をこんなにしている。妾の心はもはやあの不思議な娘達の虜になっている。一日中、あの娘が自分の娘になる夢に浮かされていた。歩きながらも娘達のあとけない口元が目先を走っていた。

七月二十九日。

驚いた。あの娘達は妾に接吻と抱擁を求めたのだ。胸さえさぐった。妾は何年も忘れていたあの悦びを二人によって呼びさまされていた。

妾をソファアに坐らせ、膝に這い上って、

「抱いて——」と云った。

次に「キス」と云って強引に唇をつけて来た。二人がかりだった。一人が唇を吸い、一人が胸を開く。若い匂いがむんむんした。

妾は夫を思い出した。同時に力が抜けた。

あとは魂を抜かれたもののように、二人の云

いなりになっていた。忘れもしない、あの一生にたった一度、夫が妾に与えたあの歓喜が妾を包みかけたのだ。妾はかろうじて堪え切った。なぜか堪えてしまった。なんて馬鹿な妾だろう。堪える必要なんかあるのだろうか。

七月三十日

異常に娘達が欲しい。

ああ、抱きしめたい。狂いそうだ。

七月三十一日

考えただけでも顔がほてってしまう。恥しい。妾はあの時何を云ってたかしら？ 今日には堪え切れなかった。まだ体が宙に浮いたようだ。それに京子の熱っぽい体。あの子も嬉しかったのだ。胸は固く、その上すべっとした肌だった。悦子の肌は半分しか触れなかった。今度は絶対触ろう。全身の筋肉はまだ弛んでしまっている。筆が震える。新しい力が沸いている気持だ。

何んて可愛い娘達だ。可愛い子。

八月一日

電話が来た。呼ばずにいられないので、すぐ来て——と云うと跳んで現れた。左右に抱

え代る代る接吻を与えた。悦子は甘え切っていた。可愛い声。二人共妾の肌を、唇で触れた。妾も二人の全身を愛撫した。京子のあとけない溜息。自分の体がこうも素晴らしい感覚を作れるとは知らなかった。死にそうになった。夫は一度しか妾にくれなかった。娘達はそんなけちけちしていない。何十回でも、何百回でも、夢を見させてくれる。柔かい。処女だ。妾もあんな時代があった。古くなりかけた妾を捨てやしないかしら？ いや捨てさせない。あの子達は妾のものだ。睡れるかしら。一体自分はどこにいったのだろう。理性が家出していて、妾は悪魔になっている。

それにしてもあの子達はどうかやって妾をこんなに疼かせるのだろう。不思議だ。抱きたい。可愛い子！

残念にもここで日記は半年位日附が飛んでしまっている。翌年の元日の日附が次の頁にある。悦子も京子も出て来ない。あと一年半位日記は続くが全く二人については一句も現れなかった。私はしかしきつとこの日記の主を見つけて結末があったら結末を、まだ続行しているなら、その経過を皆様にお知らせする事をここに約束する。

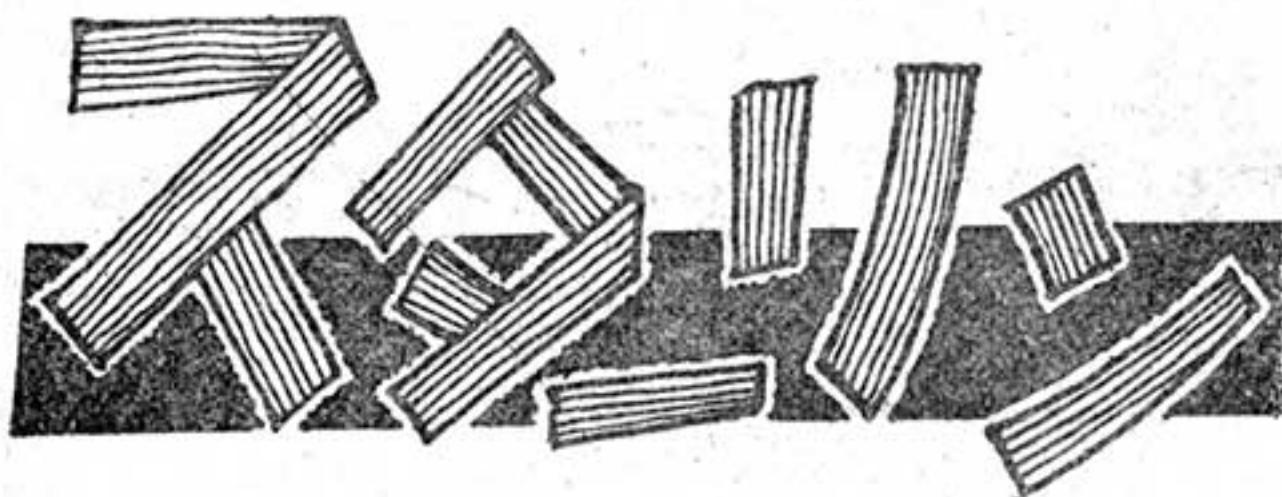
国を組んだ力

反	世
逆	紀
者	の

★三巨頭会談の真中に飛び込んだ恐るべき人間★

★爆弾の真相！ スターリンの運命はいかに？★





一九四五年二月、満身傷だらけで、のたうちまわるヒットラー・ドイツに、最後の止めを刺すべく、スターリン、ルーズベルト、チャーチルの連合軍三巨頭が、黒海にのぞむクリミア半島のヤルタに集まった。第二次大戦史上有名なヤルタ会談だが、この会談のかげにどんなスリラー映画にもないほどのスリルとサスペンスを織りこんだ冒険劇が実際に演じられたのであった。

それはもはや絶望にひんしていたナチス・ドイツがこのヤルタ会談を機会に、かれらの最大の敵であるソ連の独裁者スターリンを暗殺しようとして、数名の決死隊を送ったことで、しかもこの決死隊は、ほとんど二呎近くまでスターリンの身に接近し、あわや自分と共にスターリンの巨体を、木っ葉微塵に爆破しようとした寸前に、思いがけない事故のため悲惨な失敗に終わった。おかげでスターリン

は、それからあと八年生き、その冷酷な鉄腕で世界じゅうを、ひっかきまわし、すべての人に恐怖を与えた。

もしヤルタでスターリンが死んでいたら？ 誇張でなく、きつと世界の歴史は、大きく変わっていたにちがいない。

ヤルタへ潜行したナチス・ドイツの決死隊は十名であったが、そのうち八名が死んで二名だけ生き残った。生存者の一人ラインホルト・ベルテンが戦後「私はジョシフ・スターリンを殺そうとした」と題して、自己の体験記を、三百万の発行部数を持つ、ドイツ雑誌「ダス・ヴェルトビルト」に発表した。発売と同時にソ連からの嚴重な抗議により発売禁止となってしまった。

そのため、この無限の興味のある暗殺物語は、今日までほとんど葬り去られていたが、最近の非スターリン化旋風で、再び陽の目を見ることになり、ドイツはもとより世界的にセンセーションを巻き起こしている。

特別任務

恐るべき暗殺物語の第一頁は、ヤルタ会談の前年、一九四四年の八月からはじまる。

主人公ラインホルト・ベルテンは、フォル

クスドイッチェ連隊の一員として、ベルリン郊外に駐頓していた。フォルクスドイッチェ連隊というのは、ヴォルガ川沿岸の基地で訓練を受けた兵隊ばかりによって組織されている連隊で、東部戦線の地理に明るく、かつ勇敢をもって全軍に鳴り響いていたのである。ベルテンは、その時、齢はやっと二十であったが、すでに二年以上もウクライナ、ポーランドと転戦し、ベテラン下士官の一人であった。

その日、ベルテンが営舎の前に立っていると、親衛隊の黒の制服を着た二人の上級将校が自動車で乗りつけ、司令室へ姿を消した。一時間ぐらいすると、司令官の緊急命令で、下士官百二十名がホールに集合を命ぜられた。全部がフォルクス・ドイッチェの骨幹をなす歴戦の勇士ばかりであった。むろんベルテンもその一人である。司令官と、例の親衛隊の将官二名が厳然と一同の前に立ち、連隊所属の大佐二名が、百二十名を、一人一人点検した。

点検が終ると、親衛隊の将官の一人が進み出て、演説するような調子でしゃべりだした。「非常に危険な特別任務に服するため、十人の男子を採用する。真の男子という意味だ条

件はロシア語がしゃべれて、ロシアの地理習俗に通じたものでなくてはならん。採用者には特別軍糧と煙草とコニャック一壘が与えられ、家族には年金が支給される。では希望者は、一歩前へ！」

約四十人が一歩前に進み、その中から十人が選抜された。十人のうちの最年少者がベルテンであった。なぜベルテンが希望する気になったのか？

「あまり、はつきりしないが、煙草とコニャックに誘惑されたのかも知れない。冒険心も手伝っていたのだろう。どっちにしても解散になって動きだした時、横にいた軍曹のやつが、私の耳に口を寄せて、馬鹿！ と云った瞬間、私はしまった、と後悔したことを記憶している」

彼はその時の心境をこう説明している。

「後悔したがもう追いつかない。その日のうちに十人は今までの兵隊の服を、新しい将校服（但し階級章のない）に着更えさせられ約束の特別軍糧と煙草とコニャックをもらった。」

三日後、十人はシャッセンハウゼン駅から二マイルほど南にある古城の訓練所へ送りこまれた。

かれらが着いたのは食事時間で、すぐ広い食堂へつれて行かれたが、それがすばらしい豪華な食堂で、雪のような白布、燦めくシャンドリア、立派なセット、豊富な食事、今まで殺風景な宮舎住居をして、食事もうくに与えられなかった十人は、眼をパクリさせるばかりだった。おどろいたことには、花のような美人のサービス係すらいたのである。彼女たちは、大半がルーマニア人で、ドイツ語が下手で、フランス語ばかり話した。しかし十人は結構満足で、彼女たちといろいろしゃべり合った。

しかし次の朝、訓練主任の大佐から、秘密特別隊員としての番号をもらった瞬間から、（ベルテンの番号は、473121B）生活の様相は一変し、ほとんど一分一秒の時間まで割りつけた正確無比な時間表に従って、恐るべき猛訓練が開始されたのである。

かれらは、まずコンパスの使い方、地図の読み方をみっちり叩きこまれ、ライフル銃とピストルの使用を教えこまれた。いくばくもなくかれらはアメリカ、イギリス、ロシアの武器に習熟し、手榴弾をはじめ、あらゆる爆弾の操作に練達することになった。さらにロープを使って真直な壁をよじのぼったり、石

ころを詰めた背囊を背負って川の中に飛びこんだりすることを練習した。

一日のうち一時間は、必ず訓話に費やされた。訓話によると、現在の戦況は、単に一時的の現象で、日ならずしてわれわれのフュラー（ヒットラーのこと）は、驚異的な新兵器により、敵を撃滅してしまうというのであった。かれらは、その光栄ある勝利の戦いに重要な役割を受け持つために訓練をされているわけであった。

この名誉ある訓練所の生徒は、ざっと三百人ぐらいいで、毎日のように新生徒が入所し来り、訓練を終ったものと交代した。だから海軍から来たものもあり、陸軍から来たもの、航空兵、エス・エス（突撃隊）もいたし、なかには十七くらいのヒットラー・ユーゲントの少年もいた。決死隊を志願したかどで刑期を許された囚人もまじっていた。

被訓練者の三分の一は外国人であった。英軍師団から逃走して、黒いエス・エスの制服をおくめんもなく着ている英国人もいたし、ナチ化したフランス人、ベルギー人、オランダ人、ノルウェー人、アイルランド人などもいた。ドイツに占領されたルーマニア人、ブルガリア人はもちろんのこと、スペイン人も

相当数いた。さらにロシア人がいた。

ロシア人の大部分は、一九四一年に、赤軍に降服したドイツのアンドレイ・ヴラソフ將軍が組織した「解放ロシア軍」から脱走してドイツ軍に加わった見るからに無学文盲のコサック騎兵であった。

すくない時で五十人、多くて七十五人くらいの若い婦人がしじゅう訓練を受けていた。彼女たちは銃と爆弾の訓練以外に、無電機機操作を、うんと仕込まれていた。彼女たちはここを出ると敵陣の後方に落下傘で降下し、スパイとか秘密工作隊の伝令としての使命を与えられるということだった。

スターリンを狙え

「わたしが、訓練所司令官のオットオ・スコルツェニイ大佐の姿を初めて見たのは、入所してから四週間くらい過ぎてからで、彼は古城の広大な階段をゆっくりおりて来た。全ドイツ秘密工作隊の指揮者であり、ほとんど生きていく伝統的英雄視されているこの人物についての説明は不用だろう。一九四三年に、イタリア首相ムッソリーニを救い出したのはこの男だ。彼は六呎五寸もある大男で、陽に焼けた精悍な顔の、左の耳の下から口にかけて

決闘で受けた深い刀痕が匍っていた。その時は、訓練を終了した一団の人々が、何かの秘密工作に送り出される送別式のようなものでスコルツェニイ大佐は、一人一人と握手し、――では、さようなら、成功を祈る。勇気を出したまえ、しかし無謀はいかんよ、もう一度君達に会いたいものだ――そんなこと云っていた。わたしがいる間に、一九四四年の十月初め頃から、スコルツェニイ大佐は訓練所から姿を消した。後で聞いたところだが、彼はその時、完全な英語のしゃべれる英国とアメリカの軍服を着た一団の人々をつれて、フランスのアルデンヌに潜行したのだそうだった。むろんアメリカ軍総司令官のアイゼンハウワー大将とブラッドレイ將軍、英国軍総司令官モンゴメリー元帥を暗殺する目的だったのだ」

一九四五年二月七日、ベルテンらがここへ送りこまれてから六カ月目に、彼は数人の被訓練者と共に、古城の中の小さな一室に集められた。そこには親衛隊長ヒムラー直属の情報部長の大佐が、かれらを待っていた。彼の口から、ベルテンは恐るべき運命が自分たちを待ち受けていることを初めて知ったのである。

今日では皆の知っているとおり、連合軍側のスターリン、チャーチル、ルーズベルトの三人が、黒海にのぞむクリミア半島で会談することになり、着々準備を進めていた。で、ベルテンらの使命は、ひそかにそこへ飛んで行ってスターリンを殺すことだったのである。今では三巨頭の会った場所はヤルタというところが知られているが、その時はまだどこだかわからなかった。かれらは、とにかくクリミア半島へ飛んで行って、どこかに潜伏し、そこで、会談の場所を探しあてねばならなかった。

「成功したら、どんなことになると思う！ 共産主義はスターリンと共に滅びてしまう。全ロシア人はクレムリンに反旗をひるがえすつまり、われわれとソ連軍との戦いは終りというわけだ」

情報部長は亢奮した調子で叫ぶように云い狙うのはスターリン一人で、他の二巨頭には絶対に手を触れてはならない、と厳命した。「チャーチルとルーズベルトの髪の毛一本損じても、この全計画は失敗と思わなくてはならぬ。現在の段階における西欧二巨頭の出方が、わがドイツの運命にとり、どれほど重大な意味をもつか！」

情報部長は、さらに、こう云い添えた。

「もし諸子が成功したら、諸子の名はドイツ国民の英雄として永久に、パンテノンの壁にきざまれる。祖国の運命は、諸子の掌中にある！ フェーラーは諸子の行動を静かに見守られるであろう。ハイル・ヒットラー！」

「ハイル・ヒットラー！」

ベルテンは、他のものと同じく、高く手を差しあげて叫んだが、心の中で、やれやれ、と、うなっていた。これは狂気の沙汰じゃないか！ こんなメチャクチャな計画が成功するはずがない！ われわれは俘虜となり、銃殺されてしまうにきまっている。あの軍曹が自分の耳にささやいた言葉は本当だった。

「馬鹿……」

二時間後、市民服に改めたベルテンの一行はドーベリッツの補助飛行場に送られた。そこにはユンカー52が一機、かれらを待ちかま

前一時だった。

五十キロメートル（三十マイル）ほど東に向って飛んで行くと、空が白んできた。眼下にオーデル川が延々と流れ、川をはさんで盛んに砲煙が立っているのが見えた。

朝方、ウィーンの郊外に達した。ウィーンは焰々と燃えあがり、黒い煙がベルテンの乗っている飛行機を包んだ。その数時間前に、英米両軍の大空襲が行われたのだ。

機は困難を征服して、やっとアスパーン飛行場に着陸した。

一行は午後四時まで絶対に他人から隔離されてここにいた。その間に、みんなは散髪され、赤軍の兵士らしい士官刈りになった。そして赤軍の制服と着替えた。そのあとで一つの包みと、赤軍兵士の身許証明書をわたされた。身許証明は、すっかり磨り切れ、ところどころ破れていた。そのうえに汗と雨らしい

汚点がついていた。ベルテンは、これは赤軍兵の死体から剥ぎ取ったものに違いないと思った。

わたされた包の中には、特別軍糧とブランデー・チョコレート、煙草が防水布でパックして入っていた。特別軍糧は、訓練所でもらったものと同じで、あらゆるビタミンが高度に圧縮された乾パンである。包の中に仕切りがあり、ロシア製のピストル一挺と、コーヒー茶碗ぐらいの大きさの爆弾が三個入っていた。

やがて一同は、一台のドイツ製ジープに連結された鉄の密閉車につめこまれ、三十分後にダニュープ川の岸に到達した。

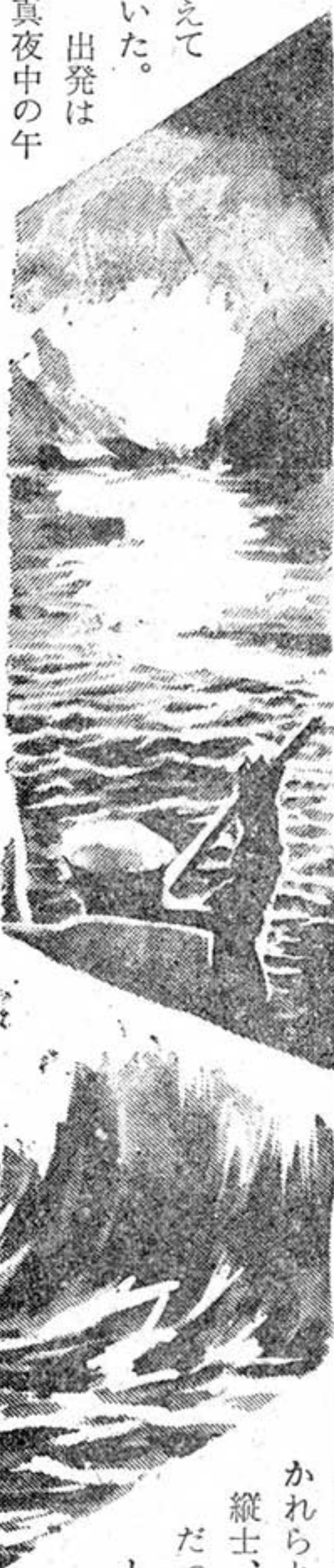
親衛隊と突撃隊の兵に包囲された棧橋の左右に、赤軍から捕獲したTB3爆撃機が二機翼下にゴム・ボートを抱えて着水していた。

一向は、四人ずつの二班に分けられ、おの爆撃機に乗りこんだ、一機の搭乗員は、かれらとおなじ数の四人で、操縦士と補助操縦士、観測士、機関銃手、全部がロシア人だった。こうしてエンジンが初動を開始してから、一同は、最後の訓令を受けた。

真夜中の午

出発は

えて
いた。



機は正確に午後四時五十分出発

した。

敵地に

潜入する

機はしばらく旋回しながら高度を取ってから東に向って飛びだした。ド

イツFW一九〇追撃機が一機

護衛するように後から尾いて来た。機はかなり低空を飛んでい

たから、いたるところの地上に戦

火が燃えているのが見られた。赤軍

はすでに東の方からウイーン市街に突

入しているらしかった。ふいに機関銃手

のロシア人が叫んだ。

「ソ連の追撃機が頭の上にいるぞ。二機……

いや四機だ！」

しかしソ連機は特別な警戒心は持たないように見えた。そのはずでこちらの機は翼に抜目なくソ連の赤い星のマークをつけているのである。ベルテンたちが、にやにや笑いながらソ連機の方を見ていると、驚いたことには護衛して来たFW一九〇機が、突然、こっちに向けて撃って来た。しかし弾道を故意に逸らしてソ連機の目をごまかすためだとすぐわ



他の地点に着陸することになっていて、ということだったが、いずれにしてもベルテンは、かれらがどうなったか知らずじまいになった。

そのあとベルテンは眠ってしまったらしい。

彼は烈しいエンジンの音を

突き破るような鋭い声で眼を醒まされた。

「ベルトをきつく締めろ！ 二、三分以内に着水する！」

窓からのぞくと、インキを流したような暗夜に、遠くの方に灯が見えた。機はすでに黒海に到着し、目的のクリミアの沿岸に接近しつつあった。機は大きく右に傾いて沈んで行った。操縦士は、不安らしく、真っ暗な外をのぞきこみつつづけていたが、ふいに叫ぶように云った。

「気をつけろ！ 波が荒いぞ！」

ベルテンが無意識に横のドアに手をかけた。とたん、恐ろしい衝撃が起り、機が水に激突したのがわかった。その震動の激しさは物凄くもので、ベルトでしっかりくりつけたベルテンの体を引きむしって、空中にほうりあげたかと思われるほどであった。瞬間、機は横転したかと思われたが、衝撃は連続的に弱まり、辛うじて無事着水し得たことがわかった。

機関銃手がドアを開くと、氷のような寒風が機内に吹きこんだ。彼はすばやく外へ這い出し、翼下につないであるゴムボートをはずしだした。

ベルテンは寒さに歯をガタガタさせながら救命胴衣をつけ、包を手にとって翼の方へ匍って行った。彼すぐの下の水面に、ゴムボートが大きく揺れていた。彼はまず包を投げ下し、つづいて飛び下りた。彼をふくめて四人が、このボートにのり込み、他の四人——ドイツ人二人、ソ連人二人——が、向うのボートにのりこんだ。二つのボートは、互いに手を振りあうこともせず、真っ暗な水上を幻のように別れ去った。

ベルテンは、この片方のゴムボートの人々

の運命についても知るところがない。岸に達する前に、暗夜の黒海に溺死したか？ 沿岸警邏船に捕獲されたか？ それとも無事上陸した後、ソ連軍に捕えられ銃殺されたか？

こちらの四人も、やはりドイツ人二人、ソ連人二人（操縦士と機関銃手）であったが、いよいよボートが機から離れる寸前、操縦士は二個の爆弾を機の左右の翼に結びつけ、靴の踵でパイプの部分の注意深く踏みつけた。こうすると、硫酸をつめたカプセルが破れ、それが徐々とフィルターを通して発火装置に浸透し、爆発を起す仕掛けになっているのである。

ゴムボートが暗夜の黒海をただよいはじめて五分くらい経つと、こもったような爆音と同時に青い火が燃えあがるのが見えた。もちろん機が爆破したのだ。

ベルテンと一緒にのりこんだもう一人のドイツ人が、それを見ようとして半ば腰を浮かした。その瞬間、ゴムボートが大きな波にぶつかり、逆立ちするほど傾斜したので、彼は中心を失って水中にのめりこんでしまった。ベルテンらは大急ぎで救いあげたが、わずかに二、三分、水中に浸っただけで、すでに彼は凍死していた。ベルテンらは、彼の死体から

証拠になるようなものを取り除くと、そのまま、暗黒の水中に流し去るだけのことしか出来なかった。

着水の場所は岸から八マイルほどであったから、必死に漕いでも、四時間は必要であった。明方、やっと、かれらは岸に達することが出来た。そこは巨大な岩壁が左右から押し寄せたようになっており、幸運にも、身を切るような寒気を防いでいた。そして深い霧が立ちこめ、数呎先も見えないほどであったが、これも大きな幸運だった、と云える。

ベルテンら三人は、凍え、疲れ、ずぶ濡れで、ほとんど半死半生で陸に匍い上った。ロシア人たちが、ゴムボートを始末している間に、ベルテンは乾いた地面をさがして火を焚いた。三人は火に獅噛みつくようにして、暖をとり、しばらく後、服を脱いで火に乾かし特別軍糧を食べたり、煙草を吹かしたりして取るべき次の行動を相談した。

かれらが、何よりも先に、三巨頭会谈の実際に行われる場所を知らなければならぬことは云うまでもなかった。

ソ連人の操縦士は、詳細なクリミア半島の地図をひろげて精密に計算した結果、かれらの現在地点は、セバストポールの北約三十キ

ロメーター（二十マイル）であることを割り出した。

彼は、戦争の初め、赤軍の空軍士官として長期間、セバストポールにいたから、事情はよくわかっていゝる。まずここへ行つて、必要な情報をさぐろう、と云い、ベルテンと機関銃手も賛成した。

三人は包の品を取り出し、爆弾とピストルを胸と脇にしばりつけ、その他のものは出来るだけポケットにつめこむようにして、その上に、ダブダブのレインコートを着こんだ。こうすれば人の注意をひくことが避けられそうであつた。

いよいよ出発という時、操縦士の男は、ベルテンの顔を困つたように見て、

「君はロシア語を實際、上手にしゃべるが、ドイツ訛りがかくせない。大いにまずいな」そして彼は、しばらく考えこんでいたが、急に明るい表情になつて、

「うん、うまいことがある」

そして、どこからかガーゼを取り出してベルテンの頭にぐるぐる巻きつけ、眼と鼻だけ見えるようにした。それがお化けみたいなおかしな格好になつたので、二人のロシア人は、げらげら笑いだした。

「これでうまくゆくよ。いいかね、君、君は第一線の勇士で、祖国ロシアを護つて顔面に負傷した。だから、口を利くことを医師から禁じられておる、わかつたな」

操縦士は、得意そうに、つけ加えた。

海岸道路を、わざと、ぶらぶらした足取りでセバストポールの方角へ歩いて行きながら初めて三人は名を明しあつたのである。

歴戦の勇士と思われる陽気な操縦士は、ワシリイ・コシヨックというウクライナ人で戦争の当初から赤軍爆撃手として働らき、一九四三年にドイツ戦線の後方に下降し、先に述べたヴラソフ將軍のコサック騎兵の一団とドイツ軍に加わつたのである。機関銃手はジョセフ・ステパノフ、彼もワシリイ・コシヨックと最初から行を共にしている勇士であつた。

正直云つて、ベルテンが、初めて完全に二人のロシア人を信用する氣になつたのは、この身上話を聞いてからだつた。赤軍の軍律として、脱走兵は即座に銃殺されることになつてゐるから、ワシリイとジョセフが自分を裏切ることとは絶対にない、と安心したわけだ。

特別許可証

一時間ほど歩いてゐると、うしろからソ連の軍需トラックが一台やつて来たから、かれらは、堂々と手をあげてトラックにのり込んだ。三十分ほどでセバストポール市内に入つた。ここは、独軍とソ連軍が港湾地域の争奪戦に死闘を演じたところで市内の大半は爆弾や砲弾で崩れかかつてゐた。

三人は適当なところでトラックから降り、それから三ブロックほど後戻りすると、ワシリイは、ベルテンとジョセフに、ある焼跡で待っているように云い、一人でどこかへ出かけて行つた。

のこされた二人は身心とも疲労のどん底だつたから、物蔭に体をのぼすと、すぐ前後不覚の眠りに陥ちてしまつた。

三時間ほどして戻つて来たワシリイは、二人を揺り起した。

かれは抱えていた二つの包をひらいてみせた。一つには、パンとソーセイジが入つてゐた。これはベルテンらが二十四時間目に初めてお目にかかる人並の食べ物だつた。他の包は、立派な肩章や略授章の附いた将校の正服であつた。

「スターリン、チャーチル、ルーズベルトの三人はヤルタに近いリヴァディア宮で会談を

やっている。会談は先週の土曜か、おそくとも日曜からはじまっている」

ワシリイのこの報告は、他の二人の顔色を変えさせた。今日は金曜日である。とするとすでに三巨頭の会談は一週間継続しているわけであるから、いつ何時終るかもしれない、ということである。かれらは目標に向って急速に行動を開始しなくてはならなかった。しかしヤルタは、現在かれらのいる地点から百三十キロ（八十マイル）北に離れている！

だが鉄のようなワシリイは、自信たっぷり地図を指しながら説明を続けた。

「心配は要らない。われわれは今晚じゅうにヤルタに着くことが出来る。毎日、午後三時と四時との間に、ここからアリユープカの町まで食糧輸送トラックが出るから、われわれは、それに便乗するのだ。アリユープカからヤルタまでは三十キロメートル、これくらいの距離は何とかなる。アリユープカは軍の病院の所在地だ。ね、だから、わしとジョセフが、君をアリユープカへ送って行くのを誰も怪しまんだらう」

ワシリイはそう云って、ベルテンの繻帯だらけの顔を指して笑ってから、
「うまいことに、わしの母親と妹がヤルタの

町はずれに住んでいることがわかった。ここを足場に使おう」

と云った。

ベルテンは思わず穴のあくほどワシリイの顔を眺めずにはいられた。自分の家族をこんな危険な仕事に平気で捲きこもうとする！ この男はきつと、どこか狂ってるのにちがいない、とベルテンは思ったのだが、ワシリイはベルテンの眼を見ると、鋼鉄のように冷酷な碧い眼玉をギロリとさせて、

「わしの親父と兄弟二人は、一九三八年の肅清で、スターリンの野郎に殺されたのだ」

と云ったが、それはベルテンに、ゾツと寒気を感じさせたほど物凄い調子をふくんでいた。

ベルテンとジョセフが食事をしている間にワシリイは、持って来た赤軍将校の制服を着た。それから黄色い腕章を三つ出して、二人にもするように云った。それをしないとヤルタ地区を自由に歩けないのだ、と彼は説明した。

三人は、わざとゆっくり歩いてセバストポール市の中央を目指して行った。街を通るものは、誰もかれらに特別の注意を払わなかった。ただ通行の若い女性が、ベルテンの繻帯

のお化けみたいな顔を見て、くすくす笑うだけだった。三人はまもなく食糧倉庫のある広場に着いた。ワシリイの交渉で三人は難なくトラックに乗りこむことが出来た。ベルテンとジョセフは後部の積荷の間に、ワシリイは運転手の隣に座を占めた。

道中は無事故であったが、アリユープカの手前に検問所があり、三人の乗ったトラックは、機関銃を持ったソ連兵の一团に取り囲まれた。しかしそこも用意の身許証明書で難なくパスした。

アリユープカに着いた時はすでに暗くなっていた。トラックは市街の中央を通り抜けて大きな倉庫の前にストップした。そこで運転手は、ここから二ブロックほど先に病院があると教えてくれた。

三人は運転手に礼を云って歩きだし、しばらく行ったところで道を曲り、海岸通に出ると逆の方向に歩き出した。かれらは検問所やパトロールを用心して、ゆっくり歩いていたが、まもなくその恐れがないことがわかったので、出来るだけスピードを出した。数時間というもの飛ぶように歩きつけ、全部で十分ほどしか休まなかった。

三人が、ヤルタ郊外のワシリイの母と妹の

家に着いたのは、もう真夜中に近かった。家の窓が一つだけ明るかった。ベルテンとジョセフを暗がりにも身をひそめさせておいて、ワシリイが窓に近づき、ガラス戸を指先で軽く叩いて顔を押しつけるようにした。忽ち内部から驚きの叫声が漏れ、同時に灯が消され、すぐ横手の入口が開いて白い服の女が二人、姿を現わした。ワシリイが無言で二人を招き三人は家の中に入った。

家の中は、家財道具は乏しかったが、清らかに整頓されていた。二人の女の眼は涙で光っていた。灰色の髪の老婦人がワシリイの母で、骨組みのしっかりした二十くらいのプロンドの綺麗な娘が、妹のリユーバだった。母と妹は、すでに殺されたと信じていたワシリイが帰って来たので有頂天になっていたが、まもなくワシリイから、かれらの目的を聞くと、真蒼となり、母は声をあげて泣きだし、リユーバは土色の顔色で、兄に思いとどまってくれするように嘆願した。

しかし、ワシリイが、母や妹の云うことを聴いて、決心を飜えすような人間ではないことは、云うまでもないことだ。

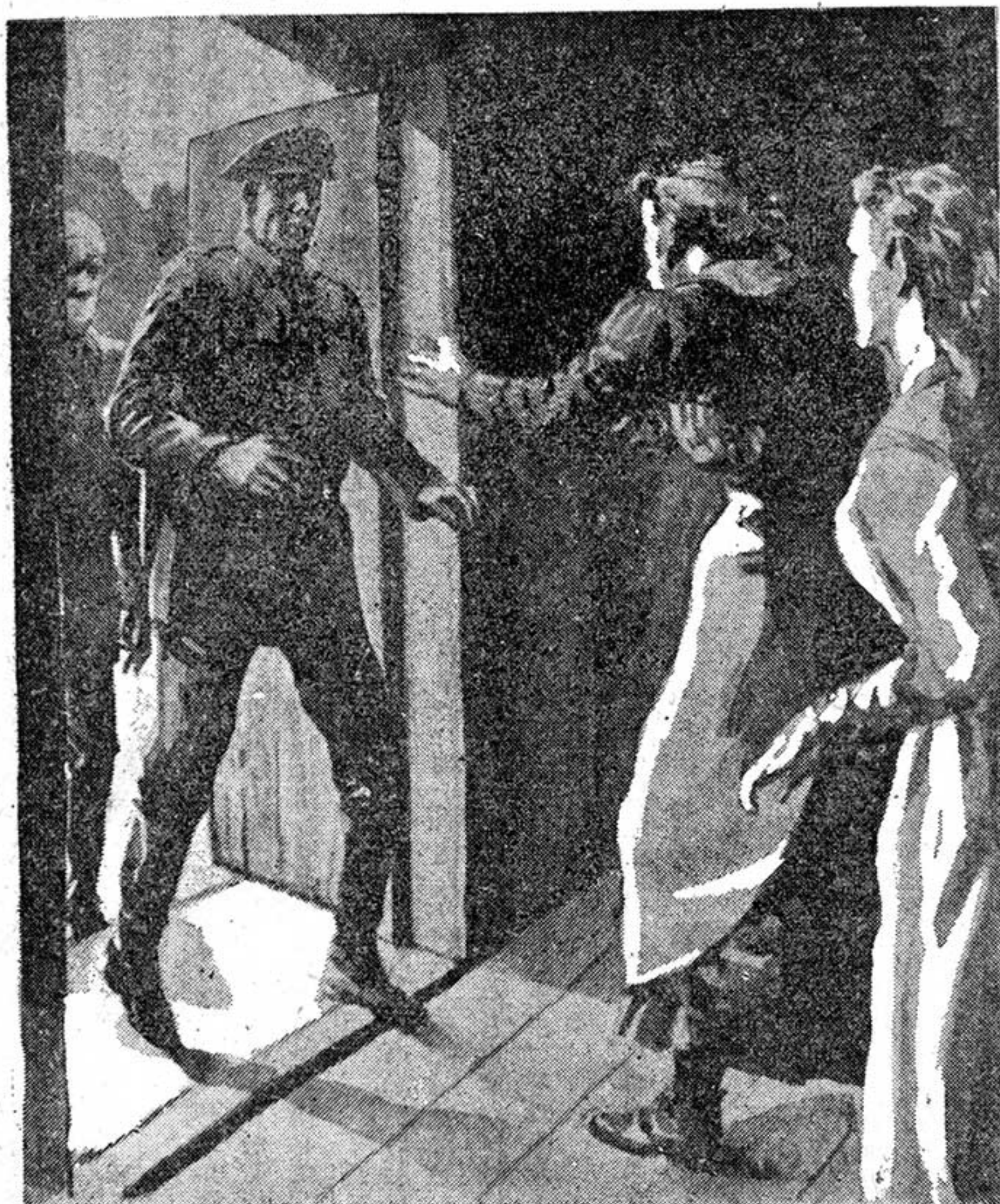
食事が終ると、ワシリイの命令で、妹のリユーバがどこかへ出て行った。すぐ戻って来

て、ワシリイに目で合図をし、二人そろって出て行った。

一時間くらいすると、リユーバが一人だけ

戻って来て、ベルテンとジョセフに、一緒に来るように云った。

この時刻におけるヤルタの街は、ほとんど



死そのもののように暗く、人影がなく、ところどころにタンクや高射砲が魔物のようにならずくまっているのが見られるだけだった。

リユーバは狭い曲りくねった道をすこしばかり行つたところの奥まった一軒の家に、二人を案内した。

内部は、種々雑多な古道具が置きならべてあり、薄暗いランプが一つついていていた。暗いカーテンの奥から、ワシリイが、一人の老人と姿を現わした。彼は老人をパラマノーフという古物商人で、彼の殺された父の友人だと云った。

パラマノーフ老人は何の前置もなく語りだした。

「巨頭会議の行われているリヴァディア宮にはルーズベルトと随員がとまっている。スタリーンは数キロ離れたコリーズの別荘に随員と寝泊まりしている。しかし三巨頭は、毎日午後になるとリヴァディア害の舞踏室に集まって会議をする。ただ、今日の午後行われる会談が最終のもので、あすは三巨頭はそれぞれ出発する予定になっている」

リヴァディア宮には、むろん特別の許可証の所有者以外は絶対に入ることは出来ない。その許可証を、一枚、自分が融通しよう。一

枚だけ！ それ以上は絶対に不可能だ、そう老人は云って堅く口をつぐんでしまった。

「事情はわかつたろう、ベルテン、ジョセフ。われわれは一人しかリヴァディア宮に入れないということだ。で、わしがその一人になる決心だ」

ワシリイがそう云つたのに対して、ベルテンとジョセフが、烈しく抗議したことは、云うまでもないがワシリイは頑として承知しなかった。

三人はそのままその家で夜を明かし、次の日の午後二時、パラマノーフ老人が約束の特別許可書を手に入れて戻ってくると、ワシリイは、むくりと起きあがり、まず腹ごしらえをした。

その後でピストルと爆弾を入念にしらべ終ると、にっこり笑つて、皆に軽く手を振り、さっさと出て行つた。

忽ち時間は過ぎ去つて夜に入つたが、ワシリイからの連絡は何もなかった。がまんが出来なくなったジョセフが、逃げる時に使うトラックをさがしに出て行つたあと、ふいに小刻みな足音がして、真つ青な顔に眼ばかり光らしたリユーバが姿を現わし、

「早く来てください！」

と叫ぶように云つた。

ベルテンは椅子から飛びあがると、用心の繃帯をするのも忘れて、リユーバのあとから走り出した。

パラマノーフ老人の家の寝台に、わずか数時間でまるで地獄から来た幽鬼のような形相に一変したワシリイが、上半身を露出して、うめいていた。

ベルテンは一と目、ワシリイの胸から腹を見ると、棒立ちになり嘔のように喘いだ。胸から腹一面にかけて、肉と皮膚が無残に焼け爛れ白い骨が見えていたが、それも黒く焦げていた。

ワシリイは地獄のような苦痛にのたうちながら、しかし精神は、しっかりしていた。ベルテンの顔を見ると、薄い苦笑を漏らし、それまでの経過を話した。

彼がリヴァディア宮に近づくと、一キロメートル毎に、数十名の機関銃を持った警備兵に停止を命ぜられたが、赤軍将校の正服と身許証明書のおかげで通り抜けることが出来た。最大の関門であるリヴァディア宮の門も、用意の特別許可証の力でパスすることが出来たが、ここで彼は残念なことにピストルを取り上げられた。では、爆弾で仕事をやるだけ

だ！と決心したワシリイはそのまま進んで行くと、いよいよ建物へ入る手前の、最後の関所でもう一度ストップを命じられ、衛兵司令が、彼の差し出した特別許可書の名前と、リストの名前が一致するかどうかを調べた。むろん一致などするはずがなかった。

ワシリイが、観念のほそを固めた時、二台の巨大なリムジンが門から内部まで疾走して来て、英国の将軍が数名飛び降りると、大急ぎで入って行った。彼をしらべていた衛兵司令が狼狽して敬礼をする間に、ワシリイは、英国将軍たちの背後にくっついて内部に入ってしまった。ワシリイは、なお英国将軍たちの後につくようにして中庭を横断し、そして広いホールに足を踏み入れた。

明らかに最終会議はまだ始まらなかった。米、英、ソ三国の高級軍人、政治家たちが、あちこちの廊下、ホールなどに三々五々集まって、何かしゃべっていた。

十五分ぐらいすると、ふいにすべての会話が中止され、正面の大きな広い階段から、軍人と政治家の団が、どやどやと降りて来た。その先頭に立っている大きな髪を生やした、粗服をまとった太った背の低い男が、スターリンであることは一目でわかった。

ワシリイは目立たないように注意しながら階段の方へ近づいて行った。

階段を降り切ったスターリンは、そこに立って誰かと笑いながら何か話した。

今やワシリイはスターリンから、十歩ばかりの距離まで近づいていた。彼はむろん爆弾で、自分と一緒にスターリンを粉砕するつもりだったから、もうすこし間隔をつめなくてはならないと思い、じりじり、と進んでいった、何人もワシリイに眼を向けるものはなかった。さらに数歩……。

もうスターリンと彼との距離は、四、五歩しかなかった。スターリンの巨大な背中が、すぐ手のとどくところに迫っていた。

「ふふふ……」

枯れたようなスターリンの笑声が彼の耳に入った。今だ！

ワシリイは、胸のボタンをはずし、手を入れて、ホルスターに結びつけてある爆弾のバンプの部分を手で、ぐっと握りつぶし、そして眼を閉じた。突然、彼は焼け爛れるような苦痛を胸と腹部に感じた。

「やった……」思わず彼はつぶやいた。

この爆弾の構造のことは、先に、彼が黒海の怒濤の中に着水して、機体を爆破させた時

の操作でわかるように、パイプの部分にカプセルが入っていて、それをつぶすことによつて、カプセルの中の硫酸が爆弾に浸透し激烈な爆破を誘導するのである。パイプの継目が不完全だったり、つぶし方が下手であつたりすると硫酸が逆に外へ流れ出し、爆発は失敗に終る。

ワシリイの場合は、継目が不完全だったのか、操作が誤まったのか、それはもうわからない。ただ、おびただしい硫酸が、どつと彼の胸部と腹に流れ出たことだけが事実である。生きながら地獄の火に焼かれるとは、このことであつた。ロシアの若者ワシリイ・コシヨックは、腹と胸を硫酸で焼きつつ、顔面蒼白に変じ、しかも正確な歩調で、静かにリヴァディア宮の外へ出て行ったのである。

ベルテンとジョセフは、すべての機会が去つたことを知り、重傷に苦しむワシリイをトラックにのせ、その夜のうちにウクライナ方面へ向つて逃走したのであつたが、ワシリイは、到底絶望とわかれると無理にジョセフからピストルを取り、はつきり笑いながら車上で自殺を遂げた。二人は戦友の死体を白樺の林の中に埋め、一瞬、敗戦のドイツを指して走り去つたのである。

黒いマニキュアの女

——意識を失う寸前の目にうつったのは、爪先の

黒く輝いた五本の指のうねりだった——



木原康夫

都築峰子・画

追って来た女

その日伊津子は勤め先の装身具店から帰る途中、電車の中で従兄弟夫婦に出会った。二人はつい三月も前に結婚したばかりで、一応親の家の二階に落ち着いていたが、早く独立した小さな貸屋か、アパートにでも入りたいと前から伊津子にもその部屋探しを頼んで来ていた。昨日、伊津子の居るアパートの一室が明いたので、今日にもそれを電話する筈だった伊津子は、

「ちようどいい所で会ったわ。実は昨日、私



のアパートのお室が一つ明いたのよ」

そう教えてやると、

「あら、私達も昨日、東中野に見つけて、さっそく荷物を今運び終る所よ」

「一足違いだなあ。もう一物残らず持ってって、後はこのトランクとその包み一つ運ぶ所まで漕ぎつけたんだ」と呆気ない返事だ。

「なあんだ。もう引越まで済んでたの」

伊津子はちよつと裏切られた気持になって云ったが、従兄弟夫婦と同じアパートで生活すれば、つき合いが面倒だし、他の所に室が有ったのはこれ幸いな気持だった。だから下車する際に二人が、

「ほんとにごめんなさいね」とか、

「迷惑かけちゃったねえ」とか、謝まるのに「いいのよ。そんなに悪がらないでも」と実は腹の中ではほっとした気持なのだ。

伊津子がそもそもアパート生活を始めたのも、誰の交渉も受けず自由に自分自身の生活を楽しむ為だったのだから、騒がしい親類が

そばにいられるのはうっとうしい。

(それにあの奥さん、ちゃきちゃきらしいから、伊津子なんてとてもつき合っていけないわ)

そんな思いにふけりながら商店街を抜けてもう、そろそろ灯の消えている住宅地へ入った時、ふと小走る足音に、

(何を急いでるんだろう)と振返った。走って来るのは女らしかった。大方親のうるさい娘が門限に遅れて走ってるのだ位に考え、歩を早めようとした時、

「あのう——ちよつと」

女が突然声を出して呼び止めるのだ。

(あら? 呼んでるわ。道でも聞きたいのかな?) ちよつと街燈の下で立ち止ると、女は走ったせいで息を切らし言葉を詰らせながら「失礼ですが——ほんとに突然で失礼ですが……」と妙におどおどしい口調で云いだす。

目の大きい、伊津子より二つ三つ若い二十前後の女だった。青白い顔が変に夜の中に浮い

ている。

「何か……」

一見取り乱した様子に訝かしい目を向けて何を云い出すか不安になって来る伊津子へ、「先ほど、電車の中でお室が明いているとかおっしゃっていらつしやいましたが——」

急にそう云われて(変な人だなあ)と思いつつ、

「はあ、云いましたけど……?」と答えた。

電車の中で確かに「私のアパートの室明いたのよ」と云った。女はそれをたよりにここまです伊津子を追って来たに違いない。今さら、あれは別の話ですなどと、ごまかしもできない。

娘はその一言に力づけられたように、

「私、是非お室が欲しいんです。今にも欲しいんです。ほんとに見ず知らずの方に失礼な事なのですが、室主の方に紹介していただけませんでしょうか?」

「はあ……でも」

伊津子は相手の性急な調子に口ごもってしまった。常識はずれというより突飛な女だ。しかし、その目は、嵐の海中に木片を見つけた漂流者のように輝いているのだ。

「お金はあるんです。いくら高くてもいいん

です。保証人もいます」女は早口に云った。

相手の勢に押されて、伊津子は小声になりつつ、

「私が室主じゃないんですし、それにもう入る人が定まっているかも知れないし……」

不安な黒さを増しつつ、断るそぶりを示すと、

「室主の方を紹介してくださいただでいいんです。いいえ、室主の方の住居をお教えくださるだけでいいんです」

言葉に必死の熱が籠って来る。まさか室主の家を知らぬとは答えられない。それに相手はすがりつかんばかりの云い方なので、
「ご案内いたしましょう。けど、もうお休みになったかも知れませんよ」

伊津子は気味悪い気持ちになって来て、これ以上立話を続けて居る勇気がなくなった。

それに、この上またどんな事を云い出すかわからない。早くこの女を室主の所に押しつけてしまいたかった。無論、女への好奇心的なものが伊津子にないでもないが、それより気味悪さが先に立っていた。

アパートの持主は、ちょうどアパートの玄関の真向にあるのだが、まだ灯がついていて起きている様子だった。伊津子はほっとし

た。寝てしまっていたら、起す手伝いをしなければならぬくらい、あの目の輝きの異様さから容易にわかる。そんな事は真平だと伊津子は思った。

「そこなんです。じゃ、私ここで……」

と相手に何か云う間を与えずにアパートに跳びこみ、二階に走りあがった。親切気のないことは感じていたが、そんな事は重大だと思わなかった。女の方が変わっているのだから伊津子が丁寧にしてやる必要はない、と考えた。

室に入りカーテンの間から室主の玄関を見たが、木に遮ぎられてよく見えない。

(薄気味悪い。早く睡っちゃおう)

いつもなら軽い食事をしてから床に入るのに、そのままパジャマに着替えて床を引っぱりだして、スタンドを消し蒲団にもぐった。静まりかえったアパートのどこからラジオが低く響いて来る。

しばらくは女の事で心の中はめまぐるしいほど働いている。

(どうして室が欲しいなら周旋屋に行かないのかしら？ お金は沢山あるなら、いくら高い室代でもいいはずだわ。それに夜ふけに、よりによって電車で立聞いた空き室へ飛びつ

いて来たんだろう？ 見ず知らずのあたしに平気で話をしかけて来るなんて！ それよりあの凄い目。何んだってあんな目であたしを見るんだろう？ まともな人じゃない。でも家出娘には見えないけど……美しい人だったわ、あんな可愛い人ちょっと居ない)

次から次へと想いが広がる。

かなり時が過ぎた。

急に静寂を破ってその時アパートの玄関が開いた。

人声。(来た！)同時にそう感じた。ぞく

とした。明いている室は一階西側だったがゴトゴトいう足音もその前で止った。伊津子は耳をできるだけ澄ましていた。足音はすぐまた玄関に戻って来て、蒲団がどうか、店が閉まっているとか云う声がして来る。

(お蒲団これから買いに行くんだわ。あの着のみ着のままで今夜からここに住むつもりなんだ。よっぽどお金持ってる。でもなぜそんな事するんだろう？)

玄関から足音が消えて伊津子はさらに目がさえて来る。隣室の目覚し時計の音が聞えそうに耳が鋭い。

女はなかなか帰って来ない。

苛々しい時間がいつか過ぎて、自動車の音

がしたかと思うと、アパートの前でばったり止った。

(蒲団屋の車?)

玄関に足音が乱れ、若い男の声。

「どっちですか? あそこの室ね」

「ほんとにすみません」などと微かに声が響いて来る。足音は玄関から消え自動車走りだしやがてアパートは元の静けさに戻った。

(わからない女だ……)

玲子の謎

翌朝、伊津子が目を覚めた時は八時を廻っていた。昨夜の怪事——伊津子はほんとにそう思っていたが、そのため睡眠不足で床から立上るとふらふらした。洗面所に行き、さっぱりと睡気を取って室に戻り、化粧台に向って牛乳を瓶からぐつとあおった時だった。

ドアがノックされ、続いて低い声が来た。

「はい」立ち上ってから伊津子は、あの女が来たのだと直感した。開いたドアの前に白無地の浴衣にグリーン細帯を締めたあの女が、微笑を浮べて立っていた。

「昨夜は失礼いたしました」女は静かに頭を下げた。年に似ず大人々々している。

「ほんとにあんな事をしてしまって、お気を

悪くしてらっしゃいますわね?」ちらっと伊津子を見て、

「実は少し訳があつて、あんな事をしてしまいました。どうぞお許しくださいませ」そこでまた丁寧に頭をさげる。

伊津子はぐつと好奇心がもり上つて来た。

「ちよつと訳があつて……」などと云われると、昨夜で消えかけているそれが、ぱつと大きくなるのだ。聞きたくてたまらない。伊津子は昨夜の不親切なぞ忘れて、馬鹿に親しく室に入るように勧めた。そうすれば少しくらい聞き出せる気がした。それに女は実に美しかった。昨夜よりずっとそれは伊津子の中に強く入って来る。もっと女を見たい気もした。

「でもお出かけ前の事ですし……」

女は一応断つたものの、

「ではちよつとだけ——」

と入つて来た。座蒲団を勧め、手早く紅茶を入れて向い合うと、女は、北川玲子といってQ大芸術科にいと自己紹介をしてから、「こんな事自身の事で、お話ししても仕方がないので、昨夜失礼をした弁解という意味でお聞きください」と前置し、

「大方はお察しのついている事ですが、私、

昨夜ある家から逃げ出して来たのです」

急に小声になつて、

「逃げ出した理由は私的な事ですのでお話ししたくないんですけど、その主人の目の届かない所に逃げたくて——家出したんではありません。私の生家は京都の織物問屋です。私は昨日逃げだした家に四ヵ月ほど前に下宿したんです。でも……どうしても居たたまれずに——」

声を落し、しばらく口を閉じていたが、

「その主人という方は、私を離れたがらないで、別に逃げる気もなかった頃から私を見張ったりしてるんです。父や母にこんな事で心配かけたくないし自分でこの事は解決したかったので……。それで私、逃げたんです。行く当てなんか有りません。周旋屋さんに頼めばいつかきつと居所が知れます。探したり発見たりする事は天才的というより神がかり的です。だから私、全然途方もない、全く偶然に室を見つけて、そこに隠れてしまえば絶対に近いと考えて、そんな偶然の室を捜そうと考えていたところにあのお話が耳に入り、夢かと思つて……。それで昨夜のような事になったのです」

終始低い声でおどおどした口調でそんな事

を云って、間もなく帰って行った。

伊津子は北川玲子がこの一件を起した原因は恋愛事件だろうと結論した。

（あの人に好きな人ができて、今までつきあっていったその下宿の主人とやらを捨てようとしたので、主人があの人を軟禁したんだわ。）

そして逃げたのよ。きっとそうだ。そう考えて謎は解けた心持になったが、これはもしかすると近々に、北川玲子の室できつとひと悶着起るに違いないと考えた。そして伊津子は玲子が普通ならしゃべらない事を自分に話したという事で、ひどく玲子が身近に感じられた。

それから三、四日玲子は、姿を見せなかった。しかしいる事はいらしく、夜は灯がついているし、近所のおかみさん連中が洗濯場で、「北川さんって人は……」などと噂しているのを聞いても確かだった。

一週間、十日と平和な日が流れ、玲子はそれっきり姿を見せなかった。

（あんな殺気立ってて、大したもめ事でもなかったんだわ）

期待はずれな気持になっている、そんなある日——その日は店じまいが遅く、電車を降りた時ホームの時計が十時五十八分を差して

いたが、伊津子が商店街にさしかかった時、閉店間際の文房具店から玲子が現れた。黒のトリアドル・パンツに白の半袖ブラウスという派手なかつこうなのに、伊津子は、おどおどしい玲子という印象を破られて、呆然として見詰めていた。

玲子は伊津子を見つけ、ニッコリして頭を下げた。自分のあわてた様子を隠しつつ伊津子は近づいていって、

「お買物？」

「ええ、絵具が切れたんで——」

いかにも若々しく前とはまた違った可憐さがあった。

（こんな可愛い人だから、恋愛事件の一つや二つあるのがあたりまえだわ）などと考えながらアパートへ続く横道に曲った。

瞬間、横にいた玲子の体がふっと消えた。

ぎょっとして伊津子が振り返る寸前に背から抱えられて、次には鼻の辺に、つーんと来るものが付いた布をぎゅっと押しつけられた。体が震えるだけで全く力が入らない。しかし、全身で暴れた。右手が何かにひっかかり掴むとそのままビリビリ切れて伊津子の指にからまる。頭のしんがうっとうしくなってきた。（ああ、どうしよう！）

力なく目を開いたその前に、黒いマニキュアをした爪がくねっている。

（黒いマニキュア……）

そのまま気を失ってしまった。

玲子は消えた！

どのくらい時が流れたか、伊津子は鋭い悲鳴に、薄く意識を取り戻した。が、自分の存在感がある程度で、はつきりはしない。いくつもの足音が体にどこかかと伝わって来て、急に何者かの手が伊津子の頭を掴んだ。

「おい！ おいおいおいおい！」

たてつづけに体を揺られて目を開いた。眩しい光がいくつも輝いている。

「しっかりしろ！」

「峯さん！ 伊津子さん！」

次々と声が耳をつく。誰かに抱えられた。が同時に胸の中がぎゅっと収縮して、烈しく胃の中のものを吐いた。

「担架！」

「抱いてけ！」

「だめだめ、静かにしなけりゃ」

「医者居るのか？」

耳の穴に綿をつめられたように声が遠い。しきりに誰か背をさすっている。

「担架に乗りましよ。ちよつとの我慢よ」誰かが腋の下に手を入れた。伊津子はのろのろとそれを断る手つきで、

「平気です」と立って歩けるという表示をすると、

「平気じゃない」叱るように云うのは右隣りの室の主人の声だ。黙ってされるままになっ

た。応急用にアパートに備え

られたあの埃まみれの担架が伊津子の目に浮んだ。室には床が敷かれていて、間もなく医師が現れた。隣室の夫人が附添になってあとの人達は外に出た。

型どおりの診察が終った。

「お酒飲みましたね？」

「ええ」と伊津子は答えた。

医師とはその一回の問答しかしなかった。やがて誰かが知らせたとみえ、母親と兄夫婦が女中まで連れてかけつけて来た。

伊津子は医師との会話通りに酒に酔った事になっていた。それに、あんな不意の、自分

でもどう説明していいかわからない事を白状したところで頭がおかしくなったんじゃないかと思われてしまいそうな気がする。

それに伊津子は母から、

「貴女へんな事されたんじゃないわね？」

と問われたりしたものだから、酒に酔った事にでもしないと、強姦された娘などと噂を

たてられてしまいそうなのだ。無論伊津子は犯されていない事は知っていた。どう調べてみてもいつもの肌とそこは同じだったし、直感的な判断によっても、また生理的に考えても犯されてはいなかった。

ただ問題は玲子だった。無論犯されたに違いないと思った。



（どうしてるだろう？ でも伊津子は氣は失
つてたし、第一現に見た訳じゃない。知らな
い事にしてなけりゃいけないわ。一生の事だ
もの。黙ってるべきだわ）そう決心した。た
だ、あの氣味の悪い黒マニキュアをしている
所から、相手はすごい変態的な者で、玲子は
きつと無慙な仕打を受けたに相違ないと考え
自分の体にそれをされたように、身震いが起
る。

嫌な麻醉薬の影響がなくなって伊津子は翌
朝は元氣になっていた。母達はしきりに止め
たが、

「平氣よ、大丈夫」と店に出た。

一日中変わりもなく、食欲が少し落ちた程度
だった。

店を引けて室に戻ると、おしゃべりな一階
の妻君が、玲子がいなくなった事を伊津子に
話した。

「それがね、昨日あなたの事があるちょっと
前に外へ行って、それきりらしいんですよ。
なにしろ物騒だから心配になりますよ、サン
ダルはいて、ちよつと出て来ますってね、す
ぐ帰って来る云い方だったんですけどね、そ
れっきりまだ帰って来ないんですよ」

伊津子は室に戻った。そしてふと玲子は自

殺するかも知れないと考えた。

（いいや、もう死んでるかも知れない）

じーんと不安が恐怖に変わった。

（伊津子があの時すぐ、麻醉薬でやられたと
云って、玲子はどうしたか騒いでいたら、警
察が玲子をみつめて保護してくれたわ。ああ、
どうしよう！ あの子が死んだら伊津子生き
てられない！）

狂いそうになって来た。いても立つてもい
られない。全身に不安な苛々しさがむずむず
して来る。理由なしに恐しい。

（恐い！ 母さんの所に行こう、とてもここ
にはいられない）

遮二無二、着替えたばかりのパジャマをま
た脱いで、洋服になった。電話でタクシーを
呼ぼうとも考えた。玲子の次に自分が襲われ
る氣持だった。ただもう恐しくなりすぎて、
玲子の事は忘れてしまう。ハンドバックを持
ち、電燈のスイッチに手をかけた。

その時だった。

コンコン。コンコン。

と軽いドアのノック音が伊津子の耳に入
った。がんと打たれたように、体が硬直して、
血液が骨に吸取られて行くようにすつと引い
た。指に力がなくなりハンドバックは畳に落

ちた。

くるるるるるるる。

ノップがゆるく回りきった。電燈のスイッ
チを無意識に力を入れて掴んでしまつて、同
時にぱつと消えてしまつた。

「誰！」

のどに叫びがつかかる。電燈のスイッチ
を手探ぐつても、そこには昔からスイッチが
ない如くに見当らない。

（駄目だわ！）

ドアが開いてしまつた。

背の高い、レインコートのようなものを着
た者が立っていた。首から上はレインコート
のフードで見えない。何か云おうにも声は出
ない。膝の力がなくなっていた。

「昨日の夜」相手は低く云った。

「その曲角で貴女は玲子の片袖の布を破
り取ってしまいましたね」相手は女の声だ。

それでもつと不氣味に伊津子を包み、魅い
られたもののように機械的に立ちつくしてい
た。

「返してください。貴女に必要な物です」
「知りません！ そんなの知らない！」
ただそう叫んだ。

「いいえ」相手は首を横に振り「そんなはず

はありません。持っています。貴女が担架に乗って室に入る時、右手に掴んでました」「だって知りません！」泣き声になって叫んだ。真実、伊津子は知らなかったからだ。

突然相手の掌に懐中電燈が輝き、鋭くあたりを探る。靴のまま女は室に上りあちこちを照し始めた。逃げようにも動けぬままで伊津子はただ立っていた。紙屑箱がひっくり返された。

「あるじゃないの」

女の声にひよいと動いた頸を廻して光の輪の中を見た。白い布がくしゃくしゃになってある。女の掌がそれに伸びて、布を掴んだ。

(黒マニキュア！)

五つの黒い爪がずっと光の輪から消えた。悲鳴をあげたかも知れない。また失神もあったろう。ともかく気がつくとき伊津子は母の顔が近くに見えた。家に戻っていたらしい。

現れた玲子

次の日から伊津子は店を休んだ。外に出るのが恐いのだ。無論アパートなどには行かない。母の居間に床を敷いてそこにいた。黒いマニキュアが恐しかった。あの麻酔薬の犯人と同一人である事も作用して恐しさは倍に

なる。また、あの女は伊津子さえ知らなかった玲子の片袖をきちんと取りに現れたのだ。

女が人間だと思えない気までする。玲子はどうしたのだろう。考えまいとしても色々考えしてしまうし、それ等が全然答えを出す前にくるくる頭の中を定るので、混沌として来る。考えたり感じたりする機能が失なわれ、狂いかけているとさえ伊津子は思った。一日に数回頭痛や昏迷が来た。頬肉がげっそり落ち、目がぎょろぎょろする。

しかし寝てもいられない。店に早く出なければいけないからだ。長い休みは取れない。十日もして恐しさをこらえて店に出た。が、以前と何の変りもない街や人の流れが伊津子をややほっとさせ、休まずに出ることができた。数日して、兄からアパートを一応引越してしまえと云われ、次の日曜日に兄も来てアパートの荷を運びはじめた。多少は、この二年越しに住みなれた室に未練があったが、黒マニキュアの恐しには比べられない。

荷をオート三輪に積み込んでいる時、誰かに呼ばれて伊津子は振り返ると、玲子が立っていた。

「まあ！」自分の声に驚いたほど伊津子はあわてた。玲子は微笑して頭をちょっと下げ、

「すみませんでした。とてもご迷惑おかけして——」

伊津子はその意味がわからず、答えを口ごもっている。

「お話があるんです。ちょっと後でお帰りになる前にでも私の室におよりくださいませ」「はあ」と答える伊津子へ、またニッコリして行ってしまった。意外に玲子が元気で、その上伊津子と話をしたいと云う。

伊津子は荷積みを兄や女中にまかせて、玲子の室のドアをたたいた。木椅子が二つ。壁に大きい油画が寄せてあった。

「ほんとにすみません。ご迷惑のかけ続けで何んとあやまっていたのか……」とまた頭を下げてから「片袖を取りにまいったそうですけど、驚いたでしょうね？」

ぎっくり目を上げた伊津子はかなり声高に「貴女はあの方に」と云いかけると、

「ええ、いつかお話した、私を離したがい方ってあの人なんです」

「まあ……！」伊津子はわからなくなっていた。茫然とした。玲子はうつ向いて、

「へんでしょ。でもそうなの。玲子はあの方に愛されてるんですわ」ずばりと云う。

いんです。あの方は以前にも増して玲子を愛してくださいます。あの方の生活に玲子が必要なんです。けど、あの人、私が他の女の人や男の人にちょっとでも親しい振りをするとても叱るんです。通りで前から来る女の人を見ると、室に帰ってひどい方法で虐めるんです。お隣りの方と朝、お早うをしてもそうなんです。電車の中で前の人を三度も見たって打つんです」目をあげて伊津子を見、悲しい表情で訴えるような口調になり、

「玲子。ママの事ほんとに愛してるんです。捨てられたら死にます。それくらいママを愛してるんです。でもいくら愛してもママは満足してくださらない。世の中は玲子とママだけじゃないから、それに玲子だって目がある以上、どこか見えます。それが偶然前に歩いている方や、そこに居る方にいったりとしても仕方ないんです。目を閉じては歩けませんし、モデルを見ずに絵は描けません。根もない事で虐められたりすれば玲子だって嫌になるわ」

投げるように云ったが、またがつくりして「だから私逃げたんです。……でも駄目だったわ」

沈黙が来た。

玄関で子供のはしゃぎ声がする。伊津子はその間に、あの時玲子が必死で室を求めたのも、夜、襲われて消えてしまった理由もわかって来た。

（すごい人だ。あの黒マニキュアはやっぱり魔力があるわ。それになんて嫉妬深い女なんだろう。気狂いじみてる）

玲子はやがて目を上げると、

「でも、もういいんです。今日、私もここを引上げて、ママの所に戻るんです。ママは私の絵を育てくださった方なんだし、愛してくださっている事は絶対なんです。それに私が居ないと生きていられないんですわ」涙がふつと眩の辺に沸いた。それを堪えるように笑

った玲子は、「もうご迷惑はかけせんわ、私がママの家に入って外へ出ずにママと生活すれば、きっと他の方に迷惑がいく事はないと思います。ほんとに今度は申し訳ございせん」

そう云うと言葉を切って黙ってしまった。

伊津子はなんと返事をしていいか困ってしまった。慰める言葉が見つからない。かと云って何か云わないのは変なものだ。確かに玲子は伊津子から何か云ってもらいたい様子をしている。どの事について何と答えてよいやら伊津子は戸惑うばかりだった。

妙な苛々しい時が流れた。

「お帰りにならなければ……」急に玲子は目



を上げて云った。「ご一緒の方お待ちになつてゐるわ、きっと」姉のような口調で云い玲子は立ち上った。伊津子も立った。

「私、迷惑がかかったなんて思つてないわ」急調子に、半端な声でそう云う。玲子はそれに笑顔で「ありがとう」と云う目をした。

そしてドアに歩みより、開くと、

「お元気で……」と云う。伊津子は何となくしに追い立てられるようにドアから出かけると、玲子はどこに持っていたのか、白い小さな包みをいきなり伊津子の掌の内に握らせ「さよなら！」太い声で耳元に云うと伊津子を外に押すように出して、ドアをばたんと閉めた。鍵の降りる音がする。

妖精と魔女

玲子が押しつけた白い小さな紙包みは、みどり色の細いリボンに縛られている小箱が入っていた。その中には、つげの木らしい樹で造られた木の葉の飾り皿が入っていた。時間をかけて造ったらしく、きわめて細かい葉の筋まで磨きがかかって、艶々と木肌が輝いている。

小紙片には次のような詩が書いてあった。



木の葉。

落ちると再び戻れない。

——でも

この木の葉は

きつと

貴女のどこかに根を付ける。

いのち
生命の無い、しかも

生命の有る、

木の葉

太いみどり色のインクだった。どんな密語がその中に入っているのか明瞭ではなかったが、この詩が愛に関する詩以外のものには考えられないと伊津子は思った。

（あたしが好きだって云う詩なのかしら？）

それともロマンチックにこう書いたのかしら？）妙な気持で伊津子はそれをつくづく見詰めてつづけていた。

その奇妙な詩と木製の木の葉が、部屋の本棚に載せられてから平和な数日が過ぎた。

その日、伊津子は閉店間近で忙がしい最中電話を受けた。しかも相手はほとんど聞取れぬくらいの小声でささやくように話す。

——伊津子様でしょうか？

そうですが……と答えると、

——新宿区×丁目×番地に来てください私、玲子です。新宿区×丁目×番地ですよそのまま電話はピーンと静かに切れた。そういえば玲子の声だと思えたが、なぜこんな呼び出し方法をするのかわからない。それに夜

がふけていて、常識的には断ってしまえる時間なのだ。

(新宿区×丁目×番地)

伊津子は受話機を持ったまま、立っていて口の中でくり返した。いやにはつきり番地が頭にくっついていて。

(行こう……)伊津子はそう定めた。玲子はあのママと云っていた黒マニキュアの女の乱暴から逃れて、伊津子を求めているのだと考えた。それとも、伊津子以外に何かを頼める者が居ず、重大な事をことずけたいのかも知れない気もする。電話の低い声が妖しく伊津子の心で騒ぐのだ。

店を出ると車を拾い、そのまま電話で云われた番地に走ってもらった。三回車を止めてその家を通行人に問い、着いたのは鉄戸のある門の大きい、樹の茂った、二階建ての家だった。表札なしで番地のみ月光に読めた。しかしいざ入るとなると、伊津子は異様な不安に襲われて、急に引返したくなった。玲子一人で待っているのか、それともあの女も一緒に居るかも知れない。

ふとその時、その家の二階の板戸が一枚明いていて、誰かしきりに手を振っているのが目に止った。

(玲子！)

躊躇していた足は勢いよく動いて横手の潜り戸を開き、伊津子は小砂利の道に入った。二階の人影はなかった。長く曲った広い砂利道は意外に長かった。

やっと着いた玄関は蔦の絡まる石垣を持った洋式のもので、二段の石段がついていた。走り登った伊津子はドアの前に立った。今にも玲子が二階から飛んで現れ、ドアを開けてくれると確信していた。

と、突然何者かの気配と同時に凄い力で腰の辺を突かれ、伊津子はどんとドアに打ち当った。ドアががごと開いたので、伊津子の体はそのまま、のめるように家の中の石畳にころがった。

ドアがぱたんとしまり、横腹を突かれて仰向けにされた。

「来たね」

目の前にずんぐりと誰か立っている。息をのんで相手を見た。面長の、目が鋭い女だった。手の爪は黒く輝き、魔物のように冷たいやらしさである。

「おいで」

悲鳴の前に頸の辺を掴まれ、ひっ立てられると、敷居に引上げられ、暴れるのも無関心

にするずる廊下を引きずられた。何回もわめき立てたが女は全くその声に答えもしない。

急に女が止ると、目の前のドアが開かれどんと投げ込まれた。石のように硬い床の上にいやというほどたたきつけられて、全身がじーんと痺れる。次いで二三回乱暴に足蹴にされ、伊津子は必死で端に逃げた。浴室だった。白いタイルに強い電燈が反射して目がかちかしてしまふ。右手に洋式の瀬戸の浴槽が見えた。素早く女の方を見た時、その足元にタイルと違う白さの顔くものを見た。ぐつと声が詰った。

玲子がぐったり蹲まっているのだ。何も着ていない。脚が変にひくついている。

「恋しい相手が来たよ」

女は下を見て云った。そして足で玲子の臀部を突く。

玲子は微かに身を動かし、顔を伊津子に向けた。

「玲子さん！」

絶叫した。が、玲子はただじーっと伊津子を見ているだけだった。

(どうしたんだろう？ 私の事知らない訳じゃないのに)そう心に感じた時、突然玲子はふらりと立つと、毛をを掴むが早いか訳の解

らない叫びをあげて壁に突き当り、その辺を打ちはじめた。

(気が狂ってるんだ！)

ぞっと逆毛立って、見ていられず思わず目をそむけた。つかつかと近寄って来て、いきなり伊津子の頬を平手打ちにした。そしてニタニタと妖しい笑いを浮べ、横の浴槽の蓋を取った。むっと甘ずっぱい臭気が鼻をつく。

「あの子をこらん。よく見てこらんよ！」

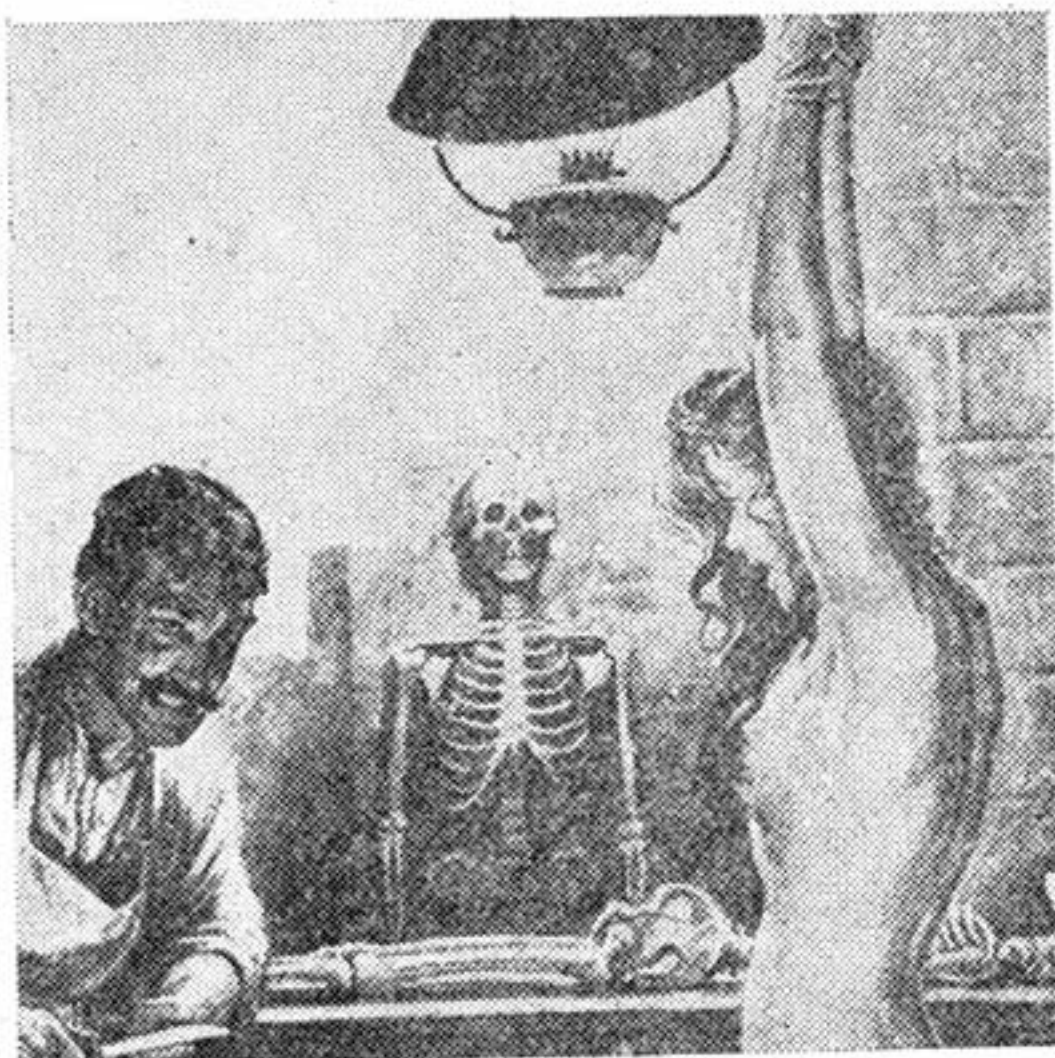
アブチック・スリラア

死 体 工 場

次号掲載 大町 三郎

——理由もなく殺されるのだ！ 平和な市民の夢を破って、一人、また一人屠殺者はきょうも刃をとぎすまして、どこかの街角に待ち伏せている！ 魂には用のない悪魔のしわざか？ 脱け殻の肉体に何の用があるのだろうか？

次号を御期待ください！



気が狂ってるんだよ。——気狂いなんだよ。

一体誰がしたんだい！ え？ お教えしましょうかい！ お前だよ、お前さんさ！」 呆然と、恐しさも抜けた伊津子へさらに叫ぶ。

「お前があの子を気狂いにしたんだ。私の最高作品をお前は殺したんだ。いいかい。この湯舟をこらん。中は、ただのお湯と違うんだ。お前を入れる為の特別のお湯さ。硫酸って奴だよ。骨まで溶かしてくれるいいお湯さ。お入り。入るんだよ！ あたしはお前の影ま

で消してやるんだ！

あの子は、お前が好きだよ、愛してるのだよ。それで気が狂ったのさ、お前を想い焦れて気が違ったんだよ。その罰だよ。お入り。早く入るんだよ！」

伊津子の全身からすつと力が抜け、ふらふらと壁によろけかかるのを、女はぎらぎら目を輝かせて掴みかかりに来了。途端に玲子が浴槽に向って歩き始めた。女は悲鳴を上げてそれを抱き止めに行った。

と、女はタイルに足を取られてか、よろけざまに頭から浴槽に浸ってしまったのだ。白煙がぱつと散り、獣的なうなり声がわあーんと反響した。玲子が突然ゲラゲラ笑いはじめた。蛇のようにくねった女の体がぐねりと浴槽に沈み、手の指が宙にもがく。

黒色の爪がピカッと光った。白黄色い煙と嗅気。

伊津子は我に返って、つつ立っている玲子をひっ抱えて室外にとび出した。そして玄門のドアを体を打つけて開き走り出た。同時に石段を踏み違い頭を打って昏倒した。投げ出された玲子はむっくり起きると、倒れている伊津子の頭を前に坐りこみ、あどけない仕方ですその髪を撫で始めた。



裏窓

既刊号目次

(お申し込みについての詳細は、二五一頁を御参照ください)

(裏窓臨時増刊・ムード)

グラビア・素肌の絵本

特集リポート・熱つすぎる妻……編集部 編

特集・危険な悪戯者——痴漢を斬る——

痴漢はこうして発生する……佐伯茂雄

痴漢の心理について……藤原 豪

座談会・闇にうごめくY虫を駆え

痴話閑談……岡田 甫

「ヘンタイ女性」今昔物語……高橋 鉄

ツカマツリ顛末記……木綿敏夫

千人斬り女豪列伝……谷 作蔵

性的傾向テスト……編集部・編

性の秘薬はどこにある……阿那茂利男

性の健康相談室……婦人科・竹内茂代

オナニーは無害か？……男性科・宇佐美正夫

大モテ男の秘密を探る……松岡克衛

「漂よい夫婦」見本帖……内海登利夫

夫婦のムード20代・50代……日夏由起夫

ベッティングの功罪と結婚十戒……原 比露志

……大場正史

女であることの悩み……回答杉靖三郎・山本杉

昼さがりの倦怠……志波葉子

愛と悔蔑(めざめ・第二回)……杵築富雄

新・枕草子・実らぬ葡萄……武野藤介

実話特集・愛欲のアウトサイド……諸 家

風流ムード随筆……諸 家

カラーセクション実用放蕩学……うらべまこと

(十月特大号)時代伝奇小説特集号

○口絵・妖異羽子板呪法……秋吉 密

海外グラマー写真集……編集部・編

書き下し長編・猿鰐伝奇……島本春雄

悲曲梟雄伝……岩堀 光

女犯経秘図……円城寺 達

笄呪文……松井籟子

隠密覚書・地獄大名……島本春雄

播磨灘の裸女……稲垣史生

紅毛の秘儀……鳴山能平

続肌邪宗門……杉 良平

甲斐の舞面乱……宇治川 竜

耽奇亭秘舌……真野 麗

人肌菩薩……橋爪彦七

犬は見ていた……竹谷十三

放浪の記……伏見和夫

悪魔と情婦……否笠一郎

女妖の檻……京極美岐

(十月特大号、定価百二十円、送料十二円)

(九月号)耽奇小説特集号

○口絵・日光浴

○「殺された七人の裸女」

殖民地の二重スパイ……大町三郎

悪のホザナ……絵口 浩

女足の賦……真野 麗

女犯経秘図……円城寺 達

毛……夢野蓉古

黄金の処女帯……柳生 亘

チーズ臭い三人の女……花町右門

紫(しどく)毒……薔薇蒼太郎

ヒーイズ・マイ・ギャッグ・マン……鳴山能平

虹の雫……早川小夜子

マヒトの告白……岬 洋之助

花吹雪天保女地獄……須崎竜平

悪魔に呪われた三人の男……神行京一

おもとの亡霊……三谷祥介

放浪の記……伏見和夫

ヒットラーの財宝を探しあてた男……陶山 密

扉をたたいた女……広尾麻津夫

隠密覚書・十人小町……島本春雄

ウェストニッパの柳……竹谷十三

殺された七人の裸女……北小路一郎

偶奇坊主……………岩堀 光

民衆の敵を仆せ……………今井 直

鐘ヶ淵因果絵巻……………稲垣史生

(裏窓臨時増刊・よるとひる)

グラビア・グラマアの季節……………吉野銀之助

夫婦の感覚を解剖する……………編集部・編

ある不感症の妻との対話……………西島 実

クリトリス不感症はある！……………神田駿一

完全なるCOITUS……………篠崎信男

性的傾向観破法……………高橋 鉄

性と妊娠のイタチごっこ……………青木尙雄

安心して性生活を営むために……………太田典礼

現代女のナキどころ……………うらべ・まこと

実伝・千人斬り紳士録……………谷 作蔵

男と女とそして私……………志波葉子

メンゼスと夫婦生活……………羽田正文

性の健康相談室……………男性科・金子栄寿

エレガントな娼婦たち……………女性科・太田典礼

プロ野球風流譚……………原 比露志

ここが魅力の急所です……………内海登利夫

「不倫な情事」と「女の市場」……………野高一作

めざめ(白い乳首・人形の下着)……………大場正史

男が女に求めるものは？……………杵築富雄

匂いぞいずる……………瀬田五郎

かびや・かずひこ……………かびや・かずひこ

パリの空の下、赤線は消えず……………萩原朱雄

新枕草子・木蓮夜色……………武野藤介

艶説・諸国ばなし……………狭山 温

随筆・軽風流……………高橋晋他

カラーページ・アダムとイヴのよるとひる

(八月号)異色読物特集号

〇口絵・裏窓裸天国

贅の花……………松井籟子

狂恋懲罰監房……………村岡良平

貞女お道……………竹谷十三

いぬ……………麻布義朗

放浪の記……………伏見和夫

夜の緋緬縮……………鳴山能平

蝦蟇物語・肉ごたつの群……………佐々木 力

隠密覚書・首吊り中蔵……………島本春雄

最大の逃亡者……………陶山 密

日本ムスメを売買した男……………ワストン・独田

黒髪さんげ……………真野 麗

仇情お浜船……………加藤晋三

峡谷の血闘……………柳生 亘

道化地獄図絵……………夢野蓉古

山西の黒い嵐……………大町三郎

兎男と猫女……………神行京一

あ(蛇)ぶ……………三宅一朗

女形地獄……………稲垣史生

楽園の香り……………柏木雛子

生人形の夢……………阿部佐治

吹雪とお花……………佐木 勤

胡蝶秘文……………岩堀 光

(七月号)倒錯の手記特集号

〇口絵・映画緊縛場面集

蝦蟇物語・むしだんご……………佐々木 力

あべじの足……………新津 勉

金色に魅せられる女……………西条恵美子

草雙紙の世界……………鳴山能平

放浪の記……………伏見和夫

あ(蛇)ぶ……………三宅一朗

殖媒爛哀史……………片岡省吾

悦虐濡れ肌地獄……………岩堀 光

乳房を菟める男……………神行京一

死に誘う天使……………花町右門

生きている竹槍……………ワストン・独田

ノーマン氏の不思議な実験……………柳生 亘

情炎白肌双紙……………稲垣史生

弄(ろうじゅう)獣……………雪俊 遥

青(あおせん)線……………杉山清詩

魔(ま)くつ)窟……………梅崎登志

妬(とけい)刑……………松井籟子

脱(だつこく)獄……………大町三郎

隠密覚書・女人駕籠……………島本春雄

耽美小説・紫夫人……………竹谷十三

旅芝居見てある記……………境 幸彦

六月号)女隠密・女スパイ特集号

〇口絵・ケツ庄が高いのヨ

〇〃・憲兵と女スパイ

マタハリ二世の悲劇……………大町三郎

観世流蜘蛛の秘曲……………小山龍太郎

黒水仙の女……………竹谷十三

喰人館炎上始末記……………真野 麗

赤いX二十七号……………花町右門

隠密太平記……………橋爪彦七

紅毛玻璃玉地獄……………加藤晋三

逆スパイ青木菊子の最後……………	柳生 亘
仮面の女体……………	宮下文作
真珠湾の女間諜……………	木村文平
鳶色の眼をした女……………	宮本 潔
プロセス・5と女……………	陶山 密
特高秘話・赤い花々……………	高月大三
悩乱破れ葛籠……………	岩堀 光
柔肌ごよみ……………	稲垣史生
福清の蟻地獄……………	鳥飼ゆき
愛怨人斬り船……………	川越八郎
カザレス公爵夫人の秘密……………	否笠一郎
女工哀史・春岡村事件……………	雪俊 遥
隠密覚書・白珊瑚地獄……………	島本春雄
Fの世界……………	佐瀬利五郎
女装礼子行状記……………	藤 琴也
悦虐女体讃……………	高月大三
風流裏窓艶色夜話……………	恋塚四郎
(裏窓臨時増刊・よるもひるも)	
グラビア・悩殺準備完了……………	
“ “ ドライはウエットのはじまり！……………	
東京の秘密クラブ……………	五島 力
東京のヘソの穴には……………	(猟奇録音)
ヨーロッパ女を攻めるには？……………	野高一作
P術指南(特殊女性の告白)……………	井上章子
マダム商売(マダムの手記)……………	志波葉子
耽美する女体の流れ……………	神保朋世
男色・色豪コンクール……………	原 比露志
テストされるあなたのSEX……………	高橋 鉄
女人多淫のメカニズム……………	神田駿一

集 女性にはたして不感症か？……………	
短小に悩む青年達に……………	西島 実
インポテンツの治療法……………	金子栄寿
早漏はここから起る……………	寺田文次郎
性 自宅で行なえる性力増強……………	橋爪檳榔子
三十男はここを狙え……………	高橋 晋
中年夫婦の痴戯を描く……………	武野藤介
現代女性の欲望を描く……………	大野千秋
フィルムの中の火遊び……………	志根寿浩
工場主と女事務員……………	佐藤みどり
告白と相談……………	解説・神戸佐一郎
夫は醜い女を愛していた……………	
夜ごと街に立つ未亡人……………	
夫を嫌い同性愛に耽る妻……………	
婚約者では満足できないオールド・ミス……………	日夏由起夫
女の見本帳……………	エロチックお洒落術入門……………
エロチックお洒落術入門……………	うらべ・まこと
風流随筆・四畳半おとこの楽書……………	今官一他
(五月号) 女の隠謀・お家騒動特集号	
〇口絵・裏窓はだか天国……………	
〇 “ “ 内外映画緊縛場面……………	
児小姓を犯した浅岡の局……………	加藤晋二
雌雄まんじ……………	真野 麗
染血の百物語……………	戸山一彦
大奥狸囃子……………	稲垣史生
癡狂院の相馬子爵……………	瀬戸口寅雄
天保素走り小僧……………	西尾富岳
うわなり火事……………	橋爪彦七

なでしこ地獄……………	広尾麻津夫
ボルシア家罪悪史……………	三宅 一朗
曠野をさまよう死体……………	陶山 密
ドイツ皇太子の陰謀……………	大町三郎
ブレンヴィリエ家没落始末記……………	花町右門
仇(あだばな)花……………	松井籟子
カザレス公爵夫人の秘密……………	否笠一郎
カルカッタの生地獄……………	ワストン・独田
聖アガルドの乳房……………	竹谷十三
悦虐の女・にせ聖女……………	雪俊 遥
一家を狙う復讐鬼……………	柳生 亘
隠密覚書・丹州鬼の巢城……………	島本春雄
あぶのうまる広告紹介……………	高月大三
祖国を売った女スパイ……………	戸山凡太郎
監獄十字路……………	藤 琴也
秘録・暴帝略譜……………	桜井純三
(四月号) 妖奇犯罪実話特集号	
〇表紙裏・囚われの女三題……………	外誌より
〇口絵・外誌に現れた(危機に立つ女達)……………	
〇口絵・泥靴にけがされる小羊……………	秋吉 轡
男装の淫婦モーパン嬢……………	花町右門
邪恋京人形師……………	若尾鋭介
翻られる女体……………	瀬木敏郎
女性憎悪者(ウーマン・ヘータ)……………	柳生 亘
カザレス公爵夫人の秘密……………	否笠一郎
女囚を奪う怪盗団……………	瀬戸口寅雄
ロックン・ロールの鳴る間に……………	大宮敬一郎
アミアン街道女教師殺害事件……………	大町 一郎
夫は満足していない……………	宮下 潔

地獄塔の脱獄者……	陶山 密
見捨てられた男の復讐……	立石梅雄
ちりめんの赤い紐と女……	堺 幸雄
花嵐遊女の達引……	稲垣史生
烹られた女達……	雪俊 遥
呪いの小盒……	香山風太郎
淫草(みだらぐさ)……	川越八郎
モイ族の媚薬……	柏倉欣造
秘境女人国……	稲垣史生
死棺屋敷(隠密覚書第一話)……	島本春雄
姉妹奴隷……	神谷欣二
若妻地獄……	竹谷十三
呪われた神々の地獄……	三上綾子
(三月号) 妖艶毒婦姦婦特集号	
○表紙裏・鞭をふるう女達……	外誌より
○口絵・処刑される妖婦たち……	編集部・編
○口絵・毒婦斑猫お銀嗜虐図……	絵・北原環
自分の臀部に追われる女……	三宅一朗
権力を持つ嗜虐の鬼……	雪俊 遥
悪魔の寝床で父を殺した女……	陶山 密
恐怖の家に住む女妖……	宮本 潔
洋妾くずれの女強盗……	瀬戸口寅雄
愛憎輪廻恨みの刺青……	大江 勇
嗜虐慾に狂う女賊……	真野 麗
女夜叉意地の惨劇……	瀬木敏郎
小塚つ原獄門の美女……	瀬戸口寅雄
七変化代官殺し……	神田越山
女贖札魔梅田の捕物……	小鹿あい子
裸馬悲恋の火あぶり……	岩堀泰三

人肉奴隷市場の女ボス……	原 比露志
雨の浜町河岸峰吉殺し……	高田嘉太
悦虐の女・デデ……	三宅一朗
倒錯の告白・いそぎんちゃく……	佐々木 力
ドヤ街は生きている……	柳生 亘
譚 磔にされた裸女……	
四本指の淫囚……	島本春雄
九鬼博士の変質液……	
アブ写真を蒐める男……	

(二月号は三月号に合併になっております)
(三月号は残部僅少になりました)

(一月号) 凄艶妖奇読物特集号

○口絵・映画に現われた緊縛シーン特集	編集部・編
世界艶笑文献仮空全集……	編集部・編
新年好色俗曲特撰集……	雪俊 遥
照姫拷問譜……	近藤 浩
スパイのハートを射つ男……	瀬戸口寅雄
死刑から無罪へ……	蓮池一郎
緩慢なる死と対面する人々……	

愛読者の皆様へ! バックナンバー残部僅少!!

○愛読者の皆様の御要望にこたえられるよう、バックナンバーを僅少ながらとりそろえておきました。残り少なくなりましたので、お申し込みくださいませようお願い申し上げます。

○十一、十二月号はすでに売り切れしましたので、お申し込みくださいませんようお願い申し上げます。

○他の号も日を迫つて少なくなつて行きますので、この機会を逸してはますます御入手が困難になります。

○本誌は定価百円・送料十二円。臨時増刊は定価百三十円・送料八円。

たゞし三冊以上まとめお申し込みの方は送料は当社で負担いたします。

(御送金には挿入の振替用紙御利用が最も確実。簡便でございます)

お申し込み先 東京都中野区江古田一の二三〇二 久保書店

振替・東京一〇七五六

集 作 傑 妖	特種を予言する男……	島本春雄
集 作 傑 妖	臥像を砕く白痴男……	
集 作 傑 妖	二十六枚の裸体写真……	
集 作 傑 妖	緑眼石の紋章……	
集 作 傑 妖	生命を売った女……	
集 作 傑 妖	邊羅綺型の鬼……	
集 作 傑 妖	刺青殺人鬼……	

(十二月号) 名刑事特異犯罪捜査特集

(十一月号) 戦慄犯罪特集号

(十一月、十二月号は売り切れしました)



毒婦お志津ごよみ

女じょ炎えん脂あぶら地じ獄ごく

岩堀 光

東 啓三郎・絵

二人小町

文政十二年三月廿一日のことである。

その日は朝のうち、空も快いばかりに晴れて、麗かな春日和を思わせた。しかし、巳の刻（午前十時）ごろから、しだいに雲が拡がりだし、西北の風が激しく吹いて砂煙天を蔽った。日光もおぼろに黄色くむしばまれたようで、江戸市井に何かしら不気味な気配を沈ませた。外神田佐久間町の油問屋「奈良五」方から火が出たのは巳の下刻。それはたちまち柳原堤を越え西丸お側衆佐野肥前守屋敷にうつり、お玉ヶ池、松枝町、龍閑町、鎌倉町、本石、大伝馬町、堀江、小網町、市村座、銀座、住吉町、難波町、高砂町、和泉町などに飛び火していった。海賊橋、山王、八丁堀なども焼け、江戸八百八町の内、六百九十二町を灰燼にしてしまった。

大火の後、流説がさまざまに飛んだ。前の明暦の大火には美しい女の振袖が火のかたまりになって諸所に飛び火させたといわれた。この時も、出火直前に、白衣を着た女が油屋の表に立って手招きしながらヘラヘラ笑っていたとか、燃えて紅連の舌で、空をなめる油屋の屋根で、髪振り乱し、全身火達磨になった美女が手踊りしていたとかうわさされた。

もつとも、それが全くの飛語とばかりはいえない。これだけの大火が、女の内に燃える何かの炎によって口火をつけられたものであるならば――

「奈良五」は江戸町人鑑にも載っている有名な店で、当主奈良屋五兵衛一代の身代であった。ところで、そういうこととは別にこの店は、

「奈良屋姉妹」または「油屋二人小町」とはやされる美しい娘をもっていたのでも有名である。姉娘を志津、妹娘を露といった。

姉と妹とどっちが美しいか？ それはみる人によってひいきも違ってくる。姉妹の美しさが、人に与える印象は、あまりにクッキリとちがっていたものだから、よく岡惚連中の争いの種になった。おれは姉だ、いやおれは妹だということから、近所の魚屋と小問物屋の若旦那が刃傷沙汰におよんだりしたので、いっそう二人小町の名が江戸市井に高くなったのである。

どちらかというと、一口にいつて姉はひどく陽性なのに対して妹は陰性だった。三ツちがいがだが、派手な姉は、十八才で結婚して五年たった今も、娘らしさが抜けきらず、そこに人妻の艶麗を加えて男たち

の評判になっていた。妹のほうが、消えてなくなりそうな可細い風情をたえず身辺に漂わせているために、いっそう対照的にみえた。

姉の志津のからだは、いつまでも未婚の娘のように端々しいのは、良人の旅人宿伊勢屋のむすこ義太郎のせいだ、といわれている。つまり、義太郎は一人前の男というには少し出来が悪かった。顔だちがまだ少年のように美しいのは、頭の働きの、にぶいせいだった。そのために、志津を世の常の女房のように満足させることも出来ず、ただ、母親に対するように甘えかかる対象としているにすぎないという。勝気な志津にはそれがまたかえって幸いして、けっこう夫婦仲は円満だった。もつとも噂では、ほとんど伊勢屋の若女房として家業をひとりで切廻している志津は、時々、好みの旅人を相手によりしくやっているのだともいう。

妹の露のほうには、父が照降町の呉服屋の次男和次郎を婿に定めてくれたのを迎えて、油屋の跡をついだ。ほんらいなら志津のつくべき家ではあったが、なんでも数年前、奈良五が商取引上の損失から、ぐらっと行きそうになったところ、義太郎が志津に惚れて、どうでもひと息子嫁にというので、伊勢屋から千両箱が奈良屋に渡され、縁談が成立したというようなことがあったらしい。志津はいわば家の犠牲になったのである。だから、露が家をついでからも、姉がわがもの顔に実家に戻り、露にいろいろ意見がましい口をきいても、妹夫婦は頭が上らないのだということである。

父の奈良屋五兵衛の死後、志津の実家への出入りはいっそう激しくなった。母も姉妹の子供の頃なくなっていたから、彼女がただひとり

★女の内に燃え上る炎は、ついにはおのが白い凝脂をも灼きつくす業火となつた！

奈良五の若夫婦後見役といわんばかりであった。

それに対して義弟の和次郎は不満だったが、なんとしても養子の身ではあるし、かんじんの妻が姉を母のように大事がっているしするの
で、美しい義姉にきびしくさからいかねている様子だった。

最初の毒

「姉さんが来ると、うちの人の気嫌が後で悪くなって、あたし困ってしまうの」

と、露に志津は訴えられた。

「何をいつてるのよ。そりゃ和次郎にとって煙たいのはあたしひとりさ。あんたもぼんやりしてないでチットは考えてくれないと、油屋の身代も、いわば他人の和次郎の自由にされてしまうよ。あんたは知らないだろうけれど、油屋の財産は、お父っあんとあたしが血の涙で
きずきあげたものなんだ」

「すみません」

「あやまることはないさ。あたしがこうしてチョコチョコ実家に入
りするのも、肉身のあんたの身が可愛いからだよ。和次郎がお父っあ
んの死後急にいばり出してそんなことをいうのも、女房が可愛いより
も、財産が可愛いからなんだ。でなけりあなんであんたの身を案じる
あたしが邪魔に思えようかね」

それでも志津は腹の蟲がおさまらぬ様子だった。彼女が、情夫の二
本松生れの渡り大工三吉に、妹の養子にならないかと話をもちかけた
のは、そのためである。

三吉は、はじめて伊勢屋の客になった時、志津をみてはッと気を吞

まれたように眼をみはった。多くの男に関心を寄せられつづけてきた
志津は、すぐに男の腹の底にあるものを読みとった。ただ、こちらが
受けてやりさえすればよいのである。惚れ惚れした男の眼は、すぐ情
欲の希求に変化する。

「おいら、いやだね。商売人の養子なんてのあ、相手はどんな女だか
ら知らねえがよ。おいらの可愛いのは、お志津、おめえだけよ」

「だからさ、あたしもあんたとううしてずっといたいから、考えたあ
げくのことなんだよ」

と、ほんとに見事に熟したという以外にことばもない胸のふくらみ
に、えりからはいった男の掌を押しつけて、

「いくら長逗留だ、お客さまだといったって、ここは宿、あんたとい
つまでもこんなことを繰返しちやいられやしない。勘定だってずいぶ
んたまってしまったている。あんたがあたしの惚れた男だから、ただで
とまってもらっているとは、まさか、いえもしないしね」

「いやな話はしっこなしだ」

「それでいっそ妹のむこに入りこんでもらえさしたら」

「怖い女だぞお前は」

「誰が、そんなにしたのさ」

「おいらだ、といえりゃあ地獄に落ちてても」

「ほんと？」

と、いう声が鼻息まじりのふんと？ にきえるほど、志津のからだ
が熱くなれば、三吉も何一つ抗えなかった。とうとう和次郎を殺す役
目を承知した。

三吉が油屋の倉の横でひそんでいて、志津の誘いだしてきた和次郎
を、背後からしめあげる段取りがととのった。志津は実家にかえり、

夜半、そつと義弟を起して伊勢屋に戻りたいといいだし、和次郎に送ってきくと頼む。番頭や小僧ではいやなのだ。というのは、亭主の義太郎のことで、あんたに打明けて頼みたいことがある。そしてあんたから義太郎に話してもらいたいのだと、意味ありげで、見当もつかぬことをいって、だから、露にも内密で、あの子が寝るまで待っていたという。

快くは思っていない相手でも、それが若い女、ことに人より秀れて美しい相手であつてみれば、頼む、あんただけにといわれればことわりかねる男の虚栄と浮気は、和次郎もちあわせていた。

その晩から彼は油屋に戻らなかった。志津は、夜明け前にはひきかえして露にいった。

「やっぱりそうだよ。和次郎は広小路の茶屋に女をかくまっているといううわさをきいたことがある。きつとその女と暮すつもりで家を出たのだよ。不実な性分をあたしが見抜いていたものだから、お露さんに、あたしを邪魔にするようなことをいっていたんだね」

志津が仕組んだ通り、渡りもので口達者な大工の三吉は、露のおほこな心を掴んだ。ところが、二人小町を両天秤にかけてみて、三吉の心は、志津の計画通りには動かなくなった。

彼は姉と面影は似ているが、おとなしい燃えようをする露に、正直いとしさを覚えた。たとえば二人のいとなみにしてからが、志津のからだにはいつでも、激しいが自からほのほをかきたてるような計算がある。男から呼び覚まれるものを自分から燃えるのだといったげだった。露にはそれがなかった。いくたび重なる逢瀬にも、おびえたような戸惑いが感じられ、それでいて、せつなげなあえぎに女の悲しい炎がせい一杯うかがえるのだった。

「あんたは、このごろ冷たくなったのね」

油屋に定まった露の亭主というわけではない、番頭たちからも、おかみさんの無理もない必要なものとしてみられるようになり、住みこむ形になった三吉に、志津はある夜、せまるようにいった。

「それはお前のひがみだろうぜ」

「ばかにしないでよ。あたしにこんなことをいわせるおそろしさをあんたは知っているはずよ」

「てめえ、おれをおどかさつもりか？ おれは、和次郎のような世間知らずじゃねえぜ。てめえが阿呆な亭主義太郎にあきたらなくて、おれにかわりをつとめさそうだったって、そういつでもいいなりになれる訳もねえじゃねえか？ お露だって可哀そうよ」

「ふん、お露の亭主気取りはよしとくれ。あの子のことはあんたよりあたしのほうが考えているんだから。お前さんなんざあ、油屋の身代六十万両がお露にみえてきたのだろう」

痴話喧嘩が高じたにしては荒い言葉のやりとりになって、志津は、憤満の心をそのままもって表に出た。そんな彼女を呼び止めたのは、御家人やくざの神保甚太郎である。

「お志津さん、今日は一段美しいぜ」

志津は肌のそそけだつのを覚える。むかしから甚太郎になんともいよられたが、どうにも好きになれなかった。彼は佐久間町一帯の商家をたかり歩いて生活していた。宿屋稼業の志津は無下にいやな顔もしていられない。それに、今の彼女は、自分を愛する男にふつと傾きかける心をもっていた。

「あら、いやな人だね」

「急ぎでなけりあ、馳走しようか。今日はふところが暖かいんだ」

「まあ、こわいこと」

しかし、いつになく、言葉とは反対に身振りが応じてくる志津に、甚太郎のほうがかえって戸惑った様子である。

志津の心情

附近の小料理屋で甚太郎にさされるまま、さかずきに二、三杯酒をのむと、志津の双眸はとりとなまめかしくさえてくる。なかば甚太郎のほうにかたむいた丸髻の首すじは、生えぎわがみずうみのように青く深い。甚太郎はつと自分のさかずきに酌をしにきた志津の手首をとった。

「まあ！ なにをするのさ！」

志津は男の腕を払いのけようとしたが、逆に、とられた手がしびれる。ちようしが卓上に落ちて、とくとくと酒が流れた。

どういふかげんかさすがは武士崩れ、可細い志津の手首の急所が押えられ、ひこうとするほどに腕は肩までしびれ、からだか意志とは反対に男のひざのほうへかたむいた。

甚太郎は唇のあたりに残忍な、快げな微笑を浮かべて、

「抗うといたいいよお志津さん。ほれ、いわねえこっちゃねえ。からだをやわらかく、おれのするままになっいな」

「あッ、いたッ！ よして、あたしをなんだと思ってるんだい。リッ、リッばな亭主のいるからだなんだよ」

「だからこうして、うむをいわさずおれのものにしようというのよ。それに知ってるぜ、渡り大工の三吉づれを、なにも妹と二人でとりっこすることはないだろうぜ」

「えッ！ なんだって」

「あんな男は、旦那に逃げられた可哀想なお露さんにきれいに進呈しなうっていうんだ」

「ううッ！」

志津は呻いた。とられた腕をひねり上げられると、彼女のからだは坐ったままに甚太郎の前にうつぶせに倒れ、顔をたたみにねじつけられた。大きな後ろ腰が甚太郎の顔近くでびくりと震えた。

「いやだ、あたしをこんなにして！」

だいぶ時がながれたころ、志津は押しつぶされた髪や着物の乱れをなおして怨じるような流しめでいった。

「それほどでもなさそうだったぜ」

「ふふッ。でも、このままになってしまうのは、あたし、いやよ」

「それみな。そいつはおいらも同じ思いだ」

「せめてあんたが露の入婿にでもなってくれば、あたしが実家に行く分には誰にはばかりもないんだけれど」

「両手に花か。悪くアない」

「いやだあんなこと。でも、むこうには三吉がまるで亭主面でおさまっているし」

「油屋の身上は六十四万両といったな？」

「まあ、何を考えてるの？」

「三吉づれにやるのはおいしいというのだ。どうだお志津、思いきって三吉を」

「そ、そんなおそろしい！」

志津は甚太郎を自分の思いにひき入れたものの、相手が根つからの

悪い奴としてっているから、これからの行末が不安だった。そんな彼女の予感のみごとに当たった。

三吉を露に知らさずおびき出すのは訳のないことだった。彼が和次郎をしめ殺した場所に、こんどは神保甚太郎が待っていた。

「話ってのはなんだ。こんな場所に連れてきやあがって、おれにあの時を思い出さそうというのかい？それなら無駄だぜ、おれはいっそうおめえがいやになるだけだぜ」

なにも知らぬ三吉はいった。

「きれいに別れてあげるのさ。そのかわり、三吉っあん、あんたにもお露の側から去ってもらうよ」

「なんだって、ふん、お露がそんなことア、いやだというぜ」

「お前か？ 三吉という色男は」

その時、のっそ

りと甚太郎が、二人の前に立つ



た。はッとした三吉が、

「お志津！ てめえ、おれを！」

と、女の肩につかみかろうとする。

「さわぐな、蟲けらめが」

甚太郎はお志津をかばって三吉とむきあった。

そんな胸に三吉ががつとからだをぶつける。互いが着物の衿を掴みあった。

しかし三吉には、相手の衿を掴んで押すか引くかする以外に法がなかった。

それに比べて、甚太郎の腕はぐいとまがって、三吉のからだをひきよせるようにすると、そのまま十字に相手の喉をしめあげていた。

以前、三吉が和次郎を殺した時は、志津が連れてきた和次郎のうしろにそつとまわった彼が、ふいにおそいかかって、首をしめたのである。

それでも充分しめきれなくて、足を蹴上げ、腕をかきむしる和次郎に、三吉は悲鳴をあげて、

「お志津、お志津、て、てつだうんだ！」

だからお志津も夢中で、和次郎の腰にしがみついたものだ。今は全くそんな手間はいらなかった。甚太郎の唇には、お志津を料亭でねじふせた時のような満足げな微笑すら漂っていた。みていて志津は、自分がいじめあげられているような身震いを覚えた。

「クッククック」

と、三吉は喉をならした。そして空を掴むように両手を振った。やがて、足のひざが力なげに前におれた。顎をそらせたその顔は、こめかみにどす黒く血のすじを浮き上らせ、青ばなをたらし、だらりと舌を出した。眼の玉が丸くとび出しそうだった。

「ふん」

あざ笑うように甚太郎は三吉を路上になげ出した。

「どうだ お志津！」

と、甚太郎がいやしくお志津をひきよせて、耳許でささやいた。

「まあ！ いやだ」

お志津は嫌悪で胸がつまった。そして、その思いがいつまでも尾をひいた。甚太郎が油屋に厚かましく入りびたりになってからも、お志津は、彼に従わせられる度に、三吉のみにくい死にはじらしたからだの一部が眼に浮かび、嫌悪感がつのるばかりであった。もともと、甚太郎に対しては、前から本能的に、いやな体臭を感じていたのである。

おんなふたり

神保甚太郎は三吉のように、お志津のからだから露に移ると、お志津をさけようとするようなことはなかった。最初に彼はお志津に、三吉殺害の同罪をいいたてて、それをお露にしらせたくないなら、自分を妹にとりもてと廻ったのである。

お志津は妹に、甚太郎が油屋の婿になりたがっていると告げると、露は、眉根をよせていやだといった。彼女も、悪御家人の噂はよくしっていたのである。

「そりやそうだろうね。いえね、あたしも客商売であいつからそんなことをいわれて、いちおう拒みかね、あんたの耳に入れただけさ。でもね、あいつは町内の悪だから、狙われるとあぶないよ。あんたもよっぽど用心しておくれ、何しろ横車を平気で通す奴だから」

そして、その言葉通り、ある夜、忍び入った甚太郎に露は侵されてしまった。彼女の寢床へまでのびきをお志津がしたなどとは、思っ

もみない露である。その後、それを種に入りびたってしまった甚太郎をいといながら、拒めぬ女だった。

その上、甚太郎は公然と、露の前で志津までも意のままにしたのである。姉が泊りに来た夜である。露は甚太郎にその時も思いのままにされた後、酒を運んでくると、彼はいなくて、やがて、離れから、姉の泣く声がした。不思議に思つて庭に降りた時、離れの障子を明けて甚太郎が出てきた。彼は彼女の方をみてにやりと笑つた。その奥に、寝着もはがれた姉の姿がみえた。

そんなことがあつてから甚太郎は、二人を左右において、日中から酒ひたり、そして、気まぐれに、姉と妹を抱いた。志津が伊勢屋に戻つて、数日こない日が続くと、露を責めて、呼びにやらせた。どう懇願しても徒労だった。そして、時には、姉妹を一つ帯にしばりつけ、恥かしい、苦しいさまにあわせた。どちらかがあがけば、片方が悲鳴をあげる恰好にされておんなふたりが、苦悶するさまをみては声に出して笑い、酒臭いいきを姉妹の鼻先に吹きかけた。

その日もひるすぎからそんなことが続き、夜がふけたころ、露も志津もくたくたになつて、気力もふせた恰好にまどろんだが、ふと露は志津に降り起された。まわりをみると、姉も自分も下着さえ身につけぬ恰好で倒れ、そんな二人の華麗な衣裳を、部屋一杯に散らかした間で、甚太郎が大いびきをかいていた。姉と自分の失心状態をみて、いつものように浴びるほど酒をのんだあげくであろう。

「お姉さん！」

露は泣きたい思いで、姉のあらわな肩に抱きついた。志津はそんな妹の肩に長襦袢をかけ、自分も緋ちりめんに草花散らしの長襦袢を着た。

「お露さん、こんなことをしていられないわ。こいつは、あたしとあんたを死ぬまでなぶりものにして、油屋の財産を自分のものにしてしまふ腹なのよ」

「ええ、でも、どうしたらいいのか？ 人にも恥かしくていえないことだし」

「このまま、だからといってほうつてはおけないでしょう。こいつをいっそ殺してしまふのよ。前の和次郎も三吉も行方をくらましたのだから、こんな男、お金を盗つて姿をくらましたといえれば誰もうたがやあしない」

「でも、そんな恐ろしいこと」

「ほかにしようがないじゃないの。それにこいつはこれでもさむらいだから起きている時は駄目よ。今でなきア」

志津はそういつて自分の赤いしごき帯をとった。そして、その片方を柱にゆわえつけると、眠っている甚太郎の頭をそつともたげた。

「甚さん、甚さん」

と、呼んでみたが眼覚めそうもない。志津はしごきを何度もねじつてよりをつけ、固くしてから、くると甚太郎の首に二回まいた。

「お露、こいつの足を押えているのだよ」

「でも……」

「さあ早くするんだ。気がつかれてみな。それこそ、あたしたちどんなにされるかしれやあしない。狂い死にさせられるんだよ」

志津はいうが早い、しごきの一方をぐいとひいた。きゅッと帯がのびて、甚太郎の首にくいこんだ。

と、甚太郎は喉を鳴らして腹を反らせた。次の瞬間、飛び起きようとするように足を折りまげた。

「お露、早く、足、足！」

露は夢中になって、甚太郎の膝をおさえた。が、すぐ強い力ではねかえされて転がった。

「むうッ！」

と、甚太郎は扱帯を掴もうと両手を泳がせた。志津はとっさに腰を落した。露も起き上ると、柱にゆわえつけたほうのしごきをひいた。

「クスン！」

と、空気の抜けるような音が、甚太郎から発しられた。そして、びくびくと手足が小刻みにふるえた。同時にこわばっていた彼のからだから力が抜けた。鼻穴からは青ばなと血が流れ出た。眼玉がむき出しになって天井をにらみつけていた。

志津はふと三吉の最後を思い出した。

罪のおい

志津は甚太郎を殺してからは、ずっと油屋に戻っていた。露が半病人のようになったからである。妹の介抱という名目では、伊勢屋でも苦情のいいようがなかった。逆に良人の義太郎がときどき恋女房の肌を慕って油屋へ泊りにきた。

露の病氣は医師をむかえてもハッキリしなかった。男運が悪い女だから、それが原因の気鬱症であろうということだった。親類や店の者たちも、それはそうでもあろうということで、誰もうたがってみなかった。

露の容態は別にとりたてて変ったこともないのだが、ただ、むやみと人にあうのを恐れた。そして、日中じっと自室に思い沈んでいた。

また、夜半に、時々うなされて、眼覚めると女中を呼んだ。しかし、誰かがあわてて駈けつけると、びくッとした様子で、呼びもしないのにくるなとわめいたりした。

ただ、志津が一しよに暮すようになってからは、他人に対しては、別にへんな素振りをみせることもなくなった。だが、姉には、

「あたし、怖い！」

と、いいつのった。

「なにも怖いものがあるものかね」

「でも、忘れられないのよ。あの時の、天井をにらんだ、あの男の顔が。それに、この手、あたしのこの手、しごきにつたわったあの男の肉のひびきが残っている」

「ばかなことをおいいじゃない」

志津はおとなしい露を相手に罪を犯したことを悔いた。このままの状態では、いつ妹が甚太郎殺害のことを口走らないとも限らない。それに、露は、屋敷の裏を恐れた。その倉庫のわきに、志津は露に手伝わせて甚太郎の死体を埋めたのである。そして、彼女にはいわなかったが、和次郎も三吉も同じところに埋まっていた。

志津は夜にひとり起き上ると、死体をほり返した。埋めたばかりの土はやわらかい。彼女は、甚太郎の死体をずるずるひきずって、倉庫から離れた畑に運んだ。それも油屋のもちもので深いこえだめの穴があった。それに彼女は甚太郎をなげこんだ。次の夜は、三吉、次の夜は、和次郎を同じ場所までひきずっていった。和次郎のからだは、もう殆んど誰とも判断つかぬほど腐れて、ところどころ骨ばかりになっていった。三吉は腹だけがつぶれて、うじがざわざわいうほどたかっていた。どの死体もはじめにうずめる時から裸にしてあったので、後数ヶ



月もすればとけて骨ばかりとなるだろう。そうしたらまた掘り起して墓地にでも捨てに行けばよい。

彼女がそうしたのは、露がまんいち甚太郎のことを口走ったとしても、それは、神径の狂った女のうわごととして押し通してしまうためであった。

「ああ、お姉さん、わたしは堪えられない」

露はある夜、そういつてふらふらと外に出ようとした。

「ばか！ どうしようというのよ」

「離して！ 恐い！ 甚太郎がくるのよ……それに三吉や和次郎さんまでが、あたしをうらめしげにじっとみるのよ。こんな家にもういられやしないわ」

「なにをいうのよ、さあ落ち着いて」

志津はむりやりに露を寝かせた。そして、彼女も横になった時、義太郎が忍び入ってきた。彼は妻の側にそっと足を入れた。

「駄目、こんなところで」

「けれど、もう一月もおいら……」

「そりゃ、あたしだって同じよ。でも、妹がとなりに寝ているのよ」

「クソ！ 露なんか死んでしまえ！」

「お前、そう思いかえ」

志津は眼を光らせた。

「うん」

義太郎は妻のいきおいに気押されたようにいった。

「あたしだってそうなんだよ。そりゃ可愛想だけれど、こんなではあたしたち夫婦までがめっちゃめっちゃになっちゃうよ。現にあんたとあたしは、こうして夜なかに顔を合せながら、おあずけくった犬みたいに」

つまらない顔でむきあっていなきアなんない」

「そうだよ」

「それに、この油屋の身上だって、もともと義さんとあたしが世帯をもったればこそ、今のようになつたのだ。いってみればあたしのものだ。そりや妹がふつうだったら、あたしだってそれっぽっちの財産はほしかあないが、この先、気の狂ってしまったような妹では、いすれはつまらない男に身上ごと好きにされちまうにきまつているものね」

「そりや、そうだよ」

「お前さん、どんなことがあつてもあたしを捨てないだろうね」

「あたり前だ」

「それなら打明けるけど、あたしアひと思いに妹を」

「な、なにをいうのだお志津！」

「なんだね、お前さん、それじゃ、あたしに力のかすのはいやだとでも」

「そ、そ、そんなことがあるものか」

「じゃ、いいね、お前さん」

燃える執念

義太郎は志津にいわれたとおり、寝ているお露の枕許にたらいを運んできた。そして、静かにそれに一杯水をはった。

「音をたてちゃ駄目じゃないの」

「すまねえ。すまねえ」

「あたしが火事だと騒ぐからね。お前さんじつとしているのよ」

「よそうよお志津、可哀想じゃねえか」

「なにをいってるのよ、今さら」

「うむ」

「いやならあんた伊勢屋に帰っていておくれ。そのかわり、あたしがお役人に捕かまったら、あんたも共犯だからね。こうして、たらいや水を運んでいるんだ」

「そ、そんなおめえ」

「じゃ、いうとおりしておくれな」

志津は小腰をかがめて、寝ている露の耳に口を寄せた。そして、大きくいきをすって、

「お露、お露！ 起きるんだよ！ 火事だよ！ お露！ 燃えているんだよ！」

「えッ！」

はじめはほんやり眼覚めた様子の露も、次の瞬間、あわてて頭を起した。その寝乱れた頭髪を志津は驚掴みにした。そして、あまる片手で露の細い首をとると、眼の前のたらいの中につき入れた。

露は懸命に頭を振って、逃れようとした。ごくつと水を何度かのんだ。そして、やっこの思いで姉の力をはねかえし、顔をやや水面より上げた。が大きくいきづくまもなく、再び水の中に顔をつけられた。

義太郎はすさまじい妻の夜叉ぶりや、必死にたらいを押しつけようとあかく義妹の様子におどおどして、立ったり坐ったりした。

「お前さん！ 早く手伝うのよ」

「ど、ど、どうする！」

「ばかッ！ 露の背中を、押えつけておくれよ！」

義太郎はまるであんまでもするように、そろそろと手をのばす。そ

して、露の背に掌をあてたが、その下でやわらかいはずの女の筋がぴんと強くはっているので、驚いて力はいらない。

そのうちに、また、お露が頭を上げた。そしてこんどは、いえッ！というような悲鳴をあげかけたが、それはひい！と、細い笛のように喉の奥で鳴ったにすぎない。すぐに志津の力が加わって、ざぶりとまたまた顔をたらいにつけたからである。

「早く、早く力を入れて、足の膝で押えるんだよ背中を」

志津はぐずぐずしている亭主にこうをにやしたように叫んだ。義太郎はそうしようとしたが、思うようにからだは動かない。

「しようがないね。足、早くお露の足をもたげなよ。そうしたら力はいりあしない」

義太郎はいわれたとおり、露のすそにまわった。そして寝着もはねかえして、すっかり腰まであらわになり、懸命にたたみやふとんを蹴ってあがいている二本の白い足をつかもうとした。だが、それも、びんぴんと強い弾力ではねかえされた。

露は又、顔を上げた。もう志津の掴んだ髪もすっかりたががゆるんで、ともすれば力がいらなくなってきたのである。志津は両手でこんどは首を押えて、露の顔を水につきいれた。

「早くしないかよ！」

妻の叱声に義太郎はやけになったように、白々とあらわな露のしりからだごと上からむしゃぶりついた。

露の両手の指はたたみをひっかいた。足の甲では、やはり、たたみを打ち叩いた。やがて全身がツンと張った。しだいに、その張りもゆるむと、たらいの中でぶくぶくと泡が立った。そして、志津の両掌になんの抵抗感もつたわらなくなった。志津は、そっと、手を離してみ

た。露の頭から顔は、うつぶせにたらいにのめりこんだまま動かなかった。

志津は肩を抱いてからだをあおむけにしてやった。そして何度も静かにその整った妹の顔をなでた。クックと志津の喉におえつがこみ上げてきた。ついには堪えきれないもののように、彼女は露の胸に顔をふせると泣きだした。

義太郎は、そんな妻のひようへんぶりに全く戸惑ってしまった。彼は志津の肩に手をあてて、何かねだる時のようにゆすった。

「よう、よう、どうしたんだよう」

志津の声は、そんな良人にいっそう悲しみがかきたてられるように高くなった。

「よう、よう、お志津、どうするんだよ」

志津ははっとしたように、顔を上げた。彼女は妹の寝着の腰にまつわった細帯をといた。立って眺めている義太郎に、とがめでもするようにならなうに命じた。

「ぼんやりツツ立ってないで、あんたは水を捨ててきてよ。たらいももとの場所に戻しておくのよ。人にみつからないようにするのよ。あたしが、こんなになったのも、みんな、あんたのためよ。あんたがぼんやりしすぎるからなんだ」

「すまねえ」

義太郎はびよこりと頭を下げて、たらいをそろそろ抱えて出ていった。

志津は、あとからあとから流れ出る涙をそのままに、露の寝着をぬがした。白々と露わになった妹のからだをしさいに眺めながら、彼女はまたむせび上げた。露のからだは相変らず美しかった。まだ子供を

生むことも知らなかった乳房は、形良く張って、乳首を空にむけていた。やがて戻ってきた良人に命じた。

「お露のからだをね、庭の古井戸の中になげておくれ。いつも使っている井戸じゃないんだよ。倉庫に出る庭の池の側に、うちでは使わない井戸があるんだ。充分、注意してね、そつとっておくれ」

「おれひとりでかよ」

「いやなのかい？」

「だって、お露さん、裸じゃねえか」

「それがどうだっていうのさ。あたしをおんぶしているのだと思えばいいのさ」

「だって、お前なら井戸なんかになげこまないよ」

「ばかッ、理屈をこねないで早くしないと夜があけるよ」

露が義太郎の背にひきずられるようにおぶわれて行つてから、志津はたたみの上にとび散った水をきれいに拭いた。寢床もちゃんと敷き直し、上布団だけははねあげた。

翌朝になって、露がいないという騒ぎになり、まもなく古井戸で死んでいることがわかった。すぐに土地の役人がきて、同心などの検死があった。その結果は、露の最近の病状からおして、狂気又は厭世のすえの自殺と判断された。身に一糸もまとわぬのも、狂人らしい死にさまであった。

志津と義太郎はどうぶん油屋に住まうことになった。いずれ二人に子供が生まれたなら長男は伊勢屋、次男は油屋をつぐことにすればよいと義太郎の両親、他の親類一同がより集った結果、決定をみた。

志津にとって、女の一念をかけて燃え上らせたなにかが無事成就し

たのである。けれども彼女は知らなかったが、どこからともなく、油屋には白い裸像をさらした幽霊が出る、たぶん狂死した妹小町が迷いでたのだろうという噂が立っていたのである。

その筋でも内偵を進めたすえ、そんなうわさは、油屋の手代利助から出たものであることがわかった。利助の語るところでは、御内儀が狂死した夜、彼は便所に立ち、庭の闇の中で白いものがあるくのを見たというのだった。なお、いろいろと誘導して訊ねてみると、闇にすいこまれたかにみえた白いものは、誰かにかつがれていたのではないかと思う。なぜと云って、それが幽霊でなく、死に行く露だったなら足があつてあるくはずだが、あるいているのではなく、たしかにずうっと闇に消えたので足がなかったといいきった。

死んだ露はたしかに水死だったが、ただ、胸乳の上に、何かでひどく押しつけられたような、仄かな赤い筋があつた。まもなく、家人たちの再訊問がはじまった。もちろん誰もがなにがなんだかわからぬといった顔でいた。しかし、役人がなにげなく露の傷らしきもののことをいうと、義太郎はうかつにも、

「ああ、お露さんは、たらいのふちですりむいたんだ。きつと、そうだ」

と、つぶやいてしまった。

志津は捕えられたが、逐一白状した義太郎のことを、それは、馬鹿な彼が、幽霊のうわさにおびえた結果の妄想だといひはった。どう責められても白状しない。そのうち調べは進み、どうやら和次郎、三吉、甚太郎の行方不明もあやしいということになってきた。

そして文政十二年三月廿一日、ふいに志津は、自分を一度油屋に連れ戻してくれ、そしたら、いっさいを打明ける。男三人の死体もちゃ

んとかくしてあるんだからといった。

色めきたった役人は、嚴重に志津を監視しながら、油屋に連れてきた。

さすがの大店も、打ちつづく不幸にひっそりとして、店の番もない。表は大戸をおろし、窓はことごとくしめきつてある。水色木綿の牢着を着て、やつれてはいるがなお濃艶な志津は、すぎ髪姿でよろめくように生家にはいった。

この日は、奇怪にも急に空が曇り、雲は低く、西北の風が強くなったことは、冒頭にのべた通りである。行燈に灯を入れねば、家内は暗く、調べがとどかない。やがて露や志津の寝所になっていた奥深くにはいる、といっそう長くしめきつたためにたたみまでしめっぽく、まるで生臭く血のにおいがしてきそうだった。

志津は役人たちに庭をへだてた油倉庫をあけさせた。どろんとよんだ油壺が並び中に、床を深くほった油溜めがある。そこで彼女は、今まで小役人のひとり下げていた行燈をとると、かざすように奥にむけた。そして、美しい顔に狂ったような笑いを浮かべた。

「誰にもやるまいと思ったのです。油屋の身上を誰にもやるまいと」「それで、それで殺したのか？」

「ほほほほ」

志津は艶然と笑った。いつか彼女がささげ持った行燈は傾けられ、まわりの紙にほのほが移っていた。役人のひとりがそれに気づいて、注意するように、

「火、火だ！」

と、十手で志津の手許を指し示した時、彼女は行燈を上げたまま、奥に走りこんだ。それを追おうとした役人は、思わずはッと足を止め

た。彼女がいくつかの油壺をひっくりかえし、自分の身にも油をかけながら、行燈の火を、牢着の袖に移したからである。

「おい！ 何をするッ！」

役人が叫んだ時、すでに彼女の立った姿は火に包まれ、まわりの床も炎がなめたてていた。ほほほッ、と志津の笑声が油煙と紅の舌の中から突っ走った。

この火事を江戸の人は春の紅葉の大火といった。火に遇った家数は大名四十七軒、旗本二百三十八軒、御家人百五十八軒、番所四十七ヶ所、神社仏閣四十六、町家の表家に住むもの十一万七十五戸、三十一万二百十戸、旅宿三百五十二戸、焼死人六万余人といわれている。明暦の十万七千余人につぐものである。家財を失い路頭に自失するものに到っては数がしれない。

哀れに美しい仇花が招いた、それが情念の結果である。色即是空……でも、恐ろしい哉。

告予号次

アブチック・スリラー 死を弄ぶ女 花町右門

「手をうしろにまわせ！」

彼は、すばやく僧服の帯をといて彼女の両手を縛り、血だらけのシュミーズで足首を縛ると、どしんと岩の上に突きこころがした――

仮

面

の

青

春

藤 川 博

第一章

どこから、私は道を違えたか。

透明な仕切りの向うには、多くの友人達が賑やかに遊んだり話したりしている。ある者は恋人を連れ、妻を従えてもいた。仕切りは押せば雑作なく破れそうで、弾力のあるゴムのように案外強靱なものでできていた。少し力を抜けば、ピンと弾ね返されて、たちまち元の場に戻されるのだった。今さら後退できない道を、どうして迷ったか、考えるだけが精一杯の努力だった。野分吹く芒の原の入日を浴びて、あてどなくさまよう孤独感を抱いて、今日もそこに一人の美の探求者の姿。とりもなおさず私は同じ嗜好者の、亡霊めいた淋しい影を、吾が影と見誤ってハッと驚くのだった。

○

私の最初の欲求を刺戟した映像――

幾歳だったろうか、夏の日盛りだった。寺の山門の敷石に腰を下ろして、無心に遊んでいたことがあった。すぐ向いは茶店になっていて、土工らしい風体の四五人連れが酒の座を組んでいた。淫らな歌声と下品な動作を、確とは判る年頃ではなかったが、浮々した人をそそる響きに、私達は自分らの遊びを忘れて見入っていた。

ひとりの若者が、酔って苦しくなったのか、座を外れて表へ出た。私達の真正面の木蔭にある縁台に、無雑作に転がり、大きく息をついたのには、誰も注意しなかったが、私は酒席の踊りを忘れて注目しはじめた。

陽焼けした膚の色、筋肉の隆起、白く目を射る腹巻のほかは、褌だけの若者の四肢は紅潮していた。呼吸のたびに、あらゆる筋肉が規則的に波打ち、汗が木洩れ日に輝いた。子

供心に妙に悩ましさが脳裏を支配し、酒席が納まったのも、友達が帰ってしまった一人になったのも、すべて意識の外にあった。

すっかり寝入ったのであろうか、若者の胸に組合わされていた腕がほぐれ、地上に届くばかりに伸びて力なく下った時、私にない異様なものが、腕の付根から誘う如くに私を刺戟した。

ふと、触って見たい衝動が私を襲った。

無意識のうちにも、私の未来への道は此の辺で分れ始めたのかも知れない。

忍び足で、そろそろ近づくスリルは、この冒険の成果の大きさに比例した満足心の大きさだった。

私は触れた。

軽い抵抗が、指の腹を快くくすぐった。背筋から頭の尖端に、ズキッと走った。

汗に濡れ、呼吸に合わせて脈うつ肉体は愛の意識を目覚めさせ、他の総てを、私の眼界から消滅させる事を憚らなかった。

此の映像は年を経る毎に反復され、蓄積されて行った。夏祭りの神輿を担ぐ肌脱ぎの若い衆、風呂上りの魚屋の若者、プールで飛込みの姿勢をとる青年等、躍動する筋肉の美への憧れが、だんだん私を明瞭な目的に近付け

て行くのだったが、それが、他の友達などの考える目標と違うことにも、徐々に気がつくようになったのは、中学二年の終り頃、十三の頃だった。

その頃、私は自分の肉体にひそかな疑問と怖れと期待の交錯した不安の日々の中に居た。

厳格な官吏の家庭の一人息子であった私は、家庭内での会話にもいちいち喧しく躰けられていて、勢い父母とも馴れた口を利かない、無口な性格を持つようになってしまったが、学校でも、友達の会話を隅で聞いているだけのことが多かった。

「浅田、君知ってるかい。アレを」

「アレって、何だい」

「ほら、アレさ。気分さ」

「え？ うん、でも初めての時は驚いたさ」

私も二ヶ月前に経験したことなのでこの会話は判った。

「それから僕、女の裸の絵だの、女学生に会ったりすると、UPして仕様がねえんだ」

「橋本もそうか。僕も、夢で女を見ると、翌朝きつとそうなんだ」

「でも、悪い気持じゃないな」

そんな会話の中から、私は自分に当てはま

る友達と共通の事項を探し出そうとした。

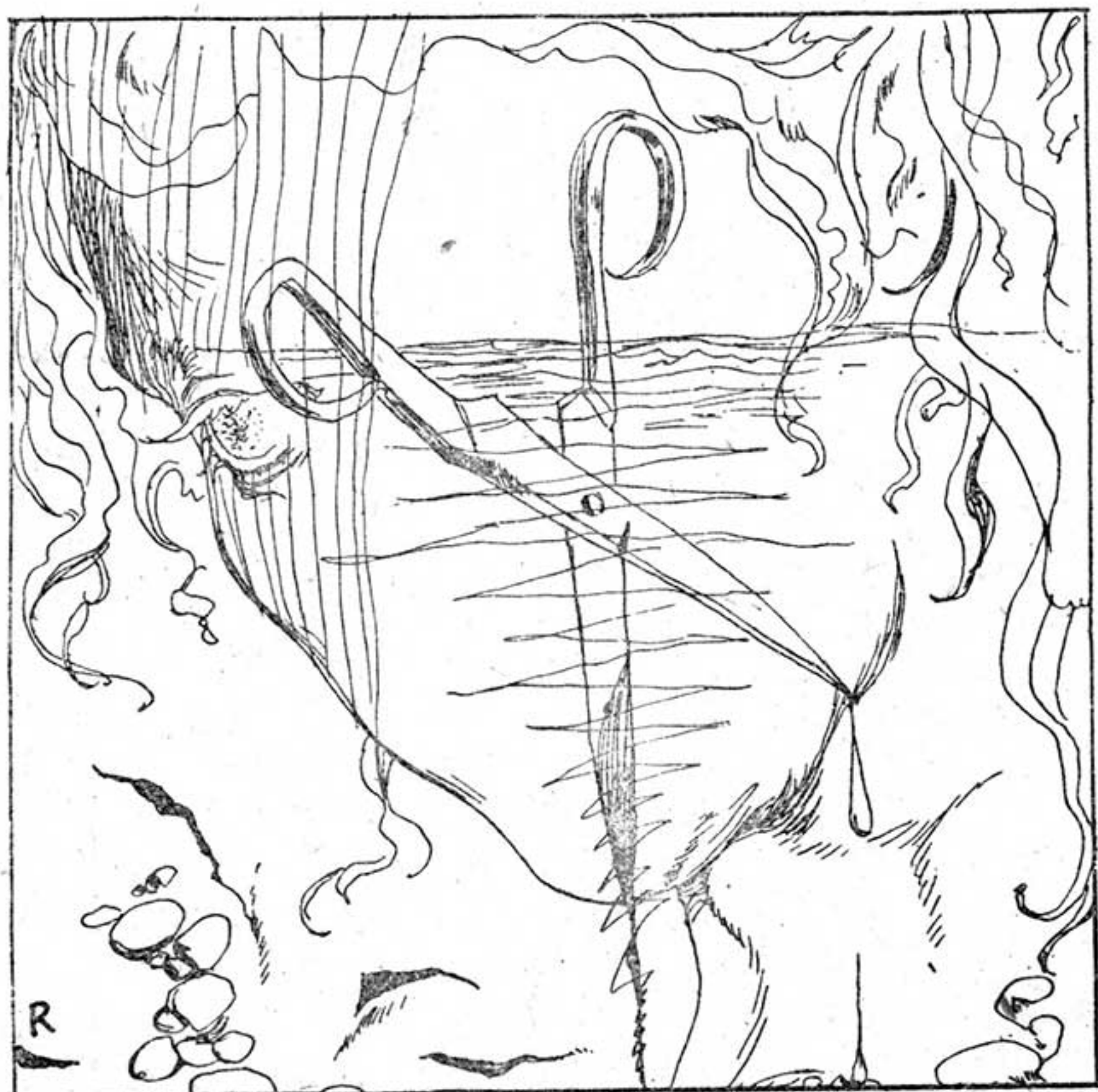
ある点では共通する。しかし若干の相違があった。私の見る夢の対象には一度も女の姿がないのだ。それは小麦色の青年であり、汗に光る肌であり、晒の腹巻であった。

私は慄然とした。

どこから皆と違う道に迷い込んだのか、私の考えが、ソドムと呼ばれる人の思わしく排斥する行為だということも、追々知ってから、今のうちに矯正したい、何とか皆と同じ道に戻りたい、と努力した。友達の馬鹿話に首を入れるようになったのもその為だったし、今まで余り交渉のなかった女生徒とバレーボールや演劇などで近しくなっ

たのも、目的はそれであったが、依然として

夢も現実も、上級生の運動着姿や、街の行きずりに見る若者の横顔に動揺したりする、結局は変わらない欲求の証拠に少からず失望し、反面、ほっと安心もするのだった。



長島四郎は二級上の四年生だった。浅黒い精悍な顔立ち、いささか不良じみた言動は、復習帖にある（あの、若者以来、幾人もの姿態を、私は胸の底に焼き付けていた）若者に共通した匂いが感じられ、身を撓るような憧れを抱いていた。

柔道の時間には、上級生が二人ずつ交替で指導に来る習慣で、腕の立つ彼も、一月に一度位であったが、私の級に現われた。

弱いくせによく上級生と取組む。そう笑う級友達にはわからない、秘密の、いや、長島にも知られない孤独の悦楽だった。大外刈、巴投、背負投等の業に、軽々とかかって投げ出される愉悦はたとえようもなく私を昂奮させた。

業が鮮かであればあるだけ、疲労が激しければ激しいだけ、歓喜の度が高まった。寝業はまた、さらに一層私の不逞な快楽をみたくてくれた。汗と埃と体臭が一杯に襲いかかって、我を忘れるほどの贈物をもたらしてくれ、頬と頬の触れ合う時などは、強く首を締められていく苦痛の、一刻も長いことを祈る恍惚境に導かれ、そのたびごとに無上の絶頂感を味うのだった。

半年ばかりの後、彼は私の態度を薄々察知したのか、柔道で私と組むのを避けるようになった。その代り、放課後公園の城址で待合せて、午後の一時を過ぎるのが日課になった。「藤川はそんなに俺に苦しめられたいのか」笑いながら抱きすくめる逞しい腕の中には甘酸っぱい悲哀と渴仰が同居していた。

それは真昼の饗宴の豪華な味覚であった。小動物の無心にじゃれ廻る楽しさはこんなものだろうか。草が、空が、二人の周囲をぐるぐる回転し、輝きにみち溢れた。

やがて、当然の過程として、私たちは夜を愛するようになっていた。葉種屋の次男である彼は、六畳の離室はなれを持っていたので、勉強を教えてもらう口実で誰にも怪しまれずに、二人だけの時を過ごすことができた。

この大きな喜びは、以前ちらと胸をかすめた性への疑問、不安、一般と違った欲望についての暗い陰を一時消滅の形に押しやった。だが、所詮は先々実を結ぶあてのない、空しい愛の交流だった。

「卒業したら、君と別れなくてはならないなあ」

「東京へ行っても、僕のこと、忘れないでください」

年が変ると、二つの肢体は、より熱く、より強く結び付いて、将来に横たわる冷然たる運命の岐路を、故意に考えまいとするのだったが、夜更けて帰る時刻までには、白々とした悲愁が二人を取巻いた。

別れたくない、別れたくない、二人は同時に抱き合った。黒塀の片側道で、前にK川の流れがひそやかなせせらぎを立てているばかり、人通りの絶えた夜を、この儘、この姿で消え入ることができないものかと、涙をぼろぼろこぼして身悶えするのだった。

第二章

あれから五年経った。学校を卒えて、ある土木会社の事務所に勤めていた私は、外見上は一人前の青年であり、勤務成績も悪い方ではなく、家庭と会社に関する限りは善良な若者に見られていた。

だが、内心のこの傷痕はどうだ。再び味わうまいと思った秘薬の苦さが、長島と別れた日がついに従って、甘酸っぱく発酵し、また、元通りの復習帖の絵に変貌するのだった。

映画館で知り合ったK、公園で誘われたM、それらも、結果はやはり実のない仇花であるとは知りながら、ひとつ、またひとつ、

悔恨はふえて行くばかりなのだ。

同じ嗜好の者が世間にかなり居ることに気がつく迄に、知らず知らずの内に頭脳は訓練されるようになっていた。

バスの停留所で、映画館の暗がり、喫茶店のボックスで、私は私の姿を鏡に映した驚きを、何度も戦慄しながら繰返した。妙にじめじめした眼、犯罪者のような落着かない挙動、絡みつくような粘液質が、その周囲に流れ出しているたまらなさ。自分も、客観的に見ると嫌悪を催すあの姿かと、背筋に寒気を覚え、逃れられる道を探す努力をして見たこともあった。実際、同類の者には、私を昂奮させる復習帖の絵に似ているのは少なかった。KやMは比較的嫌味が少く、交際をするようになってから知ったことは、彼等が正真のソドミストでなく、同時にヴィナスの理想も併せ持っていたことが、私を狂的に打込ませる原因になっていた。

そう、磁石の両極、相引き相反する原理と変らなかった。人間とは天邪鬼を好むものか。

○
土木現場には、私の欲求する姿態が随所に発見でき、秘かな満足心で、それを見た日は

一日爽快で、事務もよく捗った。

ギラギラ照りつける陽に、節くれ立った裸体の若者が、鉄骨の上を身軽に飛び回る。赤銅色の塊のピチピチした躍動を遠望するだけでも、血が騒ぎ、愛の欲求が頭をもたげ始める。あの若者が、どうかして落ちたら——そんな残忍な考えが閃めいた。血色のよい引緊まった体の若者が、前額部から鮮血をほとばしらせて、私の前に横たわる想像は、現場へ行く毎に欲情する後で、必ず意識外のどこから飛込んで、耳の裏に止り、刺すようにつぶやくのだった。

その日も事務の前に一度、現場を回って、いつもの若者が四階の鉄骨上でリベットを打ち始めたのを認めて、一通りの昂奮過程に満ちたのだが、退社の序でにもう一度見に行った。作業時間が現場は三十分程遅いので、彼をもう一度見られる。そう思い立ったのだ。

街の外れのアパート工事なので、自転車を走らせても時間一杯だった。

「おーい、上りだそうっ」

職長が下からどなった。そろそろと鉄骨を伝って皆が降りて来た。

「あっ……」

誰の声かは判らない。振向いて鉄骨を仰ぐと、彼の姿が見えなかった。

「落ちたのか？」

「誰だ」

帰り仕度の人夫達が、吸い寄せられるように、鉄骨の下へ集って行った。

毛穴がそそけ立つ思いだった。今の今、心に念じた呪いが、現実になったのだろうか。とすれば犯人は、私でなくてはならない。罪悪感が、淫夢を吹飛ばした。突かれてよろめく格好で、私も皆が輪を作っている中へ飛込んで行った。

彼は元気だった。皆の騒ぎに照れた微笑で、

「一寸滑ったんだよ。騒がないでくれよ」

極まり悪そうな顔は、どこかあどけなく、初めて近く見る私を、罪の意識から解放した上に、好もしさを加えた。

「指から血が出てるじゃないか。あ、藤川さんが来てる。ちようどいい。医者まで自転車で運んでもらえよ」

人夫の一人がそう言うより早く、私は前に進み出していた。

「さ、乗り給え。遠慮してる場合じゃない」躊躇している彼と私きりになった。皆は帰

る時間を惜しんで、一斉に引上げたのだ。

「血が、流れる……」

私には、その黒みを帯びた血の色が、たまらなく恋しく見えた。小さな悲しみと、肉体の象徴に感じ、つと寄って彼の右の中指を取って口に当てた。なま温い液体に土が混って、舌を慰め、痺れさせた。

「いいんです、いいんです。少し擦りむいただけですから」

真紅になって恐縮し、手を引っ込めようとする彼にかまわず、ハンカチをさいて指を固く縛ると、荷掛に座らせ、近くの医院へ車を走らせた。

「君、何ていう名？」

現場では誰もが私を知っていたが、私は少数の者、職長とか組頭等、直接関係のある者の外は知らなかった。

「高木です。高木重夫ってんです」

十九歳で、両親と三人暮らし、家はK川の橋向うだという。

「傷は大丈夫です。医者へ行かなくても明日は癒ります」

事務所の者というと、やはり支配観念に左右されるのか、固苦しい話し振りが、それはなお、私の愛の傾倒を深める。

「そんなら家まで送ってやろう」

道を逆に、私の胸は風を切った。

考えて見れば、これほどの冒瀆はない。相手は唯の親切、好意と受取っていたものが、裏を返せば変質者の巧妙な罠、蜘蛛の巣の醜怪さなのだ。何も知らず、肩に掛けた彼の手の温かさが、良心をうずかせる。溺れてはならない。人生の裏道に巻き込んでほならない。己が心に言い聞かせつつも、橋の袂で感謝の言葉で去る彼に、明日会う希望を抱いて、じっと見送るのだった。

半月ばかりの内に、指の傷は小さな痕を残して癒った。数回会う機会を作って、私はその指を、まるで自分の分身のようにいたわり、口に触れた。もう最初の土臭い血液の温かさはなかったが、やや差らいながら、なすがままに身を委ねている重夫に、昔の私を発見し、愛情の変遷に感慨を深めた。いつか私も、長島四郎と同じく、愛されるより愛する立場をとるようになっていたのだ。

長島といえば、東京の薬学校へ入ったきり消息は絶えていた。卒業後も、この町へは戻らず、どこか薬品会社へ勤めているらしい。彼も、矛盾と混乱の愛情を、悩みながら捨て切れずにいるだろうか、それとも、一時

の感傷から脱却しているだろうか。

月の光に、K川を隔ててT山にコンクリートの観音像が見下している。

「俺、此頃、藤川さんに会うと変なんです」堤の中腹に寝そべって、指をまさぐる動作を許しつつ、重夫はポツリ、と言う。

「何だか、俺、女のような気持ちになって来んです。他の者と話す時、こんなこと、ないのです」愛される意識が、そうさせるのだ。

「重ちゃん、僕、好きかい」

「ええ。俺、今まで、頼りにする人、居ないんで、藤川さんが、兄さんのような気がするんです。でも……それでいて妙に、弱くなる気持ちが出るのは、困るんです」

そろそろ、一人前の男性としての機能が、完全化しつつある年頃だった。人を、異性を愛そうという意欲が、進行しかけている彼が、私に依って、愛されたい性の未然期まで引戻される形に、とまどいしているらしかった。考えがそこに及ぶと、急にいじらしさが倍加し、私は、肩を引き寄せた。

「……………」

音にならない低さで、彼は泣いているのだ。「どうした。重ちゃん」

覗き込むと、涙が月光に染まって青かった。

あぶちっく
みすてりい

宝

石

呪

縛

黒 木 忍

菊 地 信 博・画

地獄行

「あッ」

「しずかにしろい！ もうすこしすれ
ばそんなの気にならねえようにして
やらア」

「……………」

ニヤリとして、そういつ
た後棒の男の言葉に、若
い娘はハッと押し黙っ
た。

「どうした？」

もっとゆすぶ
ってやろう
か」

娘が黙

り込んだので、また後棒がいった。

「いや——」

「そうだろう、そんならずかに担がれてい
ろ」

そういつて、フツと笑ったようである。

駕籠ではない。

娘は青竹で担がれているのである。

両手と両足を括られて、その間に太い青竹
を通して、二人の小者に担がれていた。

娘の名は美代。

日本橋本町の両替商丹後屋の一人娘。

日本橋界隈の小町番付には五位内に入ろう
という小町娘だ。

父の丹後屋が鬼瓦のような顔をしているの
に、美代は美しい。丹後屋が金で飽かして囲

った柳橋芸者に生ませた娘だった。本妻に子

女は手と足で鉄棒を抱きながら虚空にもがい
た。見ている美保の身内がしびれて来た。

が恵まれない丹後屋は、美代を家へ連れて来て目のない可愛がりよう。

その美代が悪旗本にかどわかされたのだ。

一刻程前——

下女と連れ立って所用からのかえり、いきなり五六人の男達に囲まれて、

「あッ！ なにをなさいます……」

それだけで口をふさがれていた。

目の前に丹後屋の黒いなまこ堀がつづいているというのに、いや、それがいけなかった。人通りがまるでない。俗に逢魔の刻という刻限。

猿ぐつわをする奴と、両手をうしろへ捻じ上げて縛り合せる奴と、仕事は分担で素早い。駕籠に無理に押込められた時チラと見た供の女は路上に俯伏していた。当身を喰って気を失ったらしい。

恐怖でふるえている美代を乗せて、駕籠がひた走って凡そ半刻後、駕籠ごと門を入って庭先へ引据えられたようにトンと降りた。

「出る！ といったって無理だったかな」

猿ぐつわをかけた奴が、駕籠の中から美代を引き出した。

その美代を、サッとガン灯の灯りが照らし出した。

ハッと美代は目をつぶって、突っ伏してしまふ。

「美代！ 顔を上げろ！」

「おい、顔を上げるんだ」

俯つ伏している美代の襟上をつかんで、控えていた小者が無理に顔を上げさせようとする。そうされまいと抵抗する。すでに襟許は大きく開いているのだ。その襟をつかんでうしろへ引っ張られては、肩から背中へ着物を引き剥がされることになる——いや、もう白くてまるい肩のあたりが半分覗いていた。それに気づいて美代は顔を上げた。

「ハッハ、さすがは丹後屋の箱入娘だ。美しいな」

廊下の正面に坐っている武士がいった。白っぽい着物を着ている。美代はその顔をどこかで見たような気がした。

「どなたです！ あたしをこんな目に合わせてつれ出したのは……」

美代は箱入娘ではない。柳橋芸者の母の血を引いて、負けず嫌いのきかない目がぐっとその武士の顔を睨らんでいった。

「千駄木兵庫だ。そちとは柳橋で会ったことがある」

美代はそれを聞いて、あと思った。

父に内緒で柳橋の母に会いにいった時見られたのに相違ない。いや、会った記憶がある。

千駄木兵庫——千二百石の旗本だ。

とすると、ここは兵庫の本所割下水の邸だ。

「その歴としたお旗本が何故このような無態をするんです！」

「まあそういうな。天下の旗本もこう泰平の世がつづくといかな。直参だと威張ってもそれは、俺達の手柄ではない。先祖の手柄だな。それを知ってるからお上も俺達を窮乏に落し込んだまま平気だ。お上が俺達の面倒を見てくれないとわかった以上、俺達は俺達でつくらなければならん。金をだ。そこでだ、丹後屋は江戸に聞えた財商だ。ちと金を借りようと思う」

「お金を借りようとなさるのに、お旗本は礼をつくさないんですか！ このさまは逆じゃありませんか」

美代は兵庫を睨んでつけつけといった。

兵庫はそれを軽く押し返して、

「貸しはしないな丹後屋のほうで」

「当り前ですよ！ 町人だと思って馬鹿にするから、この頃のお侍には金を貸す者が居ないんです」

「貸さないから無理にも借りる。それよりは

特集 あらちく☆みすてりい

か手がないのだ。どうだ美代、丹後屋は千両箱が有り余って五万両程どこかへ匿したそうではないか。そいつの匿し場所を書いた紙を娘が持っているという噂だ。本妻が妾を妬くので丹後屋は万一の時を考えて娘の金にするつもりだろう。そいつの紙切れをこっちへ渡して貰いたいのだが」

美代は兵庫の顔を睨んでいて、あッと驚いた。

それを何故この男が知ったんだろう……と、それが顔色に出た。

「本当らしいな」

兵庫は美代の顔色からそう察すると、

「どうだ渡すか」

「そんなものありやアしません」

美代の目色は必死になる。

「あるさ、顔色で白状している」

兵庫は、ニンマリと笑っていた。

「出せないなら探そうか。それ程大事な紙切だから肌につけてるだろう。おい、女の体を探して見ろ」

「あッ、畜生！ 何をするんだい馬鹿！……」

「あッ、こいつ！」

美代の懐ろを探った男が、美代に腕を噛みつかれたのだった。

「フ、フフフ」

とそれを見て笑ったのは兵庫だった。

「イキがいい娘だ。帯を解いて素っ裸にしてから探すがいいぜ」

ハッと美代は顔色を変えた。これはいくら鉄火な文句を出しても、生娘にとっては辛いことだ。それでも負けず嫌いの目が兵庫を睨らんで、

「裸にして探すって、もしそうしても無かったならどう詫びをするんです！」

「詫びなぞ致すか。目の保養をしてからあとは皆んなで慰さんでやる」

「畜生だ、まるで……」

小町娘は、あとを悲鳴のように声をふるわせた。

「おい、早く目の保養をさせろ」

「へエ」

美代に腕を噛みつかれた男は、今度は容赦しないとばかり、ぐいと美代の背中を前に突きという帯に手をかける。

「畜生ッ、畜生ッ……畜生ッ……」

美代は後手に縛られた肩を、腰を、左右に

振ってそうさせまいとする。

「こいつ、じっとしてろい！」

「おい、待て！」

男が美代の帯の結び目をつかんで、えっというように兵庫を見た。

「畜生畜生といいやがった。天下の直参を畜生呼ばわりした町人の娘は畜生以下だ。人間並に扱うのは止めた。そいつの後手の縄を解いて前で拝み手にくくれ」

「へえ」

兵庫がどうするのかわからないが、いわれた通りに、美代の後手を解いて前で合せ縛った。

「足首も縛れ」

「へえ」

ドンと美代の肩先を突いた。あッと投げ出されたように裾を乱して倒れるのを、むずと白い二本の足をおさえ込んでそれも縛ってしまふ。

「九尺位の太い竹があったらう、それを持て来い」

一人が駆け出してそれを持って来る。

「持って来たか。それを女の手足に通して担ぐんだ」

「こうですかい」

「担ぐんだ」

「へえ」

青竹の前と後を小者が二人で担ぎ上げた。

「うっ、ち、ちくしょう！……」

担がれた途端、着物の裳裾がふんわりと下に垂れた。

「まるで、もんじい屋へ興入れのようだ。その思い入れで庭を二三回廻って来い。人間並に悲鳴を上げて詫びをいつてから五万両の詮議だ。さあ廻れ」

無惨というか、残酷というか、これは地獄への道行だ。

屈辱！

そうだ、これでは一思いに殺されたほうがいいかもしれない。

だが――

もう青竹に、捕まった獣のように手足を吊られて、兵庫がいうももんじい屋への興入れの行列が広い庭を歩き出したのだった。

一廻り。

二廻り。

それが、縁側の前を通る時、さっとガン灯の明りがそれを照らした。

そして――

故意か偶然か？

青竹の後を担いでいた男が、地面へ届いて引摺っている美代の裳裾を踏んだのだ。

思わず美代は、「あッ」と声を出したのだった。

その恰好で、また兵庫達の居る縁側の前を通る。

そうしたら、兵庫が持つガン灯が、その美代を照らすだろう――

しかしだ、美代を担いだももんじいの妖美な興は、ふわっと闇の中で消えてしまった。

それと一緒に、縁側に居た兵庫も、ガン灯も消えて失くなったのだった。

本物のダイヤ

「うまかったじゃアないか、さっきの台詞は」

「（しずかにしろい！ もうすこしすればそんなの気にならなくてやる）かい？」

「泣かせ所だよ全く」

舞台の袖で、時代衣装した二人が笑い合った。

「今度から、今のを入れようよ。全然受けるぜ」

「美保ちゃん

が怒るぜ」

「そうだ、一体どうしてあすこんとこで（あッ）なんていったんだろ」

あたりを見たが、女優の阿久津美保はそこに居なかった。

飾り直している暗い舞台を通過して下手の袖へ行った。

そこに阿久津美保が次の出を待っていた。

「よう、美保ちゃん、さっきどうしたんだい（あッ）なんてさ」

「ご免なさい、これよ」

美保は左手を突出した。

「なんだ、美代が指輪をしてんのかい」

「そうなのよ。あの時あなたあたしの裾を踏んだでしょう、その時思わずハッとして目を開いたの、そしたら目の前についていうより上

かしら、この指輪に気づいたのよ。時代劇に指輪が出ちゃアいけないでしょ」

「わかりやしないさ。あれッ、これ石が無いぞ」

「あらッ」

特集 いりすみ*くちうあ

美保のしてる指輪の石がないのだ。

「どこで落っこっちゃったんだろう、いいわ。

どっちみち小道具なんでしょ」

美保はチョッと舌を出した。そしてぽっと

顔を上気させると、

「あんた、さっきわざとあたしの裾踏んだの？」

「さあどうかな」

石本はニヤリと笑った。

「厭ね、わざとなら」

美保の目が軽くその石本を睨らんだ。

「ハッハ、偶然だよ、トチチリシ

ヤンさ」

「フフフ、そんなら勘弁してやる」

美保は、男のような言葉でいった。

「出だよ美保ちゃん」

「今度こそお手柔かに」

「さあ、どうしよう」

「厭よ、そんな……」

舞台はこれから美代が責められるのだ。一寸手をかけて、兵庫が坐る廊下が正面になりその前の庭前に美保の扮する美代が上半身裸



かにされて突っ伏している。後向き。

そこで明りが点いた。青色で、暗い庭前を現わしている。

「美代！ どうじゃもんじい屋へ嫁にいく

輿の乗り工合は——」

美代は突っ伏している。

兵庫の目配せで、その美代の上体を石本扮する小者が、美代の顔を押しつけた膝からひ

つべがすように引き上げた。

「……………」

美代は黙っている。後手に縛られているが今度は双肌を脱がされての後手なのだ。足首の縄はない。

「畜生と言わぬな。人間なみになったと見える。それで五万両の詮議だが、そこに持っているような、隠れ場所を書いた紙切だ」

「……………」

「探すぞ、帯紐解いて探すがよいか」

「あッ——」

「構わぬ、解け！」

「畜生！……畜生！……」

美代は身もだえる。

「畜生といったな。今度は素っ裸になって担がれるか」

帯が解かれた。すらりと下へ下へって美代の裸体が浮かぶ。と、さっと現れた影がその美代の裸体を観客から隠し立った。

やくざ奉行の遠山の金さんだ。

それから金さんの啖呵が兵庫の面上に飛ぶのだが、その前に、

「金さん、早過ぎたぞ！」

「邪魔すんな！ その男！」

観客からいっせいに野次が飛ぶ。無理もな

い、美代が裸にされたと思わず息を呑んだところで、遠山の金さんでは観客はがっかりする。

さすがにこの時の騒ぎが静まる迄が敵わないと、これは寿役の金さんに扮する役者がいつもこぼすのだが、目の前に美代を置いての名台詞だから気が抜けないというところだ。

やっとその捕物劇が終って、美保は楽屋への階段を上っていくと、劇団主事の浜田が降りてくるのと会った。

「おつかれ」

「あ、浜田さん一寸。あのこの指輪、石が何処かへ失くなっちゃったんですけど」

美保は、左手を浜田の前に出した。

「へーえ、いいだろ、でも花村君に断つといて、彼女に借りたんだから」

「はい」

そのまま美保は楽屋へ入るのを止めて幹部部屋の戸を開けた。

主演女優の花村優子は、美代の扮装をしている美保を見るとフンと横を向いた。

特集 あらちく*みすてりい

これにはわけがあった。美保はまだ劇団に入って二月しかたってない。

最初、無論捕物劇の美保の役は、主役だから、当然花村優子が演ることになっていた。

それが、脚本を見て、青竹で担がれるのは恥しいから本を変えてくれといったのだ。

「君はそれで役者かい？ いいよ、それなら美代役は美保ちゃんにやらせる」

いつも花村優子のいうことならきく浜田がそういったのだ。

「それじゃ今度の芝居は現代物だけにしますわ」

「そうだね、いいだろう。普段疲れてるんだから少し休むさ」

それで美代の役は主演女優の優子から新人の美保に移ってしまったのだ。

それで優子は内心穏かではないのだ、それに美保が美代役を代りに振られて挨拶にも来なかったのも腹立たしく思っていたのだ。

しかし、劇団の内部によく通じてない美保をそれで責められないだろう。それに美保は少しおっとりしていた。正確にいうと少々愚かなのだ。内閣改造で浮かび上った保守党の中堅どころの代議士が父で、かつていた郷土の先輩が大臣になったのですこぶる気嫌が

いい。その父に美保は女優になりたいといいい出して、劇団に入れて貰ったのだった。

美保は美人だ。少し愚かなところがあるがそれが時代劇にはすごく重要な場合がある。

台詞は覚えるのは遅いが覚えたら正確で、他の女優より役になり切ってむらがない芝居をした。それを浜田は買ったのだろう。

だが、花村優子は別な見方をしていた。

「浜田は、阿久津代議士に金を貰ったんだらう？」

と勘ぐったし、それに優子にいわせて不埒なのは、浜田は優子と肉体関係をつづけていたことだった。自分を阿久津美保に替えたと思ったのだ。

勿論、そんな花村優子の心の中なぞ知らない美保は、

「花村さん、すいません、この指輪の石なくなっちゃったんですけど」

その美保を見凝めて、優子はしばらく黙っていた。

「すいません、あたし小道具だと思ったんです」

現代劇にハマて出ると、浜田に渡されたのだ。

「それ、本物のダイヤなのよ。二十万円はす

るのよ！」

花村優子はそれだけいうと、くろりと美保に背中を向けた。

取りつく鳥もないのだ。

美保は困ったように立っている。その間に現代劇開幕を知らせるベルが鳴った。美保は扮装を変えなければ仕方がないので、すいませんと頭を下げると楽屋へ戻った。

奇妙な宝石さがし

その日の舞台がはねてからだった。

「一寸話があるから、そのまま舞台で待ってて」

と花村優子にいわれて美保は、時代劇の扮装のまま舞台の袖で待っていた。

見る見る舞台は片付けられて、大道具の人は帰ってしまふ。がらんとした舞台は裸電球が一つ照らしていた。

そこへ花村優子はやって来た。

「今ね、あんたの衣裳や化粧箱を調べて来たのよ」

「……………」

「なかったわどこにも」

「すみません、指輪のことですか」

美保はやっと気がついていった。

「そうよ。そこらをよく探してよ。板の隙間にでも落ちてるかも知れないわ」

美保はそういわれて、舞台の床に顔を押しつけるようにして失くなったダイヤを探し始めた。

それを花村優子は、自分は探そうともしないで、美保の探すのを冷たく見凝めていた。

「あんた、衣裳を引摺って汚れるわ。役者は衣裳を大事にするものよ」

「はい」

「あたしがやってあげるわ」

優子は美保の前に立たせると、美保の衣裳を思いきり上へ捲りあげた。美保は赤い腰巻も衣裳だからと、それも一緒に捲くり上げる優子の手に逆らわなかった。

両袖も肩の辺まで捲くられた。

「さあこれで探しなさい」

「はい」

美保はその恰好で、舞台の上をうろうろした。

「もっと目を床に近づけなさいや見つかりやしないわ、小さいもんだから。でも二十万円するのよ、買うと」

「ほんとにあれ二十万円するんですか？」

「そうよ、それがどうかして？」

そういった優子は慌てた顔をしたが、
「父に弁償させますから勘弁してくれませんか」

と美保がいったので、一寸口を噤んでから
「駄目よ、あれ婚約指輪なのよ。あれが失く
なったら大変だわ」

「そうですか」

美保はまた舞台を、小さなダイヤを探して
廻った。

十分位たつと、美保は舞台の真ん中に、優
子に背中を見せて頂垂れてしまった。

「どうしたの？ もう探さないの？」

優子はそれを見て冷たくいうと、近づいて
美保の前に立った。

優子はフンと笑った。ザマがいいと思った
のだ。

「ないんです」

美保は憐れな声を出した。

「あ、わかったわ。あんたこの衣裳であれを
失くしたんでしょう。もしかすると袂かどこ
か入ってるんじゃない」

「そうかもしれません」

「向うを向いてご覧、解いてやるから」

ついで優子は美代の帯を解いた。

「脱ぐのよ」

「はい」

美保の脱いだ衣裳をざっと探して、

「ないわね。それは？」

「これもですか？」

「そうよ、全部調べなくっちゃ。そうね面倒
だから全部いっぺんに脱いで」

美保は仕方なく全部を脱いだ。

ブラジャーにパンティだけだった。

「それは」

「はい」

「はいじゃアないわよ。小さいものだから何
処でも入るわ」

「もう勘弁してください」

「かくしてるのね？」

「いいえ、そんな」

羞恥と困惑の赤い顔だった。

「脱がすわよ」

「いやです」

「どうして？」

「で、でもそんなところにダイヤはありませ
ん。かくしたんじゃないんです。落したんで
すから」

「二十万円のダイヤよ。あたしがかくしたと
思ったらどう」

「……………」

「じっとしてらっしゃい！」

「あつ、やめて」

その時――

「何をやってんだい？」

あつと美保は、裸体を美代の衣裳を重ねた
上へ俯つ伏してしまった。

そして奇妙な舞台稽古

「あら？ 善さん」

優子は吃驚した声を出した。皆んな帰った
あとで、当然劇場内の何処かに居る夜番の善
さんを忘れていたのだった。

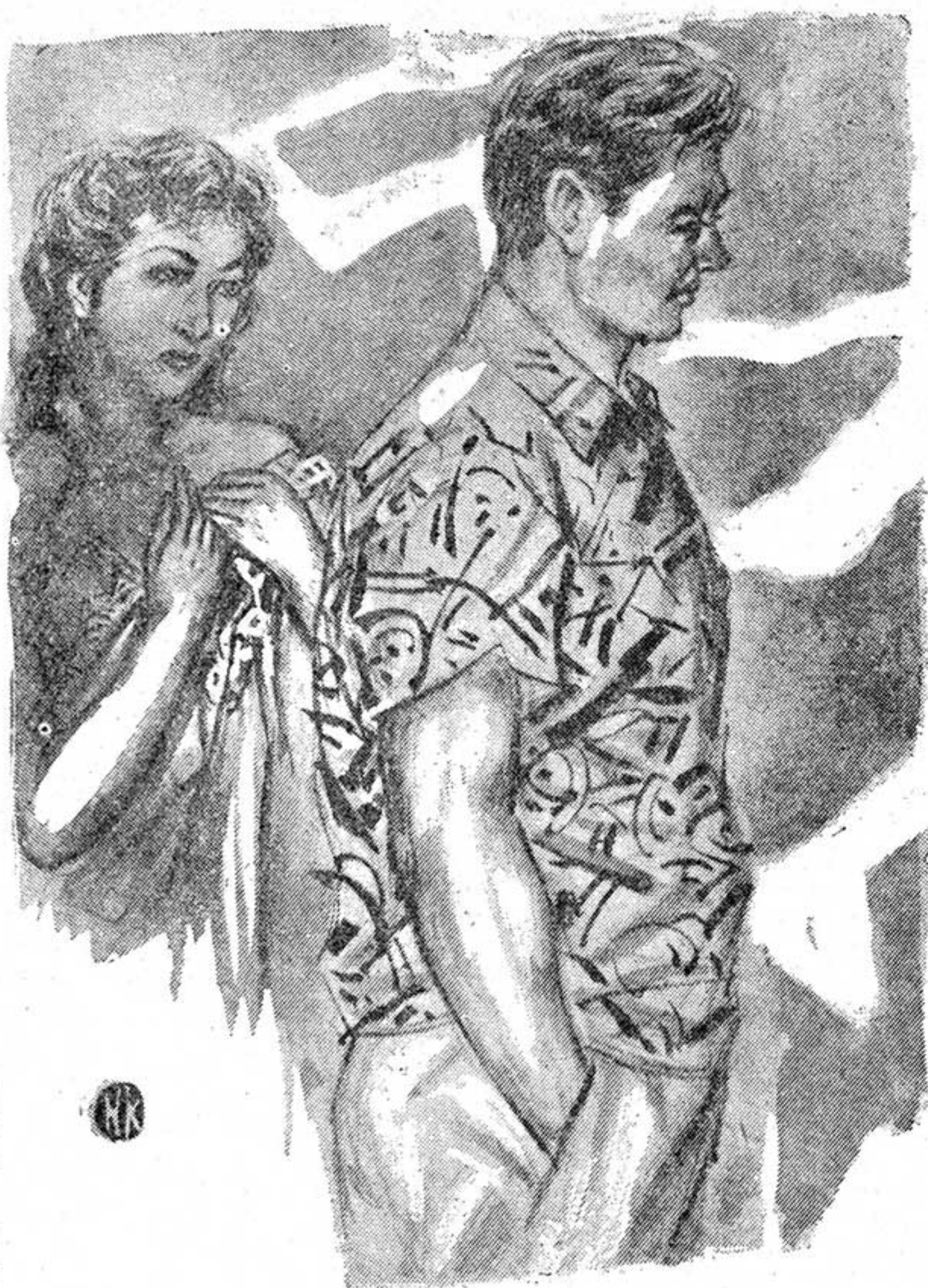
美保はその間にシュミーズを着た。そして
善さんを見てこの人はなんだろうと思った。

劇団に入って日も浅い美保は、夜番の善さ
んには会ったことはない。ただこの男なら時
時オーケストラボックスに居て芝居を熱心に
見ている男だとわかった。三十五、六に見え
た。

「何をしてたんです、一体？」

善さんは、幹部の優子より美保のほうが聞
き出しやすいと思ったのか、美保を見ていっ
た。

「あたしが花村さんの指輪お借りしていて、
石を失くしてしまったんです。ダイヤモンド



だというので探していたんですけと」
「花村さん、あまり虐めないほうがいいぜ」
善さんは花村優子に顔を向けて云った。
「虐めやあしないわよ、あたし」
善さんに見つめられて、優子は一寸戸惑った顔をした。

「そんならいいけどさ。でも美代役をとられて花村さんがこの子に当り散らしてるって評判だよ」
「そんなことないわよ」
「そうかね。だけどこの子が主役をやったらあんたの目から見たら下手な所も見ては居ら

れないだろう。それを怒らずに教えてやる親切は花村さんに欲しいな」

「そりゃア勿論よ」

「それじゃ教えてやりなよ。俺芝居を見ていてこの子の美代役が気に喰わない所があるんだ」

「善さんがそういうんならそうしてもいいわよ」

優子は美保に向って、

「ね、この善さん芝居好きなのよ。演出の先生は初日だけ見てもう来ないでしょ。それでだんだん芝居がだれてくると善さんが注意してくれるのよ。善さんは舞台稽古も見ていてすっかり覚えちゃうのね。皆んなの芝居がバラバラになると善さんは正確に直すのが文芸部の人より上手なのよ」

美保はうなずいた。

「それで何処を教えたらいいの、善さん」

「美代が青竹で担がれるとこさ」

「あんなとこ、あたし恥しくって美保ちゃんの見てないのよ」

「いや、花村さんならどう担がれるかこの子に見せてやればいいんだ」

「いやよ！ そんな」

「そうかい、そんなら仕方がない。それで美

保ちゃんといったな。あんた、ダイヤの石が失くなったって警察に届けたほうがいいぜ。

二十万円もするんじゃないや大変だ」

「はい、そうします」

「そして花村さんに今晚ここでされたことも警察でいうんだ、人権問題だよ」

見る見る優子の顔色が変わっていった。

「善さん、何もそんなこといわなくってもいいじゃないの」

「そりゃあそうだよ。ダイヤが出てくるとかすればね。それよりあんた、この子に芝居教えてやれよ、いやかね？」

「だって、あすこでしよう……」

美保は、優子のなんだか善さんという男の前に急におどしたようになったのを不思議な気持ちで見ている。そして、

「やってもいいけど、担ぐ人居ないじゃないの……」

ふるえるような声で優子がそう云ったのは、美保はすっかり驚いてしまった。

「大丈夫さ、とにかくあんた美代の衣裳に着替えなよ。あんたは手伝ってさ」

「はい」

美保は何がなんだかわからなかった。優子が服を脱ぎ始めたので、それでも美保は美代の衣裳を優子が着るのを手伝った。

「着たわ、どうするのこれから？」

善さんは、上手の袖で何かをやっていたが

優子がそういうと、上から両端を吊られた鉄棒が下って来た。それは背景の大川端とか、

家の壁だとかを吊るす棒で、必要に応じて上へ仕舞い込んだり、舞台へ立てたりするものだ。かなり重いものでも、それを操る綱に

おもりをつけて簡単に操作出来るようになってるものなのだ。重い綴帳もそうなのだ。

「これにぶら下がるの、あたしが……？」

優子は、殆んど恐怖の表情を見せて、足許の一尺上に下りた鉄の棒を見ていった。

「そうだよ、いやかい？」

善さんは、舞台へ出て来ていった。

「仕方がない、やるわ」

優子は鉄棒に沿って横になると両手と両足でそれを抱くようにした。

善さんは袖から持って来た縄で優子の両手と両足を縛り合せた。

それを見て優子が云った。

「善さん、今夜のこと誰にも黙っていて……」

哀願する声だった。

した。と、優子を吊るした鉄棒がゆっくり上へ持ち上った。背中が

舞台の床から五十糎程上がると、鉄棒は固定した。

優子の美代は、両足と両手で鉄棒を抱えるようにしていた。実際

に縄で体重を支えるのではなく芝居ではそうするのだった。

善さんは戻って来てその優子を見た。

「善さん、かんにんしてよ」

優子は泣くような声を出した。

美保は、まだ何がなんだかさっぱりわからなかった。どうして花

村優子ともあろう幹部女優が、劇場の夜番だという善さんにこんな

に下手に出るのか、いくらおっとりとしている美保でも、優子の姿は芝居のその場面を美保に見せて教えるものではないことに気がついていった。

「二回目か、あんたこうされたね」

善さんは、優子の美代の足の方へ廻ると、ふわりとして垂れている衣裳を踏んだ。

「あっ、善さん、かんにんして……」

優子は、膝でおさえいていた裾がはずれて、

特集 いりてみ*くちうあ

深くはだけられたのを知って、泣き声を出した。

「揺するぜ」

ふらふらと、優子の体が左右にふれた。

「あつ、善さん……善さん……」

「見なよ、あんた。幹部女優ともなるところいう芝居をするんだから」

善さんは美保にいつて、ニヤリと笑った。

「善さん、善さん……もうかんにんしてよ」

善さんは、泣言をいっている優子を見てニヤヤするだけで煙草に火をつけた。

「花村さん、この子に藻掻くところもついでに教えてやれよ」

「いやっ！ いやいやいや……」

優子は腰を振った。

美保はなんだか身内がじーんとしびれて来た。

その時、客席を靴音を響かせて舞台に近づく男の影があった。

「美保ちゃん、こんなおそく何をしてんだ」

文芸部の浅利が、妙な顔をしてそう叫んだ。

「善さんもそこに居るのか？ 不用心だよ」

横の扉が開いてるから一寸覗いたんだ」

「善さん善さん……誰か、誰か来たわよ……」

必死に押し殺した声が美保の背中でした。

奇妙なる解決

宿直室で、善さんと浅利は向い合っていた。

「困るね、善さん」

「でもね浅利さん、花村が美保ちゃんて子を虐めてんのを見てこの野郎と思ったんだ。あの子が少し足りないのをいいことにして好きにしているんだからな」

「それだけかい」

「それだけって？」

「善さん、それだけじゃ花村君はああは君のいう通りならんぜ」

「……」

「あんた、あの指輪、安物だと知ってなんだろう？ ダイヤだといってそれで美保ちゃんをひどい目に合わせたなんて人にしられたら彼女居づらくなるんであわてたんじゃない」

「あ、あんたもそれを知ってたのかい……」

「いや、気がついたんだ、今話を聞いててね。持ってるんだろう。出せよ！」

善さんは、ズボンのポケットからガラス玉の宝石を取り出して浅利に渡した。

「預つとくよ。これでまたあんたが花村を脅迫すると困るからね」

「あんた、それ花村に返すのかね？」

「永久に僕が預るさ。この話はこれで全部終りにしとくんた。誰も傷つかないようにね」

「惜しいな、それで花村は自由になるんだが」

「おい善さん。そんなこと本気で考えてるんなら支配人に今夜のこと全部話すぜ」

「冗談だよ浅利さん、支配人に話されたらこっちはお払い箱だからな」

「はは、冗談さ勿論」

浅利は宿直室を出た。

ドアの前に帰り支度した美保が佇んでいた。二人は開いてる横の口から外へ出た。

「どうも済みませんでした」

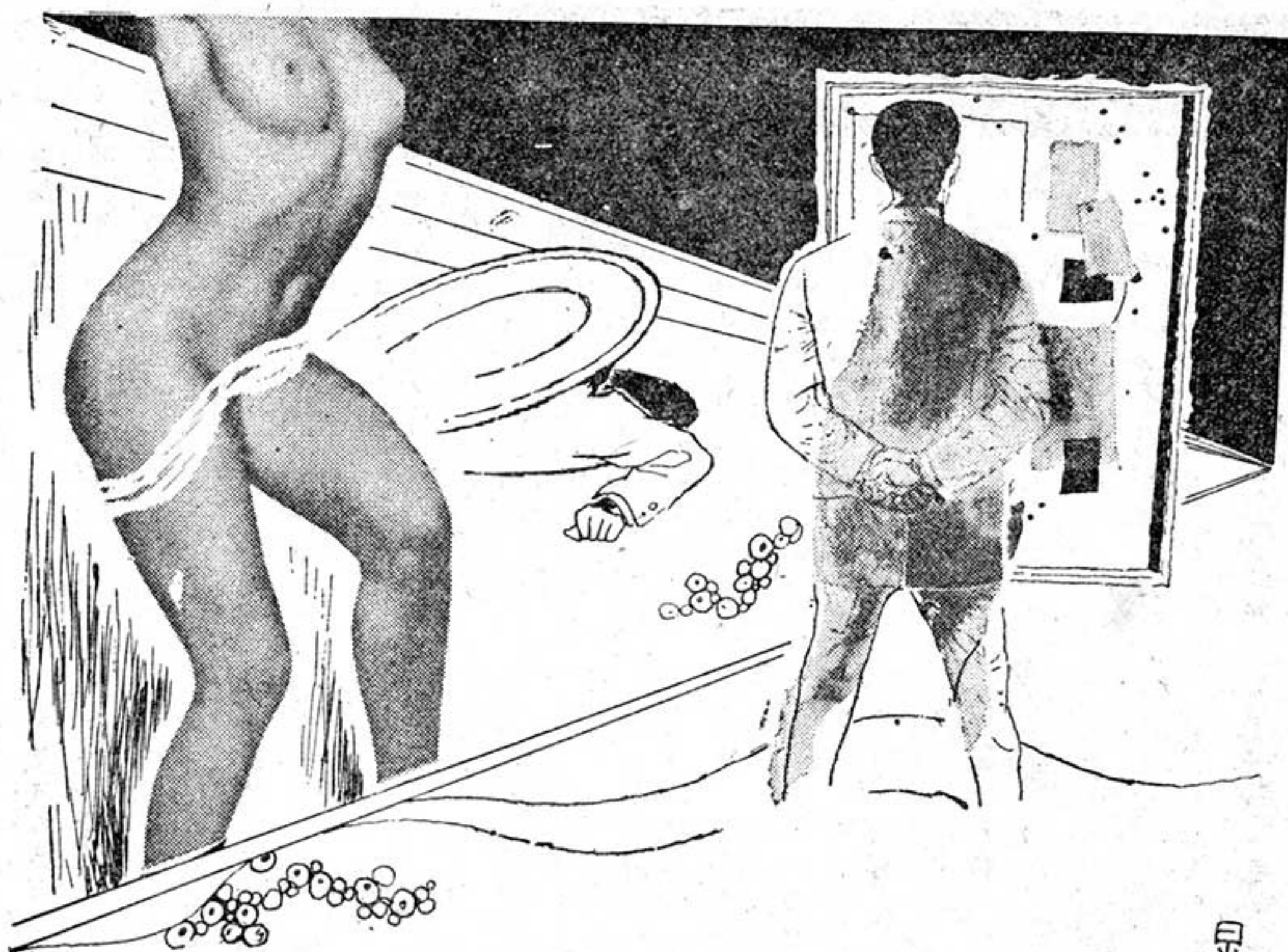
「何が？ ハッハハハ、なんでもないさ。今夜のことを忘れるんだよ。ダイヤは善さんが探してくれるって云ってるから見つかるとう君が弁償しなくても済むと思うよ」

「どうも済みません」

浅利は、その美保を見て、この娘は本当に白痴のけがあるのだろうかと思った。

（もしかすると、これはめっけもんかもしれない！）

二十六才の独身の浅利は、ふと愉しくなった。勢いよく、歩いていた足をとめると、手を上げてタクシーを止めた。



晃

あぶちっく・みすてりい

闇

(一)

大河内常平

美濃村 晃・画

「江波のやつ、なんか会社のことで、しくじったらしいな。使い込みかもしれない……五十万円ばかり都合してくれ、どうしても至急に入り用なんだ……って、理由もいわずに、蒼い顔して頼みにきたそうだぜ」

朝吹純二は、遊びにきた友人から、おなじく大学の同窓生である江波の、こんな噂を耳にしていた。

江波正太郎は丸の内に本社をもつ、輸出向けのカメラなどをあつかっている、ちょっとした規模の貿易会社につとめている。

渉外課長かなにかしていて、仲間ではずばぬけて羽振りもよく、ときおり誘われては、銀座あたりで、飲ましてもらっている仲だ。

いわゆる社用族にぞくする男である。会社の経理に、商用の接待にかこつけたレシートをだせば、いくらでも金が自由になるらしい。好きとはいえ、探偵小説なんぞ書いてその日ぐらししている朝吹純二に

特集 いりすみ★ちくちくあら

とっては、想像もできないような、いい身分におもえる友人なのだ——こんな話のぐあいでは、朝吹のいまの身分としてとても心配してやれる境遇でもない。

気の毒にと心配だけはしていると、突然その当の江波が、深夜に訪れてきたのには、驚いてしまった。

雑誌社の締切りにおわれ、徹夜仕事をしかかっているところだった。

スプリングの襟をたて、よろよろと幽鬼のように蒼ざめて、入ってきたのだ。

「やあ久しぶりだねえ……おどろかして悪いけど、いま気の狂いそうな目に会っているんだ……とうとう朝吹君にだけ打ちあけて、相談してもらおうつもりで、やってきたのさ」

やがて煙草をつけ、こう前おきして、話しはじめた。その手がぶるぶると震えている。

——それはまったく、嘘みたい

な不気味な告白だった。

まだ一週間にもならぬ土曜日の夜、れいによつてバーからバーへ梯子飲みしてすっかり酔った江波は、最後に無理に連れの堀越という客にさそわれ、車で新宿にでて、特飲街の裏手のアルサロのボックスで、ハイボールのグラスを重ねていた。

そのクラブは初めての店で、堀越の顔見知りのところだった。

小田急の終電車で帰ればいいんだからと、堀越はまったくの自分勝手に、いささか疲れきった江波を相手にして、鯨飲する。

ほかほか女の子にグラスを注文し、また彼女たちにも飲ませて、たぐりよせたりキスしなかったり、まさに乱痴気騒ぎの限りをつくしていた。

飲まねば損だと、ありありと態度にみせているのだ。

江波の会社にとって、手ばなせない客筋として饗応せねばならぬ、とある得意先の営業部長だったからである。

ずんぐりと肥満して、脂ぎった額の禿げあ

がった、みるからにひと癖ある不快な中年男だった。江波だって根は勤め人だ。土曜の夜ぐらいいは、こんな堀越みたいな男のお伴をして、へこへこ飲んで、いたくなかった。

「おう、お時間がきたからな……江波ッ、そろそろひきあげるぞッ」

こう腕時計をみてわめいた堀越の声に、蘇生のおもいでボックスからとびあがり、てぎわよく勘定をすませ、車をボーイによばせて、すぐ眼と鼻の駅まではしらせ、やっつけりをつけた。

まだキャーキャーとしつこく引きとめる女の子たちを振りきって、江波はネオンをあとに、闇の通りを歩きはじめた。

もうどうせ、江波ののれる電車はない。車で帰るまえに、あまり馴染みのない新宿の市街地を、何とはなしに彼は、さまよってみた。

大通りはひろい十字路になり、巨大な岸壁のようにそそり建った黒いデパートらしいビルの上に、さざ波にゆれる夜光虫みたいなアセチレンの燈火をつけ、ウデ卵屋や玉蜀黍

「そんな人、死んだらいいと思わなくつて？」
「ダークブラウンの唇が男心を淵に誘う!!」

をあぶって売る露店などがならんでいる。

煌々とライトをつけ、地下鉄工事らしいヘルメットをつけた人夫たちの、深夜作業もとおくで、進められていた。

江波は足のむくままに、いくつも道をおれて、狭い裏通りの深夜喫茶に入ってしまった。

コーヒーでも口にしてみたくなかったからだ。

「テス」というその店は、入口から螺旋階段になって、屋根裏の四坪ほどのフロアーまで、いく層にもなって、ほの暗く造作された店だった。

江波は深夜喫茶などにはあまりゆかぬたちなので、興味をひかれて、階段を登りつめてボックスに座った。

中途のフロアーのボックスの隅には、スプリングをひろげてめぐり込んで寝そべっている、どうみても中身は二人らしい、うごめく徹夜組の姿もあった。

江波の席をとってからあらためて見渡した視線が、真正面に黒い壁を背にした女に気付き、びたりと瞳をあわせた。

一瞬江波は、はっとした。眼を疑ぐるおもいだった。

女は口に、煙草をはこんで、ふっと煙をふ

くところだった——それがまるで、ポスターがゆらいだような錯覚をおぼえさせる刹那にうつったのだ。

しかも夢心地をさそったのは、

「おひとりですの」

と、あちらから親しげに、声をかけてきたことだった。

「ええ、だ、だれもいません」

こうとつさの、おかしな返事をかえした。

女はおかしそうに笑った。

「わたしもひとりなのよ。ここでまちあわせ、てましたのに、こやあしないの……」

も、女のお友達。ひどい人よ、いくらみたって、ことづけも書いてないわ」

指さしてみせた背にした黒い壁は、なるほどよく見ればおおきな黒板になっていて、無数の白チョークの字やなぐり書きの絵が、いっばいに交叉した角度で、壁をうずめつくしていた。

このごろできて来たという、落書喫茶という趣向の店らしい。若いひとたちが、フレンドどうしの伝言や詩や似顔をかきつけたりして、恋人とのないしょの連絡をとったりする。そなえつけのチョークもおいてあって、なにか心をそるしくみになっているのだ。

バー風のカウンターもしたにあるらしく、女のまえには、飲みさしのアレキサンダーのグラスが、ならべてあった。

不思議な美しさをたたえた、女だった。

Vネックの黒一色のスリッパオーヴァーに黒のヒール。流行の七分袖からでた腕が、ほの白くゆらめいて、煙草を唇にはこんでいた。

豊かに背にたれた髪、ダークブラウンをひいた唇——そうした格調の化粧の効果を意識してのように、斜めうしろにスポットの明りをうける位置にあって、江波のまえに腰をおろしている。

それはあたりの雰囲気にしっくりとあつた、蠱惑的な、男心をさそう肢体だった。

(二)

江波正太郎は、この若い女と話題がすすむままに、夜半まで楽しく、我をわすれて語りつづけた。

女は佐山優子という名だった。

優子は最近の映画のはなしから芝居のはなし、さてはマージャン、ゴルフなどの趣味にまでおよび、あらゆる話題で、つねに江波の知識を圧倒する内容をもっていた。

野球、ボクシングなどのスポーツを語り、さらには自動車の免許までもっているらしいそのすべてへの博識ぶりに、もう江波は憑かれたような気持に酔った。すすむグラスにほんのりと紅をさした優子の面差しに、放心した視線をそそぐばかりだった。

これはどえらい驚異だった。

文化人をもって日頃自任している江波が、みごとに鼻を折られたかたちである。まさに徹底的にやられてしまった。と同時に、こんどはこんな女性を、どうしても手中からてばなすまいとする焦りが、みるみるうちに胸にうずきはじめていた。

均斉のとれた肢体、胸から腰にかけてのほどよい量感。ウェストから足にかけての、びっちりとした装いに誇張された優雅な魅惑――すべてが男の渴^{かわ}きをそそるものだ。

「もっと飲もう……どっかにゆこうよ」

と江波はさそって、螺旋階段をおりながら、ぐいと腕をまわしかけた。それは思いきったしぐさだった。しかし優子は、すこしもそんなことは平気で、なすがままにまかせて、路上にでた。

この土地にくわしくないうちに、優子にきいてナイトクラブにはいった。

ボーイがべこべこと頭をさげたり、バンドの連中がサックスの手を休めて目礼したりすることから、優子がこの店にとっても、ただならぬ位置をしめていることが、読みとれるのだった。

優子はカクテルをつづけ、江波はハイボールでおしとおして、まれにフロアーにたつて踊ってみても、ただ組んでゆれているばかりとなった。

「ああ疲れた……優子さん、もうへばりきったよ。どっかで寝そべって、話さないかい」

「どっか、どっかっておっしゃっても、ここしか飲めるところ、もうなくってよ」

「ううん、べつに誘惑するんじゃない……ただ疲れたし、別れたくは絶対じゃないんだ。ね、今夜をゆっくりと、語りあかそう」

こんなつきなみな台詞をいって、ついにその一時間後には、車をとばして原宿の高級ホテルをくぐっていた。

「あなたは幸福な人ね……こんなふうに、したいほうだいに羽をのばせて。会社でもそん

特集 いりすみ★くちあふ

な渉外の仕事なさってらしたら、遊ぶことがお勤めみたいで、いいことばかりね」

こうほほえみながら、すすめるままにさして恥らいもみせず、なみなみと湯をみたしたバスに入ってくる優子だった。

この底ぬけの無邪気さともとれる、恐いものなげな態度は、はたしていかなる彼女の本質からくるものだろう。

計り知り難い、謎めいた妖しさがある。

バラ色にゆらめく優子の裸身をまえに、江波はまばゆく戸惑うのだった。

「いや、いいことばかりなんて、とんでもないさ……泣きたいくらい、いやな奴だってある。今日の野郎なんか、まったく毛虫みたいに、いやでたまらぬ男さ」

こう言って江波は、さっきまで接待していた堀越の悪どさを、かいつまんで話してきかせた。言ううちにも、憤りが甦った。

「そんな人、死んだらいいと、おおもいにならなくて？」

「ああ、死んだらいい……ぶっ殺してくれる人がありゃあ、五十万でも百万でもつんでやるぞ」

「すごく口惜しいのね……わかったわ、そんないやな人なら、きつとなんとか、自滅する

ものよ」

こうなぐさめるようにいって、堀越のことをとやかくと尋ね、トイレにでもたつのか、そつと廊下にていていった。

江波は入浴中に女中がシーツをかえたらしい純白のベッドにもぐり、こともなげに枕もならべて、相手のもどるのをまった。

やがて優子はもどってきて、パチリと明りをスタンドに切りかえ、おおきくベッドのspringを軋らせてみて、はしゃぐように身をよせてきた。

江波はがばと身をもたげ、その唇に唇をかさねた。シャネルの甘い香りが、つよくその肌にかおっていた。

廊下にでたのも、その香りを装うためだったのだろう。

はげしい肉体の疲れに、昏睡のそこに落ち込んでしまった江波は、ふと床をたつかすかな優子の気配に、ふと一瞬の知覚をとりもどした。

夜がいつしか明けきって、窓には高い日射しさえしている。ベルをおして女中をよび、優子は朝食をたのんでいた―そして隣りのつづきの間で、ガラッとガラス窓をひい

て、顔をつくっているらしかった。

二人が車をとらせ、再び日曜日の新宿の雑沓の市街地へもどったときは、もう昼ちかくにもなっていた。

「なんだかうそみたい……ゆうべからが、夢のようね」

こういって優子は頬をあからめ、わたしたち二人の記念にといつて、またあの「テスト」の、おなじ螺旋階段をあがって、おなじボックスに座ってみた。

やはり日中でもこのフロアーはほの暗く、ボーイ達は朝で昼勤のボーイと番がかわるらしく、その顔ぶれだけが違っていた。

「あなた、いままでに、駐留軍におつとめになったことなくって……」

「いやあ、ないねえ。どうして？」

「じゃあ……へんな話だけど、警察につかまるといふ、悪いことなされたことある？」

「よせやい……あるものかい」

あまり喋りすぎて、話題がなくなったせいだ、こんなおかしいことまで、尋ねはじめたのだった。これを江波は、しきりに相手の男のすべてを知りたがる優子の心情と解して、かすかな喜びさえ覚えるのだった。

ところが次の相手の言葉は、こんな意外な

ことに触れはじめた。

「じゃこんなもの……ごらんになったことないわね。わたしこまってるの。知ってるメイドしてる女の子に、米軍の大尉キャプテンにたのまれたから、うってきれて、頼まれたの。でもいやだから、いまから返しにゆくよ。人にいわないでね」

こういってあたりを見渡し、バッグから絹のうすいハンカチーフに包んだものを取り出し、そつと江波に渡してきた。それはずしりと、重いものだった。

「あッ、これ、拳銃じゃないか」

「そう、でも、弾ははいってないそうよ……だいじょうぶだって」

小型のガッシリとした、いかにも新式の、あたらしいピストルだった。江波は人目のないのを確かめ、握把の底を外して、弾倉をぬき出してみた――弾丸はつまっていない。銃口からのぞいてみると、防錆油でも強くひいてあるのか、黒ずんで条線がよごれていた。

「……くわしいのね」

「兵隊にいったもの。すこしは知ってるさ……おいしいけど、これはうっかり持てないや。返しといたほうがいい」

「もちろん……いやよ、こんなもの」

優子は布にそっとうけて、こわそうにバッグにもどした。頼まれたメイドにすぐ返しにゆくというので、また明日の十二時にここで会う約束をし、二人は別れた。

江波はまちどおしく時のたつのを希いながら、自宅にひとまず戻って、昼寝したりして、その日曜日をすごしたのだった。

(三)

「……そして僕は、翌日のつまり月曜日の朝に、会社にでかける時間を気にしながら、床にねそべったまま、朝刊をみていた。そしてらどうだ！ あの土曜日に飲んだ堀越のやつが、小田急の沿線のあいつの自宅のちかくで、夜中に呼びだされて、殺された事件がでてるじゃないか！ 三面の上段いっぱい、大見出しで載っているんだ……君もおぼえてるだろう！ あの事件なんだよ。あの被害者が、堀越なんだ……時刻は土曜日の明け方ちかく、突然セダンで乗りつけた男が、急用だと堀越の家をたたきおこして——会社にたいへんな事故がおきて、使いにお呼びにあがりました——とかなんとかいって寝起きを連れだされ、駅ちかくの原っぱで、屍体が発見さ

れたんだそうだ！ 日曜日の朝刊にはもちろん記事がまにあわぬ時刻だし、夕刊は日曜で

休みだから、やっとその日の朝になって、知ったわけだよ」

こう朝吹にうったえる江波の顔は、もう恐怖にひきつっていた。

優子にたずねられるままに、

堀越

のその自宅の位置までもを、刻明に教えた記憶はあるのだ。しかし彼女は、いっしょにホテルに泊ったままだし、犯人は男であると、堀越家の家人の証言も新聞にでている。



是

すると優子が翌日「テスト」で拳銃をみせたのも、べつにこの事件とは、関連はないのだろうか。

しかし拳銃といい、あの「そんな人、死んだらいいと、おおもいにならなくて」というホテルでの彼女の言葉といい、あまりにも符牒が、あいすぎているではないか！

「で、朝吹君、ぼくはめったな素振りではみせられぬと心に決めて、会社には出てはみたよ……みんな堀越の会社と取り引きのある連中は、新聞をみておどろいていた。ぼくに色々たずねる重役もいた……ぼくはすこし飲みあって、別れたままでしたと、ぼかしておいた……あのときほど、夜のくるのを、待ったことはないね。会社がひけるやいなや、銀座に上役をさそって出て、飲みながらに時をすごした。飲まねばまぎれぬ気持だった……十一時になると別れて、一人で新宿へむかった。もちろん「テスト」にさ……いたよ、優子はあのボックスに、待っていたよッ」

江波はここまで言って、ひしと顔を、被っ

特集 いりてみ*くちるあ

てしまった。

——優子はあの夜のとおりに、懺悔的な微笑をなげて、彼をまっていたのだ。そして、「新聞みて、わたし、おどろいちゃったわ……あなたの殺したがつてた、堀越さんという男が、死んじゃったのね。うれしいでしょ。その願いをかなえてくれた人には、あなた五拾万円くらい、あげてもいいって」

と、あとけないまなざしで、ささやいたというではないか！ これはなににもまさる、脅迫の圧力を帯びて、江波につき刺った。

「まさか……君が、殺ったんじゃあ！」

「……もちろんないわよ。誰かあなたに同情して、やってくれたのね。幸福なひとねえ……あたしは一晚中、あなたとおつきあいしていたじゃないの」

「じゃあ、あの拳銃はッ」

「あんなの、もうアメリカさんに、お返ししたわ……きつとちがう拳銃でしょ。あらあなた……この今日の夕刊、まだ読んでらっしゃらないの。あの堀越さんという方の殺された近くで、ゴミ箱から兇器のピストルが発見されたそうよ……今日の朝にもなつて。ほら、指紋までとれたんですって。いま前科者のカードと、あわせてる頃ね。でもだいじょうぶ

よ。警察にあげられたことのある人や、駐留軍に勤めたことのある人でなければ、指紋カードなんか、普通のひとは出してないでしょう……まさかあなたが、犯人じゃないでしょう。いざとなつても、あたしが証言するか、心配なくてよ」

こういつて優子は、江波の頬を両の手の平ではさみ、はげしいベーズをおくるのだった。あたりに人影はなかった。江波は激情にたけり狂う想いがした。

悪魔だ！ ああ、しかし、なんという妖しい魅惑にみちた、美しく魂をゆさぶる悪魔だろう！

まるでひとごとのように、哀れな愛する犠牲者をいたわる天使のように、そのベーズのなんと熱かったことか。

「朝吹君、ぼくは無理な不義理をしようのうちうえて、五十万円借りだして、優子にわたし……優子は——これすこしも、わたしのお金にはならないのよ——とことわりながら、封筒にいれてバッグにしまった。そして——けしてあなたに、無理はもう言わなくてよ。もうお金の心配なんかさせない。でももしかすると、たった一度だけ、なにかお願いする

こと、あるかもしれないけど。でもそんなお願い、できるだけしないわ。気にしないで……いやッ、そんなお顔しちゃあ。あたしあなたを、とても好きなんですもの——と、涙ぐんでいうじゃあないか。ほくはあの金を、べつにおいしいとは、おもっていない。しかしともあれ、ここに一人の人間が、抹殺されているんだ！ どうすればいいんだろう。きっと君ならば相談できるとおもって、決心して打ちあけにきたんだがね……もちろん僕は、我が身がかわいいさ。しかしいまのほくにとつては、あの優子は、こんな目に会わされても、なお命にもかえがたい、ほくのすべてなんだよ！ ともあれ確かに、酔ったうえとはいえ、殺人は依頼したほくなんだからね」朝吹はここまで取乱した友の言葉をきき、おおきく頷いてみせて、腕を組んだ。

(四)

まったくひどい、然も困ったことに、親しい江波なりの不条理の理をもふくんだ、妖しい煩惱につつまれた事件だとおもった。

ちあわせた朝吹純二は、探偵作家なりのはげしい意欲をもやし、この怪事件へとぶつかっていった。

まず第一に基本点として態度をかためたのは、江波の意をくんで、すべてを絶対の隠密のうちに捜査してゆく方針だった。

どうひきあいに出されても、江波の立場にプラスするはずはない。となると、五十万円の金にはさして執着はない、なんとか穴をうめる手はあると本人の江波がいう以上、こんごのさらに加わる禍根さえ防止できるなら、このままに闇にほうむり得たほうが、たしかに友人の社会的地位のためにも、徳策かとさえも思われるのだ。

次に推理されることは、おそらくこうした方法によって、行なわれた事件であろうという、犯行の経過である。

朝吹は刻明に当時の状況をききとり、ひそかな単独行動をとった。まず原宿のホテル、つぎに立ちよったすべてのルートなど、店をメモし、実地にしらべあげた時間表までつくり、こうした推定にたっし得たのだ。

その結果とは、優子たる女が、ホテルで江波から堀越の自宅の位置や容貌などをたしかめ、ただちにこれを殺人者に連絡したとする

容疑であった。

廊下のすみにある、ホテルの電話をつかってだろう。優子がベッドにはいるまえに、刹那の時間をつかって連絡したことは、疑う余地もない。

優子は江波と、朝までかたときも離れたことがない。したがってその間におこなわれた兇行に、直接に手のくたしようなないわけである。

乗用車をもった謎の殺人者は、女の指令のままに、堀越を社用にかこつけておびきよせ、附近の草っ原で惨殺した。指令をうけて都心より小田急沿線を車で急行したとすると、丁度時間のあう道のりにあたる。

おそらくそして虐殺後に、明け方になって原宿のホテルにもどり、兇器の拳銃を優子に手渡したのだろう。

二人の宿泊したホテルのつづきの隣室は、ガラス窓をあけると、ホテル前の路に面する位置にあった。優子はたしか、朝はやめに江波をあとにして、ベッドから先に出て隣室のガラス戸をひいていた。

ここで表てから、そっと発射直後の拳銃をうけとったのだ。

真犯人の指紋を拭きとった拳銃に、江波の

指紋をあらためて附着さすために——これは「テス」の昼もほの暗いボックスで、もののみごとに、成功されている。

酔ったうえとはいえ、堀越が殺されればよいと言ったことは、殺人教唆とひらきなおられても、どう抗弁することもできぬ。

まして優子に、夜半に江波がホテルからぬけ出たなどと偽証され、また江波の指紋のついた拳銃を、あらためて殺人現場附近のゴミ箱にほうり込まれてあるともなれば、もはや江波への容疑は、絶望的なものと化すではないか。

ともあれどうはこぼうとも、優子と謎の殺人者には、堀越殺害の判然とした動機もなければ、また証拠もない。証拠不充分のままに、判決のくだしようもない有様となろう。

——こうした位置におかれたとき、要求される金額に応ぜぬものは、江波ならずとも存在し得まい。まして五十万という金を、つくってつくれぬ、江波でもないのだから！

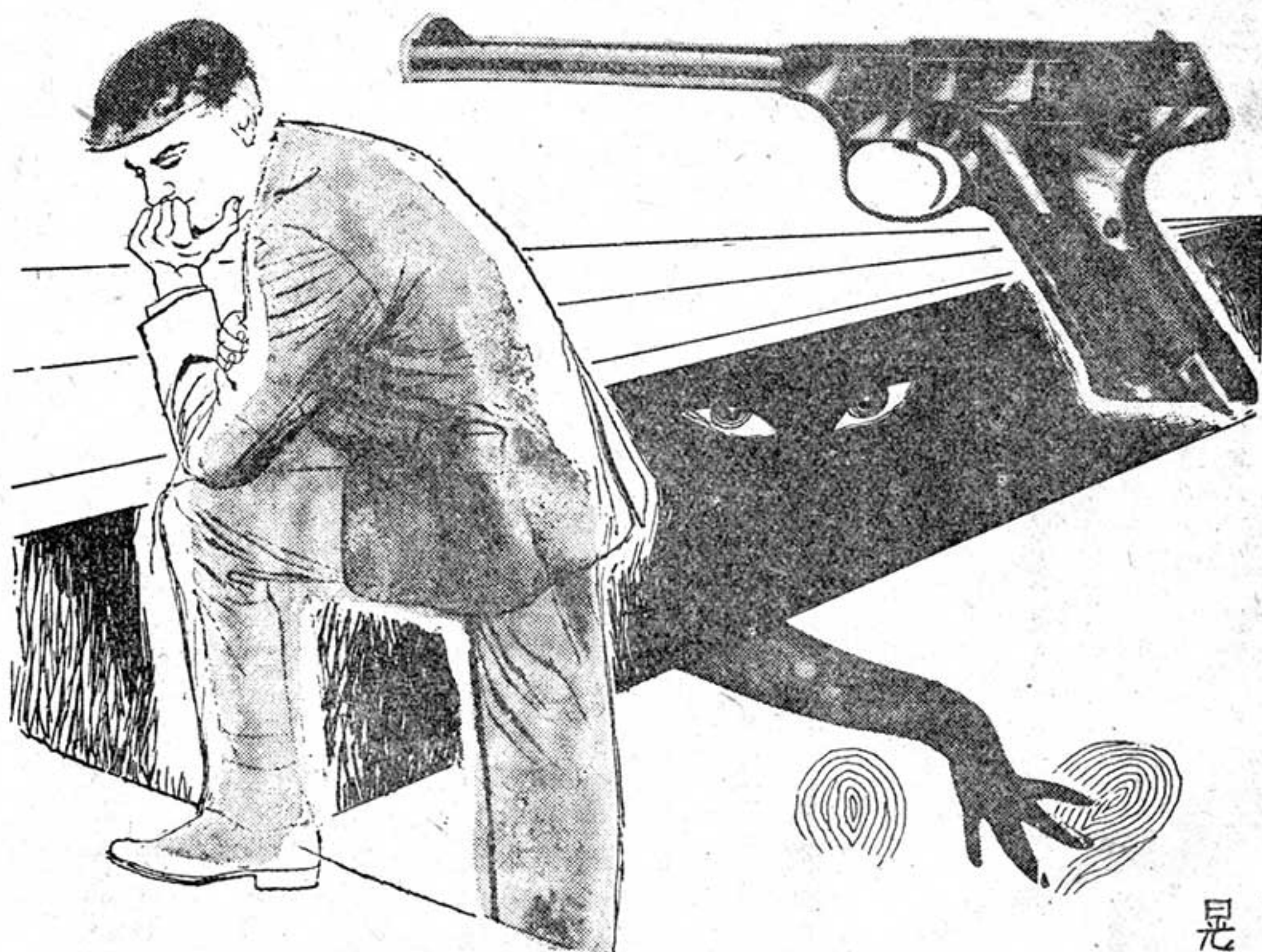
朝吹は事件の輪郭をつかむにつれ、その巧妙な手段、心理的な相手の心を読みぬいての犯罪の完璧さに、ほとほと舌をまくばかりとなった。

くわえて驚いたことに、江波は依然として女に、恋慕の焰を、ともし燃えさからせているではないか。

二人でいったというナイトクラブ「テス」などを中心に、朝吹は執拗な調査をくりかえしていった。集中攻撃を開始したのだ。

「このクラブにこのまゑきたとき、すばらしい美人が、いたじゃあないか……一目惚れしちゃったんだ。どんな女か、おしえてくれよ」
こうボーイにたのんで、法外なチップをはずんだりした。

「あああの、ユウ子さんという、女の方ですか……あの人は、香港と貿易しているリーさんという三国の方の、



特集 いりすみ★ちくちくあ

「お知りあいらしいですよ」

「ほう、じゃあぼくなんぞとは、つきあってくれんな」

「さあ、それはどうですか……よくいろんな男の方と、いらっしやいますから」

「で、そのリーさんは」

「おうわさだけで、まだお目にかかっていません……ただなんとなく、噂にだけ、おききしています」

ボーイもこれ以上は知らず、ただ一度、うんと酔った彼女が、しきりに神戸へゆきたがっていたことだけ、記憶していた。

香港といい神戸といい、なにか三国系の、密輸団にでも関係のありそうな気配だった。

サックスをやっているクラブのバンドマンは、

「だれかに追われて、東京にきてるらしいですよ……しきりにどの客のことも気にして、あたしのこと尋ねなかった？　なんて、脅えてたりしますからね」

と、これもまた彼女の奇怪な印象をのべ、それ以上はまったく、

知るところがなかった。

しかしこのバンドマンの言葉から、朝吹は意外の収穫を得た。

優子の半面が、おほろげながらも、浮んできたのだ——何者かに脅え、戦っているというのだ。

朝吹はいよいよ、事件の核心である「テス」に捜査の手をのぼした。落書き昼夜喫茶の店「テス」は、たしかに仄暗い照明で、妖異な設計で建てられている。

植込みの鉢にのびた、棕櫚の厚い葉の蒼さが、黒ずんで冷たくきらめくほどの、陰影のおおい店である。

朝吹は一瞬フロントで戸惑ってから、かぶっていたハンチングを脱いであたりをうかがい、手すりに触れながら、螺旋階段をのぼりかかった。と、その時だった。

「もし、優子さまをおさがして、ありませんか……」

と、フロントに佇んでいたときから、カウンターのむかいで首をあげて見ていたバーテンが、こうあわただしく、朝吹に声をかけた。たずねてきた。

「いや、べつに……」

反射的にとっさに、答えてしまった。

「では、ローズさまを……」

「ああ」

かさねての問いに、べつに肯定したわけでもないのだが、そうもとられる、生返事をしてしまった。

「さようで……ただいま女の方からお電話で、ハンチングにグレイのズボンをはいたお客さまがいらしたら、優子さまのお知りあいか、うかがうようにお言づけでした。それで、お相手ちがいのローズさまのお客さんでしたら、八時までまっていたくようにと。ローズさまからここへ、あらためてお電話があるそうです。おまちください」

「ふーん、で、優子とかいう人の、客だったら……どうしろと言ってるんだい。もちろん優子なんて、知らないけど」

「さあ、その場合は……べつになんとも、うかがっていません」

おかしい言づけも、あったものだ。

この刹那に、優子とローズが同一人である、ピンと直感が胸をかすめた。

つまりローズの名で、優子を知っている男がこの「テス」にすれば、何等かの用件があるわけであろう。

よく考えてみれば、このハンチングにズボ

ンの姿で、彼女の出没した店をさぐりつづけてきた——その情報を誰かからつげられ、何者であるかを気にして、この店に電話してみたのだろう。いつも優子は、何者かに脅え、日夜おののいているそうではないか。とすれば、その謎の人物は、優子をローズの名で、見知っているわけであろうか。

バーテンは朝吹を、そのローズの客としてあつかい、カウンターのボックスをすすめて、電話をまたせた。

八時十二分前——壁の電気時計が、針をすすめていた。

(五)

「あたいローズよ……トニイ、とうとうあたいを、探りあてたわねッ！」

どこかのホールかららしい女の電話声は、ジャズと人声のざわめきのうちに、したたか酔ってるらしく、呂律がまわらなかった。

「おう、トニイだ……いま優子って、いうんだってな」

この調子と雑音ならばと、朝吹はこうたしかめて言葉をおくった——一瞬全身の血が、応答をまって緊張した。

「ガッテム……勝手になさいなッ。リーはユーがかぎつけたこと、知ってるかしら」

「いや、全然、わからねえはずだ」

「そう、シュワリーね。じゃ、あたいの、負けにきまった！ 焼くもきざむも、おすきなさいよ……」

「よせやい、そうすてばちになんな」

「ふん、まだあたいに、未練があんのネ。じやあ、なんとでもお遊びよ。かわいがらしで、あげるからね……」

ここで女の声は、ふと途切れた。
なにか次の言葉を、まとめる気配だった。

「……いい、よくきいてよトニイ。今夜、夜中の二時に、武蔵野ビルの裏の、モータープールにきて。わかッて、武蔵野ビルの、裏のところよ。使ってないジェネレーターの、小屋のところ。暗いから誰にも、わからないとこ……そこであれ渡してから、どこかにゆかない？」

「……わかった。二時だな、すこしは綺麗に、めかし込んできなよ」

こうたたきつけて、こちらから受話器を切った。みごとな効果だった。朝吹はどうしようかと頬を火照らして考えてから、やはり断乎として、約束の場所に、飛び込んでゆく決

意をした。なにか渡すなどと、意味ありげである。

そこで優子をつかまえ、すべての女の秘密をキャッチしている如くほのめかして、江波から手を引かす覚悟だった。

なんといっても、不覚な囃の電話にまどわされるほどの、女ではある。

単刀直入にたがいの弱身をギブエンドテイクし、引きさがらせる勝算はあった。

またいざの場合は、その場でつかまえて警察にわたし、一切をさらけ出して禍根を絶つ、非常手段も考慮してみた。

夜半の一時すぎ、朝吹はおりからの小雨をさいわい、紺のトレンチコートの際をふかぶかたて、ハンチングのひさしをおとして、武蔵野ビルにむかった。

しばらくビルを鎖した鉄のシャッターのまえをうろつき、やっど路地をみつめて、裏手のモータープールにぬけた。

ジェネレーターという、錆びたペンキ塗りの小屋も、すぐ見当がついた。

あたりはドラム缶や古タイヤが、ごろごろ散乱して、もしもの人目を避ける、恰好の地形にあった。

原

稿

募

集

◎小説並びに読物

——三十枚～四十枚程度——

他誌に見られないような特異性のあるもので、本誌ならピッタリすると思われる作品をお待ちします。

(小説は現代・時代、どちらでも結構です)

◎アブチック・スリラー

——三十枚～四十枚程度——

アブチック・スリラーは毎号掲載したいと思います。力作を送り下さい。

他に本誌に適すると思われるものならば何でも結構です。原則として、原稿は返却しないことになって居りますが、特別の場合にはお返し致しますから、もし不採用原稿返送御希望の向きは、送料を同封されますようお願い致します。

掲載の分には相応の原稿料を、掲載誌発行後一ヵ月以内にお送りします。

(原稿送り先)

東京都中野区江古田一の二三〇二

久保書店内 裏窓編集部

お買い上げの本誌に落丁乱丁等がありました節は書店にておとりかえ下さるか、または本社宛お送り下さればスグおとり替えます。

◇他誌に見られぬ特異な題材で頁を飾る本誌は、毎号異常な反響を呼び、店頭で売切れの盛況を示して居りますが、来月号もお買い洩れの無いように必ず本号お買い上げの書店に御予約下さい。

◇バックナンバーは新期の愛読者の方の為に小部数取り揃えてあります。(二四八頁～二五一頁を御覧下さい)既刊号三冊以上お申込みの読者には送料は当社で負担致します。

◇御送金は、現金書留、小為替、振替等が最も安全で確実です。

◇小社は本誌の他にも単行本・新書判等の書籍も多数出版して居ります。出版目録をおのぞみの方はハガキにハッキリと御住所御芳名をお書きになって「裏窓で見た、目録送れ」とだけ書いて、東京都中野区江古田一久保書店宛御申込になれば、無料で直ぐ送ります。

◇直接の御来社は勝手ながらおことわり申し上げます。

裏窓		第二巻・第十三号	
		毎月一回一日発行	
定価	百二十円・送料十二円	印刷所	昭和三十三年十月二五日
	(地方売価百二十三円)	編集人	須磨利之
発行所	株式会社久保書店	印刷人	山田忠雄
	東京都中野区江古田一ノ二三〇二	発行所	向上印刷株式会社
	電話・中野(38)六九八〇・一三八八		
	振替口座・東京一〇七五六番		